大佛次郎

天皇の世紀

黒船渡来

1

文春文庫

文春文庫

天皇の世紀
(1)

大佛次郎



文藝春秋

文春文庫

天皇の世紀
(1)

大佛次郎



文藝春秋

天皇の世紀 (1) ◉目次

序の巻　9
外の風　55
先覚　119
黒船渡来　163
野火　247
厄介丸　337
解説　福島行一　468

天皇の世紀 (1)

序の巻

一

二日前に雪が降り、京都御所では清涼殿や常御所の北側の屋根に白く積もって残るのを見かけた。

大きな建物だから寒かろうと覚悟して行ったが、冬暖かい青空で、光に恵まれた昼となった。天気がいいせいだろう、一番大きな紫宸殿の二段となった高い屋根に防火用の水を噴出させるドレンジャーの演習をしていた。人影はほとんど見えないのに、高い棟から水だけ噴出して、二百坪からあると言うひはだぶきの大屋根の面をつたわって流れる水が、見る間にひろがって屋根の色を変えて行き、檐のところで飛沫を上げ始める。

欄干の下が、左近の桜、右近の橘が左右にある南庭である。橘の方には霜よけのすのこで囲ってあるが、桜は葉をふるい落した裸の枝に暖かい日を浴びている。平治の乱に源氏の悪源太義平が敵の大将平重盛を追って、馬でこの木を幾めぐりかして闘ったのがこの庭、と思うと、合戦が天皇の御座所近くまで入って強行された現実を、いまさら思いがけぬことに考えさせられる。

年中行事絵巻など見ると、この南庭に何かの催しのある折は、中世の民衆が行儀悪い

格好で、平気で廻廊に立って見物したものらしいから、その時代には天皇と市民とは後の時代よりも遥かに隔りのない機会が多かったものらしく、戦乱の折に紫宸殿の庭に武士たちが陣を構えて立てこもることなど、別に不思議としなかったものだろう。

大屋根の棟に避雷針が、五本まで、間隔をおいて立ててある。たちまち私は、筑紫に流されたまま死んだ菅公、菅原道真の亡霊が雷となって都の空に駆け戻り、無実の罪をきせた佞人ばらを襲い、この紫宸殿の屋根にまで落ちて炎上させたと伝えられた「大鏡」の話を思い起す。避雷針を五本まで立てられては、菅公の亡霊もいささか不便を感じるに違いないからである。

天皇の御座所だった清涼殿は、お湯殿や台盤所などある西廂、昼の御座の後が、しとみ戸をおろしたままだったので、鬼が出たと言う中世の闇が、今にそのまま残っているように感じられた。暗くて寒さがしんしんと、こもっている。

源氏物語やら枕草子に描かれた日常のこまかいことの起った場所が、続けさまに現われて来るので、ここで、そんな古い話を一々、思合せていたら、それこそ日が暮れてしまいそうな気がして来る。滝口入道時頼の呼び名となった滝口は、清涼殿をめぐる溝の流水の二十センチほど落ちる所があるのから出たのだが、夏はよしとして冬の勤務などは辛かったろうと察せられる。水際の地面に控えて警備につくもので、すぐ頭の上の欄干の奥に、主上も女御たちの姿も、事にふれて見える位置で、彼の恋びととなった横笛の、艶な面輪も優しい目遣いも、そこの地面に座ったまま、見まいと防いでも目に映っ

たものだろう。

殿上人の呼び名を生んだ「殿上」の間は清涼殿の南廂にある低い板敷きの細長い部屋で、南側を吹きはなしにしてあるせいか、ただの廊下のように見えるが、位を得てここへ上ることを認められるのが、つまり昇殿を許されることで、殿上人と確認を受け、その他は地下で、地面に座るわけである。

漆喰の壁一重うしろが、天皇の昼の御座所で、そこの鬼の間から殿上をのぞき見られる櫛形窓が壁の高みに開いているだけだ。公卿たちが集って会議もする部屋だが、廊下の一部分としか見えぬ簡素なもので、吹きさらしであり、やはり冬は寒かったろうな、と思うばかりだ。ここで極めて重要なことが評議されたとも考えられなかった。これは、つまり大して重要な相談もなかったと言うことで、今の御所と場所も違うが、八省院、太政官、左右近衛府まで政府機関が必要でそろっていた律令の昔の大内裏とは違って、宮中で政治の問題を討議することなど、数世紀間も起って来なかったのである。

この「殿上」に昇る公卿たちは、宮中のことだけを、あるいは祭礼や儀式のことだけを相談に集って明暮れしていた。こう考えて来ると、床が低く板の間だけのこの細長い「殿上」と言う場所が、私には、質素などと言うのでなく、極めて象徴的なものに見えて来るのだった。

殿上の間から小蔀の窓の下の戸口を昼の御座に昇る階段の下に出ると、真正面にすぐ

目につくように、年中行事を月毎に分けて列挙した屏風が飾ってある。これも中世から同じ位置に据えて来たものだろう。古来の行事を守ることに如何に人が専念して来たことなのか。

源氏物語や枕草子に見る艶やかな季節の移り変りを叙した文章から考えると、御所の庭に花の木がゆたかのように考えられるが、清涼殿の前庭には囲いのある呉竹、漢竹のひとむら、あとの全部は川砂を敷いて白くさっぱりしたもの。後の庭（萩壺）が萩のひといろ。それに藤壺の藤の花と定っている。左近の桜も、藤も萩も、花の季節はまことに短く、眺める楽しみも、すぐ終ってしまうものなのに、植える草木にも中世の規律がきびしく守られて来たのである。眺めていていかにも清潔な庭で、心をひく。

猪熊兼繁博士のお話に依ると、「殿上」は昔はテンジョウであった。デンジョウと濁音で読むように成ったのは幕府時代に入って崩れた武家読みと見てよいのかも知れない。同様に、今の京都御所は徳川氏の寛政年間に松平定信が命ぜられて造営に当ったもので、里内裏で法則の崩れていたものを、なるべく古制にのっとるように計画した。隠れた故実家で「大内裏図考証」や「皇居年表」の著述もあって、三十年間、紫宸殿、清涼殿の昔の結構を研究していた裏松光世をさがし出して来て専らその意見に従って中世の姿を再興せしめるように努めたと言う。その後、嘉永七年の粗相火で炎上したが、老中阿部正弘が御作事総奉行となって、寛政の規模どおりに、安政二年に再興された。それが今日あるものだが、太平洋戦争の末期に空襲による火災の延焼をふせぐ為に諸殿舎をつな

ぐ長大な廊下や塀を全部取払ってしまった。現在は、その礎石だけが、あけひろげた敷地に冬の光をあびて点々と連なっている。

清涼殿の殿上の間あたりが、吹きさらしで、ひどくあけひろげて見えるのも、実は幾重にも立ち塞がって外部と遮断していた塀や建物を失ったせいなのである。地下の者が足を入れるのを許されなかった場所の趣きは失われた。どこか大きな学校か役所の古い建物を放課後の閑散な時間に裏から見たように淋しくさえある。

太平洋戦争以前には、もとより、これらの御殿は外からは決して見えぬように目隠しされていた。禁裏（裡）と称えられたのもその故だし、グリフィスがフォービイドゥン・エンクロージュアと字義どおり訳した意味が当っている。さらにこの禁園の四方を、屋根のある高い築地がめぐり、始終清らかな水が流れている溝が囲んでいた。

その外側、今日御所の御苑となっている四方の土地が、仙洞御所、各宮家の御殿とともに十世紀に近い代々を御所に仕えて来た公卿殿上人の屋敷で埋まっていた。これにさらに一重、今日も在る石垣をめぐらせ、外の町と通じる出入りの門を九つに限ってあった。

広さ二七七、〇〇〇坪。外の町の辻を吹く風は九門から奥に入りにくい。幕府の方針が神棚に上げて隔離しておくことで、この幾重にも囲まれた奥に中世の時間をそのまま残しておくようにすることだった。古事故実だけを守るのを生活としている公卿たちが天皇を囲んでいた。

近代の気流が僅かに入るようになったのは時世の急変に依って諸藩の志士が学習院に入るのを許された時あたりからで、それまでは幕府の京都所司代でも出入出来る場所を限られていて、取次の任にある公卿を間に立てなければ何の公用の話も出来なかったのである。殿上の間に近付くことなどは無論許されない。幾重にもある垣が、道を遮っていた。九重の奥とは、比喩だけのものではない。

もっと古くには、天皇の常の御座所の近くに「日記の御厨子」が置かれ、醍醐、村上二代の天皇の日記を納めて、天皇の御日常の参考にして行事を規律されたこともあった。「禁秘抄」「建武年中行事」など、宮中の日常の様式について天皇みずから御撰になったものが多く残っている。禁園の池の水は醒めていても中世の時間のまま動かない。やがてこの静かな環境の中に外の時世の激動が荒々しく押入って来るようになったので、物事を古式どおりにしか処理しようとしない大宮人の心を驚ろかしめたのである。

一条摂政家の侍で下橋敬長と言うひとが大正十年に七十七歳の長寿で維新前の天皇の朝夕について残した談話がある。長いがその時代の老人らしい人柄が出ているのでそのまま引用する。

「毎朝お目覚になりますと、先ず恐れながらお手水をお使い遊ばします。御維新前のことでございます故に、唯今のように結構な石鹸というような物はございませぬ。其時分の石鹸の代りになる物は糠でございます。糠も我々の所では木綿の袋に入れて洗います

が御上には絹の袋に入れて差上げます。御うがいを遊ばした後に糠袋を以てお洗いになります。

そうしてお湯でお拭き遊ばします。もっとも拭きますものは、お局が絞って差上げます。それを済ませられますと、これは毎日ではございませぬが、隔日あるいは三日目に、その時分には主上を始め堂上一同は、女と同様に鉄漿をお付け遊ばします。その鉄漿や五倍子の粉は、寺町通竹屋町下ル川端陸奥大掾という者から差上げることになって居ります。お身仕舞はこれで済みます。

お身仕舞が済みますと、常の御居間へ還幸になられまして、表向の御拝は四方拝その他定まった日にございますが、日々恐多くも神様仏様、御陵等に御自分限り御遥拝遊ばされます。」

これは清涼殿の昼の御座の南隅に板の間でなく石灰で平らにかためた場所があって、今も大理石の肌のように光って石灰壇ととなえられているが、そこに座って神宮をはじめ神々を御拝あるのだ。石灰壇に座るのは地面に降りて座る意味である。そちこちして午の十二時近くになって、「あしたの御膳」を召上る。食器は白地に藍の模様のある茶碗。京都の泉涌寺に孝明天皇のお使いになった調度や食器など保存されているが、実際に簡素のもので、優雅だとか美しいと言うことなど、まったく考えない実用だけのものなのを人は意外と感じるだろう。

「御遥拝を済ませられまするとと、御朝餉を献上いたします。その順序を申上げますと、

先ず『おあさ』を献上いたします。『おあさ』と申すのは餅でございますが、何故餅を御朝というか、それには一つの御話がございます。徳川様の御政治の前は豊臣秀吉公、その前は平信長公（織田信長）、その前が足利御代々の御政治、足利家におきましても遂には天子をお養い申すどころの話でない。御承知のとおり、十二、三年も彼方此方と逃げてござる時分でございますに依って、失敬な話ですが自分の三度の食事もしかねて居る。中々天子様をお養い申すどころの話ではありませぬ。従って御上においても、恐多くも殊の外御難渋を遊ばされまして、召しあがる物がございませぬ。所が河端道喜（どうき）というこれは俗に申す餅屋でございますが、桓武（かんむ）天皇様が大和国から山城国長岡へ御遷都の時から御供して来たと申すのが、河端の家の申伝えでございます。格別の御由緒がございますから『おあさの餅』というものをこしらえまして献上いたします。その餅は先ず普通の団子ぐらいの大きさで、外に餡（あん）を沢山かぶせてあります。それも砂糖のない時分でございますに依って塩餡でございます。これを数三つ五つとか七つとかにしたならば数がよろしいように思いますが、数六つを献上いたしまして申伝えに依りますと、朝廷御難渋のころには『朝のものはまだ来ぬか』とおっしゃって、恐れながら主上がお待ちかねであったということでございます。その後御時節も変り徳川様の御政治となりましたけれども、やはり昔からの例に依って毎朝献上致します。神様へあげるのと同様に、土器（かわらけ）に盛り白木の三方（さんぼう）に載せまして、御上のお側へ奉ります。これは御覧遊ばすだけで昔のように召上りは致しませぬ。召上りました所が塩辛いのでおいしいものではござい

ませぬ。」

形式だけのものとなっている「おあさ」をさげると、

「今度はほんまの朝御膳、これは板元でこしらえまして、板元から板元吟味役に差出す。もう板元の方で甘い辛いのお加減も、恐れながら御上のお口に会うように致してありますが、吟味役がなおそれを調査を致す。そう致しますと、そこへ御膳番が出て来ます。御膳番と板元吟味役が向い会いになりまして、その御膳を点検して、そうして板元吟味役が付けてございますのを御膳番へ出しますと、御膳番がそのお茶碗を取って拭きまして、お三方の上へ載せます。それがことごとく載ってそろいますと、御膳番から御内儀の御末と申します女官に出します。御末は命婦へ渡します。命婦がまた内侍に渡しまして、内侍が御上の御側へ持って来て奉ります。そこで朝の御膳を召あがる。」

主上の食事は、朝（十二時近く）と夕方（午後四時）との二回だったようにも伝えられたが、別にお夜食もあった。下橋老人は、朝から昼の御膳までの間にお手習、学問、お歌等なされたと話しているが、摂家の御側席のことだから始終拝見していたわけのものでなく、固定しがちな老人の記憶で、ある時期の観察で全体を類推した点もあるだろう。朝の早い夏と遅い冬とでは異なる点もあったろうと思う。

昼の御膳は、「その数は中々沢山で鯛などは御規則で眼の下一尺、毎日毎日よくそろえたものでございます。御出入の魚屋から板元に出します。板元で塩焼にして、御器に

載せお三方に載せます。立派にそろうた鯛で、鯛の付かぬことは一日もございませぬ。味噌汁は精進の味噌汁、ある時には鯛とかお魚の入った味噌汁を添えます。それから午後に至りますとしばらく御休息を遊ばして後に、薄茶、御煎茶、御菓子などを召あがる。そして前に申上げましたお学問、お手習、お歌などを遊ばす、随分お忙しい。

それから夕景になりますと今日の時間で申しますと、午後六時か七時、日の長短で変りますが、夕の御膳を奉る。それも前に申上げましたような順序でございます。その時には御酒を召上ります。我々の家では焼物の徳利を用いますが、朝廷では錫の御徳利で燗をして差上げます。勿論、お局さんがお酌、殊に孝明天皇様は御酒がお好きであらせられまして御酒の御席が余程長い。六時七時から召上りまして十時ごろまであがって御座るというようなことを伺っております。

それが済みますと、前の順序で下げまして、それから御好みに依って、お菓子、お茶の出ることもあると聞き伝えて居ります。そう言う次第で御所は夜が更ける、というのはほかではございませぬ。御酒がお長いらっしゃるからでございます。それから、いよいよ夜の御殿へお越しになるのでありますが、たいてい今の十二時ごろになります。先ず日常の御動作と申しますと、斯様なことでございます。」

毎日の鯛と言うのは三百六十五日、かなり単調で、慣例としてそれも寛大にながめていられたものだろうか？　海が遠く川魚や野菜の豊富な京都としていつもそうであったか疑問である。老人は一番結構のものが鯛として理解していたのかも知れぬ。ともあれ、

江戸幕府代々の政策もあって、禁裏の時計は悠久に中世の時を刻んでいた。一度の食膳にも多くの人間と手数を要したのでも、慎重で大切に計らったのと同時に、それだけの方式の知識だけで生きている人々が禁裏の内外には実に多かったことの証明である。

ついでのことに当時の元旦の朝賀のことを引用しておく。これは常の日でない特別の行事だし、幕末にまで残った平安朝の遺風の一例だからである。

元日は「寅の一点と申しておりますが、今日の午前三時お湯のおかかりがありまして、御上がお湯をお使い遊ばして御膳をあがるまでに、拝礼があります。それは清涼殿の御庭に出られまして四方に御屏風を囲って、神様に御灯明を上げてございます。その中へ御上が束帯でお入りになりまして、天照皇大神を始め奉り、天つ神国つ神を御拝礼遊ばします。そう申上げると一口でございますが、神様の御名をおっしゃって御拝礼を遊ばし、次に天の星のお名前をおっしゃいます。夜半星とか、北斗星とか何とか色々ございますが、そのお名前をおっしゃって、それを済ませられますと、御陵の方へお向いになりまして御拝礼になります。その御拝礼の前に神饌を奉ります。塩、鰯とか、生の鮹、蕨、荒布、昆布、蕪そういう類をお三方に載せてお供えになります。それらの御式が口で申すと短いようでございますが中々長うございます。それを済ませられますと夜が明けます。夜が明けますと、常の御殿に還御遊ばされて、そこで初めてお雑煮を召あがる。お雑煮のことを烹雑と申します。その烹雑と申すのは、菱形になっている生餅が三つ。生大根が十三本、それから鮒の生を生きている形に串に刺して付けてあります。そのほ

か二種ばかりありますが、今ちょっと記憶致しませぬ。それを供える中清が准后さん、今の皇后さん、親王さん、その親王さんは明治天皇で、明治天皇は皇太子におなり遊ばさずに、親王からすぐ天子でございます。その御二方は大根が十一本、主上のは大根が十三本、つまりその間に二本の差があります。准后さんが十一本、親王さんも十一本、お雑煮としてそう言う物を差上げますが、表向のお雑煮はあがりは致しませぬ。御覧遊ばすだけでございます。そうしてこれは表向に書くべきものではございませぬが、内証で御末が別にほんまのお雑煮をこしらえて差上げます。それは白味噌を湯で溶かしたのに餅を入れ、小芋、焼豆腐、大根を薄う切って入れて、雪平鍋か、何かで煮てあげる。お茶碗につけて、ほんまの鰹節をかけて上げる。（中略）表向の烹雑は食べることは出来ませぬから内証でこしらえて上げます。それはほんまにあがります。」

後水尾天皇御宸筆の「当時年中行事」に依ると、正月元日に鰯を白い土器に入れて同じ土器で蓋をして出した。これは朝廷の衰微の時の例を忘れないで今でも奉るもので、鰯は下層の者が用いるものなので、隠して出すのだ、と記してある。その当時は四方拝の後に平たい餅に牛蒡と味噌を包んだものと梅干茶で祝酒を飲まれ、それからあしたの御飯を召上った。そのころ鯛は出なかったようである。何か奉るにしても、現代では考えられない法式が守られる。前に掲げた食用に適せぬ形式だけの雑煮に入れる大根の数の規定にしてももう人が知らなくなった由緒なり故実があって人に守られているのだ。

常御殿と言うのは、清涼殿より東の奥にあって江戸時代の初期になってから建てられ、清涼殿の中世風の御起居に不便が感じられてから日常のお住居となったもので、ひはだ葺の屋根で、間数も多い大きな建物であるが、清涼殿などと異って畳も敷いてある。剣璽の間もある。常御殿から奥が御内儀と呼ばれ私的性格が守られ、ここでは天皇は女房たちばかりに囲まれて生活された。男性は公家の子息の中から選ばれた御稚児がふたり、始終お側についている。この子供たちも女装して化粧していた。

女房たちは平安朝時代の姿で暮していたが、源氏物語の中にあるような自由は失われて、外からは見えぬ消息のうかがわれ得ぬ生活をしていた。御内儀は、禁裏の中でも禁域であった。

すぐ近くに広い内庭があって、御涼所やそこから優雅な吹き抜けの渡り廊下で通じる茶室「聴雪」があり、美しい流水と面白い石組の林泉が入組んだ景色を作っている。庭木も多い。清涼殿の中世の庭が漢竹呉竹の二叢を小さい囲いに置いて、あとは白く川砂を敷いただけの清潔で美しいものなのとは対照的で、人間的な桃山時代を通って江戸に入った近世の築庭を示している。「聴雪」は茶室でありながら襖の絵など華やかである。武家風が入ってないとは言えないだろう。しかし、この一連の建物は、桂離宮と同じく優雅で軽らかで、和やかな安定感を覚えさせる。こんこんときれいな湧き水が石をめぐって流れるのに、山茶花の落花の白いのが波紋に載って漂っているのを見た。

さて下橋老人の談話にまたもどる。雑煮が済むと摂家五軒の朝賀を受けられる。この

日は摂家五軒だけで他の朝賀はない。家柄が固定していて動かないのである。

「摂家五軒。近衛さん、九条さん、二条さん、一条さん、鷹司さんの五人ですが、お子さんが加わって十人になります。十人の方の朝賀でございます。五摂家は黒い装束で直衣に単、指貫でございます。轅と言うものに乗って有職の行列を立て、この日は御所の公卿門へおいでになって、公卿門の門代で下乗です。門代は御承知の通り、門の柱と柱との間に敷石がありまして石が三段でございますが、その高い所、その門代の所まで御輿を持って参りまして輿の先の轅、それを敷居の中に入れます。そうして前の御簾を掲げて、沓を穿いて、参内殿へ向けて参ります。その時には『雲上明覧』にある連中、門流の堂上と言う者は残らず出迎えでございます。四位以上は黒い装束、五位は赤い装束で、出迎うて居ります。それで五摂家が朝賀せられますと随行して行きます。そうして参内殿に入られますと、参内殿に御簾が下してありますので、右京大夫と、もう一人他の女官とで御簾を掲げます。そこで摂家が拝賀を致します。それから奥の間で御休息、日が短いので直ぐ朝の十時十一時になります。そうしますと剱璽の間へ天子が出御になります。その時は天子は西に向いて御座り、五摂家は北を向いて御座る。そこで天盃を賜ります。それから昼の御膳を賜ります。それから下ります時は、元の参内殿から公卿門を出て今度は准后さんへ御祝詞を申します。お会いはございませぬ。」

朝賀の時に摂家残らずから、天皇に太刀と馬を献上する。これもやはり形だけのもので馬の分には銀一枚をあて、太刀は献上太刀として木でこしらえてあった。「もとは仕

様がないほど沢山あったものだが御維新の時に焚物にでもしたのか、今はさがしても見つからない」。それでも大高(おおたか)を三折にして御太刀一腰、御馬一匹以上と書く。御の字の書き方も身分によって区別があり、五摂家などの御の字、宮さんはどれ、大納言はどの御の字、仙洞さんはどの御の字と書き分けて差別を崩してはいけない規則になっている。そして献上するとそっくり上を包みかえて御太刀一腰、御馬一匹として、改めて朝廷から返して来る。元々である。銀一枚と木刀が、行ったり来たりするのである。

二

式日の衣冠束帯のみならず、日常の衣服まで外の世界とは全く異なるものを着けて一ブロックの人々が禁域の中に数世紀間も古いしきたりを守って暮していた。

今から考えると実に異様だが、維新以前の京都では幕府の二条城より小さいその一廓を自分たちの町と違う並ならぬ神聖なものと見ていた。幕府の政策が、あくまでも天子を雲の上に祭り上げて隔離しておくことだから、中世のままの時間に住まわせ、公家たちにも、実質もあり努力を要するような仕事を与えない。五摂家などはなるべく動かず高みに無為にすましているだけでよいのだが、下級の公家の殊に若い人間は年寄の真似をしているほかはなかった。

幕府が制定した「禁中並公家衆諸法度(はっと)」は天皇の御芸能の事として第一は学問で、学

ばざれば古道に明ならず能く太平を致す者、未だあらざるなりと、「貞観政要」の文を引き、「禁秘抄」に載するところを御習学専要に候なり、と学問を勧めると見せて、それ以外のことを考えぬように希望し続けた。

若い公卿たちも閑ばかりあって学問をするよりほかはないのだが、それが実学ではなくて「禁秘抄」などの古いしきたりや、式事の慣例、また有職故実を器械のように覚え込むのが学問と信じられた。その他は、歌道、香道、華道、茶のような遊びごとだが、それもそれぞれ専門の家が代々続いていて、横合から出て権威を侵略することは許されぬ。狭い場所に人間ばかり、うようよ、いることだ。

「お公家さまは文字が上手で字は書くが、みんな気位が高くて世事にうとく、あまり賢明とは申せない。お姫さまは美しくて賢いが、若君はみなあほうである。とは京の町びとの例の悪口であった。御所のお勤めは、このあほうの仕事で勤まるらしい。ただその家で生れたということだけで、いばっている。その感じもたしかである。けれども彼らにも苦しみはあった。一体その毎日は何をしていたのか。花鳥風月を詠めて三十一文字に書きつづくれば、とにかく一応の資格があったにしても、これも内容はすぐれていない。連日の仕事は父祖や先輩の日記、記録を読み、宮仕えの様式や作法に生命をかけて守りぬくという努力を重ねないと勤まらない。他人からおろかものにみえたとて、それが一生の仕事であった。古典の研究も国文学でない方面でつとめられた。歴史というよりも制度的な考究であった。それにしても学識が問題である。当時、京の町にはおおく

の学究があらわれた。学徒もおおかった。なかには、『職原抄』一冊でつらぬく書生もいた。これを〈職原さん〉という。世間知らずのあほうの一種であった。」

京の町名ともなっている古い公家の出で猪熊博士のものされた文章にこう言うくだりがあった。

江戸時代の禁裏の収入は、慶長六年に徳川家康が進献した一万十五石四斗九升五合の領地を本御料とし、次いで二代将軍秀忠が奉った一万石を新御料、後に将軍綱吉が献じた一万石一斗余の地を増御料と称して、幕末には他の小さい土地の収入を加えて、総計三万百十三石六斗六升七合九勺が御料所の草高である。

三万石程度の大名ならばすくなくないし、大名の家老でもこの程度以上の石高を受けた。忠臣蔵の播州赤穂の浅野内匠頭の知行五万何千石にくらべると、禁裏はざっと半分で、十世紀以上続いた古い制度と組織を維持するように強制されていたのだから、内情は苦しい。江戸時代の皇室経済を管理したのは幕府だから実情を知って定額献金やお取替（立替）金などで補充した。物価は騰って来るばかりだし、文久三年、将軍家茂が参内した折に米十五万俵を、元治元年には十五万俵を増して年に三十万俵を差上げることにした。慶応三年の七月になって、急に山城一国を皇室御領としたが、これは幕府方が天下の尊王の風潮に圧迫されて急に譲歩したもので、十二月には大政を返上しているので、最後まで出し渋って、やっと出した時はもう間に合わないような始末となった。

維新からさかのぼるざっと百年前（安永三年）に幕府がさだめた禁裏供御の費目が一

万両で、御用商人が納入する品物に価格を指定してあった。鮮鯛一寸につき代銀四分余、蛤一箇につき代銀一分二厘余、小鳥十羽につき一分七厘と言う例、幕末には物価が数倍に騰貴していた上に、幕府が派遣している小役人が間に立って袖の下やリベートを役得としていたから、「日常供御の粗悪薄乏言うに忍びず、御酒には水を混じ、野菜には干からびたる残物を交えた。雉子の焼肉に燗酒を注ぎ汁茶碗に盛ったのを御雉子と称し新年拝賀の臣僚に賜る行事が古くからあったが、幕末のころにはこの御雉子さえ、雉子肉の代りに焼豆腐を用いられた。」（正親町季董氏）有職故実を勉強して口やかましく説いても経済の変動がそれの内容を強力に歪めて来るのだ。若い人たちは、この「学問」に虚無と失望を感じなかったものか。

精神生活の空白さとともに、貧乏が公卿にはつきものであった。古く応仁の乱の時代にも、色紙や短冊を書いて土塀の外に吊るして通行人の望む者に売ったと伝えられるくらいで、天下泰平の徳川時代に入って後も、公卿は摂家、清華、大臣家、閑院家などと称して官位は高かったが、関白、議奏、伝奏などの役がつけば官禄を給せられるが、役がなければ大臣、納言と言っても位倒れの空位空官に過ぎず、収入は家格に付属した微禄だけである。

「公卿の上位にある摂家大臣家といえども、その家禄はわずかに四、五百石乃至二、三千石に過ぎず、下級の公卿に至りては三十石三人扶持等、幕府の御家人輩の小身の禄に

当るものがあった。維新の元勲岩倉右大臣具視の如きも百五十石の微禄の平公家の一人であった。七卿落で有名な東久世、沢、錦小路を始め幕末に活躍した公卿の多くが、此の三十石組と同輩にまでいやしまれた公卿の中から出ているのも興味がある。斯くして公卿は有職故実、詩歌管絃、陰陽神事等を門外不出の家伝として収入に充て、甚しきは歌留多、扇子の地紙張や揮毫の内職に米塩の資を補い、辛うじて生計を営んでいた。朝廷の式日に際しては当番の公卿は非番の公卿と衣装束帯太刀等の式服式具を有無相融通して威儀を整え、わずかに式に列する状態であった。」（正親町季董「天忠組の主将中山忠光」）

自家用の衣冠束帯太刀を持ってないだけでなく、供の青侍を置いてあることに成っていて、実は置いてない。それ故、参内する時は出入りの八百屋や豆腐屋の若者を、衣裳を借りて供侍に仕立てて形をつけた。洒落てるのではなく苦しまぎれなのである。

前に私が祇園の茶屋の女将に聞いた話だが、虱を湧かしている某のお公卿さんの住む路地があって、京童の口の悪いのが、そこを白梅小路と呼んでいたと言う。

内大臣三条実万は住む場所を俗に梨ノ木町と呼ばれたが、商人が梨ノ木町を通る時は、呼込まれぬ工夫をして売り声をやめて、そっと通り抜けたと言う。品物を買ってくれても代金を払ってくれないからである。安政四年に林大学頭などが、開国を説くために上京した時の町の落首にこう言うのがあった。

梨木町

一文もなしの木町の内大臣

忠義は人が百も承知ぢゃ

徳川の天下も幕末になると、幕府自体が経済的に行詰って来たし、旗本御家人から諸藩の武士たちも手内職に追いやられたりさらに誅求される農民の困苦はきびしいものに成っていたことで、公卿の貧乏も必至となっていた。官位だけ貴く、その形式を守るのが生命の在り方で気ぐらいばかり高いのだから出入りの商人たちは手を焼いたらしい。中山忠能の家の場合でも花山院家の一流で大臣家に準じているが家禄二百石だから、実収入は八十石ぐらい、一石一両だったのを、今日の一万円と見て今日の大学出数年目のサラリーマンの年収とあまり相違ないのが、家格は大臣並なので規定どおり諸大夫（しょだいぶ）以下の侍を置いてその家族をも養わざるを得ない。機嫌が悪くなるはずである。「生計甚だ不如意にして、物売も中山邸の前は売声を止めて通るとまで言われた」となると、前の梨ノ木町だけでなく、公卿町はどこも商人の苦手が多かったらしい。

悪質なのになると、東海道の道路に出て、大小名の行列の前に出て、いやがらせをやって、金をつかませるまで通れぬようにした。とにかく四位以上の大名は数がすくないのだから、たいていの国持大名は貧乏公卿より官位は下である。麿は三位、何々なるぞと威丈高に名乗って動かなかったら、往来止めとなって行列は前進しない。

竹越与三郎の「陶庵公」は、明治の元勲岩倉具視公について「岩倉氏は一百五十石の分配を受くるだけで、貧寒を極めたものであった。公卿の家には、尋常の場合に幕府の

捕手の入ることを得ざる規則があって、今日各国公使館が有する治外法権の様な特権を持っておったので、岩倉はこの特権を幸として、博徒をしてその邸内に博奕せしめ、その寺銭を貰い受けて生活の一助としたことがあるほどの貧寒であった」と記載している。貧乏で屋敷をばくち場にまで落としたあくの強い性格が、無色無味な他の公卿とは自ら育ちが違うものだったとも言えよう。

幕府は摂家五家に一万五十六石余、清華九家に五千四百八十二石の所領を与えた。幕府の下にざらにある中辺の旗本並の収入だが、皇室の御領は幕府の役人が管理し、人民から米穀を徴収して皇室に献納したのにくらべて、上級の公卿の領地は、自分たちで住民を管理して米穀も直接に公卿の家に運ばせた。自由のきく範囲がひろいのである。領地の民に対して軽い裁判権など認められたらしい。

公卿の知行所は、主として五畿内、丹波、近江などにある。公卿の領地の百姓は「横柄なるものにて応対なりがたきほどの事なり。」公事（訴訟事件）など起ると所司代へ内証で頼み込むので、公卿領と入組んだ土地の者は、やりにくく迷惑することが多かった。その代り、百姓たちは領主の公卿に請求されるとおり、米穀のほかに川魚や畑のもの、焚木、炭などを税のようにして奉った。その負担が重いからくやしがって、よその百姓に威張って横柄にしたのだろうが、その為に上級の公卿の家は、比較的、生活が楽である。それにしても家柄に応じて摂家など、世襲の諸大夫を十名置くことに規定され

ていても実は用がないのだから、それだけの人数を抱えてあるように届け出て、三人か四人の諸大夫がいるだけである。幽霊人口十数人の俸禄はきちんと、幕府の方から大坂の御蔵米を受ける。

下級の公卿の方は実際に生活が苦しい。鍋取公家と言う名称があったくらいで、公卿が自分で台所仕事をしていた家もあった。青侍や雑掌の給料は「譚海」が書かれた安永年間で、米三石で、平公卿の禄高のない者が給せられる御蔵米は、現米三十石だったから、その一割分の三石は支払い得ない。実際に常時人を雇っておくことは困難であった。

やはり津村正恭の「譚海」に掲げられた挿話(そうわ)に石山三位の話がある。所司代と言えば都に詰めている幕府の権力の代表だが、ある時泉涌寺に参詣に出た途中で、青侍風の編笠をかぶった男が路の真中に先に立って行く。所司代の家来がしかりつけたが、聞かぬふりして、ゆっくりと歩いている。側まで行ってとがめると、振向いて誰びとなれば乗打ちせらるるか、我れは石山三位であると名乗ったので、所司代がおどろいて馬から飛降り、無礼をわびた。所司代より位は上なのである。

泉涌寺へ参詣ならば自分も拝礼にまいるところだ。いっしょに行こうと言う。所司代の方は迷惑だったが、すこし後に下って歩いて供をして行った。寺に着くと、三位は背負っていた風呂敷から装束を出して着かえて正式の拝礼を終った。退って来て煙草をのみながら閑談したが、所司代がかような官位ある御身分で、お供の者も連れず御往来なさるのはいかがかと思う、と意見すると、いや、そのとおりだが御蔵米だけの暮しでは

供など使っておられぬのだと三位が笑って話した。装束も風呂敷で自分で持って歩くのだ。

後の岩倉具視が若い日に、鷹司政通に歌道を教わった時に政通が、「堂上および地下官人等は薄禄または無禄の為に卑劣の所業ありて朝威に関繋する風説、しばしば予が耳朶に達す、甚だ嘆息に堪えざるなり」と物語り、「家計窮乏するときは心志を高尚に養い難し。故に予は幾年を経といえども必ず宿志を貫き、堂上及地下官人等をして、いささか生活に苦しむの心をゆるやかにし以て文学を勤勉し、朝威に関繋するが如き卑劣の所業なからしめんと欲す」と話したと言う。

政通は太政大臣となり、太閤とも称せられるように重く用いられたひとで、公卿に珍しく気宇も大きく、ペリーが来朝して日本の開国を迫った時に、公卿の全体がとんでもないことだと狼狽して全部がこれまでどおり鎖国がよろしいと言った時に、別に断ることもない、これまででもシナとオランダには交通を許しているのだから、新しく一カ国を加えてやってもよいではないか、と発言して禁裏中をおどろかした。素直で高い見解の持主である。

鷹司家は千五百石の知行で、楽でないとしても苦しくなかったろうが、一般の公卿、殊に下級の者の貧乏と、それに原因する非行を知って、どうにも処理出来ぬが、捨てておけぬ重大な課題と見ていたのである。百五十石で貧乏で、自邸をばくち宿にしていたとまで伝えられた岩倉具視にとっては若い日に聞いた鷹司太閤の述懐は忘れ難い言葉

として耳に残ったものと思われる。

梨ノ木町の住人、三条実万は黒船渡来の最初の浪のうねりが禁裏に及んで以来、つまり維新の初期、嘉永安政年間を通じて京都の政局に軸心となって、経綸をふるった人物で、安政の大獄にはにらまれて辞官落飾の処分まで受けたが、清貧と忠誠のひととして外の町の者にも知られていた。

実万自身が、手録の中に薄禄困窮のことを書き残している。貧乏の故に不心得の者が出る。家法の薬などと称して怪しげな薬を売る。あるいは無用の者に公卿の紋章入りの提灯を渡して、その威光で勝手に諸方に出入りさせて礼金を取るとか、途中で出あった武家や富豪の者に僅かの失礼をとがめて断り金を吹掛けて取上げるとか、「いやしくも為さざるところ無し」と言う。今日の所作それを一々とがめ居れば今日の暮しを如何ともすべからずと言う類多くあり、勿論、志の正しき者に左様の義は決してこれなく、さすればその不心得者は小口よりしかり戒めてとがめらるべしといえども、元来衣食の資、当時の姿にては無理なること故、よくよくの事にてなくば大目に見置かねばならぬ勢、やむを得べからざるなり。もっとも家来の者など譜代の者はなく、ただ本体の知れぬ者、あるいは他国にて悪事をなし追放の者を抱え込み、あるいは無知文盲の田舎者また小侍を召遣い、ただ少しにても費用の入らぬを第一となす。故に主人の不行跡を諫言致すようなることはなく、姦悪の者は主人を扇動させて利得の世話をする類あり、その他は申

すまでもなく、是もさすが三百石高以上の人にては先ず少なく、ただし是なきにあらず。さてそれは全くの不心得の人のことなり。また二百石以下とても従来の仕廻し宜しき家には随分相応に致すもあり。」

中世以来の式事と、祭りと、故実の強制を繰返している禁裏内の無風地帯に、外の風が吹込む以前に、貧しさから分解の色が濃かったのである。黒船がもたらした強い風圧が、ねむっているような公卿の世界を揺さぶり脅かす。好むと好まないとにかかわらず、政治の渦が禁裏に及んで来た。

その時、にわかに能動的な働きを見せたのが、摂家清華の古くからの家柄の者よりも、微禄の平公卿や三十石の御蔵米組、鍋取公家の人々に多かった。好い刺戟であった。だが、この人々にしても、未経験の新しい局面に対して、どう立ち向ってよいのか解っていなかった。すると世間の方から彼らを迎いに来た。尊王の思潮がたかまって来るのにつれて、自分たちにない官位のある人たちを尊く見たのと、やたらに行動的で過激急進的な人たちは公卿に接近して利用することを考案したのである。別に器量なくて形式的な歌を詠むことだけ知っているようなひとでも、庶民でないことだけで有難く見えた。小さい暴動を起すのに、幕府側を閉口させる都合のよい看板となる時期が来た。武家の側からも列藩の有志が、いつからか公卿の屋敷に出入りするのを見るようになる。ほんものもあれば偽者もある。

三条実万の手録が指摘したように、素性本体の知れぬ者、他国で悪事を働き追放され

て来た者まで既に公家の屋敷に入っていたのだから、もとはなかった通路が、禁裏の一部と外とを結んだわけである。プログラムなど持合わせずに、人間がやたらに動く時代が来ていた。追求する目標があって突進している間に、それが武蔵野の逃げ水のように、それまで明らかに見えていたのが、途中で見ると消えてなくなっている場合もある。それでも人は、地面から揺り上げられたように傾いて、一方に走り出す。不思議な情熱とエネルギーの時代であった。民間の志士たちの中でも、士分にしても低い階級の人たちが多かったし、それ以下の庶民の出身の者も熱心に加わった。七卿落で有名な東久世、沢、錦小路などは三十石の御蔵米で同輩から軽く見られていた人々である。この人たちが最初に、中世の夢から誘い出されて、外の風の中に神輿のように担ぎ出された。

今日、幕末の公卿屋敷は、京都御所の御苑となって、人間は住まず、美しい樹林となっている。昔の面影など跡かたなく、なくなった。ただ一棟、明治天皇がお生れになった旧中山大納言の屋敷の敷地と質素な産殿の建物だけが板塀にかこまれて、御苑の北側に記念を留めていた。

中山大納言の邸のあとは、柵をめぐらして門の戸に錠が掛けてある。いつもになく歩いた後で、広い御苑内を戻って、門をあけてもらうように交渉するのも、おっくうで、柵について回って、せめてかいま見て帰ろうとした。

平凡な瓦屋根で、いかにも質素な小さい家が一棟残っている。東側に濡縁をつけて欄

干を添えてある。これが御産所の保存されているもので、雨戸を閉ざして、冬曇りの光の中に、ひっそりとしてわびしい。これは庭が一面の落葉で埋もれて、庭木も枝が伸び放題に荒れているように見えたので、よけい荒涼とした空屋の観を深めた。

黒く塗った垣根が隙間をあけて板を並べたものなので、家の西側の裏手へ回ると台所口らしいところに方形の石の井戸が見えた。

明治天皇の幼名に結びついている祐井がこれかと思われた。水があるのかないのか井戸わくの内側から冬青々と羊歯の葉が伸びている。その他は荒れた落葉の庭だけである。鉄条網をまたぎ垣について一周する間に、私たちのズボンは払っても落ちにくい草の実だらけになった。

ホテルに帰ってから私は、邸内に入らなかったのが怠慢だったようで、考え直して、次の日また出かけて見ることに決め、閉めてある門をあけて頂くよう交渉してもらった。これは宮内庁の管理でなく、御苑なので厚生省の係である。禁裏をめぐる築地の外を流れる水のきれいな溝を境界とし内側の石と、外側の石とで管轄が分れ、石橋は宮内庁と区分が定めてある。次の朝の十時に行く約束となった。

出直したのがよかった。祐井は昨日かいま見た裏手の石井戸でなく、門を入って、なめ正面の枝の繁みの中に隠れていて、昨日はそこに井戸があるとは見えなかったのだ。厳重な角材の井戸の蓋の上に大きな枝が倒れ折れて、おおいかぶさっていた。井の脇に青石の碑が立ててあって、由来を記してある。これは明治天皇の産湯に使った井戸でな

く、御誕生の二年後に大ひでりがあって都人が苦しんだ時に、中山邸でも困って新しく井戸を掘ったら三丈数尺かの深さで、きれいな水がこんこんとわき出て、日に八十数人で使って水がかれることがなかった。皇子のために奇跡のようにわき出た水と信じて、祐井と呼ぶことにした。天皇の産湯は鴨川の出町橋の上流の水をくんで来て用いた。陰陽頭土御門晴雄の勘文に依るものだが、祐井の水も若い皇子ののどをうるおしたものに違いなかろう。

御産所の建物は、内縁側を東と南につけて十畳と六畳の二間である。東側に床の間をつけてあり、十畳間の西側は長い戸棚である。裏手にお湯殿があったはずだが、今は残ってない。前の日私が外から見かけた羊歯の葉が繁った石の井戸は、台所用のものだったろう。つるべ綱を掛けてあった鉤が残っている。この井戸も、のぞいてみるとかなり深い。羊歯の葉は井戸わくの石の隙間から生い出たものである。

御産所は二間とも畳をはずしてあったし、襖の類もどこかに片付けてあって見当らない。外から見ても荒れている感じだったが、屋内に立つと畳も襖もなく、裸でほこりっぽく乾いているのが心苦しくさえ思われた。番人がないので、戦後に人が入って釘隠しの金具や襖の引手をはがして持ち去った。いつも畳を敷いておかないのも、浮浪人などが由緒も知らず入って寝る危険があるからだそうで、明治と言う大きなエポックの主柱となった天皇の誕生された部屋とは考えられないくらいである。月に数回の掃除に、雨戸をあけ風と陽を迎え板床のほこりを払う。それ以上に、もっと別の保存の方法があり

そうに思われる。

中山大納言は御領二百石で、幕末の内裏の図面を見ても、石薬師御門の内側で、他の公卿の屋敷にくらべて、敷地も狭く小さい。五、六百坪のものであろう。収入にくらべて家柄は花山院家の一流で大臣に準ずる格なので、ここでも物売りが門にかかると売声を止めて通ると言われていた。

石薬師御門の外は、すぐ町家である。この御産所を新築するのにも場所が狭いのに頭を悩め、普請の費用を作るのにも困難した記録が残っている。

三

明治天皇は孝明天皇の第二皇子であって生母の典侍中山慶子はこの権大納言中山忠能の娘である。嘉永四年三月に十七歳で召されて宮中に入り、典侍御雇となり名を安栄と賜った。四月に典侍に進み、今参と呼ばれ、五月に権典侍と称した。翌年の三月懐妊の徴があり、典薬寮医師女医博士賀川満崇が診断して四ヵ月を経ていると告げた。慶子は典侍中山績子の部屋子だったし、績子は慶子の大伯母である。そこで績子が世話をして、忠能の妹で正三位勘解由小路光宙に嫁いでいる順を帯親にした。

帯を着ける日時その他について、万事、陰陽頭に伺を立て、勘文を受けて決める。中世のまま守られている法式である。先に記した産湯の水をどこで掬むか、場所を陰陽頭

に尋ねると、勘文を案じて答えて来る。吉い方角を選ぶのである。中山家にその清書が保存されていた。初湯でもどこの水がよいか占うのである。

「御湯の水　吉方

出町の橋の上、今月一日より廿五日まで九月節並に中　甲寅卯の間なり

弘小路口の下、今月廿六日より来月廿五日まで十月節幷中　乙卯辰の間なり

右の方流水を汲るべし

嘉永五年九月一日　　はれ雄」

中山権大納言は、御産所を造営することになる。家柄の格が高く使用人も多かったので、邸内は手狭で場所がない。屋敷の北側、八条殿町の民家の間に地所をさがして、武家伝奏三条実万に相談して鷹司関白の内意を聴いて貰うと、それはならぬと言われた。そこで西隣の前権大納言鷲尾隆純の邸内の空地を借りようと交渉したがこれも断られた。やむを得ず狭い地所内の西の隅に四月十八日から工を起して、八月下旬になって、ほぼ完成した。それが、現存する建物で、費用総額は百両、簡素な普請で、六畳と十畳の二室で浴室、厠が付く。中山家の家計では、この不時の入費を出す余裕がなかったので、議奏東坊城聡長に頼んで、金二百両を拝借したいと申入れたが、聡長、実万が鷹司関白に取次ぐと、前例があるから百両以上は出せないと沙汰があった。聡長が不足の百両は典侍中山績子に話して御上にお願いになっては如何ですか、と勧めてくれた。

関白の同意を得た百両は、定式どおり武家伝奏に書類を出し、家計の窮迫を訴えて、

明年以後十五年賦で返納する約束で、御産所造営の用度金百両を拝借したいと願出た。四月二十四日に手続きを取り五月十二日になって百両に当る銀六貫目を貸与された。

中山績子を介して内請した百両の方は、八月二十日になって半額の五十両を明年以降一年賦の償還の約束で、始めて貸与せられた。どちらも不如意で、思うとおりに行かない。

明治天皇崩御の直後に俳人の碧梧桐が京都へ行き、各所で話を聞いて集めて「遺芳余香」と題して雑誌「日本及日本人」に掲げたものがある。嘉永以降、天皇の御誕生地中山大納言の邸の隣家に住んでいた田中某と言う人から聞いた話を取次ぐ者があった。

「当時は随分町人がお公卿のお住居を拝借していました。田中の家もどういう縁故でございましたか、今出川御門をはいりました、すぐ左側の河鰭さんのお家を拝借していました。その時分もう鷲の尾さんというのはござりませんで、すぐ中山さんとお隣同士になっていました。町家とは違い、お構えも広うおしたので、草がぼうぼう生えてそのお掃除をするのも大変だったと言います。その時分よく中山さん方へは出入りしまして頂戴ものなどしたことは数えきれませぬ。おエライ天子様のお生れになった御霊跡ということも当時は存じませんで、中山さん方へ往こうなどとお友達あつかいしていたことを思いますと、ほんまに夢でございます。

その時分のことで一番記憶に残っておるのは、鶏や豚をお屋敷内に飼うたことでございます。構えは広うし、ただ捨てて置くのも勿体ない、というので、今考えれば随分モ

ッサリした垣などこしらえて、そこで鶏や豚を飼いました。鶏は兎も角、豚を飼いますのが妙なことと思召すかも知れませんが、御維新前後のことで、何でも豚は有利なもんやというような噂がパアと立って、誰彼とのう飼うたのでございます。中山さんのお内にも飼うてあったかと覚えております。畏れ多いことではありますが先帝様（明治天皇）も御幼少の折は、鶏や豚の鳴き声をお耳近く聞かれたのでございます。その後、明治七、八年のことでございました。東京へ御遷都後のことで、町人の拝借していました処などは皆立退きを命ぜられます。総てが今の御所のように改められました。」

こう言う話を捨て難いと思う。中山家の位置は、公卿屋敷の中では町の民家に近い位置にある。

御世話卿には議奏前権大納言東坊城聡長が任命せられ、御用掛には禁裏執次（とりつぎ）出雲守沢村寿栄、その下に非常附使番と御用下掛を各二名ずつ置いた。

医官も典薬寮鍼博士藤木篤平以下九名、他に、生れたもうべき嬰児の執匙に典薬寮医師太田成式を、産科は同寮の女医博士賀川満崇、その子の医生賀川満載が係となった。

着帯の日時なども例によって陰陽頭土御門晴雄などが勘文を奉って選ぶ。御産の事で往来する順路も行違いのないように陰陽頭が決定して、それぞれの向に通知した。なお夜中でも医師たちが御門を通行出来るように各方面に連絡を取った。

その間に中山権大納言から船鉾（ふなぼこ）町（新町綾小路南と新町四条南）の年寄に書面を送っ

て、毎年の祇園会の船鉾に祭る神功皇后の神面をとどけて来るように命じた。安産を祈るためである。また御用掛から大和国山辺郡内山村永文寺子院上乗院内に祀る生産社の神璽を迎えて御産所に移した。御産所の次の間に屏風をめぐらして御神体を安置し、前に小机を置き、毎朝洗米清酒をささげ、灯台香炉を備え、昼夜灯明を点じ、抹香を焚くのである。

両船鉾町の年寄が日を別にして神功皇后の神面を奉じて来たのを、御産所正室の床の間に祭った。二面ともに唐櫃に納めたままで外に出さず祭具も置かない。これから毎日慶子が生産社の神璽と併せて礼拝するのである。

九月三日には中山家では邸内の空地に穴を二つ掘った。この方位も陰陽助が定めるので、御産後、穢物を埋めるのと、もう一つは産湯を捨てる為である。産湯の水は前にも記したように方位を見て、四日に家来を遣って出町橋の北からくんで来させた。実際にくんで来る流れの水は僅かのもので、あとは邸内の井戸水を足して用にあてる。従って、私が前の日に祐井と誤って信じた西側の羊歯の葉の茂った石井戸の水が使用されたのかも知れない。

嘉永五年の九月二十二日は、「この日天晴れ風静かなり」と記録されている。辰の刻ごろに出産のきざしが見えたので、直ちに使を出して医師と産婆古市佐渡を迎えにやった。御用掛、出雲守沢村寿栄もまた知らせを受け、午の刻ごろに来た。中山忠能から、関白、議奏、武家伝奏に書状でこの旨を知らせ、大典侍の中山績子にも通知した。

出産は午の半刻で、皇子であった。後の明治天皇である。

孝明天皇はこの時二十二歳であった。天皇は常御所で庭の籬の菊花が咲くのをながめながら午餐の膳に向っている折に皇子降誕の吉報があったので、たいそうお悦びになって、いつもよりも杯を重ねられたと言われる。静かな秋日和の昼の時間である。この北庭の菊の花壇は維新前後には荒れてなくなっていたが、明治天皇がその時の父の帝のお悦びのさまを忍んで改めてもとのように植えさせた。

明治天皇の降誕以前に孝明天皇には、最初が内親王で、嘉永三年の誕生で順子と言う名であったが、三歳でおなくなりになった。左大臣藤原尚忠の女、夙子の方の出であった。次は同年十二月十七日の誕生で皇子だったが、翌十八日、命名もない内に夭折された。こちらは権大納言藤原俊明の女、伸子の方の出であった。明治天皇の次に、三人の皇女が生れたがそろって短命で、誕生の翌年になくなっている。誰が見ても実に子供の運に恵まれない方だったのに、新しく皇子の誕生を見た。そしてこのひとりの男子がやがて明治と言う開闢以来の時代を、神話の巨人のように背に担うことになった。

お生れになった皇子は、請衣を以て御体をつつみ、胞衣とともに抱き奉った。請衣とは、白羽二重三幅を方形に袷にしたものである。

降誕のことを奏上が終るのを待ってから、継入の湯に浴せしめた。これが終ると、邸内に在る火を全部棄てて、河端道喜の家から持って来た火を用いることになる。河端は禁裏御用の餅屋で足利時代の末からこの家の火を清いものとして宮中で用いる例である。

もとから在る火は産のけがれに触れたものとして一切棄て、清いと信ぜられる火を新しく入れるのである。

未の刻過ぎて、天皇の御使、生島朝子（駿河と称せられる）が輿で来て中門を入り、寝殿の簀子で輿を降り、老女に導かれて御座所に入って皇子に拝謁し、守刀と掻巻を差上げて帰って行った。

いつごろから始められたものか、現代から見て変った古い風習がいろいろと守られた。出産前に帯を着ける時に、母公附の医師から仙沼子一包を奉る。これは合子草の種子で、妊婦が帯の間に入れておくとお産が軽く、また毒のある場所に行くと仙沼子が自然と音をたてて鳴ると伝えられるのである。これを包むのにも法式があって、十四粒を一包とし他に一粒を一包としたのを中におさめ、上に仙沼子と書き、さらにその上から檀紙で包む。これを帯の間にはさんで持つのである。

御産の調度や雑用の品々は、宮中で調進し奏者所で点検し、使番がとどけて来た。胞衣桶一口、笋刀一双、押桶二口、衣架一双、菊灯台一基、五尺屏風一双、赤身の天児、犬張子大小二個、片高畳一枚、薄畳一枚、倚子茵一枚、薬簞笥、薬用の風呂、茶碗、鍋、桶、杓、盥、行灯、炬燵、便器などである。

皇子の御蓐は御産所の正室六畳に設ける。白絹の縁をつけた片高畳を置き蓐を展べ、寝衣をかける。片高は厚い畳を斜めに半分にそいだもので、その高い方に枕を置き皇子

をお寝かせした。東あるいは南が枕で、枕もとに犬張子を二つ置き、左右向き合っている。この犬張子の中に、白粉や黛の用具が入れてある。その後に披露物台を置き、先に御使を以て賜った守刀一振を載せ、赤身の天児と称える人形を台にもたせて立てる。天児とは白絹に綿を包んで頭とし、丸く削った木を丁字形に組んで人形の肢体とし白絹を貼ってあるので、手足に当る末端に紅絹を貼ってある。赤身と称するのは、この故である。昔から天児は生れた子の遊び友達となり、また悪気を払う作用があると信じられた。

別にある披露物台は床の間に置き、押桶二個を載せた。二つとも白木で白絵、その一つには米一包、花結の糸二条を、他の一つには青石を二個と方頭魚二尾を納める。米は銀箔を押した帖紙で包み、皇子の座を動かすごとにこれを撒いて、修祓に代えるので、花結の糸の方は白練繰の緒で、長さは二つとも一丈二尺、七夜を迎えるまでに皇子がくしゃみをされるごとに、その数を結ぶ、くしゃみが多いほど、長寿と信じられた。青石、方頭魚はお七夜と箸始めに供えるので、金石の名にちなんで、御丈夫なようにと祈願するわけである。

御蓐の東に衣架二つを立て黒紅に金箔を押した提帯二条を懸けて結んである。白張屏風一双を御蓐の側、便宜のところに立てる。衣架も屏風も白張で、白描で松竹鶴亀を画いてある。彩色のあるのは最初、提帯だけである。彩色のあるのを用いるのは色直しの時からであった。

九月二十八日は皇子のお七夜に当ったが、なくなった姉君順子内親王の百ヵ日なので、

陰陽少允若杉保申が御座所の清祓を行なっただけで、七夜の儀は二十九日に行い、旧例どおり参議文章博士五条為定に皇子の名を勘進せしめ、豊、美、建、義、敦、祐、重の七字の中から勅定せられ、天皇が親しく筆を執って、祐宮と記して中山家にとどけさせられた。祐の一字は周易の文中から選び、また光格天皇の幼名であった。御使生島朝子が中山邸に向い、天皇の賜うところの御名字と太刀一腰、馬代丁銀十枚、産衣三襲、鮮鯛一折をもたらした。御名字は備中檀紙三折に宸筆を以て祐宮と記し、訓書を添えてある。訓書は奉書を四つに折って祐、佐知と三字を書いてある。これを拝覧の上、前に下賜せられた守刀の箱におさめる。

産衣は白生羽二重で、背、胸、袖の全部で五ヵ所に、菊の花の御紋に松竹鶴亀を記した紋様を胡粉で描いてある。これに犬張子がつけてある。これは枕もとに置いてある粉黛具を入れたのとは違って、玩具の犬張子である。淑子内親王と和宮からもお祝の贈物があった。天皇の女御からも産衣二襲、干鯛一箱が進められる。産衣は天皇から賜るのと同様で、やはり玩具の犬張子を添えてある。干鯛と言うのは乾し固めたもので食用に作ったものでなく、白木の方形の深さ六、七寸、長さ二尺二、三寸の干鯛箱と言うのに納め、形は一定している。宮廷で肴を贈答する形式だけのために作られたので、新年の御太刀一腰が、体裁だけの木刀であるのと同じであった。

十月二日に胞衣を洛東の神楽岡におさめた。これも陰陽寮からの指示に依るものらし

く御用掛、沢村寿栄から皇子降誕の翌日に吉田の神主のところに書状で旨を伝え、御胞衣を吉田神社の境内に埋めるので、近く人を遣って吉い土地を定めると知らせた。御産所から方位は卯辰、即ち東と東南東の間に当り吉田山の斎場所から距ること八間の土地に定めた。

御胞衣は降誕後二、三日で地に埋める例だが、この年は九月中に土用の節があり、土用には地に穴を掘ってはいけないことになっている。土用が終って節替の時も悪い。順子内親王の斎日があり二十九日は七夜の礼、三十日と十月一日は、また日が悪いとあって、この日まで延ばした。土用中に埋めることもあろうと考えて、初め御産所の脇に穴を掘ってあったのも使わないことになり、十月二日に使番が仕丁、植木屋、人夫など連れて行って吉田山の上に埋め、松の木一株を植えて目じるしにした。周囲五尺ばかりに方形に竹柵を結い、白絵の菊灯籠を立てて灯明を点じた。この灯明も宮中から持ってきた清火である。神官に依り祓加持、祈禱があって、使番が帰り御用掛に報告した。御用掛は直ちに参内して右京大夫からこの由を上奏した。

十月二十二日は、降誕後三十日に当るので皇子が始めて宮中に参られる。参内始めである。輿に召される前に、皇子に脂粉を加え奉る。これは慶子の父、中山忠能が宮中へ行って形式を写して描いて来たのが残っているが、額の生え際に際と言って横に線を白粉でえがき、黛を点じて、その下には臙脂を用いて、犬の字を書く例である。そこから寝殿に出て板輿に乗る。典侍中山慶子、つまり御生母が陪乗して抱いて行く。

慶子が着帯の日に主上から賜った末広や、皇子が降誕の日に賜った守刀、これに諸社寺の護符類、赤身の天児、衣一襲、口拭の絹、料紙などを文匣のふたに入れて輿の中に置く。

巳(み)の刻に輿が出る。先払は門番二人、禁裏使番十人、二列となり麻上下(かみしも)で先行する。お輿は仕丁八人でかつぐ。これを直垂姿の滝口の侍四人が脇につき、典薬寮鍼博士藤木篤平と典薬少允山科元敏が狩衣を着けて列外に従い、御用掛沢村寿栄がまた狩衣を着て輿の後にお供する。預仕丁二人、押えの仕丁二人、同心六人、与力二人がこれに続く。御世話卿東坊城聡長は中門内からお供し、中山忠能とその子右近衛中将忠愛(ただなる)は門外でお送りしてから改めて供奉に加わる。列外のお供である。

御輿は門を出てから東に向い、中筋街を南に出て飛鳥井氏の門前を西に、有栖川宮の門前を北に、朔平門前の街を西に行き、清所門から入り、巳の刻半に奏者所から昇殿せられる。わざわざ道を遠まわりしたのは陰陽家の意見に従ったもので、あらかじめ陰陽助、幸徳井保源が勘文を奉ったのである。

天皇は常御殿にお出ましになって皇子と初めて御対面になった。口祝があって人形を賜った。女御からもまた人形を差上げた。皇子からは内侍所に、御鈴料金百疋、鮮鯛一折を奉り、天皇には中高檀紙十帖、昆布、干鯛各一箱、樽一荷を献上する。この時から皇子は典侍中山慶子の局にお住いになることになる。忠能の母綱子が付いて移って来て日夜おもりするようにした。

しかし、一週間ばかりして十月二十九日になると、御所では新嘗祭の神事に入るので、乳母などに穢れのあるのを憚って、皇子は中山権大納言の邸に移られることになった。お供は参内の時と同様である。この時から皇子は引続き、中山邸におとどまりになるようになった。忠能も宮中の勤番をやめて、皇子傅育の任にあたり、母の綱子と妻の愛子が夜々、お側につくことになった。必要な飯米薪炭灯油の類は宮中より物を以て給し、菜料は銀で受ける。

だが支給は潤沢でないので、傅婢乳母など六人を十一人に算えて、剰った分を中山氏に与えた。しばらく祐宮を養育せよと御下命があった時に、忠能から家政の不如意を言い衣服飲食の一切の財用を宮中より賜与あるならばと申上げた。皇子には賜米二十五石の俸券を賜った。京都には茶染屋五兵衛と言う江戸の札差にあたる男がいて、公卿の俸券を銀に替える職業をしていた。そこで皇子の俸券を御用掛沢村寿栄から五兵衛に話して、二十五石に対し銀二貫十六匁二分五厘を受取った。

皇子を中山家に預けて養育するのは、費用がかさむから、御所にお迎えした方がよいと、新中納言典侍勧修寺徳子や大御乳人命婦、押小路甫子などから意見が出たくらいである。奥は天皇をかこんで女たちばかりで、それぞれ気位高いひとたちだから、いろいろ口が多く煩しいのである。

それにしては、これまでの皇子も内親王もお弱くて夭折されているので、祐宮の健康

のことを考えるのが第一であった。御世話卿東坊城聡長が関白や武家伝奏と相談して、一ヵ月の定額を制限し、当分、中山氏の屋敷でお育てすることに決した。これらの費用は幕府から禁裏に入れている武士の承認を求めることになっている。

祐宮の衣服、紙類、奥向使用の蠟燭、医師に対する謝礼は御所から贈った。すべて宮中の前例どおりにして動かさない。それだけを任務にしている人間がいるのである。

皇子には、正月にこき板（羽子板）、こきの子（羽根玉）、鰯が贈られる。三月の節句には青白のほらがい餅六十と鰯、五月には檜で造って花を挿した飾り兜、暑中には肴一折、中元には菊の紋章を入れた紅白の提灯各一個、八朔には米の粉から作った菓子藤の花一荷と鰯。九月の節句には餡を入れたほらがい餅、猪の子には、つくつくの白きね（五、六寸大の臼に白い強飯を盛り灰塩を加えて杵を添えたもの）と鰯、寒中には肴一折、誕生日にも肴一折、現代の生活から考えると質素で清潔なものである。

京都の風習で、子供が生れるとその最初の正月に、母方の生家その他から「ブリブリ」や毬杖を贈る。祐宮にも外祖父権大納言中山忠能からブリブリと毬杖を献上した。ブリブリは木で作り瓜のような形をしたのに、高砂や千秋万歳など目出度い画をかき、ひもを付けたものと付けないものとがあるが、ひもを付けたのには両側に車がある。毬杖も古くからあるもので、長さ一尺八寸ばかり、頭に槌がついていて、胡粉、丹、緑青などで彩った紙を柄に巻き、木で作った毬を打って遊ぶのである。幕末時代には、実際は子供たちはこの玩具で遊ばなくなっていたが、これも古い風習だけを守って、贈るの

である。ブリブリと毬杖を献上したのは、外祖父の中山権大納言だけでない。新待賢門院や女御、御生母中山慶子からも一組ずつ奉った。祐宮が最初に接触された外部の世界は、お付きの人々と、前に記した赤身の天児、犬張子に、慣例が保存して来たこれらの玩具だけであった。

その年の冬の寒さはきびしく、夜々、忠能の母綱子と妻の愛子が祐宮を守って寝るのだが、十二月三日は綱子の番で、この夜は殊に寒気はなはだしい上に大風が吹き荒れたので、体が弱いと信じた皇子を守るので、終夜ねむれず、その時の所感を詠じた歌が残っている。

君をつゝむ心のふすま重ねても
むねのいた間に風ぞもりくる
日の御子はこゝにいませり天津空
さむきよあらしこころして吹け

実際に中山家ではお預りして居ても心配だった。今日やや荒れて残っている建物を見ても屋内の闇に底冷えする京の夜が思われるくらいである。

この月の八日になると、御物忌から祐宮をなおしばらく忠能の屋敷に置くように御所から命令があり、次いで二十四日になると、明年正月中、逗留するように重ねて話があった。その間、祐宮が少し加減を悪くしたので、宮中と側近の者が非常に心配して、京都馬町に小児科の医師で三宅宗仙と言うのが名医のうわさが聞えていたので、典侍中山

績子から天皇のお許しを得て宗仙を迎えにやり診断を受けた。同時に中山家にゆかりのある大坂の坐摩社に命じて連日皇子のために祈禱をさせるように宮中に願出て、依頼の使者を出した。

翌る嘉永六年（一八五三）がアメリカ合衆国東インド艦隊司令長官ペリーが軍艦四隻をひきいて、大統領の国書を幕府に渡して開国を迫った年である。ペリーは回答を明年に受けるよう約束させて琉球政府を威嚇して貯炭所を作る権利を得た。鎖国で天下泰平のように信じられて来た日本の社会がここで一度に睡（ねむ）りを破られる。その後は年々、一段ずつ急速に疾風怒濤の中に突入する。祐宮は、まだその運命を知らず側近の不安と看護の中に新しい年を迎えた。

外の風

一

幕府時代の日本人は、住んでいる土地から一生離れないのが原則であった。農民は死ぬまで土を守っている。諸藩の武士たちも、主人の参覲交代の供をして江戸に出る役目でない限り、城下や領土の内に暮して外を見ずに一生を終えた。商人も商売が活発になり、品物を遠方に送るような時代が来るまで、領主や士分の者の生活の用を足すので満足して、小さく、規定された生活であった。大名の所領が変更になると世帯をまとめて移住するくらいに密接に隷属した関係である。

都市が発達するのに従って、商人の活動がさかんとなり、農民も村を離れて労力を求める町に出て働くようになった。世の中の組織が変って来たのである。

よほど旅慣れたものでないと、旅の苦労を人が嫌った。狭い日本の街道筋だけを歩くのでも、途中諸藩の領土に分たれて支配が違う。通貨さえ違う場合があった。道中記の出版が起り、伊勢神宮へ抜詣りがはやり出したのは、外を見る好奇心と活力を人間が商売でなく持つような時代に入っていたのだ。それでも、人は用なく遠方へ出るのを嫌う。封建時代の人の心を一様に支配した感情である。参覲交代で、大名行列を作って街道を

練って上りくだりする武士たちも、自分の住む地方の町が一番住みよい場所だと信じ切っていた。道中の事物にも器械的に他国のものとして注意を払うだけである。もとより任務に怠りや粗相のないように緊張を要求されている旅である。

旅嫌いの日本人が、幕末近くなると、外に出かけるようになる。生れた家で暮すだけの理由を失っていたし、経済的にも家に置いては養い切れぬ人員が出た。何となく現状が不安である。人間の生活が活発である都市に出たり、知らぬ遠方の土地へ行ってそこの国情や人の心の動きを知ろうと求めたもののようである。遠国の人々にも自分と共通する心を見出すように成った。

京都の禁裏に住む公卿には、幕府の拘束があって、そうした自由が考えられなかった。しかし、列藩の武士たち、特に若い人々の間に、一代前には父兄が安心していた空気とは違って、何かの心の渇きを覚え、それが何か自分も知らずに他国を知ろうとする漠然とした志を持つ者が出て来ていた。未来をさぐろうとする新しい情熱である。もちろん、家の生活に不自由を感じ始めたのが原因で、次男三男の部屋住みの者にこの傾向が強く、また努力しても身分の序列以上に出られぬと知っている小身軽輩の中の勇気ある者に、渇きは強かったろう。絶望しなければ、貧乏は若い者に、いつも力となってくれる。

長州の吉田松陰の若い日の旅もそれである。何のためのものか、何を求めて出たのか、ほとんど自分ではっきりしていなかったろう。ただ、誰かに会って強い渇きを癒やそうと漠然と求めていた。今日と違うとして二十ぐらいの青年で、どこへ行っても彼は自分

が何も知らないのに気がつく。しかし、惑いながら何かを発見したい熱情に取り憑かれている。精神は純粋で高邁であった。やがて終る短い生涯の中にも、長崎に行くかと思うと熊本に横井小楠を訪ね、江戸に佐久間象山の門をたたき、大日本史の水戸の学者たちと対話し、やがて、ペリーの軍艦に頼んで大胆にもアメリカにまで渡ろうと企てるのだ。疲れることを知らない彷徨である。彼の生れた萩の町は、当時の日本としては随分遠く奥深い土地で、現代でも閑静と無為に、美しいまま損われぬ山と海につつまれている小さい城下町だ。牢屋に入るためにその故郷の土地に帰るまで、松陰はこの遍歴を続けている。

もっと目標が明確で動揺しなかったのは、半世紀間も前から続けられて来た一部の人たちの蘭学への関心である。蘭学といえば、オランダ語の勉強のことだが、それは狭い入口だけのことであって、内に入ると、彼らには未知の西洋の科学が、どこまで遠く深いか予測もつかず拡がっていた。圧迫を受けながら蘭学の研究だけが一部だけ認められていた。漆黒の闇夜を手さぐりで行くような経過の「蘭学事始」の執念のような忍耐強い究明が、自由人である医学生たちに依って始められた。医学のうしろに、まだ奥があるのだ。心ふるう思いでそれを追っていた人々である。

前野良沢、杉田玄白も医者で、教師もなくオランダ文の解剖学書、「解体新書」の翻訳に粉骨協力した。それから五十年経ってから、有名なシーボルトが長崎のオランダ商

館に赴任して来た。民間の二、三の有志だけで、独学で蘭学の勉強に苦労したのと違ってヨーロッパでも尊敬された優れた学者が来朝したのである。

シーボルト自身、日本研究の使命を帯びていたのだが、外科学、植物学、天文学、地理学などの広範囲にわたって教えてもよいと日本側に申出た。さいわいに、この時代の幕府の老中には学芸に理解ある政治家が加わっていた。シーボルトの門に、長崎の医師や通詞(つうじ)ばかりでなく、江戸を始め全国から有為の学徒が集って教えを受けることになった。若い高野長英は陸奥の水沢から、小関三英は出羽の国から、遥々と長崎まで出て来て、郊外の鳴滝の校舎に入った。シーボルトは江戸にも出て、最上徳内のような地理学者、天文学の高橋作左衛門などとも会ってお互いの研究を深めた。日本人が初めて見る各種の珍しい学問書も運んで来てくれていた。これだけ特別の配慮を許しながら、幕府の方針はどこまでも鎖国で、制限した条件でオランダに通商を許しているが、蘭学を通じて夷狄の文化が国内にひろがるのを、官僚は御法どおりに嫌っていたのである。政府として一応海外のことを知っておくべきだとするが、それは秘事であって、民間にまでひろがるのを神経的に細心に警戒していた。

日本漁民が漂流して外国へ渡ってから送還されて来ると、遭難を憐むどころか入牢させて外国の事情が外部に伝わらぬように、時に牢死させたり、一代きびしい監視の下に置くのが建前であった。その為に、日本に家族を置き恋しく帰りたくとも上を怖れて外国に居残ったままになる者さえ出た。海の外の風には毒があるように妄想していたよう

である。蘭学の必要を認めていても、やはり危険だと見る当局者が、固い壁のように立ち塞がっていたわけである。

有名なシーボルト事件と言うのも、今日考えると実に何でもないことだが、異人恐怖症の幕府の役人から見ると、不埒で恐るべく国に害毒あることと見た。文政十一年（一八二八）帰国しようとしていたシーボルトの荷物を積んだ船が海上で狂風を受けて港内に避難し、倒れて稲佐の海岸の民家の二階にもたれかかって、破損して出港不能になった。

幕府側では、前からシーボルトに疑いの眼を向けて見ていたので、江戸で交際のあった天文方の高橋作左衛門を調べて、シーボルトに日本地図や蝦夷の地図を贈った事実を知ると、すぐに長崎奉行に指令してシーボルトに地図を出すように命令させた。シーボルトが拒絶すると、役人を出島の商館に向けてシーボルトが持っていた品々を強制的に押収した。地図や名所絵の類で、なかには「無間ノ鐘由来記」とか「夜啼石敵討記」などの、くだらない読本の類も入っている。公安を害するものと認めたのだろう。処罰の範囲は、間に立った通詞の多勢に及び、二十三名が入牢せしめられた。関係者だと見れば、まことに皆そのとおりである。更に西丸奥医師土生玄碩は、シーボルトの所持品の中に発見された葵の紋服を贈ったことが判って、六十九歳の老人が切腹よりも一段軽いだけの改易を仰せつけられ、同じく奥医師だった長男は切米を取上げられた。「御国禁に背き候段、不届至極に候」と言うのである。玄碩はシーボルトから白内障の薬を教え

て貰いたくて、自分が着ていて相手が欲しそうに見えた葵の紋服を脱いで与えただけのことであった。

高橋作左衛門は御書物奉行で天文台長である。入牢中に病死した。「御旗本の身分に有るまじき仕儀、不届の至につき、存命に候えば死罪仰せつけらるべき者なり」と塩漬になっていた死体に宣告した。そして、長男と次男は遠島に処せられる。下僚や弟子たちもそれぞれ江戸から追放、シーボルトが江戸にいる間泊った宿屋の主人までが不取締というので五十日間も両手に鎖をはめておかれた。シーボルト自身は日本人の妻子がありながら、日本御構と言うので国外へ追放である。海外から訪れて学術の師宗と歓ばれても、終始、危険人物と見て監視していたのである。

だが、強権を以て幕府が防波堤を高く築いても、知識欲に燃えて渇いている人々があって、危険を冒しても漏水をすくって喉をうるおす。学問の同志が相寄り集って、互いに知識を交換した。自分たちが学んで来た学問と、オランダのそれとが建前がまったく違うのを発見した。彼らから見ると幕府の官学の朱子学も形式を整えるだけで内容がない。道を説くのはよいとして、内容が力そのものである実践がないのに気がついた。

江戸の山の手にあった洋学関係の人々の集い、尚歯会の同志が同様に迫害を受けることになった。渡辺崋山、高野長英、小関三英が、同学のよしみから、また偶然に住居が近いせいで、親しく往来した。

渡辺崋山は三河田原藩の家老で、麴町の三宅坂の藩邸の中に住み、高野長英は平河天神の近くに一戸を構えている町医、小関三英は岸和田藩医で赤坂見附近くにいたので、どちらからも、歩いて四、五分の距離である。好学心が同じ方角、海の外に向う。親しい仲となったのは自然であった。

これに幕臣の中では明日のことを考えている川路聖謨（としあきら）、伊豆韮山の代官江川太郎左衛門、農政学の佐藤信淵、古河（こが）藩の家老鷹見泉石と言った人々が相寄って、新しい知識を交換し、教えたり教わったりした。長英を除いて、人柄は皆、温和でしかも己を律するにきびしいと言ったような者ばかりであった。

崋山、渡辺登は質実敦厚な人柄で、主家の疲弊した藩政を改革して復興させた功績さえあって全国的に注目されていた。藩の海防掛を命ぜられてから、ひろく海外のことを勉強しようとする。若い時に家が貧しく内職に団扇や提灯の画など描いたことから始めた余技の画が日本美術史に残る作品を生み、特に肖像画が西洋風の写実的な性質を見せてさわやかな新風を生んだ。偏見のない性格の上に、洋学から得た識見に依るものだ。精確に具象的に物を見ようと努めている。

高野長英は、奥州水沢の医家の養子で、養父は杉田玄白の門人である。江戸に出て苦学して医学と洋学を勉強し、次いでシーボルトの鳴滝塾で自然科学の研究を続けた。江戸に帰ると、麴町に医院をひらいて診療だけでなく講義をして学生に教え、かたわら洋書の翻訳なども続け、聖賢の道を説くのでなく、有名な大飢饉があった時は蕎麦と馬鈴

薯の作り方を本にして出版するような、実学的な立場で、医者だけでなく、何でもやる変った人物として世間から見られていたろう。学問とは、人を律するばかりでなく、世間の為になるように在るものと考えている。儒学者の側から見れば、人気取りの忌わしい傾向、危険なものになる臭気が感じられていたのである。

天保八年（一八三七）にアメリカ船モリソン号が日本人の漂流民をのせて渡来すると知らせがあった時に、幕府は鎖国の御国法どおり武力でこれを撃退するように決定した。国際的な慣例に無知だったとしても、日本人の漂流民を送って来るものに向って、道理も考えず危害だけを妄想したものである。

幕府は文政八年（一八二五）に、二念なき異国船打払令と言うのを出している。例外をおかず、徹底的に排撃するという意味のものである。イギリスのフェートン号が長崎で乱暴を働いたのや、薩摩沖ノ島で狼藉した事件に衝撃を受けてにわかに出した禁令だが、海岸に近づく外国船をすべて破壊し、上陸する船員を全部逮捕するか殺害すべしと、沿岸の官憲に命令した。日本人漂流民を送って来る船にもその筆法を御国法どおり容赦なく実施させようとするのだ。多少なり目があいた者が見たら、これは日本の為に怖るべき結果を招くものと信じられた。

崋山も長英も自分の身を危くするとも考えず、警告を出した。日本の国や社会のことが心配になった。世界から故意に足を踏みはずしている鎖国的な頭脳は、反って異国の侵略を招き、国を危くする。こうした社会的視野のひろい意見が出ることを官はきらう

のである。崋山は「慎機論」を書き、長英は「夢物語」を草して、幕府の異国船撃退方針を緩和させるように人に訴えた。人道上の目的で来る外国船に武力を用いるのは間違っているし、日本の為にならぬと信じたからである。

折悪しく目付に鳥居耀蔵がいた。官学の統領、大学頭林述斎の子であって、本能的に洋学嫌いで、西洋人は野蛮人であり、道徳仁義を弁えぬ夷狄だと狂信した剛情な人格である。江川太郎左衛門と同行して浦賀から江戸湾の防備を見まわったが、江川が崋山、長英などの「蛮社」に出入りしていること、巡見に際して測量方として推薦したのがやはり「蛮社」の同人だったので採用に反対したが、用いられて優秀な報告を出して成功だったので、一層、洋学派を憎んだ。崋山、長英が出したのは御国禁に反抗する不穏の文書で、密偵にさぐらせ一味の逮捕を進言した。

崋山は天保十年（一八三九）五月十四日、奉行所に呼び出され投獄された。長英も江戸から逃げる余地がまだあったのに、自分だけ逃れる気はないと言って迎いの来るのを待った。小関三英は感じ易い男だったので、捕えられる前に運命を知って自殺した。

時代は暗い。窓をあけて外を見てはいけないのだ。渡辺崋山は長英のように学者ではなく、有能な地方の行政家であった。藩の海防掛を命ぜられたので、職務に熱心な男が、海の外のことを知ろうとして、精神は狭い世界から脱出しようとした。その報復に、牢に投じられた。

清廉潔白で篤実な彼の人柄を知っている友人の全部の者が、自分たちの身を危くするのを知りながら、崋山を救い出そうと骨を折った。多く学者や画家の友人である。朱子学の大家で崋山の二十年の師匠であった松崎慊堂（こうどう）などは六十九歳の高齢だったが官辺に向って運動し、崋山を助けようと尽力した。死罪になるものと一般に信じられていたものである。人々の運動が認められて、藩に引渡され、終身蟄居を命ぜられた。江戸の獄中生活で病みやつれた軀で罪人として故郷に帰り、監視づきで残る一生を小さい家の中に送ることになった。

江戸の友人たちは人間的に優れた人々で、学問に対する情熱も活発な、気高い志の交わりだったとして、彼が帰って住む小さい田舎町は封建の闇の中に沈滞して、気高い精神など認められない環境であった。崋山はどこまでも国法の罪人と見られる。毒を持っている危険な人物と公儀で設定したように、待遇された。息を蘇らせるような空気は通って来ない。幕府が改めて彼を告発することになるらしいと言うような悪意のあるうわさをひろげる者が出て、崋山の気力心力は極限に来た。この誠実な人物は、主人に迷惑をかけ、年老いた母を始め、家族を不幸に陥れた罪をわびた遺書を認（したた）めてから、清らかな自殺をした。

高野長英の方は、若い時から蘭学に飛び込んで、一度、開眼された目を二度と閉じることが出来なくなっていた。精神は強靱である。勇気を以て取調べの座につき、学問の正しさを確信して絶望することがない。その、たくましさが、上に対して不遜なものに

見え、憎しみを加えたことも確かであった。崋山の場合と同じように外にいる友人たちや門人が運動してくれたので、明日を楽観的に見ていた。仙台藩が彼を領内に引取らせてもらうように公儀に働きかけていたのも長英の新しい学識を惜しんだからである。長英も、自分の学問が世の為、人の為になるものと信じて疑わない。この蛮社の事件を起した発頭人の目付鳥居耀蔵が、町奉行となったと知った時、長英も始めて、これは助かって外に出ることはない、と見た。牢に入れられてから五年目の六月晦日に小伝馬町の牢屋が火事を出したので、囚人たちは三日以内にもどるのを条件として、一時釈放された。外に出てどこまでも学問を続けたい長英がその中にいた。長英は三日を過ぎても帰らなかった。捕吏に追及される身になりながら、一度、故郷の水沢に帰って年老いた母に対面してから転々と地方に隠れやがて江戸に帰って来ると、妻子とともに隠れて住み、オランダの学術書など翻訳して初一念を貫く生活をした。また身辺が危くなって友人の江川太郎左衛門を頼って伊豆の韮山に行き、しばらく匿(かくま)われて暮した。江川太郎左衛門は、幕府の代官であった。洋学や海防のことに昔から熱心だったので、上に知れる危険を知りながら、この天下の脱獄者をかばって養ってやったのである。長英も永居は友人の迷惑になると承知であった。やがて、行き方をくらまして今度は四国に渡り、伊予の宇和島へ行った。幕府の威令は日本の全土に及んでいるものでなく、地方の大名の領内に隠れれば、しばらく知れずにいる。支配が違うせいであった。

宇和島の藩主、伊達宗城(むねなり)は長英が来たと知ると、藩士に蘭学を教えさせるようにした。

江戸に知れて問題になるまで、長英と知りながら学問を伝授させ、また兵学書の翻訳に従事させた。これまでとは違う新しい時代が、やがて来るものとこの四国の奥地の大名が自覚していたのだ。

しかし、ここにも長英はいられなくなる。いつか、ひょっこりと、薩摩に渡り、領主島津斉彬（なりあきら）の世話になる。分国の有難いところで、当座の席は在るのだ。

だが、大胆な男は、また江戸に帰って来た。沢三伯と偽名して、青山百人町に医師を開業した。薬で焼いて顔の人相を変えていたので、隠れとおせるつもりでいた。しかし小伝馬町の牢屋で一緒だった男が、ある日偶然に往来で長英を見かけて、密告して出たので捕手が不意に家に踏込んだ。長英は抵抗して、捕手の一人を斬ったが、もう逃れられぬと覚悟して、切腹して死んだ。彼の死後、僅か三年を経てペリーの艦隊が江戸湾に入って来た。

二

江戸幕府は鎖国の制度に依って、日本全土の人間に目隠しを施した。国外のことは容易に見えぬようにしたが、ただ一カ所、長崎だけを窓のように外に開けてあった。

制限してオランダ船と唐船の入港を許して、両国の商人が来て住むのを認めた。江戸の人間は長崎が日本の中で最も遠いところのように信じていた。その上にオランダ人を

出島に、シナ人は町の場末の一廓に、堅固な門を作って日本人から隔離して置き、原則としてはその地域から外に出られぬことになっており、認可を得た日本人の出入りも、境界のところできびしく役人が監視していた。日本に居住を許したとしても、本土から分離して置いたことになる。

しかしながら、長崎は、外人のために日本に在る唯一の玄関であった。オランダ人もその式台まで上るのを許される。しかし、奥に通すようなことはしない。幕府はオランダ人に通商を許しても、国交関係を認めたのではない。つまり鎖国のままで交易だけさせているのだ。

まだ帆船の時代が続いていた。オランダ船がジャバのバタビアから長崎に来るのに、六、七月の海の季節風に乗って来るので、風が逆になるとオランダ船は日本に姿を見せない。一年の内の極めて短期間の訪問であった。これも封鎖した状態を守りたい幕府が、例外を許した理由だったろう。出島に来ているオランダ人は、船が来ない長い期間を、する仕事もなく、たいくつして暮している。オランダだけに通商を許されているお礼を将軍に言上しに江戸まで遠い旅に出ることがあるのが、日本内地に入る唯一の機会である。道筋の庶民が珍しがって見物に立つが、この場合、幕府の警戒は一層厳重である。個人的な自由な行動を採ることは、もちろん許される段ではない。処罰に死を以て脅迫されているものだった。

それにしても、この小さく一つだけ開けてある窓から、外の風が入って来た。オラン

ダ人から献上の贈物の中にはその時分から珈琲などもある。出島には日本人とはまったく異る風俗習慣で、物の見方考え方も別な西洋人が小人数ながら定住して掘割一筋、外にいる日本の民衆の注意を不断にひいた。離れて散らばっている蘭学者だけが、長崎に心をひかれていたのではない。シーボルトが来る前から新しい医術と長崎の土地とは常に結びついて考えられた。唐人屋敷の方からは、詩書や画法が伝えられた。西方の文化に関係した漢文の本も舶載されていた。漢文ならば日本の有識者は自国語のように平易に読んだ時代である。

窓は小さいが、ここで受けている風は、いつも新鮮で、遠く大坂、江戸、もっと奥の仙台あたりにまで通って行った。禁断だった海外の知識に、それほど渇いていた事実が人に在る。これが、やがて学問の他の動機から、まだ年若い勝海舟、坂本竜馬、高杉晋作、伊藤博文、井上馨など次の時代を作った人々が、新しい知識や技術を知ろうとして、また海外の事情を聞こうとして、いそがしく足を運ぶ土地となった。

たしかに江戸湾の水は英国のロンドン橋の下の水と直接に通じ合っていた。船首には人体の彫刻を、船尾にも重い装飾をつけて船脚が重かったオランダ船の時代は去り、帆船でもクリッパー型の、鋭く軽快な船体で海を速く渡るようになったし、蒸気機関が外洋船に取付けられてから、風を帆にとらえなくとも自由に遠距離の航海が可能となる時代が来ていた。

日本の鎖国は、日本列島が極東の奥深くに在ったせいで、長い間安穏に維持されて来

たが、航海術の発達から海洋が狭くなると、オランダ船、唐船以外の外国船が近海に現れて、祖先から受け継いで来た異国に対する警戒本能を刺激するようになった。長崎は、よかれ悪しかれ、外からの風をまともに受ける場所であった。土地の人たちは、アチャさんと愛称で呼ぶ習慣だった唐人とも、オランダさんとも二百年も続いた友好関係で親しい目でながめたが、この両国以外の外国船がふいに来るのを見て、驚くことが起った。その最初のショックが、平和な長崎の湾内で、文化五年（一八〇八）に起ったフェートン号事件であろう。

この外国船は、日本人が知っているオランダの国旗をマストに掲げて長崎に入港して来た。新暦の十月に入って、秋の光が池のように静かな海に流れている日である。水平線に姿を現わしたこの船に、それまで日本人が知らなかったヨーロッパの烈しい意志が隠されて来た。

出島のオランダ屋敷では、毎年来る季節に故国の船が姿を見せなかったので、今年は来ないものと、あきらめていた時、船が見えたと日本側から告げられて、祭の日を迎えたように悦んだ。長崎奉行は、検使を船に出すので、商館からもオランダ船かどうか確かめに人を寄越すように求めて来た。出島のカピタンはヘンドリック・ヅーフであった。部下のホゼマンとスヒンメルの両名をすぐ差向けて、沖にいる船に向い、日本側の検使に協力するようにした。

風邪気味で籠っていたヅーフも床から起きて、道路に出て沖を見ると、船は高鉾島を廻ったところで、錨をおろすのが見えた。オランダの国旗を掲げているのを見て悦んだ。出島から出た船が、沖合の船に接近すると、先方からもボートをおろして漕ぎ寄せて来た。舵を取っていた男が立ち上ってオランダ語で話しかけて、ホゼマンとスヒンメルにボートに乗り移って親船に行くように求めた。日本の検使の船がすこし遅れていたので、それが来てから母船に行くと答えた。その時、思いがけず、先方のボートの水兵がサーベルを抜き放って、いっせいにこちらの船に乗り移って来て、オランダ人両名を腕ずくで捕えてボートに移らせ、母船に連れ込んだ。日本人の通詞も、すぐあとから来た奉行所の役人もこの乱暴沙汰を見て、おどろいて陸に知らせた。

当時、ヨーロッパではナポレオンのフランスとイギリスが戦争をしていて、ヅーフの祖国のオランダもこの戦争に巻込まれていた。知らせを聞くと、ヅーフは、これはオランダ船ではなく英国の軍艦が来たのだと直覚した。日本側では、オランダの国旗をあげた船が来てオランダ人を捕えて行ったので、どう言うことかと呆れて、ヅーフの意見を尋ねに来た。

長崎奉行は松平図書頭（ずしょのかみ）である。検使が帰って報告したのを聞くと激怒して、異国船へ行きオランダ人を取戻して来いと厳命を下した。その時、沖の母船から出たボートが武装して岸近くまで接近して漕ぎまわったので、ヅーフ以下出島のオランダ人を奉行所に避難させた。町の者は怖れて大騒ぎとなった。松平図書頭は、武士の面目にかけてオラ

ンダ人を取戻すと誓い、海岸一帯の番所に戦闘配備につくように伝令を走らせ出動の準備をさせた。近隣の大名から一千名の軍隊が常に配置されている規制になっていた。伝令が行って見ると、どの番所にも人がいない。隊長たちも不在だし、長い海岸線に沿って、六、七十人の人数がいるだけなのが判った。これでは、目の前に敵船を置いて見ているだけで手が出せなかった。奉行は落胆した。しかし、ヅーフには自分が責任を以て、解決を計るから心配しなくともよい、と慰めた。

夜の十一時近くになって、捕虜となったスヒンメルが書いた手紙を、とどけて来た者があった。筆蹟がスヒンメルのものなのをヅーフが確認した。それを読むと、沖合まで来ている船が、インドから来たもので、船長の名はペリュウ、飲水と食料を日本側から補給して貰いたいと言う希望を取次いで来た。奉行はこの請求に応じたものかどうかヅーフに相談した。ヅーフは、これはイギリスの船だと思うし、それとすれば我々の祖国オランダとは交戦中なので、敵の為に我々から御配慮をお願いすることは出来ないと答えて来た。お心持はよくわかったとのみ、奉行から挨拶して来た。奉行は、独自に無事を計ってくれるものと見えた。

ところで深夜になってから、図書頭の用人が話に来て、どうなりましたかとの質問に、奉行から必ず、両名の方を取戻すように沙汰を受けている。その手段は、あちらが卑怯にもオランダの国旗を掲げて我々をあざむき、策略をめぐらせてホゼマン氏などを囚えたのですから、我々は敵船に行き礼を尽して放還を求め、承知しない時は油断を見て敵

の船長を刺殺した上で、私もその場を去らず腹を切って死にます、と如何にも冷静に話したので、ヅーフの方がびっくりして、それだけはやめて欲しい、それでは、あなたが助けてくださる筈のオランダ人両名もイギリス人に殺されて了うのですと、口をすくして説いたが、命まで捨てようとしている用人には話が通じないのである。うろたえたヅーフは深夜にかかわらず奉行に面会を求め、この危険な計画を実現しないように頼み込んだ。

松平図書頭は、出来るだけ永くこの船を引留めておき、番所の配備を怠った諸大名の軍勢や船が集るのを待って、一挙に攻撃に出ようとした。

次の日の朝になると、沖合の船はオランダの旗をおろして公然と英国旗を掲げた。これはドリュリ提督の下に属するイギリス船フェートン号で、大砲数門を備え、オランダ船を拿捕して日本貿易を破壊する目的で、日本近海を巡邏し、長崎の湾内にオランダ船が隠れているものと信じて捜索に侵入して来たものであった。船長はフリートウッド・ペリュウである。イギリス船が偽ってオランダ国旗を掲げて、湾内に侵入し、武力を楯に我物顔に湾内を調べて廻ったのである。

「その間、日本人は凡て防禦の準備を修め、我が出島もまた守備せられ、一般に狼狽の体なりき。されど二百年来全く平和に過ごせし国民なるが故に、これ決して異むに足らず。両検使は蘭人を伴わざれば帰還すること能わざるを以て、小舟にて英船の周囲を徘

徊し、温言を以て彼等の放免を請いしも効果なかりき。十一時頃に、四人の水夫は同船の一艇に乗込みて長崎市に向って漕出せり。予（ヅーフ）の後に聞く所によれば船長も同艇に在りしという。若し其の乗組員が予の掌中に入らば予はたやすく我等の同胞とこれを交換し得たらんも、これに反して彼等が日本人に捕わるる時は日本人の激昂によりて彼等のみならず我等の同胞二人も生命を喪うに至りしなるべし。然るに同艇は一の日本船を見て再び本船に漕ぎ還りしかば予は安心せり。」（斎藤阿具訳「ヅーフ回想録」）

池のように静かな湾を囲んで、何が起るかも知れぬ無気味な時間が過ぎて行く。たしかに二百年平和に過ごして来た市民には始めての緊迫した経験である。

午後四時頃になって、人質となっていたホゼマンが急に送られて来てヅーフの前に現われた。船長ペリュウは十八、九歳の青年で、オランダ船が日本に来ているかどうか隠さず言わぬと殺すと言ってホゼマンを脅迫した。その後に端艇を出して港内を漕ぎまわって検分させ、ホゼマンの言うとおりオランダ船が来てないのを確かめると、「予は飲料と食料とを得るため予の小艇にてホゼマンを陸に送る。若し同人が夕刻までにこれを携えて本船に還らざる時は、予は明朝早く解纜（かいらん）して、日本及支那の船舶を焼払うべし」としてフリートウッド・ペリュウと署名した書面を持たせて帰らせた。食料を持って来られぬ時もホゼマンは必ず船まで帰ること、さもないとスヒンメルを容赦なく死刑にすると、船長はホゼマンを送り出しながら口頭で伝えた。ヅーフはこの脅迫的な書簡を松平図書頭に見せた。奉行が耐え難い激怒を抑えているのが、ヅーフにもよく解った。

奉行はヅーフに、英国人の要求を容れれば人質のオランダ人を間違わず返してくれるとお思いですか、と念を押すように尋ねてから、水と食料を送るのに同意した。まったく人質を救出しようとする人道的な意味で、武士として、忍び難いものに屈服したものである。二人が帰るのを待つ間は不安であった。イギリス人が約束を破って人質を返さないことでもあれば、松平図書頭の武士の名誉はまったく地に落ちる。ヅーフも寛大な奉行の切ない心中を知っていた。

人質が無事に帰ると、奉行は、無礼な脅喝をした外国船をどうやって処罰すべきか、方法を考えた。ヅーフは、フェートン号が充分に武装した軍艦で、これは困難なことだと伝えた。襲撃しても海上のことだから、逃げて了うのである。港口の狭い水道に石を積んだ舟を沈めて退路を塞ぐことが出来れば別だが、さもないと、脱走を防ぐのは不可能に近かった。

図書頭は夜が明けたら使をイギリス船に出して、口実を設けて出帆を遅らせるように申入れようと言った。朝になると、待っていた大村侯の軍隊が長崎に着いた。三百隻の小舟に藁と茅を一杯に積んで火を放ちイギリス船を囲んで、焼打ちにする計画が提議された。

同じ朝に風が東に変った。順風を見てフェートン号は人々が海岸から見ている前で出帆して遠く外洋に出て行った。逃げられてしまったのである。

フェートン号が立去っては、万事が終った。奉行は万一の場合を思いゾーフ以下のオランダ人を引取って保護していたのを、自由に出島に帰らせた。その夜、松平図書頭は事件の責任を一身に引受けて切腹して果てた。

長崎の市民はオランダ人やシナ人と直接交際する地位になくとも、慣れていて、異人種でも怖れる理由はないと知っていた。奉行の切腹、続いて海岸防備の人数を置くのを怠った佐賀藩からもその責任を取って自決する人々が出たのを聞くと、フェートン号の事件が市民に与えた印象は、暗く強烈であった。恐怖の為に一時、長崎の町は混乱し、今にも異人が上陸して攻めて来るものと信じたのである。

フェートン号より四年前、文化元年九月にこの港にロシアの軍艦が入って来たことがあった。ロシア人を見るのも日本人の経験になかったことである。これはロシア政府がレザノフを全権大使として日本に派遣したもので、通商を求めがてら、日本の漂流民をとどけて来たものである。長崎の奉行は江戸へ急使を出して処置を問合せるとともに、国法に依って露艦の武器弾薬の引渡しを求め、幕府の許可があるまで上陸を許さない強硬な方針に出た。江戸からの返事がなかなか来ないので、使節に病気の治療をさせるという名目で上陸を許したが、家の周囲を竹矢来でかこみ、外と交通させず、丁寧な待遇だが監禁と同じであった。

半年も待って、年があけてから幕府から返事があったと言うことで奉行所に案内された。通る道の両側とも幕を張り廻して商家を目隠ししてある。市民にも見てはならぬと

命令が出ていたので、人影もない。外出は許されたが、実に町に何も見ないで終った。その上に、奉行所で幕府がレザノフに与えた回答は、全面的の拒絶であった。通交は不可能である。幕府は日本人が外国と通商するのを許さず、外国人が我が国内に入るのを許さない。これが国の方針なのである。

半年間も待たされて、この返事である。レザノフは已むを得ず、長崎から出て行ったが、すくなくとも自分が受けた極端な待遇に復讐したくなったらしい。北に向ってカムチャッカまで帰ると、そこにいた武装商船二隻の海軍士官に日本の北辺の領土を襲撃するように命じた。その為に、文化三年九月カラフトのクシュンコタンにあった日本の番所が焼かれ、五人が拉致された。次いで翌年四月千島のエトロフ島に来てナイホの番所を焼き、当時の中心地だったシャナの沖合に現れて砲撃を加えて上陸を開始した。日本側では箱館奉行の役人や津軽・南部両藩の兵そのほかあわせて三百名ばかりが来ていたが、火砲をあびて、うろたえるばかりで応戦するどころでない。奥地へ退却すると、ロシア人は会所などの中を徹底的に掠奪してから火を放って船に帰って行った。

同じような事件が、各所に起ったが、およそ北辺の、人間もすくなく連絡の乏しい場所で不意に起って、半年は流氷や雪で鎖ざされている荒海を越えて知らせて来るのだから、江戸で対策を考える時は、もう年も更っているのである。江戸に伝わる前にかえって長崎にいるオランダ人や唐人の方が早く聞いている場合さえある。ロシア人はシベリア大陸を渡って太平洋岸に進出して来ていた。

出島のオランダ屋敷にいるヅーフに、奉行からロシア人の北方の荒掠について知らせ、長崎に来たレザノフの部下がやっていることかどうか意見を求めた。露船は武装船であって日本人を捕え、数門の大砲その他を持去った。また何か書いたものを残して行ったが、何を書いてあるのか判らない。そこで急に長崎から通詞が二人、それを読む為に江戸に呼ばれて行ったと話した。数日後に、その書類の写しが長崎にとどき、ヅーフに、読んで出来るだけ精確に翻訳してくれと奉行から依頼があった。ヅーフも露西亜語のは読めない。フランス文のがあったので、それをオランダ語に写した。これは、脅迫の文章であった。「ロシア人は日本人が通商開始を望んで出るまで、日本貿易に永く損害を与えることを実地にやって見せる。日本国の北部が常に露国人の欲するままに打捨てられ、若し日本政府が依然として頑固に通商を拒絶する時は、やがて、その領土を失うべきことを知らせてやるばかりである。」

三

こうして北辺に不吉に感じられる雲がのぞくのと同時に、南方からフェートン号のように、乱暴な態度で突風のように舞込んで来たものがある。これまでになかったことである。それも、ただの前触れであった。最初の浪が寄せて来て岸を洗って過ぎた。二世紀の平和に慣れて来た日本人には強いショックだったが、更に続く大きな浪のうねりが、

その時分にはシナ大陸に打揚げて沿岸を浸蝕していた。

中国は当時、満州朝廷の清国だったが、やはり自分の重量で安定した動揺のない大きな睡りの中にいて、外に向って目を醒ましてはいなかった。小さい島国の日本が、白人の勢力が入るのを拒絶して、国交も結ばず、オランダ人を長崎の出島に入って通商だけするのを許し、国の秩序と純潔を守ったのと同じく、清国でも異国と関係を断ち、商売に入って来た者だけを、南支の広東の、城壁の外に場末の貧民街につながる汚れた狭い地域に、一塊りにして留まるのを認めていた。それもシナ側の貿易商人の建てた家を借りて住み、用務が終ると、海を渡って、ポルトガル人が居住を許されていたマカオに退き、次の貿易のシーズンを待つように命ぜられた。日本の場合と同じで、国交はない。地方官の両広総督だけが許して、季節風に乗って貿易に訪れる。これが、清朝になる前、明の時代からの慣行で、外洋紅毛諸国の蕃船は海関の検査を受け税をおさめ、十三行あった中国側の貿易所に入り特許商人（行商）を通じてのみ取引が許される。

この世紀に入り、イギリス人の間に中国の茶の需要が急に増加した。茶の輸入が大きく儲かる商売となって、イギリスの東インド会社が広東に船を集めるようになった。長崎の出島のオランダ人のように、行動を制限され、取引の窓口が十三行を仲介とするように定まっているので、税金のほかに手数料や賄賂を取られるばかりで、イギリス人はひどく虐められた。この不便な制限を取りはらって国交を結び、国と国とが通商をするように、北京にある朝廷に大使を出して条約を結びたいとは、イギリス政府が前の世紀

から希望したところであった。気まぐれの地方の当局が相手では支障ばかり起る。

一七九二年にイギリス政府はマカートニー伯を特命大使としてシナに派遣することになった。国交を開き通商をさかんにしようとするのだから、一見、何でもない容易な交渉と思われそうだが、ここはヨーロッパではなく、アジアだから全く想像以上の困難があった。アジアの大国の清国は、後に日本が開国を嫌ったのと同様に、下交渉をしても頑として受付けなかった。日本の鎖国はキリシタンが国内に入って来るのを嫌ったのと、孤立しても自給自足出来た小さい経済を破壊しまいとした防禦的性格のものだったが、中国のはそうでなかった。

中国の皇帝は万国を統馭し四夷を撫育する天朝であって、物産はゆたかで、無いというものはない。外夷の貨物によって始めて有無を通ずるというようなことはない。ただ天朝に産する茶、磁器、絲などは西洋各国及び汝の国の必需物であるから特に憐みを垂れ慈悲を以て広東に洋行を開き貿易を許し、その日用を助け、天朝の余潤に霑わしめているのである。最初の英国の特派大使マカートニー伯に真向からこう答えたのだから、開国の拒絶どころではなく相手を見くだして、広東の貿易もいつでも廃止してよいのだと信じ切っているのである。貿易は必要ないのだ。中国は唯一の太陽の如きものであり、外に在る国々はどれも野蛮国で、中華の余慶を受けて存続する。交際などと言う対等の関係は在り得ない。

清朝ではイギリスを朝貢国と見なした。イギリス国王の代表は朝貢使なのである。マ

カートニー伯は白河を天津まで上って行く乗船に、進貢に来たしるしの旗を賑やかに立てるように命令された。その上に、マカートニー伯は皇帝の前に出たら三跪九叩の礼を行わねばならぬと、礼部の役人が厳格に要求した。三度跪(ひざまず)いて、その間に九回も額を床に打ちつけるのである。この屈辱的な礼法はイギリス国の代表として出来ることではない。自分と同格の大臣なり高官が、イギリス国王ジョージ三世の肖像に対して三跪九叩の礼を行うものなら自分も考えてもよいが、これは私が英国王の御前に謁見に出た折と同様の礼を致すだけでよいのではないか？

時の清朝の皇帝は英邁剛毅なる乾隆帝であった。下交渉が巧妙に行われて、マカートニー卿はイギリス国王の特派大使の面目を損ぜずに謁見を特別に許された。乾隆帝の前に出たマカートニー卿は、国書を収めた黄金に宝石をちりばめた箱を頭上高く捧持して階段を昇り、皇帝の御前に片膝だけ突いて挨拶とともに皇帝に手渡した。御前大臣が取次いだとも記録されている。

しかし、重要なのは清朝の方では別に独立国の大使として迎えたわけでないことである。条約の交渉に入ることなど、てんで考えてなかった。対等の関係などではない。謁見が終った後は、イギリス人は帰国して行けばよいのだと見ていた。

マカートニー卿は、管理西洋堂事で軍機大臣の和中堂に会見して貿易その他について交渉を試みたが、話にならなかった。外交使節を北京に置きたいと言うのは、天朝の定

制に合わない。これまでも西洋諸国の人間を北京に奉職を許したものがあるが、天朝の服飾を用いさせ、教堂内に置き、一生故郷へ帰らせない建前になっている。臨時に北京に来る外藩の使臣は宿舎を決め給与はするが、勝手な行動を許さない。お申入れの使臣にも現在北京にいる外国人と同様にシナの服飾に改めさせればよいようなものだが、貿易はこれまで広東の十三行に限って扱っていることで、貿易の世話をさせる為にわざわざ人を遠い北京に駐留させることはない、と言う返事。全面的に拒絶されたわけだが、実は話の意味が通じないので、外藩の国がもったいなくも天朝に向って何を言うことかと、咎める調子である。

これは、国際的慣行に照らしてイギリス側では理解できない態度であった。イギリスは、アジアに入ってインドまで征服していた。そのイギリスを中国に隷属する野蛮国も同様に見られているとは気がつきにくいことなのである。その後も幾度かくりかえしてイギリスは、国王の書簡と礼物を広東に送り、両広総督から北京に転達するよう依頼している。尊大なシナ人には、これが外藩からの貢物と見られる。天朝と外藩との根本の関係は不動のものである。

天朝の諭旨を受け、両広総督からイギリス人に下付した文章がある。大皇帝は万国に君臨し、その恩は四表を被うておる。内地外夷を論ぜず均しく大皇帝の百姓である。汝の国の時計、羅紗、毛織物などは中国必需のものでない。その貿易を許すのは皆、大皇帝の外夷を垂憐し一視同仁の恩意に出づるものである。今回の汝国王の表貢は汝等の恭

順の心を表明するものであるから、大皇帝はこれを嘉賞して収受し、「汝等夷商を休恤して、内地商人を管束し公平の貿易をなさしめよ」とお言葉があったから、汝国人の広東に来たって貿易するものも分に安んじて禁令にしたがい決して違犯しないようにしなければならぬ。（矢野仁一「近世支那外交史」）

どこまでも対等の関係ではなかった。両広総督始め、地方の官僚の移り気と強慾とに委ねられて安定を欠く立場である。東インド会社もたまりかねて、嘉慶二十一年（一八一六）にイギリス政府に要請して、再び特命全権大使を北京の朝廷に派遣することにした。大使はアマースト卿で、その費用は東インド会社が負担した。今度もマカートニー卿の場合と同様に、乗船に貢使と記した旗を掲げて白河を遡行することになる。それはよいのだが、例の三跪九叩の礼を謁見に際して求められることがイギリス人には難関である。

マカートニー卿の時は、唯一の例外としてそれを行わずに謁見を得たのだが、ロシアの使節ゴロヴキン伯爵はこの問題で清国側と争って追返された事例が嘉慶十年にあった。アジアでないと見られない特殊の野蛮の風習と認めて便宜上従ってはどうか？　前のマカートニー卿の場合には謁見は出来ても使命が達せられなかった。なぜ失敗したかの根本の原因をイギリス人はまだ理解していなかった。とにかく謁見が許されなければ、使節を送る意味がない。イギリス国民の品位を傷つけるものと考えないで、ある場合には相手方の奇妙な風習に従うこともやむを得ないのではないか？　東インド会社も商社だ

から利益のことを優先する意見で、譲歩的であった。しかし、使節を迎えた現地の空気を見ると、アマースト卿もそう軽く進退を決めることは困難となった。

アマースト卿がまだ北京まで入らず天津に着いた時に、シナ側の接待委員から申出があって、天津で賜宴を行うから、その席でアマースト卿に三跪九叩の礼を行わせ、これが式どおりにできたら、すぐにも北京に案内するようにする。もしできなかった場合はその旨を申上げて、何分の御沙汰を仰ぐことにすると、最初から手きびしい話が出た。シナ側ではアマースト卿に予行演習までさせようとする。

アマースト卿は当惑した。三跪九叩の演習をしたら、皇帝の前でそれを行うことを承諾したことになる。マカートニー卿の前例に従って、イギリス国王の前に出た場合の礼を取りたい。

清国側の使臣の話では、自分たちは天津で三跪九叩の礼を行わしめ、それが出来たら北京に案内せよと、皇帝から仰せつかって来たのだと主張を曲げない。皇帝は、マカートニー卿の時の乾隆帝ではなく嘉慶帝の代に変っていた。そのせいで、きびしいのかも知れないが、アマースト卿は進退に窮した。皇帝がそこに居るのではなく宴席上に皇帝の牌位香案を飾り、これに対して、アジア風の大げさなお辞儀をするよう強要される。

アマースト卿は粘り強く、それならばイギリス国王の玉座に対して弓身俯首の礼を一度だけするところを、九度くりかえして特別の敬意を表することにしたいと申入れた。

実際に、天津の賜宴では、馬鹿らしく思いながら、そのとおりに続けて九度、同じことを繰返して頭を下げて見せた。清朝側の接待の役人は、もちろん不満なのだが、どうにも説き伏せ得ないので、諦めたものらしく北京に連れて行くことになった。天津を出発する日になっても彼らは皇帝が満足なさるかどうか極めて不安だ、とアマースト卿を訪ねて告げ、陛下の特別の御恩恵に依って謁見を賜ることだから御前に出たら三跪九叩の礼をしてもらわねばならぬと、重ねて念を押した。どうも話が段々と面倒になる。中国側では、天津から北京へ連れて行く間に、この頑冥不霊な野蛮人を説得して、清朝風の大がかりなお辞儀をさせる計画だったらしい。その証拠には、清朝側の後日の記録ではアマースト卿が天津で三跪九叩の礼をしたことになっている。

果して、天津を出発してから二日目に接待役の工部尚書蘇楞額がアマースト卿の前に来て、実は皇帝から直々の御沙汰があったのにかかわらず、天津で演礼を行わしめず北京に向け出発したことを烈しくおしかりを蒙った。陛下のお話では乾隆五十八年マカートニー卿が参朝した折には正しく御前に向って三跪九叩の礼をした。今日、その変改を許すわけには行かぬ、謁見は許さぬだろうと仰せられている、と、申入れた。清朝の大官の常套とする外交術なのが後日に判ったが、マカートニー卿が三跪九叩を行なったことにしてあるのだ。

これに対してアマースト卿も骨っぽかった。然らば満州国大臣がイギリスの摂政王太子の肖像に向って三跪九叩の礼をして見せてくださるか、それならば自分も皇帝の御前

に出て同じ礼を取らぬでもない。また、あるいは支那皇帝から将来イギリスに派遣する大使に、イギリス国王に対し拝跪の礼を行わしむべしと勅諭を頂けるものなら、自分も叩頭の礼を行いましょうと答えた。

無論、中国側の官吏が、そんな上奏が出来るものでない。北京に近付くほど、問題は紛糾して来た。清朝側でも走りまわって善後策に苦労したらしい。北京からも礼部尚書と理藩院尚書が通州まで来ることになった。この人もアマースト卿に作法どおり三跪九叩の礼を演じさせて見て、期限内にそれが出来たら北京に案内する。失敗したら奏上して仰せを待つとのことである。

アマースト卿は通州に足止めされて、北京から来た大臣と三度まで会見した。話は食い違うばかりであった。片方は、跪叩の礼を、あくまでも遵行させようとする。清国大皇帝の高貴の地位を考えても礼を守るのが当然なことではないかと自分たちは何の疑いも持たず主張する一方でアマースト卿はそれならば自分の面目を立てるために、前にマカートニー卿が跪叩の礼を行なって謁見した旨を皇帝からイギリス王に対して御披露たまわりたいと申入れ、もちろん容れられるところではなかった。イギリス人側でも内輪で相談した。アマースト卿は多少譲歩的になっていたが、東インド会社の代表で来ていた人々が、反ってこれは会社の利益のためにならぬと主張して、拒絶することに決した。

通州で主として折衝に当ったのは、清朝の理藩尚書の和世泰であった。アマースト卿

から跪叩の礼は行い難いと通知したのにもかかわらず北京へ向け出発は明八月二十八日、皇帝の謁見は三十日と勅定が下ったと通告して来た。アマースト卿の方が驚いて心配になり、先般の当方からの通牒を見てくれたのかと確かめると、あれで万事支障ないと温顔で言う。

あれだけ悶着した後だからアマースト卿は他の者にも念を押した。我々は跪叩の礼は行い難いと申上げた。この点を御了解願えたのだろうか？　誤解なきように望むと確かめると、中国側では、最早、万事解決した、皇帝の寛容にお頼みするだけで礼節のことは問うまい、と、いやに、あっさりした返事である。それならば話がうまく通じて人を侮辱した厄介な東洋風のお辞儀をなしに謁見を許されるものか、とアマースト卿は出発の準備をして、翌日通州を出た。

通州を離れたのは午後五時で、それから一晩中歩かせられて北京の外壁について廻り、夜の明け方に宿舎となる筈の建物の前に出たが、休息もせずそこを素通りして、円明園の宮門を入った。

八月二十九日のことである。そこでシナ側から不意にこれから謁見が行われると申渡した。おどろいて謁見は明三十日と定めてあったのではないかと抗議すると、急に今日に御変更になった。直ちに参内なさるように、と言う。何しろ一晩中、旅行して来てアマースト卿は身体疲れ切っていたし、礼服等の準備も出来てない。殊に、大切な信用状も後の荷物になってまだ着いていない。謁見は本日は行い難い。病気なのだからと、断

ったが、その時になるとシナ側の大官たちはにわかに熱心な様子になり、なだめすかしたりするようにアマースト卿に謁見を勧め、和世泰からお国の礼儀でよいのですよなどとまで言ってくれた。明らかにアマースト卿が謁見に出られる状態でないのを承知してのことであった。

アマースト卿は応じ得ない。すると皇帝が激怒されたと称して、退去を命じて来た。皇帝から尋ねられた時、和世泰などは、英国人は天津では礼節に従わなかったが、謁見の時は跪叩を行なって礼に背くようなことをしないと我々に約束したので大臣たちが謁見の手続きを取ったと奏上した。

その一方で、アマースト卿を強制的な旅行で極度の疲労に追込み、準備もなく不意に謁見に出るように告げて、実行不可能に陥入れたと言うもので、天津を出発する時から、こまかく計画したものかと思われる。英国王の使節を、まるで人形を扱うように翻弄して来朝の目的を遂げさせずに追いかえした。巧妙なのと同時に、西欧人に理解できない性質がある。

私がこの事件について永々と書いたのは、ロシアの使節レザノフが通商を求めて日本に来た時の、日本人が施した待遇と、このシナの大官の流儀とが、まるで性質が違うのが対比せらるべきだからである。日本の役人は最初レザノフを上陸すら許さなかったが、病気と言う理由をつけて陸上で待つことを認め、竹矢来で囲んで外に出るのを許さなかった。半年も待って申入れに対し江戸から回答が来たと呼び出されて、奉行所まで行く

時になると、途中の人家をどこも幕でつつんで目隠しして市民が外に出るのを禁じてあって、まるで人が住んでない町を歩くようである。しかも、幕府が半年待たせてレザノフに与えた返事は、拒絶であった。我々は国法として貿易を許さない。国法一点張りの拒絶である。

シナの大官たちは、同様に拒絶を与えたのだが、日本の幕府ほど閉鎖的でもなく、消極的でもない。あべこべに、好きに手玉に取って、都に入れてから、不意に突放した。皇帝はその間の事情を関知しない。嘉慶帝は、アマースト卿が礼服がとどかないので謁見を辞退して帰って行ったと報告を受けた。

嘉慶帝は両広総督に命じてアマースト卿にお言葉を賜った。「汝等は福分浅薄で、宮門までも来て天顔を瞻仰することができなかったが、大皇帝は国王（イギリス）の慕化輸誠を憐念し、貢物を酌収して貴重の品物を賞賜するから天恩に感激して、迅速に帰国して国王に恩意を伝えよ。」またイギリス国王に対する勅諭にも、汝の国は中国を距ること遼遠で使節を派遣するは容易でない、それに中国の礼節に暗習しない使節に対して、礼節のことで重ね重ね唇舌を労することは実にいやだ。今後、使節の派遣は見合せるがよい。歳時来朝するから化に向い、来朝しないから化に向わないというのではない。汝の国の人民を輯和し、汝の国の疆土を慎固すれば、それでよい。朕はそれを嘉するものである。（矢野仁一「近世支那外交史」）

四

英吉利国進貢使と記した旗を掲げ白河を上ったマカートニー伯の北京訪問は西暦一七九二年のことで、それから一八四〇年に鴉片戦争を起すまでイギリスはみずから天朝だとしている倨傲な中国に対して、対等な関係に入れなかった。万里の長城の厚い壁に素手で向ったように、何としてもくぐりいるわけに行かない。

イギリス政府の方針も、清国の尊大なる偏見を傷つけて、貿易の利益を損わぬように、慎重に出先に指令した。出先には新たに貿易監督官を置いたが、首班がロンドンから派遣した官吏であっても次席は以前から広東貿易に従事して来た東インド会社の社員である。古くから業務に当って来た民間人の方が、壁の突破には熱心であった。遠い本国の外務省が採っている対支方針が生ぬるくて、貿易がいつまでも広東だけに限られているのでは、正常な発展は望み得ないと知っていた。

新任の貿易監督官ナピァー卿の広東着任を見た中国側の両広総督の態度は従来のままであった。従来イギリス商の貿易を管理していた大班（セレクト・コミッティー）があるのに、にわかに夷目（貿易監督官）を設けようとするのは旧例に反する。しかも、ナピァーは従来の例の如く請願もせずに広東に来た。夷館に入り、平行の款式で直接、官に向って文書を通じようとした。イギリス王の公文も所持しないから、果して貿易監督

官かどうかも判らぬが、仮にそれとしても外蕃の夷目が中国の官吏と文移応酬することは許されない。貿易事務ならば稟（請願）を以て行商（中国商人）を経て願出るべきであって、官に書信を提出しても総督はこれを接受せぬ。省外の夷館は広東に来て貿易する夷商一時の住居として寝食売買を許されておるだけのものだ、頑として受付けない。もとのままである。その上に、支那人民とイギリス人と一切の貨物の売買を禁じイギリス人の使う買弁、通事、下僕など一切の労役に服するのを禁じ、水陸の兵力を城の内外、両岸の地に配置して威嚇し、イギリス人に食料薪水の供給を断絶せしめた。ナピァー卿はその為、イギリス人保護のため軍艦二隻に沿岸の砲台と砲戦を交えながら広東まで来るように呼入れたが、使命は全く失敗で、卿自身が疲労の極、やがて熱病になり、マカオまで後退して日を経ずに病にたおれた。

イギリスはヨーロッパ諸国を抜いて産業革命に成功し、発展した産業の市場を海外にひろく求めている最中である。蒸気機関をすえた船も出現し、航海は自由で安全となった。支那に来ているイギリス人が見ると、シナの皇帝があたかも世界に君臨するが如き態度でイギリス人を侮蔑し、対等の関係に入ろうとしないのに対し、本国政府はいつまでも抗議もしないでいて、貿易も不便の多い上に制限され、イギリス人の立場は不名誉で不安定な立場に置かれているのが歯掻ゆいのである。貿易監督官こそ、もっと積極的に働きかけて中国側に平等直接の交通を認めさせなければならぬ。茶の輸入だけを考えても、一世紀間に四百倍の消費量となり、いくら運んでも足りないくらいである。これ

が、相手側の専断だけで、時を問わず貿易の中絶が起って来る。広東に入っても人間は行動の制限を受ける。婦人はマカオまでで広東に連れて来てはいけない。支那人を雇うのにも一々、許可を要する。西洋人が内陸の川を航行する時は、屋根のない小舟でないと乗ってはならぬ。外出は毎月三日以内で、十人以上組をなさず、地域を限り午後五時までに必ず帰館すること、その他である。日本の長崎の出島のオランダ人にも同じ種類の制限があったが、実は産業革命以後のイギリス人は、おとなしいオランダ人の気風とは、いちじるしく違って、征服的で推進力がかかって活動的であった。その上に、インドのアヘンを持込んでシナに売込むと、底のない桶に水を投げ込むように無限に地に吸収し、これまで茶を買込むだけで片貿易で銀を持って来て支払っていたものが、アヘンを売込むようになってから勢が逆転して茶の上に大量の銀を持って帰るようになっていた。どの船もアヘンを運んで外洋まで来て、小舟に渡して陸に運ばせる。十三行の特許商人だけが相手でなく、末ひろがりにひろがって岸に運ばれる。貿易は東インド会社一手だけでなく、イギリス人の個人の散商を生み出していた。堅固だった防波堤が水がもり始めたようなものである。

その時になってもシナのマンダリン（大官）たちは悠々と尊大であった。ナピァー卿の後任として赴任して来たエリオットが何とかして平等直接の交通を認めさせようとすると、両広総督は怒って、間に立ったシナ商人を叱りつけた。中国を貴国と呼び、二国民の和親などと称するのは無礼至極ではないか、大皇帝とイギリスの如き小国と何の和

親があろう。不敬のことである。

鴉片（アヘン）は断るまでもなく、現代では国際的に厳格に禁止された麻薬の原質である。中国大陸にアヘン吸飲の悪習がひろがった。台湾から起り海峡を渡って福建に伝染したのが始りで、十七世紀後半からのことである。その後一世紀間に、次第に奥地に浸透した。乾いた枯野に火を放ったようなものであった。

一度この習慣がついたものは、廃人となるまでアヘンを吸わずにはいられない。害毒は急襲的で、また直ちに広範囲にひろがる。防ぎようもなく、需要は昇った。アヘンは、インドでさかんに作られ、イギリス人は、これを中国に持ち込んで、極端の赤字だった片貿易を大きく逆転させた。船が広東近海に殺到した。平行したまま身動きが出来なかった両国の関係を、このいたずら者がひっかき廻して崩すことになった。元来、破壊力が、万能のアヘンである。

アヘンの害毒が民間に蔓延して防ぎ難いのを有識者からさかんに上奏して禁止令が出た。最初はアヘンの販売者だけを処罰して吸飲者には罰は及ばなかった。アヘンが断絶すれば死の苦しみを伴うものだから、吸飲者を阻止できるものでない。吸飲者を罰することにしても流行はやまなかった。大きく需要がありながら売買を禁じたので値段が暴騰した。それでも一度習慣になった者はやめるものではなく、高い価で買う者が多いから、禁令を犯して売る者が絶えなかった。

清朝の政府は、最初、人民がアヘンの中毒に依って家を破り道徳的に頽廃するのを理由に禁止令を出したのだが、当時の地方官は賄賂など当然の徳分とする風習だったし、役人を買収すれば、いくらでも輸入して売ることが出来る。禁令がきびしくなれば賄賂が高くなり、従ってアヘンの値段が騰る。利にさとい商人が捨てるわけがなかった。

貿易場の広東の外洋には、インドからアヘンを載せて来た内外の船が群がっていた。中国の船もいるが、イギリスの船が多い。禁令が出て、官許の十三行のシナ側の商人が表向きの取引を停止すると、外洋で親船から小舟に積んで、長い海岸線のどこかに上陸させて奥地に運び入れて来る。イギリスの法律には、アヘン密輸入者を罰する規定がなかった。イギリス貿易監督官も取締る方法がなく手を焼いた。禁令により広東の内洋では、アヘンを扱わぬようになったが、外洋での取引を取締れるものではない。中国側では自国の船を、厳罰を以て正当に管理出来ても、武装しているイギリス船を臨検捜査してアヘンを没収することは危険な仕事であった。これに対抗上、イギリス人はスクーナー型やカッター型の脚の迅い密貿易艇を用いるように成った。いつの時も群をなして、広東河の流域を上下している。河と言ってもこれは海である。

仕事が仕事だから舟乗の中でも荒っぽい冒険好きの者たちが参加した。すごく儲かるのだから、シナの「天朝」の禁令など、ものともしない。一艘で毎週数千ドルの利益を収めたと伝えられた。対支貿易に従事する外国船は、マカオで許可状の紅牌を受け、それを提示して広東河に入る規則だが、最早、このイギリス人たちはその規律に従わない。

監督官のエリオットもこれを取締ることが出来ないのである。

彼が最も当惑したのは、中国側の行商を通じての正当な貿易が、アヘン貿易に依って混乱せしめられ、順当に発達させることが困難になったことであった。北京の政府でも、アヘンの禁圧は不可能と見て、酌量変通して輸入を許そうとか、また内地で栽培させて銀の流出を防ごうとか禁令を緩和しようとした時期がある。方針が安定してなかった。正当の貿易まで俄かに停止されることも起った。エリオットが赴任以来、努力して求めて来た平等の交通権も、アヘン密貿易が不断になぐり込みを掛けている状態では、両広総督の機嫌次第で崩されもするし、「天朝」の御意のままに停止されることになる。

しかし、これは広東貿易に限られたことである。裏返して見れば、正当でないとしても貿易が防波堤を破って広東の外に氾濫したのと同じ結果である。偉大なる中国皇帝の尊厳も何もない結果になっていたのであった。ただ貿易監督官が内外の攻撃を受け、当面の両広総督の復讐も、専らこれに集められることになった。しかも、その場合には、両広総督はイギリス人に直接に指令して来るのではなく、警告を中国側の行商からイギリス人に話させる。警告が実行されるわけがない。イギリス王の貿易監督官エリオットの立場は皮肉なものになった。

貿易が度々停止せられたのでエリオットは両広総督に意見を上達するようにした。近海で小舟に依るアヘン密貿易が広く行われているのは、正常の貿易を困難ならしめるも

ので、イギリス政府は正しからざる現状を厳重に取締りたいと望んで既に警告を発した。閣下がこれを承認支持せられるものなのを不正貿易者にひろく知らせたいが、従来の如く中国側の商人（行商）からこれを伝達するのでは実効がない。官憲から海域内の外国人社会に布告して頂けるものなら危険な非法を行いつつあるイギリス人に対しても、イギリス国王が財産保護を手控えることを彼らをして悟らしめ得ると思う。

両広総督はエリオットがアヘン貿易鎮圧の為に、行商によらず官の命令を直接に受けようと申出たのは神妙であると賞めて、イギリス人が広東に来て貿易を再開することを許した。これは、形の上ではこれまで一切の仲介に当ったシナ側の行商を入れずに天朝の官辺と交渉を開いた点で、エリオットが求めた平等交通の一歩を前進せしめたことのように見える。しかし実際は、精力的な現実は役人のすることよりももっと先にはみ出していた。後方から推進する若い資本社会の圧力が暴力に類していた。事務官吏を満足させたこの種類の規律の方法では氾濫を抑えることができなくなっていたのだ。

これまで、アヘンの害毒に対して東洋風に道徳的関心だけを示して来た中国の皇帝にも、やがて経済的に破局が上奏されるようになった。アヘン貿易による銀の国外流出に依り、銀が騰貴し銅貨が下落した為、物価が上昇して庶民の生活が極めて苦しくなった。各府県から天朝への送金や納税は銀ですることになっているので価の低い銭を価の高い銀に易えなければならぬ。その為に塩税を払えぬので、塩商が利益が多く望み手も多かったものを店を閉じる。アヘン貿易の為に銀の流出した額は、道光三年以前は毎年数百

万両だったのが、三年以後十一年までの流出が千七百万両、十一年から十四年までの流出が二千余万両、十四年から十八年が三千余万両に増加している。アヘンの吸飲に依って国の経済が受ける影響がこれまでに重大だとは、天朝の高官たちがほとんど無関心で来たことである。

ここでも道徳論が先で、経済のことは遅れがちに発表せられた。その間にもアヘンを積んだ外国船は広東近海に集り、上陸地点をどこにでも見つけて、内地にアヘンを送り入れていた。北京の政府は各州の将軍督撫にアヘンの害悪に対する所見を上申させた。その中で湖広総督の林則徐の上奏文が道光帝の御意にかない招かれて北京に出てアヘン煙を禁絶する方略をいろいろと進言した。

自信の強い尊大な中国もアヘンの攻撃には処置に窮し動揺を来たしていた。道光帝は、林則徐に一切の権限を与えて欽差大臣として広東に向わせ、アヘン貿易を鎮圧に当るように命じた。林則徐の意見は、アヘンを根絶せしめなければ国も民も力衰え、十数年後には用ゆべき兵士も民間に得られなくなる、と言うので、禁令だけでなくアヘン吸飲者まで死刑にしない限りは、取締りを厳格にするほど販売の利益は厚くなるから、法を犯す者がなくなることはないと極めて強硬な主張であった。

中央から欽差大臣まで任命せられて赴任して来るとなって、両広総督も急にアヘンの根絶に熱誠を示し部下を動かした。広東近海にいる外国のアヘン船を駆逐し、民船を拿捕し、陸上では販売者のみならず吸飲者まで逮捕した。急激に徹底した取締り振りであ

る。外国商人に対しては官から直接に、今後アヘン貿易に関係すれば、交通貿易を全く停止せしむると戒告した。エリオットには、近く総督と同格の欽差官がアヘン貿易の鎮圧に来任するからアヘン貿易の根絶を見るまで、外国の合法的な貿易、平和な交通が停止せられる。事後のことは、新任の欽差大臣林則徐が着いてから何分の指示があろうと通告した。またしてもエリオットは閉め出される。

アヘン貿易はもう広東では行われていない。それが正当の貿易まで停止せられる理由はないのだが、中国側はまたしても貿易は両広総督の恩恵で許したので一方的に任意に停止できるものとする態度に戻った。ところで、広東まで入って来ないとしても、外洋にはアヘンを積んだ船が入って来ていた。当時の推定で一万箱に近い量のアヘンが海上に待機していた。これが何かのルートを経て、水が低きにつくように本土に流れ入って来るのである。

売込むのに熱心な外国の勢力があり、買入れるのを待っている中国内部の商人が在った。イギリスの貿易は、これで年々安定した大きな利益を上げているのである。中国の官憲は三月に林則徐の赴任して来る前に広東の外国商館の前で、支那人のアヘン商の死刑を執行して見せた。これ見よがしの残酷なやり方なので、見せつけられる側も自ら平らかでない。広東にはイギリス人だけでも二百人いて、その誰もがアヘンを抱え込んでいた。

アヘン貿易を禁圧する為の欽差大臣が、やがて赴任して来た。イギリス人もアヘンが社会的道徳的に取返しがつかぬ害毒となるのを知っている。しかし、この需要がなくなるものとは信じないし、他の貨物より間違いなく売れて莫大に儲かるから禁制のものと承知していても誰でも倉庫に持っていた。林則徐は東洋風に道義心の高い士大夫で、アヘン退治を自己の一代の使命と信じて広東に来た。エリオットの方はイギリス王の事務官吏であって、正当の貿易を守るのが自分の責任だと信じる。それ故に不正なアヘン貿易を抑える意志は抱いている。ただこれも、アヘン貿易をなくすことは中国側の事情を見ても不可能だと信じている。誠実に目的を徹底させようとした林則徐とは、その点で問題の見据え方が食違うのである。

欽差大臣林則徐の広東到着以前に、両広総督の急な処置で、陸には軍隊を海上には兵船を廻してアヘン貿易に関係のある外国人や外国船を駆逐する勢を示した。林則徐が着いた時に、伶仃洋に碇泊していた二十二艘のアヘン船が急に帰国しようとする形勢を示した。取引できぬと見てアヘンを海に捨てるわけがなく、取締りの及ばぬ外洋に出てから中国側のジャンクに渡しかねない。アヘンは海上に貯えてあっても、売買にあたる外国商人は陸上の広東の商館にいることだから、林則徐は彼らに向って海上のアヘンを引渡すことと、将来はアヘンを載せて来ぬこと、これに背くときは中国側で貨物を没収し人を処罰するとしても異存ない旨を誓書に認めて提出するように要求した。

林則徐は、西欧人が信義を守ると聞いて、誓書を出させれば将来の禍根を無くすこと

と信じた。誓書とともにアヘンを引渡せば、過去のことは問わない。今後の違犯は新しいアヘン章程を出して厳罰を課するが、今日までのことはこの方法で処理したいと、相手を信頼したおだやかと言ってよい申入れである。期限はつけてあった。三日以内に、引渡すアヘンの量を声明し、誓書を出さしめるのである。同時に林則徐は外国商人に旅券を出すのを停止し、マカオに行くのを禁じた。外国商人を商館区域内に閉じこめ、外部との交通を禁じたのである。周囲には兵隊を出し、水上には兵船を配備した。

広東のイギリス人は個人各自の名義の下に千三十七箱のアヘンを引渡すと申出たが、林則徐はまだ隠してあるものと見て拒絶した。その上にアヘン密売の首魁と見られるイギリス人デントに出頭するように要求して来た。イギリス人以外の外国商人は、今後誓ってアヘンをシナに輸入しないと声明書を出し、林則徐が要求した誓書も後に正式に提出した。イギリス人だけがこれをしない。

エリオットは、林則徐が武力で圧迫を加え、外国人の生命財産の安全を危くするものだと誤解して、脅迫に屈してはイギリスの国の名誉を傷つけるものと思い込んだらしい。当時マカオにいたのを広東に出て来ると、商館にイギリスの国旗を掲げ出頭を求められていたデントを保護する姿勢を示した。

イギリス国王の官吏として、そうせねばならぬと信じたのだろう。林則徐は、ただアヘンを吐き出させ今後は輸入せぬとの誓書を取るだけの意志である。アヘン禁圧の意志を徹底させるのみで、外国人の生命に危害を与える意向はない。イギリス人が俄かに対

抗的態度を示して、デント等をかくまいアヘンの押収に応じないのを見て、封鎖を厳重にするとともに、商館に出入りしていた買弁や下僕を立去らせた。商館内の生活は忽ち不便を来たした。

エリオットは官憲に三日以内に広東を立去る旅券を下付し、退去の際は輸送船を出し、下級人民の暴行を受けぬよう保護の護衛兵を出して欲しいと請求して出た。林則徐は旅券を出すのは、伶仃洋にあるアヘンの量を申告し引渡しを終ってからのことである、と拒絶した。商館は水と食物の供給も絶たれた。エリオットは「イギリス人の生命財産の安全を守る為」に遂に屈服して、イギリス人の手にあるアヘンを全部船から引渡すから、その場所を指定されたいと申出た。

申告したイギリス人所有のアヘンは二万二百八十三箱の巨額なものであった。これだけ船にあるのを陸に居ながら承知していたのである。多数のイギリス人が署名して、将来、中国にアヘンを輸入しないと声明した。林則徐はイギリス人のこの申出を悦んで、次の日には人夫を出して水を供給し、続いて食料を送った。するとエリオットはその食物を拒絶して受けなかった。なぜかと言うと、まだそれほど食料に窮していなかったからなので、その裏では中国側の不法によりイギリス人の生命財産の安全が脅威せられていると、本国外務省に知らせた自分の立場を守るためであった。林則徐は一意アヘンを敵としていたのだが、エリオットはイギリス人が理由なく迫害されるものと考えていた。

手持のアヘンを提出し船の交通が許されるように成ってから、エリオットはイギリス居留民全体に広東から退去するように求めた。五月二十四日にエリオットは居残っていたイギリス人を伴って自分も広東を離れマカオに引揚げた。この人数の中にアヘン売込みの常習犯として中国側が放逐したイギリス人十六人の内の十人が加わっている。広東に外国人で残ったのは、二十五名ほどのアメリカ人だけである。この人々は、イギリス人と違って、公然とはアヘンに関係がない。

アヘン禁圧に対する林則徐の考え方は非常に真面目なもので、外洋の母船に積んであるアヘンも捨てておけば、やがて密かに陸揚げされて、中国の人民を中毒させ、道徳的にも肉体的にも破壊させるものだと見ている。その信条から、外国人から没収したアヘンを、北京へ送る予定だったのを、途中で抜かれる危険を思い、居留外人や沿岸住民が見ている前で、六月三日から二十五日までかかって焼捨てて処分した。当時の金にして二千余万円に及ぶ価格のもので内外の人を驚ろかした。しかも林則徐は、アヘンを提出した船が積荷もなく帰国するのを気の毒として、アヘンの代償に茶を提供するように申出た。アヘンについては厳重に処分するが、正当の貿易を認めないとするのではない。アヘンを積んだ船が外洋に碇泊することは許さぬが、アヘンを載せてない旨宣誓して海関の検査も辞せぬ外国船が内海に入って貿易に来るのを承認しているのである。

エリオットは林則徐のやることを見ていて中国がアヘンを専売にする為に、イギリス人から取上げたのではないかと疑ったくらいで、一箱千二百円もするものを、全部焼却

処分にしたのを見て、この賠償をどうするのかと急に狼狽した。

彼の責任の逃れ場所は、中国側が信頼しがたく、イギリス臣民の生命も財産も重大な危険にさらされたと発表することより他はない。広東には戻れないと言うのである。その間にアメリカ船は誓書を出して内洋に入り貿易に広東へ入港していた。イギリス船だけが誓書を出さず、虎門の外に群がっていて、内洋に入って来ない。誓書を出せばイギリス人が中国側の裁判で死刑に処せられる危険があるからと、エリオットがきめているのである。林則徐から、これを見ればイギリス船がなおアヘンを隠していて、売込む機会を外洋で待っているとしか考えられない。

その内にエリオットから、マカオで貿易を許して貰いたいと申入れた。マカオはもとからアヘン貿易の根拠地となっている。アヘンの密輸入はまだ終息してない。広東付近が禁令が行われたので、次第に海岸線を北上し、福建沿岸で密貿易の組織網をひろげていた。林則徐はイギリス人がマカオにとどまろうとするのを拒絶し、貿易を終った外国人に居留を許さぬ。先に放逐を命じたイギリス人アヘン商と同様に中国に滞留することは許されぬと答え、兵隊を出して本土に通じるマカオの出入口を閉ざし、食料その他の補給を止めさせた。マカオのポルトガル官憲も、中国側の要請を受け、イギリス人の安全を保証できぬと称してマカオからの退去を求めた。

遂に八月二十六日、イギリス人は女子供を連れてマカオの住宅を離れ、舟に分れて乗り、ホンコン島や、付近の島陰に碇泊する母船に移って漂う水上に住むことになった。

中国側が放逐を命じた歴然たるアヘン商人も、この中に残っているのである。エリオットはまったく中国側の非人道的措置によるものとして本国に報告し、軍艦の救援を求めた。当時ホンコン島を中心に、近くに集結したイギリス人は数千人に達したと言われ、その食物の供給を九竜の中国官憲に求めて拒絶された。

林則徐は、アヘンを積んでない船に入港を認めないのでなく、正当の貿易を許さないのでもない。イギリス船の中にもトマス・カウツ号の船長ウァルナーのように、エリオットがイギリス人に広東へ行くのを禁じているのを越権として、中国側の要求するとおりアヘンを載せてない旨の誓書を出し、通行許可証を貰い、海関の検査を受けて正常に入港して貿易を許された例さえ見られた。

イギリス人だから差別されるのではない。しかしエリオットは被害を妄想し続け、妥協する機会も失くした。求めて窮地に陥った傾きがある。軍艦が来ると、彼は俄かに強腰になった。九月四日に、糧食を九竜の村民に求めようとして支那の巡邏兵に妨げられると憤激して沿岸にいた中国の兵船に砲撃を加えるまでに到った。これはただ中国側の反省を求めたまでだ、と彼は本国に報告した。しかし、彼は十一月に入ると、ヴォレージ、ヒアシンスの二軍艦とともに虎門に行き、水師提督を介して林則徐にイギリス人のマカオ居住及僕役、糧食の供給を要求する書簡を送った。

五

夏の間に香港（ホンコン）の尖沙嘴でイギリス船の水夫が酔って乱暴して村民一人（林維喜）をなぐり殺した事件があった。林則徐が前から犯人の引渡しをイギリス側に要求していた。

エリオットは自分の権限でこの事件をイギリス側で審理し、故殺を証拠不充分とし、暴動罪として五人の水夫を罰金禁錮に処して至急本国に送還することにした。中国側の要求に対しては加害者を確認出来ないと答えた。この事件も、中国側を怒らせ、食糧の供給を絶つ理由に挙げられた。十月二十六日に林則徐は、犯人の即時引渡しを要求し、イギリス船がアヘンを扱わぬ誓書に署名して正常の貿易に入るようにしない場合は、三日以内に中国沿岸から退去せよ、と命令して来た。

エリオットは、イギリス政府の訓示を待たずに誓書は出せぬと答え、殺人の下手人も引渡さなかった。しかし彼は、アヘンを載せた船と、デント商会以下、中国側で退去を命じたアヘン商人を抱えて香港島周辺に碇泊を続けた。

林則徐は火船を準備し、香港のイギリス船停泊所近くに水陸の兵隊を集め、いつでも攻撃できるように配備した。エリオットは二隻の軍艦を動かして虎門に向い、尖沙嘴のイギリス船舶に対する中国側の攻撃命令の撤回、マカオに安全居住を許し、糧食と雇人の供給を要求して出た。急迫した状勢に押出されたようなものである。

中国の水師提督は、林維喜事件の犯人が引渡さるれば中国側では退去すると答えた。イギリス側の軍艦二艘は、虎門で中国の兵船二十九艘と火船十三艘に対し、先ず砲撃を加えた。無論、装備が優れ、破壊力も近代化しているイギリス側の方が火力は優勢で、数ばかり多い中国側の耐え得るところでない。四隻が爆発撃沈され、他は逃れ去ったとイギリス側は報告している。この知らせがとどくと、香港の尖沙嘴駐屯の中国軍が各砲台から海上に碇泊中のイギリス貨物船に砲火をあびせた。これは当然の報復である。イギリス船は前からエリオットの命令を受けていた。直ちに碇泊場所を外洋に移した。

林則徐は、中央に伺いを立てて布告を出し、十二月六日以後イギリス船の貿易を全面的に停止させた。疑問の余地なくアヘンを抱えている事実だけでも命令は至当だし、その上にイギリス側から砲撃の火ぶたを切ったことだから中国の決定は正しいはずなのである。しかし、翌る一八四〇年二月、イギリス政府は、中国官憲のイギリス貿易監督官及びイギリス臣民に、加えたる侮辱損害の報償を得るため、並びに中国に通商するイギリス商人のため、そのシナ政府の指導下にある人々の暴力の威嚇により蒙りたる損害の賠償と、将来これら商人の身体財産が侮辱侵害に対し保護せらるべき保障を得るためにシナに出兵するよう決定を下した。

イギリス政府が清国に対し、出兵の理由として伝えた文書は次のようなものである。広東に平和に居住せる多数のイギリス商人は、不意にその商館に監禁せられ、支那人僕役の手助けを取上げられ、糧食の供給を一切断絶された。これら被監禁者が毫も支配権

監督権なき他地の他人が支那官憲のみずから発見することもまた押収することもできぬような、かつ一部は当時支那の領土内司法権内になかったような（つまり領海外にある）アヘン若干数量を引渡さなければ、餓死の危険を免れないようになった。貿易監督官はこれらイギリス商人が不法行為を加えられ、その生命は危険に陥ったことを聞き、事実を調査し、支那官憲に説いてこれらの不法行為を止めしめ、危険と困難とを冒して広東に赴いた。しかるに欽差大臣はこれを聴入れず、国際法に背き、またイギリス国王の官吏を待つべき当然の礼敬を無視して、商人らと同様に監禁し、依然彼らの一切の生活手段を奪うことを止めず、貿易監督官が支那官憲に一定数量のアヘンを引渡すため、当時広東にいなかった他人に対して、自分の辜も発する権力も権威もなき命令を発せざれば彼等商人をことごとく餓死せしむべしと脅迫した。貿易監督官はその同胞被監禁者の生命を救助するためその要求通りの命令を発した。また此等の命令を受けた人たちも、決してこれに従う義務はなく、かつ要求されしアヘンの大部は自分の所有でなく、単に他人のために預かっていたに過ぎなかったが、明らかに広東のイギリス商人を死より救わんと欲し、またイギリス女王が将来その損害に対して賠償を得しむべきを信じて、これらの命令に従った。（中略）イギリス政府は命令を下された人たちが要求され貨財を引渡し、多数同胞の生命の破滅を防ぐため、自ら悦んでその貨財の破滅に服従したる快速な覚悟を大いに賞讃する。しかしイギリス政府はこれらのことに対し支那政府より十分な賠償を要求するものである。

イギリス側は、これまでの事件をこう解釈した。禁令を犯したアヘン輸入の責任については何も考えてない。

イギリス外相パーマーストン卿が清国政府に要求したのは、生命を脅かしてイギリス人から代償として取上げた貨物の価格を元の所有者に返還すること、侮辱的待遇を与えた貿易監督官へ賠償するとともに、将来中国政府及びその官吏に依りイギリス国王の威厳に相当する尊敬を以て待遇し、文明諸国民の諸習慣にかなう方法を以て交渉にあたること、またイギリス商人がイギリス官憲の保護下に身体生命の安全を保障され心配なく居住し、かつ支那沿岸の諸要港と通商を行い得るため、その全権大臣によって選定される一つ以上の海上の島の永久割譲を承認することなどである。

マカートニー卿もアマースト卿も、門口まで行って拒絶された問題を、ここで一挙に解決し、国交を対等にするどころか、一段と飛躍してイギリス人に安全な根拠地となるような土地を永久に割譲せよと要求したのである。貴国と呼ぶことも非礼として許さず、二国間の和親など対等の関係は在り得ぬとまでした尊大なアジアの帝国、天朝と自負する者に対して、言語に絶した無礼な意志の表明である。

事件は単にアヘン禁輸の問題だった。この紛糾をてこにして、マカートニー卿以来の懸案を圧力を以て解決させようとした。成長して来たイギリスの産業資本の前進基地を東亜に獲得しようとするのである。外相パーマーストン卿はイギリス臣民の貿易の自由、

安全を保障する条約が厳正に成立可能ならば海島の割譲までは求めまいとの意向だったが、いざ戦争となって勝利を制すると、イギリス人の意志はにわかに強硬に貪欲のものとなり、貿易に五つの港を開かせイギリス臣民の居住、貿易の自由、安全を約束せしめた上に、香港の割譲を支那に承諾させるのである。全権が外相の訓令以上に追加を要求することを背後の力が認め、推進させた。

これで、イギリスの産業資本はアジアに進出する強い基地を獲得し、その後は自由に東亜に支配的勢力をひろげる。尊大な中国が夢にも信じられなかったことが、次々と事実となって起って来る。三跪九叩の敬礼のような勿体ぶって、しかも形式だけの空疎な話ではなかった。自信でかためた壁が各所で、土煙をあげて崩れるのを見せられた。洋夷は大砲も発達させていた。鉄を鎧った軍艦は、蒸気機関を具え、考えられない速力で妨害を排して北上して来た。遠征軍は、真先に広東河を封鎖し、舟山列島を武力で占領した。更に揚子江口、黄河の河口を封鎖した上で、直隷湾に入って来ている。陸地の官憲に対しイギリス政府の要求書を北京に送達するように求めた。内ぶところまで入って来て匕首を突きつけたものである。シナ人の方では、アヘンを焼いたのも貿易を停止させたのもイギリス人を懲らしめるためだったと信じていたのに、そのためにイギリス人が軍艦軍隊を向け領土を侵犯して進出して来たので、まったく寝耳に水の驚きようであった。

何の理由か、理解し難い。広東にいたエリオットが、帝都に近い白河の沖に軍艦で来

て、公文書を突きつけ、天朝の返事を要求しているのだ。その時になってもシナの大官たちはまだ楽天的であった。直隷総督大学士琦善は、大沽まで来て下僚を英艦に遣って、パーマーストン外相の書簡を受取らせてから、別して大したことでないような、気やすめの上奏をした。イギリス人は広東を閉鎖されたので、貨物が売れず困って港をさがしに来たものらしく、様子も悔悟の心があるようだから機を見、変に応じて、よく納得させ、南に帰らせるように仕りますと言った。

イギリスの黒船が白河沖にまで入って来たのは、日本の江戸湾の浦賀に黒船が来たのと同様に、首都のお膝もとなのである。おどろき、あわてたのだろうが、そこはアマースト卿を歩きまわらせ身体の疲れ切ったところで、注文をつけ交渉を不能にするくらいのことを平気でやる中国の大官のことで、まだ機を見、変に応じて回航させて見せると考えていたらしい。

琦善はイギリス人はアヘンの禁圧で林則徐を憎んでいるのだと見た。林則徐をやめさせることもできる、と暗にエリオットに話して広東に戻らしめるように仕向けている。エリオットはまた、天津に永く留って、中国側の反感を買うよりは、林則徐が斥けられ、琦善が欽差大臣となって広東に来たら円満に話がつくかも知れないと期待したようである。だが、イギリス軍の舟山列島の占領はまだ続いている。琦善が巧妙に交渉しても定海県城から撤兵はしない。

やがて林則徐が罷免せられ、琦善が欽差大臣となって広東に向った。しかし琦善もイ

ギリス人の烈しい欲求には手を焼く。これは世界史的に新しく生れたたくましく不敵なヨーロッパの意志なのである。広東に帰ってからのイギリス人はひどく傲慢になり、軍艦の数も増加し、危機感が深化している。古い天朝の外交では最早処理出来がたいものになっていたのである。

六

国土が大きく、広東と北京とは遠く離れて通信が遅れる関係もあるが、中央では地方の状況がよく判らない。その上に清朝の大官たちは事件が自分の責任になるのをひどく嫌うので、闘ってひどく敗北を蒙っても、正直に真相を知らせるようなことをしない。時を待って、イギリス側で無益な攻撃を中止すると、報告は敵が敗走したもののように北京に知らせて来る。いつも虚偽で装飾してあるので、北京で知らぬ間に形勢は悪化した。イギリス人の方にはごまかして置いて、明瞭な返事をなかなか与えない。仮条約を結んでも、官印を捺さないで、北京から許可が来るのをいつまでも待つと言う流儀である。香港を譲渡するように約束して、イギリスに定海の占領をやめさせ舟山列島を還させたが、ぬらりくらりしていて自分の方では約束を履行しない。

その間にイギリス側は虎門から内洋に軍艦を入れ、沿岸の砲台を破壊したり占領して、遂に実力で広東に肉薄した。軍艦だけが来たと信じていたのだが、陸軍が上陸したので

中国側では驚愕した。水師提督を始め多数の死傷を出し、千人もの捕虜と数百門の大砲を捕獲された。

エリオットは広東を占領すればシナが屈服するものと期待した。しかし国は広大で北京の皇帝は紫禁城の簀桟敷にいることで、らちがあかなかった。そしてイギリスの占領下に広東ではさかんに貿易が行われた。

その裏面で中国側では火船を集め、湖南四川の兵隊を呼び寄せ、外国商館を攻撃して大規模にイギリス人を殲滅させる計画を進めていた。エリオットはこれを知って日没とともにイギリス人以下外国人を避難させ、占領した砲台と艦船から砲門をひらき、広東城を占領した。ここでまた、シナ軍三万五千人を撤退せしめ、贖金六百万円の一部を受取って和約を結んだ。贖金とは掠奪を行う権利に代えて償金を払わせるのである。

一八四二年の正月になると、香港島は事実上、イギリス軍の手に落ち、貿易監督官も役所をマカオから香港に移した。同時に、北進が開始され、一度還付した舟山列島に派兵し、揚子江口に威嚇を加えた。六月に入ると、揚子江に入って上海を占領した。中国側では、文武百官が城をあけて逃亡したあとである。

七月には江をさかのぼって鎮江を陥し、大運河の口を塞いで、北京の糧道を絶った。八月には南京の前面に軍艦を入れ砲撃を加える配置に就いた。こうなっては、中国側に勝目のないのは、最早隠しようもない。

鎮江の守備軍は大将以下千六百人が最後の一兵まで闘って全滅したし、軍機大臣で和

平論が進められるのを見て憤って自決する者まで出たが、あれだけ尊大だった中国も屈服するより他はなかった。この時、エリオットは帰国を命ぜられ、代ってポッティンジャーが貿易監督官となり条約締結の全権を委ねられていた。エリオットは、アヘンの臭気がつきまとっていたのでイギリスの体面のために退かせるとともに、英国の意志をより強くシナに徹底させる任務をアヘンに関係のないポッティンジャーに与えた。香港割譲と、他に開港場を開かせることを、武力を背景にシナに要求することである。ポッティンジャーは赴任すると、広東官憲に虎門砲台を修築すれば、イギリス軍は直ちに攻撃を開始すると威嚇し、香港、定海を自由港と布告した。よその国に来て、独断でそう決定したのである。その上で海岸線に沿って軍艦軍隊を北上させ、揚子江を南京まで征服した。

イギリスがアヘン戦争を起したのは、イギリスの貿易監督官と臣民が監禁され生命の危険を受けたと言うのが理由であった。禁制のアヘンの引渡しを承知しなかったために起ったことで、引渡さねばならぬアヘンをイギリス人だけが引渡さなかったのが、監禁に近い待遇を招いたのだとは、一切感じてないように見えた。マカートニー卿以下を特派して平等の国交に入ろうと努めて、頑冥な清国の拒絶にあい、何とかこの壁を突破しようとしたのが、この強引な戦争で初めて目的を達し、香港を割譲させ、イギリスの貿易のために五つの港を開かせ、イギリス臣民の居住貿易の自由と安全を保障せしめ、イギリス人の治外法権を認めしめた。

武力と言う直接で解決が早い手段で成功した。南京条約にはシナにアヘン輸入を公認させる条項はない。しかし、禁制品のアヘンを没収したのに対して賠償金をイギリス人に向け支払わせたのは、将来もアヘンを密輸入しても没収不能のような印象を人に残したものである。

シナは日本のように鎖国していたのではない。場所を広東に限ってあっても恩恵として貿易を外国に許してあった。日本の鎖国も長崎の出島と唐人屋敷を例外として貿易を認めていたので、似た点がないでもない。江戸幕府は、シナほど気まぐれに、急に貿易をやめさせたり停止することはなかったが、下敷になっている考え方は、シナの朱子学を官学としているし、やはり一方的な恩恵として、特に貿易を許してやっている。

国交はないとする、つまり鎖国だが、オランダ人と唐人の商人にだけ、友交関係を認めているのである。シナは開放的で国交を認めているようだが、これは中華と外蕃との関係、文華のある国と野蛮国、夷狄との間の交通であって、平等のものではない。朝貢に来るのを許し、シナ側に必要のない貿易をしないのだが、下級の国々の乏しきを憐んで許し、中国の物産を分けてやるのだとする。中国に足りないものはないからである。この尊大な誇りは日本人にないのだが、外国を夷狄と見る観念は、支配階級の中に中国と同じく在った。古くからの官学の朱子学と新興の国学とが、精神の領域では外国人を夷狄と見なした。それも主として紅毛人南蛮人であって、シナ人と朝鮮人は夷人とは遇

せず、皮膚の色の類似、歴史的に古くからの交渉も深く、学問文化を受けて来たことで、外夷とは考えられなかったのだ。知識人は、シナを中華として眺め、いつの場合も模範を彼地に仰いでいた風がある。今日から考えると不思議なことだが同学の者の交際では、親がつけた日本人名でなく、中国名をつけて呼び合っていた唐土心酔の人々もある。(蘭学者がまた自ら命名したりオランダ人に選んで貰ったオランダ名前を用いて、得意であった。この子供っぽい心酔の仕方は、いつの時代でも日本人の尖端的な人間が懲りずに示す心情である。)

世界に無比の強大を誇るシナは西力の東漸を別に不安とも感じていなかった。日本は祖法とした鎖国の中に既にその不安を胎蔵していた。はにかみ屋で外の風を嫌って、門を閉めて家の中にこもったような気性がある。シナ人が自ら許していた中国の強大な力量を、日本の支配階級はそろって素直に純粋に真実と信じていたと思われる。アヘン戦争で、遠い国から船を送って攻めたイギリス人にシナのような大国がもろくも敗れるとは、戦争になったと知っていても日本でも誰も予想しなかったことである。僅かの軍艦に砲撃されて、海岸の砲台が破られ、内国の河川に敵を入れ、鎮江あたりでは全市の守備軍が一人残らず殲滅される。海岸の要地は奪われて、敵の奥地侵入の根拠地となる。

鎖国の日本だから、すぐ隣りに起ったことでも海の外の戦争は向河岸の火事ほどの火の色も見ずに済んだ。実際に普通の日本人が二年にわたったアヘン戦争の実情を知ったのは、斎藤竹堂の警告の書「鴉片始末」や坂原雄の「阿片乱記」に続いて、各種の著述

が国内に行われてからのことで、出版が弘化、嘉永年間になって一度に行われたことで、時期的には大分遅くなる。それまでは幕府の関係者の一部と民間の有識者の耳に伝えられただけで、知ったところで海外に起ったことだし、支配階級と言うのはいつの時代でも閉鎖的で現状維持を望むものだから、隣りの戦争を自分の国の運命と結びつけて考えることを避けた。

民間の敏感な人々だけが、風圧の常と違って容易ならぬのを感じ始めた。「力」と「徳」を持つ大清帝国が、まさかと思うのに、少数のイギリス軍艦の前に屈服し、上海、寧波、福州、廈門、広東の五港を貿易港として開き、殊に香港島を割譲してイギリスの領土とした。

インドを征服したイギリスは同じようにしてアジアの内陣深く進出して来た。足がかりの場所をシナ大陸の一角に築いた。ホンコンから上海に飛石伝いで来る。何となく、この勢には、ただならぬ力が加わっていて、氷河か火山の溶岩が押出して来るように、圧力が無気味である。あるいは、強烈な颱風かハリケーンのようなものを見るように感じられる。海を渡って来て、これは、マカオ、広東、舟山列島、上海と激浪を寄せかけて海岸線を北上し、遂に国内河川の揚子江をさかのぼって、南京にまで達した。今のところは、それがシナ大陸で済んでいるが、いつ、その余波が日本に寄せて来ぬとは言えない。大清帝国でさえ侵略された。日本の民間の有識者はシナ人のように悠々と大陸的で無関心でいられる大人ではない。島国に育って、いつも性急過敏な気質なのだ。

先覚

一

長崎市の山越えに茂木に出る上り坂の中腹に秋帆高島四郎太夫の屋敷の址が残っている。高島の家は天正時代、港が作られたころから長崎に来て住まった旧家で、代々の町年寄の一軒となった。秋帆の父四郎兵衛が町年寄のほかに出島の砲台を預かるように命ぜられてから砲術の荻野新流を習って、その興味が子の秋帆にも伝えられた。砲三十八門を装備したイギリス船フェートン号が長崎の湾内に入って来て、出島のオランダ人を人質に取り飲料水や食料を提供させて出帆して、そのために長崎奉行松平図書頭（ずしょのかみ）が切腹した事件が起った時、秋帆は十一歳である。町の混乱や出島の台場を預かる父親の心痛を見ていて深く印象を受けたのに違いない。

十七歳で父親の役目を継ぐと、台場を預かり、また町年寄としてオランダ屋敷に出入りする間に、西洋流の砲術が発達していることを知り、熱心に兵書を取寄せ、火薬製造の技法を調べ、また出島のオランダ人に依頼して、新式の大砲、砲弾、マスケット銃（洋式銃）など、本で知った実物を、オランダ本国やジャバのバタビアから自費で購入して、新知識を得た。

ヨーロッパではナポレオン戦争の経験から、ボンベン（破裂弾）、グレナーデン（柘榴弾）のほか、照明弾、焼夷弾などが急激に発達していたので、砲術書を取寄せて見るだけでなく、大砲や砲弾の実物を取寄せて見て、その製作まで試みたのである。町人として普通許されぬことだったが、苗字帯刀を認められる町年寄で、出島の台場を預かり、彼自身も蘭学を知りオランダ人と交際のある立場が強味であった。

秋帆はアヘン戦争が大陸で起る前から長崎港の台場の規模が小さく備砲が旧式で、万一の場合の役に立たぬことを知って、度々、改革の意見を奉行に進言したが採用されることなく、自分一門だけの研究を熱心に進め、輸入した砲にならってモルチール砲（臼砲）を鋳造し、各種の砲弾を作るのに成功した。

砲術のほかに秋帆は西洋流の兵式調練を、オランダの兵書で知って、古い日本の兵法とは、革命的に違うのに驚嘆を感じた。「西洋銃陣」と彼は呼んだ。オランダのヘーグ文書館に秋帆が注文した蘭文書籍の注文書が残っている中に、「歩兵操典」「射撃用剣付銃に関する教範」がある。「海上砲術書」などの書名が見えるし、現存する彼の旧蔵書の中に「主要火工品製造に関するハンドブック」などが発見せられる。

不思議な熱情であった。理解力が優れていたし、作る技術を次第に進めて行った。不審な点を出島のオランダ人に説明を求めたり、また彼自身が毛筆でオランダ文で認めてオランダに送った質疑応答書が、今日もヘーグ文書館に保存せられている。新式の各種大砲、歩兵銃を購入するのには手続上、注文書を出すので、それがヘーグやバタビヤ文

書として残り、高島父子、特に秋帆のものが目立って数が多い。孤独な先覚者の努力の痕跡となっている。

秋帆の家は、代々続いて市中の小川町にあったが、天保九年に町内の火事に遭って焼失してから、今日、遺跡となっている郊外の小島町の別荘に移った。丘の上にあって、港と市内を見晴らしているが延長五十間の石垣を高く積み、敷地自体が台場のような形をして、茂木に通じる街道から石段を昇って門に達する。石垣の一番高いところで一丈五尺、普通は六尺あまりだが、高い地点にあるから道路から見上げると、台場のように堅固な外観である。これが秋帆を罪に陥れようとする側に言わせると、町人の癖に「小島城を築き塁壁を堅くせり」と罪案の一に算えられたのである。さすがは長崎の旧家のこと、この形勝の地に別荘を営み、雨声、送月と名づけた二つの二階を作り、桜の間と名付けられた客間は、床の間から周囲の襖、天井まで桜の花を一面に描き、金粉の彩色をほどこしたのが、近年まで一部が残っていたと言われる。今日では至極平凡な民家が占拠して、人が住んでいるが、石垣でかこみ箱のようになっているこの敷地内で、いろいろと実験が行われたものだろうか？

天保十一年には秋帆の門弟は三百余名に達して歩兵四小隊砲兵一隊に編成して春秋の二度にわたって、田上の原で演習をして注目された。これまでの日本で見られぬことだったからである。長崎に在番の諸藩の武士が門人となったばかりでなく、秋帆の名声を聞いて、諸国から入門を希望する者が多い。天保十一年と言えば、アヘン戦争が起って、

シナが南支で敗戦を重ねている時である。長崎では、海の風が国外に起った事件を日本のどこよりも早く知らせて来る。

秋帆の目は早くから海外に向って注がれた。長崎の土地がまた、蘭学と限らず日本の地方に隠れている志ある人々を不可知の魅力で惹きつけていた。そこに秋帆がいることも、何をしているかもいつか人が知るようになった。

佐賀藩はフェートン号の事件の時に、長崎の警備の番に当りながら任務を怠る失態があって、長崎奉行松平図書頭が自決した後で、責任のある数名の武士が切腹した。古い警備の方法では不充分なのを知ったのもこの時からのことで、鍋島直正が藩主となると、長崎の防備の受持区域を親しく巡視し、西洋の軍事学を採る必要を知った。前に直正の家老だった武雄支藩の鍋島十左衛門が早くから家来を長崎の高島父子のもとに入門させて砲術を習わせていたが、天保五年には自身長崎に行き、弟子となった。天保十一年には鍋島藩は、ホイッツル砲（速射砲）、臼砲の実弾射撃を行い、また西洋銃陣の操練を行なった。やがて佐賀城下にオランダ砲稽古場を設け、一般の家士にも稽古させ、かたわら大砲鋳造所を作り、製造方も養成した。

鹿児島藩でも、秋帆のもとに島居平八、平七兄弟を送って学ばせた。修業中、兄は病死したが、弟の平七が薩藩の西洋砲術を起した。天保十三年の三月、鹿児島城下中村の騎射場で、各種の大砲の実弾射撃を行ない、西洋銃陣の教練を行なった。野戦砲を両翼

に備え、四十八名で組織した銃隊が行動を共にしながら射撃練習をした。銃隊の服装は高島秋帆が考案したもので、ベトレン笠（魚頭形陣笠）をかむり、筒袖半天に股引、たっつけ袴で、大刀を廃止し、脇差ばかり差して、動作を軽くしてあった。

秋帆の初期の弟子たちは、渡辺崋山がいた田原藩の鈴木春山、肥後藩の池部啓太、岩国藩の有坂淳蔵父子などが算えられる。秋帆の師範が、大砲を操作する技術や、鋳造の実技だけでなかったことは最も早く弟子となった肥後藩の池部啓太が師を助けて数学を重んじ、弾道学の知識を伝えたことでも知れる。池部の塾では、「西洋振子の理を以て、砲の道、火玉道、砲丸の前後遅速算」を弟子たちに学ばせた。砲術の門人が七、八百人いて、算術の弟子が五、六百人いた。池部啓太は元来、数学者の出だったので、彼は秋帆の砲術の弟子となり助手となったことは、砲術を操典以上の科学的のものにした。一介の町年寄がほとんど独学でオランダ書を読んで始めたことが、国の未来に影響があるものとなったのもその故である。秋帆は、幕府の外国船打払令が、空想だけでそのままでは行われ難いのを知っていた。そこにアヘン戦争である。イギリス艦隊が無傷で大国シナの陸海軍を打破り、領土を割譲させるまでに圧倒する威力を示したのである。イギリスの成功の原因が、優れた武器を以てする近代化した作戦に依ることは、かねてから秋帆が信じていた立場を裏書した。

フェートン号の来襲とロシア軍艦の北辺侵寇で、島国育ちの過敏な感受性が充分に刺激を受けていた。アヘン戦争はその大規模なもので、怒濤のように東亜に押寄せて来た。

その余波が、またも何かの形で日本の近海に向って来ることも覚悟せねばならぬ。アヘン戦争のことは出島のオランダ人から伝えられたが、長崎在留のシナ人船主も無論、本国からの便りで知っている。事実が誇大されて伝わったのはやむを得ない。

秋帆は長崎奉行田口加賀守に意見書を出した。蛮夷は火砲と艦船の利を以て武備の第一として、近年になって急速にこれが改良され発達した。元来、この度の戦争は、非は明らかにイギリス側にあるのに、正しい立場の唐国の方が大敗している。これは精鋭な武器の力に依るものであって、シナの武備など前時代的な無力なものだったことは、出島のオランダ人も話している。日本の火術も実は西洋では数百年前に廃棄した陳腐のもので、この実情を知ったら蛮夷が侮って侵攻をくわだてぬとは言えない。蛮夷を防ぐには蛮夷の術を心得ていなくてはならない。大体、砲術は危険なものなので、高貴の人々は近よらず微賤の者に委ねられて来たので、長い年月の間に一向に進歩もなく逆に無力なものに堕した。何とぞこの機会に、近来発明のモルチールその他を御採用になって諸国海岸、江戸長崎などに備えつけ、火砲を一変し、防備を堅固に致させるようお願いしたい。広東一件の勃発を見るに到って、平生考えるところを重ねて申上げる次第です。御採用くだされば有難い。

天保十一年九月の日附である。これはアヘン戦争が起った年なので、秋帆の早耳と焦慮が感じられる。

二

奉行は、意見書を見てから秋帆を呼出して、熱心な説明を聴取し時宜に当っているものと信じて、中央に取次いだ。老中水野越前守がこれを有司の審理に付した。その中に、例の渡辺崋山、高野長英の蛮社の獄を無理に起した西洋嫌いの鳥居耀蔵がいて、秋帆の意見にはじめから反対して出た。真面目に反対しているわけだが、その理由に挙げたものはいささか妙な論旨である。西洋諸国は信用出来ず、礼儀道徳をわきまえている日本国、清国の如き文明国とは違う。近年西洋にて用いるモルチール砲などは、砲術諸家が修業するように命中を専一としない。多人数の中に打込んで火薬の猛威を振わせることを主としている。西洋は礼儀の国でなく、厚利をはかり勇力を闘わせるのみである。わが国が智略を以て勝利を取るのとは違う。従って西洋で利用しているからといって、一概に信用することは出来ぬ。俗情は新奇を好む。蘭学者には殊にその弊があり、砲術だけでなく風俗習慣にまで奇を好む風があって宜しくない。

広東擾乱の次第も、唐国が二百年の泰平にて文華に流れ、武備が弛緩していたのに対し、イギリスは戦争に熟練していたために勝利を得たので、別に火砲が優れたためとは考えられない。然るに、ひたすら火砲の利を頼み、わずかの地役人を指揮するぐらいのことで、一方の御備えと考えるような微賤の者の偏見などは、お取上げになるべきでな

い。ただ火砲は元が蛮国伝来のもので追々発明のこともあるかも知れぬから、これが諸藩のみに伝わって幕府で知らないのは如何かと思われる故、右の火器はお取寄せになって然るべしと愚考する。

この判定の背後に在るのが、西洋は日本と違い野蛮で信用ならぬということで、官学の排他的思想と、毛嫌いなのである。否認の理由は西洋の学問の産物だと言うことなのだ。

幕府の内部でも鳥居のような頑固な保守的な考え方の者ばかりでなく、崋山の友人だった江川太郎左衛門のように、秋帆の説を正しいとして大砲とともに江戸に呼出して、実際に西洋の銃砲の演習をして見せるよう計らってくれる人々がある。

秋帆は悦んで、江戸に出てきた。長崎から連れて来た地役人、門人の他に、江戸で入門した者も加え、二中隊八十五名を編成した。自分の工夫した服装をさせて、マスケット銃、迫撃砲、速射砲の演習をして見せる機会を得た。長崎から運んだのは二十ドイムモルチール砲とホイッツル砲である。演習の場所は荒川沿岸の徳丸ケ原で、天保十二年五月九日のことである。

幕府の役人と諸侯の家中が原の南側に設けた五張の幕舎に集り、一般の見物人とともに演習を見た。臼砲三発で始まり、ブラントコーゲル（焼夷弾）二発、距離八町と四町の標的に向って、榴散弾二発とドロイフコーゲル一発が、それぞれ発射された。これは秋帆父子が自ら発砲し、野戦砲は門人が当った。

次いで騎兵の馬上銃射撃が行われ、野戦砲三門を部隊の両端と中央に置いて銃隊の洋式調練を実演して見せた。横隊行進、左右、後方へ打ち方、方形陣となっての打ち方、着剣二重陣になっての突撃、その他次から次と変化のある部隊行動である。個人的か小集団各個の戦闘しか考えてなかった人々に、この部隊が整然と動作を変化させる調練は新鮮なものに見えたのに違いない。兵士たちは小銃の操作の邪魔にならぬように陣笠を変形させたトンキョ帽と言うのをかぶっていたし、紺色の筒袖筒袴の軽装をしていた。秋帆は銀月の紋をつけたトンキョ帽に、桃色の筒袖、筒袴をはいていたと言うから、それだけでも江戸の人間には珍に見えたろうし、号令がすべて聞いたことのないオランダ語だったので、これは後で不埒なことだと非難の的となった。特に幕府の鉄砲方から検視に来ていた者たちは、一斉一様に武器を持上げて操作する兵士の動作を、失笑に値する馬鹿げた動作としか見なかったらしい。

しかし不発弾は一発も出なかった。野戦砲とともに剣付鉄砲で行われた突撃と、一転して作る後退輪形陣は心ある者には、強烈な印象を与えた。例の目付役の鳥居耀蔵を始め、最初から敵意を抱いて見に来た者は、それ見たことか、子供だましではないかと、悪評をあびせかけたが、偏見なく演習を見た人々は、新しさと機動力を見て驚いた。これは確かに、何かある力ある仕事だ。一町人がオランダ書を読んで現実に組織して見せたものだが、他の者はほとんどそれを考えなかったものである。この場合、幕府は奇妙な方針で秋帆に命令を下した。この新しい流儀を、幕府直属の者に教えるのはよいが、

ほかの諸藩に教えてはならぬ。これは秋帆の志と違って、幕府の安全だけを考えたものであった。

おかしなことに、幕府のこの命令は、高島秋帆の門人が長崎を中心にして早くも佐賀、薩摩、岩国の諸藩にひろがっていたのだから、命令を出しただけで実効はない筈である。伊豆韮山の代官江川太郎左衛門は幕臣でありながら亡命中の高野長英を匿ったほどの人物、最初から秋帆に同情的であり秋帆が江戸に出て来ると、すぐに入門を希望して出たくらいで、洋学嫌いの鳥居耀蔵や幕府の鉄砲方の役人が否定的態度を露骨に示したのも無視して、秋帆について火術を習おうとした。幕府は太郎左衛門を採らず、旗本の下曾根金三郎を選んで秋帆の伝授を受けさせるようにした。命令では、直参の者一人に伝授するようにとあった。西洋流の火術の力を認めたとしても、躊躇って臆病な態度である。

実際に西国諸藩に秋帆の流儀がひろがっているのを知ってからは、江川太郎左衛門にも習うのを許した。しかし、その場合も、西洋流と称するのを廃止させ、高島流と改名させた。西洋のものだと言うことで嫌ったと見るより他はない。変な話だが、これも古い秩序を守る官学の考え方から出たのである。

解禁となると、秋帆の門に入って学ぶ者が日毎に増加した。旗本で後に勘定奉行となった川路聖謨、仙台の大槻磐渓、信州の佐久間象山なども高島流の門人である。進取的な立場を採る人々が秋帆が拓いた道を辿ろうとした。こうした傾向は、幕府の要路にあ

る一部の守旧派が相変らず悦ばない。殊に、崋山、長英の死の原因となった大目付の鳥居耀蔵が不思議と思われるくらいに、執拗に新しい学問傾向に向けて酷薄な方針に出ようとする。天保十三年に遂に秋帆が告発された。高島秋帆に課せられた罪状は、鳥居の家来になっていた本庄茂平次が仲間をかたらって鳥居に訴えて出たもので、鳥居の方が最初に秋帆の失脚を企てて、その材料を本庄などに探させたものと見ても当らぬとは思われない。鳥居は崋山や長英を罪人に仕立てた時と同じく、秋帆の場合にも、蘭学や西洋に学んだ兵法がひろがるのを憎んで容赦なく破滅させようと望んだのである。洋学を秩序の敵と信じた。

本庄茂平次は前に長崎にいて唐人貿易や紅毛貿易の吟味方をしていたが、不正を行なって長崎を出奔し、江戸に出て鳥居に仕えた男、やはり長崎で唐通事で、悪事を犯して追放された河間八平次とともに秋帆の罪科となるべき箇条を作り上げた。秋帆は大砲などの密貿易を以て巨利を得、会所の金を私して兵糧米を貯蔵し、謀叛を企てる目的で西洋銃砲を買集め、長崎の小島にある住居を城のように堅固に造っている、と証言したのである。幕府は長崎奉行に命じて秋帆に揚屋入り（入牢）を命じ吟味させた。なるほど秋帆は近隣の大名から新式の火器の輸入を頼まれると、代金や手数料で大きく儲けて、門弟たちに稽古させる自家用の銃砲を買っていた。しかし、もとより謀叛など企てる理由がない。何を訊問されても立派に言開きする。

事件は、鳥居耀蔵が江戸から糸をあやつっている。大目付から司法警察の権力を握っ

た町奉行になり、望んだことを下僚に実現させる勢力を持っていた。長崎奉行は伊沢美作守だったが、鳥居の意を迎えて、秋帆の罪状を決定的のものにするように努力した。秋帆が弾薬火薬など調製し、配下の人数も多く二十門の大砲と数知れぬ小銃を所有し、郊外の嶮阻な場所に台場の如き要害を構え大砲を備えていることで一旦蜂起した場合、大坂の大塩平八郎一味などに比較しても最も侮るべからざる勢力となるし背後の天草にでも味方を求め浪人どもを集めれば容易ならぬ事件になるところだった。その上に自分が与力格に昇進したことを発令以前に他人に吹聴し、倅の妻に代官高木作左衛門の娘を迎え、身分不相応な縁組をしてお上をおそれる様子も見せない。なお家宅捜索をして押収したものの中に江戸城御本丸の絵図があった。これをオランダ人に渡して代償に珍しい品物を受取っていたとも推定せられる。悪事は明白でありますから、江戸で御直々にお調べくださるように、と鳥居に報告した。

同じ書簡の中に、「広東一件は取調べましたところ、やはり事実で、戦争も次第にエゲレス方が優勢となったことも相違ありません」（有馬成甫「高島秋帆」）とアヘン戦争のことを書いてあるのは、鳥居の方から戦争の様子を尋ねて来たのだろうか？　鳥居がイギリス軍の勝利を信じたくなかったのは当然であろうし、内心は不安に思っていたのである。

秋帆は、江戸に送られて、伝馬町の牢に収容された。地元の長崎で吟味が行われるな

らば、周囲の人の見る目があって簡単に黒白の区別がつくことも、遠く江戸で事情を知らぬ人々の手に渡されては、偏見や先入主に左右されることとなる。長崎奉行の報告は好い加減で採るに足りぬものだが、江戸では町奉行の鳥居甲斐守耀蔵が有罪を既定の事実として秋帆に臨んだ。秋帆は危地に立ったが、気丈に迫害に耐えた。さすがに謀叛とは断定を下しかねたので、取調べは遅々として進まず、その間牢内に押込めていつまでも苦しめて置いた。

秋帆の弟子で、肥後藩の池部啓太も連累の嫌疑で、伝馬町の武士牢に収容された。これも取調べを遅らせて、いつまでも監禁のままで差置かれ、再び世の中に出る望みもなくなったように見えた。啓太は死を決して、自分の学問だけでも後に残したいと考えた。元来、彼は数学者であった。

「陰鬱な獄舎は窮乏と不如意との生活であった。筆、墨、紙を得ることは殆んどできなかった。そこで一策を案出し、食事の余りを室の隅に播いて鼠を呼んだ。餓えた鼠はこれに集ってその鬚を落して行った。また彼は自分の髪毛を抜いて罠を作り鼠の足にかけてこれを捕え、そのひげを抜いて放してやった。このようにしてやっと鼠のひげで筆を作ることが出来たということが伝えられている。また墨がなかったので汁椀の欠けているところから少しずつ漆を集めてこれを粉にし、水を加え墨汁を作った。そしてこの筆と墨とを以て鼻紙に縷々数万言を綴って『割円四線表』を著わした。これは三角函数の表であるが、これが完成には獄中三カ年の日子を費し、細字で書いた鼻紙四百八十余枚

に上った。次に啓太は『万動理原』を著わした。これは弾道の原理を説いたものである。これら獄中における彼の苦心惨憺の結果になる著書は、出獄のとき携えて郷里に帰り家人や弟子に示したが、見る人皆涙を流し、袂を濡さないものはなかった。」（前掲有馬氏著）

高島秋帆も、天保十四年から弘化三年の七月まで、あしかけ四年の間、牢内で苦しみを受けた。しかし、その間に外国船が日本の近海に現れ、危機が人に感じられるようになって、秋帆に対する吟味が不当で残忍な点が問題とされるようになった。老中の水野越前守がそのために職を罷めさせられ、閣老がかわり、秋帆の弟子の川路聖謨などが要職に就いたので、鳥居甲斐守が斥けられ、四国の丸亀に永預けになった。

秋帆の吟味もやり直しとなった。これまで問題とされなかった告発者側が取調べられることになって、讒訴した本庄茂平次以下が告発された。秋帆の判決は、身分柄してはならぬことをしたと言う程度の罪で、遠島とすべきはずのところ、牢屋の近火の際に放たれてすぐ帰って来た故に、罪一等を減じて中追放と言うことになった。秋帆は安中藩に預けられることに決した。

秋帆が獄中で暮した四年間に、アヘン戦争で露骨に示されたヨーロッパの意志が、漸く日本の海岸に迫るのが感じられた。幕府は江戸湾の防備を考えないわけにいかない。狼狽して砲台を作らせようとした。採用すべきが高島秋帆の西洋の方式のものとなるのは当然人の考えたことである。しかし、秋帆は、儒学臭い反動派に憎まれて、牢獄に

閉込められていて、幕府は使うことが出来ない立場にいる。ただ、この長崎の町年寄が独学でおこした火が、消されそうになりながら、飛び火して、遠い地方の所々で風を得て息を吹返していた。

昔のままの方式では最早いけないのを知っている人々が出た。幕臣の中でも、江川太郎左衛門などは公然と秋帆の弟子で幕府から大砲鋳造について相談を受けた。その間も、秋帆は世に出られないのである。太郎左衛門は、今こそ秋帆の経験と頭脳の働きによるべき時節だと考えて、要職にいる川路聖謨などに歎願書の取次を頼み、先生の知識を御用に立たせるように御赦免の上、私にお預け願うようにしたいと運動した。聖謨ももとよりその志なのである。しかし、この場合になっても幕府は秋帆を用いようとしない。秋帆の学問が幕府にも必要だと判っていても、秋帆の意見が開国論に紙一重なのを本能的に悟っていたから、保守的な国の秩序を損わぬために、いつもためらうのである。まだ秋帆の学問は薬と言うより毒性あるものに見えていた。

三

天保十二年に水戸藩主徳川斉昭は堅牢なる軍艦を造ること、並びに外国が新たに貿易を要求して来た場合には拒絶するように幕府に建議した。その時も水野越前守以下の老中は貿易拒絶には同意しながら「西洋の式を参酌して船艦を製造するは鎖国の厳令にも

触るることなれば採用する能わず」と答えている。先祖からのしきたりが、この場合になっても動かし難いものに信じられている。思想がいつも慣例から出て来る。

しかし、幕閣は、翌る年になると、外国船の打払令を緩和して、外人の要求に依り食料薪水を給してもよいと認めた。前の命令（一八二五年）は、外国船を見たら二念なく打払えと言う過激、厳重なものだったのが、これが改められるのに十七年の長い年月を必要としたことになる。しかも、この改正は、天下の輿論を怒らしめた。一歩進めて鎖国を全面的に廃止するなどとは当局者には、とうてい考えられなかった。

弘化元年六月になると、長崎に来たオランダ商船からオランダ国王が日本に忠告することがあって特別の使者を出したと知らせて来た。予告された使節の乗船は七月になって入港した。

国王の書簡の宛名は、和文では日本国王殿下と記してある。書簡の内容は英国軍がシナに入ってその軍隊を破り、遂に貿易を開かしめたが、英国は日本にも迫るだろうから、時勢を察して旧来の鎖国の法を改め、外国と国交を結び、日本が兵禍を受けぬようにされるがよいと親切な勧告であった。

「貴国も今また此の如き災害に罹りたまわんとする。およそ災害は倉卒に発するものなり。今より日本国に異国船の漂い浮ぶこと、古よりも多くなり行きて、これがためにその船兵と貴国の民と、忽ち争論を開き、終には兵乱を起すに至らん。これを熟察して深く心を痛ましむ。殿下高明の見ましませば、必ずその災害を避ることを知り給うべし。

我も亦、安全の策あらんを望む。」

蒸気船が創られてから各国間の遠い距離も短縮された。

「かくの如く互に好みを通ずるの時に当り、独り国を鎖して、万国と相親まざるは、人のよみする所にあらず。貴国歴代の法に、異国人と交りを結ぶことを厳禁し給いしは、欧羅巴州にて、あまねく知る所なり。老子曰く、賢者位にあれば、時により治平を活護す。故に古法を堅く遵守して返って乱を醸さんとせば、その禁を弛むるは賢者の常経のみ。これ殿下に丁寧に忠告する所なり。今貴国の幸福なる地をして、兵乱の為に荒廃せざらしめんと欲せば、異国人を厳禁する法を弛め給うべし。これもとより誠意に出る所にして、我国（オランダ）の利を謀るには非ず。それ平和はねんごろに好を通ずるにあり。ねんごろに好を通ずるは交易にあり。こいねがわくば叡知を以て熟計し給わんことを。」

オランダ国王は言う。「この忠告を採用してくれるならば、殿下の親筆の返簡を賜りたい。その場合は、腹心の家来を差遣すから、この書簡で言足りぬ分を、その者からこまかく御説明申上げよう。」オランダはこの処置に依って長崎の貿易の独占も抛棄するのだが、世界の情勢、新しいイギリス、フランスの東方への意慾を眼前に見ていると、真実に日本のことを心配して警告してくれたものらしい。その善意を、幕府の当局者はほとんど掬みとれなかった。

またしても形式論にこだわってこれに逃込むのである。七月に受けた申入れに対し九

月まで待たせてから、返事は後日こちらから致しますからと、長崎奉行からオランダの使節に伝えさせた。相当無礼な態度だが、オランダには通商を許しているが、国交を結んでいるわけでなく、この種類の書簡は受けるべき筋合のものでないとする。逃げ口上と言うよりほかはない。これまでの如くに、手続きだけを題目にした。

閣老連署の返事をオランダ側に渡したのが翌年の六月になってからだった。春日遅々たる趣きのもので、三跪九叩の礼にこだわった大清帝国の高官たちの遣り方と、大して相違ないようである。日本は通商をオランダとシナに限り、通信を許しているのは朝鮮と琉球だけで、その他とは一切交際しない。国王の御厚意は謝するところなりとは言え、祖法を変えるわけに行かぬ。これからも通信を停止せねばならぬ。この返答を送って礼を欠くとも見なかったのは、オランダもやはり夷狄だと見る考え方が日本もシナと共通していたからであろう。

水戸の徳川斉昭は、老中阿部伊勢守に手紙をやって、御三家の権威でオランダ王の手紙を見せて欲しいと申入れた。「往復書翰と贈酬品目等を示されたし、来書中には必ず天主教を布くこと交易を請うことあらん。又贈品中にはギヤマン等無益の玩物あらん」と言うのであった。

秋帆高島四郎太夫などの民間人とは違い御三家の一つである水戸藩主の位置となると、その発言は幕閣に対してもとより圧力が強い。斉昭は、オランダ国王の書簡を読んで

「紅毛も頗る利口にて中々油断し難し。諺に所謂お為ごかし、入らざる世話と申すものなり。皇朝は一小国にても人民衆多にして忠信義勇なれば、かれ戦争にては勝利を得ること能わず、交易通信に託し、甘言を以て我を欺かんとするものなり。宜しく旧に復して異船打払の厳令を発し、清夷蘭狄たりとも長崎の外に近づかしめざるを第一の良策とす。時宜により清蘭（シナ、オランダ）たりとも交易禁絶して可なり」として、幕府の形式に依る拒絶以上に攘夷的である。別の機会に斉昭は次のように交易も害あるものと断定している。

「交易というは、是彼と取交わし、互に利あればこそよけれ。今我国は何一つとして事足らぬものなく、彼国々より持渡る物多くは奢を勧る無用の品なり。阿蘭陀一国と交易するさえ、識者の憂うるところなるに、内には諸藩を引入れて交易し、外には大船を出して外国に交わらんには、必ず夷狄の風俗に移され神国の大害をなさんこと目のあたりなるべし。」

今我国は何一つとして事足らぬものなく彼国々より持渡る物多くは奢を勧る無用の品なりとある発想は、イギリスの使節マカートニー卿の要求に対して清朝が答えた趣旨と、ふしぎと通じ合っている。天朝の物産は豊盈で、無いというものはない。外夷の貨物によって始めて有無を通ずるというようなことはない。ただ矜憐の情から恩を加え澳門（マカオ）において洋行を開設し、貿易を許しその日用を資助し天朝の余潤に霑わしめておるのだと蛮夷を見くだして臨んでいる。この「天朝」の態度と、閉鎖的な相違はあっても通じて

いるものがあったのは、あるいは偶然かまたは未明以前の無邪気な性質が似通っていたかである。幕府のオランダ国王への返答が「外蕃の夷目（監督官）が中国の官吏と文移応酬することは出来ぬ。貿易事務ならば稟（請願）を以て行商を経て呈請しなければならぬ。書信を呈通してはならぬ」とした清朝の役人の返事と相似しているのと共に当時のアジアの時代の色であろう。日本の水戸斉昭のは、やはり鎖国と孤立の古い安らかな睡りが理想のようで、懐古的な色合いが深い。

「夷虜、皇国を窺窬致し候こと、今に始めぬこと、代々申伝え、心長く終には併呑致し、巧黠の狄心、誰も存じおり候事、申すまでもこれなく候。またこちらにても、彼へ応じ候御策略は、御代々さま御伝意にて、夷舶一切御近付きこれなきがよろしく、そのうち次第も御座候わば、幸いと清蘭たりとも交易御禁じ然るべく存じ奉り候。」

夷舶一切御近付きこれなきがよろしく、ときびしく説いている間に、ヨーロッパの意志は深く東亜に押入って来ていた。潮は高まって来た。最初に、これを受けたのは日本の南の先端にある琉球列島である。早くも各国の外国船が姿を海上に見せ、さまざまの要求を出した。

イギリスだけではない。アメリカ、フランス、ロシアなどの船も出没する。その乗員たちのひそかな意志は大なり小なり新しく押出して来たヨーロッパなり西洋の意慾を分ち持っていた。これは少し遅れるが、嘉永六年に日本に来たロシアの軍艦パルラダ号に乗っていたゴンチャロフの書いたものに、この心持が示されている。

「今ぞ遂にこの十カ月に亘る航海、苦労の目的を達するのだ。これぞ閉めたまま鍵を失くした玉手箱だ。これぞ金力と武力と奸策とを使って、これまで無駄骨折って手なずけようと各国が覗って来た国である。これぞ巧みに文明の差出口を避け、自己の知力と自己の法規によって敢て生きんとして来た人類の大集団であり、外国人の友誼と宗教と通商とを頑強に排撃し、この国を教化せんとする我々の企図を嘲笑し、自己の蟻塚の得手勝手な国内法を、自然法にも、民法にも、その他あらゆるヨーロッパ流の正と不正に対立せしめている国である。

『いつまでもそうして居られようか?』と我々は六十斤砲を撫して云うのであった。日本人がせめて入国を許し、天賦の富の調査を許してくれたらよいのだ。地球上で人間の棲息する各地方の地理や統計のうちで、殆んど唯一の空欄となっているのは日本ばかりでないか。この不思議な、まだ知られていないが故に気にかかる国土は北緯三十二度から四十度まで延びている。従ってその一はマデラ島より南に当るのである。この国には炎暑も酷寒も来れば、棕櫚も松も、桃も蔓越橘も生えるのである。（中略）山々には、――我々はもう知っている――世界最上の銅が出る。しかし上質のダイヤモンドや銀や金や黄玉はないか。そして金よりも貴重な、十九世紀最高の鉱物たる上質の石炭はないかどうかは、まだ知らないのである。」（井上満訳「日本渡航記」）

ゴンチャロフは、小説「オブローモフ」の著者である。大蔵省の役人でパルラダ号に

乗って来朝したのだが、初めて見る日本に向けて、未開国を見るような西欧的な優越感を以て眺めていたのが判る。

長崎の港と日本人を見てから、彼は、こう言っている。

「日本人から長崎を取ったらどうだろう」と私は空想にふけって呟いた。吹出した者もある。

「連中（日本人）には、物を利用するという能力がないのだ」と私は続けた。「他国の者がこの港を占領したらどうなるだろう。見給え、すばらしい所じゃないか、全東洋の貿易が活気を呈するだろうに……」

アヘン戦争で成功した英国人、これにおくれまいとしているフランス人となると、この北方の人間の空想に留ることはない。発展する産業力と帝国主義的な慾望で背後から推進されて出て来ているのだ。後になってから、ロシアは日本海の入口対馬を占領しようと企てたし、イギリスは下関を砲撃した後に長州藩から関門海峡の要害の小島、彦島を租借する交渉に入ろうとした。その、どちらも西方の貪慾な意志を日本に向けて、シナの香港と同じように橋頭堡を作ろうとしたものである。ただ、イギリスは、図体の大きいシナの内陸に、その後も次第に食込むのにいそがしくて、日本に開国を迫るのを立遅れて、アメリカ人に譲る結果となった。

南シナ、揚子江岸の上海に入って来たヨーロッパ人に取って、琉球列島は、海上数日の距離に在る。琉球は薩州藩の属領となっていたが、琉球を介してシナと密貿易するた

めに、琉球がシナに進貢船を出すのを許してあった。琉球の名に隠れて、シナ貿易を営んだもので、薩摩の物品をシナに送ることは避けたが、シナからの輸入を行なって藩の財政をうるおした。小規模だが、幕府の鎖国を一部裏切って交易をしていたわけで、この島津氏の秘密の政策にあやつられて琉球は奇妙な二重の立場に置かれたもので、清朝に対しては、日本に帰属していることを隠して、交通したものだった。ある時期には、薩摩では藩士を琉球人に扮せしめ、進貢船でシナに渡って必要な物品を買って帰ったものだが、清国側に発覚する危険が生じたので、これは中止した。その後は琉球人が薩摩に代って貿易を続けた。ヨーロッパ人にこの関係がよく理解出来なかったのは当然である。

天保十五年三月に、フランスの軍艦が琉球の運天港に来て、清国との条約文を見せて、通交と貿易、布教を要求した。琉球王は断ったが、よく理解されなかったらしい。フランス軍艦は九日ほど滞在してから、宣教師一名とシナ人の通訳を残して出帆して行った。琉球からはすぐに舟を出して鹿児島の藩庁にこれを知らせた。舟も独木舟（まるき）である。藩庁からすぐに江戸にいる藩主に知らせ、届け出たので、長崎奉行の下知で警備の部隊を琉球に派遣した。それまで、琉球の守備に常備した兵力は百余人である。フランス軍艦は帆船だったが、大砲三十数門を備えて、乗込んでいた兵力は三百人ほどだったと知らされた。

このことがあってから、外国の勢力がすぐ隣まで来ていることが切実に感じられた。

フランス軍艦が置いて行ったフランス人宣教師とシナ人通訳の処置にも苦しんで、鹿児島から来ている役人と相談して、那覇に送り天文寺と言う寺に収容し監視しておいたが、熱心な男で琉球の言葉を勉強して覚えて、やがてとめるのもきかずに外を出歩くようになった。

それまではシナ人の通訳を間においてお互いの話を通じたのだが、自分が琉球語で話せるようになると、琉球側の役人に向って「我々が来たのは、司令官が英国で出版された本で琉球が日支間の交通に便利な地点にあるのを知って、平和に談判して国交を開く意志で来たもので、我ら二人を残したのも、この国のことを視察するためなので、やがてまた軍艦が来るが、心配することはない。ただイギリスは我々と違って、この国を併呑しようと考えている。その目的で、イギリス船が来るのも、そう遠いことではないから今の間にフランスの要求を入れて、その保護を受けるようにしておけば、イギリスの野望を防ぐ手段ともなろう」と話したので琉球側も薩摩の者も狼狽して、鹿児島ばかりでなく、清国にまで使者を送って救援を求め、またフランス人が退散するように大々的に神仏に祈ったりした。増援部隊を七百人琉球に送ったと鹿児島から幕府に届けたが、実は百五十人ほどの士卒を新たに派遣したのに過ぎない。平和だった島が平和ではなくなった。潮の第一波が送られて来た。続いて弘化二年の五月にはイギリス船が一隻那覇の港に入って来た。

イギリス船は、ルソン、八重山島を経て来たもので食料品などを求め、昨年フランス軍艦が来た後の模様など、強い関心を見せて尋ね、三日ばかり碇泊してから長崎に向って出帆した。長崎では伊王島沖に碇をおろし薪水食料を求めた。日本側が以前と変って、おとなしく要求に応じたのを目新しく眺めたことだろう。二念なく打払うなどと言う烈しさは最早見えず、表面はおだやかに要求に応じた。このイギリス船は、帰路にも琉球に寄港し、まだ滞在していたフランス人宣教師や清国人通訳とも数回会って、出港して行った。そして翌年の四月になると、イギリス船がまた那覇港に来て医師ペテレンとその妻子を上陸させ、滞在を求めた。もちろん拒絶されたが、本国政府の命令で来たものだからと言って動かない。シナ人の下男が船に積んで来た家具を陸揚げした。その間に、船が出帆したので、やむを得ず護国寺に置くことにした。ペテレンは布教を目的で来たのだが医師でもあり病人を施療すると申出た。これも断ったが、勝手に看板を出し、病人を集めた。最初のフランス人宣教師と言い、このイギリス人家族と言い、異境の土地へ来て、なかなか勇気もあり辛抱強い人間である。日本人の側でも、嫌っても別にこれに迫害を加えるようなことをしない。薩摩から派遣された武士たちが黙って見ていたのも、意味深長な事実である。

イギリス船が那覇を去った後に、今度はフランス軍艦三隻が運天港に姿を現わした。一艘に七百人、他の二つに五百人と二百人の多勢の乗組で、自由に上陸して来たばかりか、那覇、首里の付近まで出歩き、馬を借りて乗廻し、また勝手に測量などした。その

間に司令官が琉球政府の役人を軍艦に招待して饗応歓待して、欧州列国の形勢を説明し、清国の条約文を見せて、フランスと和親を通じ、国交をひらき通商をするのが得策だと、説明し、その場で返答を求めた。

あいまいに答えるよりほかはなかった。すると次第に威嚇的になり、無理に承諾させようとした。国王に話して相談してからでないと返事は出来ないと答えて退去した。フランス側では、司令官が琉球側の政府に出頭し、国王の謁見を得たいと申入れた。もとより国王から直接に返答を取る決心なのである。国王は病気で会えないと答えた。フランス側の威嚇的態度は露骨に強硬になった。その間に司令官は、「琉球と日本とは既に国交があるようだが、我々はやがて日本にも行き条約を結ぶ予定でいる。だから琉球も早く我々と和親を結ぶべきである」と言明した。フランス人は、琉球を日本と見ず、小さい独立国と見ていたのである。

琉球からは、すぐに鹿児島にこの旨を通知した。江戸にいる藩主にも知らせ、幕府に届け出た。鹿児島から琉球に出兵する命令が出た。真実に兵隊を出せば早晩フランス軍と衝突が起り戦闘に入るところだったが、薩摩では藩主以下、琉球を仲介にしてシナとも交易をしていたことで、通商貿易が国に不都合なものとは見ていなかった。琉球へ加勢の軍勢は勇ましく山川港から出帆したが、どこを廻って帰って来たのか、琉球へは行かず、間もなく、ひそかに帰国して来た。表向きだけで、積極的に出兵して琉球を守ろうとするのではない。

日本全国でも長崎に次いで鹿児島の城下では海の外の事情を知っていたとも言える。前に掲げたように琉球から清朝に出る進貢船に、琉球人の姿をした薩摩の武士が乗込んでいた事実があるし、やがて琉球で、イギリス、フランス、アメリカ合衆国の人々と琉球政府と会談があると、島津の家中が琉球人の役人になりすまして席に立会って談判を傍聴した例が出て来る。薩藩士、市来政右衛門がその一人である。安政三年に藩主斉彬の命令で、洋学修業という名目で琉球に派遣され、琉球人の風俗に変装し英米仏人との談判の席に加わった。この政右衛門の後年の談話に、老中阿部伊勢守正弘などは、その当時から開国の見込みを一定していたので、井伊掃部頭が出る以前に、幕府は開国を覚悟していたと言うのである。

英仏の船艦がしきりと姿を見せ不穏の形勢になった弘化三年閏五月に地元の薩藩主島津斉興、斉彬父子が家老の調所笑左衛門に老中阿部伊勢守の屋敷を訪ねさせて申入れを行なった。外国船の要求を、あくまで拒絶していては不測の禍を生ぜぬとは保証し難い。薩藩では先年七百余の増援を送り、現在六百余名おるが、もとより我より事端を開かず、フランス人が我に非理を加えることがあるとして、極力抗戦を回避させる方針を採らせている。海外貿易は国禁であるが、今日の状勢では最早拒絶出来ぬ場合に立到ったように思う。それ故に琉球だけに限って交易を許し、内地に侵入するのを止める手段としてはどうか？

七百人、六百人あまりの兵隊を琉球に出しているように話したのは、大げさに言ったので、事実は百五十人から百人のところで、薩州藩の首脳は外人と衝突して戦端を起すのを賢明に回避するようにしていた。藩が派遣した役人が琉球の者と見せかけて、イギリス、フランスの出様を見ている。島津斉興、斉彬も戦争をしたら日本もシナと同じで、ひどい目に遭うことを充分に考えていたから、無責任に景気ばかりつけて外国船を打払えなどとは言わないのである。開国論者とは言えないが、経験から交易の利益その他について覚醒していたし、外国の発達した技術や産業についても薩州藩は活発で注意怠りない国柄となっていた。斉興父子が調所笑左衛門をして言わしめたのは、琉球の二重の立場を利用して、外力の本土に及ぶのを拒む防波堤にしようとする意見である。琉球だけに外国船の交易を許して、内地の当分の安全を計ろうとするのである。

阿部伊勢守は開明の人物だが、やはり保守的な幕府の思考の枠から外に出るひとでない。幕府がオランダの親切な仲介の申出を拒絶したのも、その場かぎりの遁辞で、当座をごまかして解決を先に延ばしただけのものである。そのために、相手の親切に対し、返事にならぬ返事を与えた。いつまでもその手がきくように考えているのが失策の第一歩なので、一歩一歩、泥に足をとられて、やがて動きがつかなくなるのだが、調所笑左衛門の意見を聞くと、これも一時の便法だが今日となってはそうするよりほかやむを得まいと、うなずいたらしく見える。

琉球は表面、清朝にも従属して、これまでにも交易をして来た。そこで交易だけのこ

とならフランス、イギリスについても清国と同じように暗黙に許して、その代り外国勢力の本土に侵入するのを食止めるのである。島津氏は琉球に二重の性質を課して、シナ貿易を行なっていたことだから、同じ方法でフランス船、イギリス船を琉球に迎えることも特別のこととは考えない。阿部閣老がまた、これを聞くと、なるほど、それで当座の難は免れられるな、と思った。何事にも当座の策を積み重ねる。考えてから返事する、と答えた。

笑左衛門は、大目付筒井紀伊守政憲にも会って同じ意見を聴いて貰った。実はこの方針は日本の一部を開国することなのだ。それを人々は、形の上では琉球国として行わせようとする。都合のいい逃げ道を見つけたものなのである。通信、貿易、布教の三カ条の全部を拒んでは、国難を免れ難い。貿易だけを琉球国に限って承認するのである。

翌る日、筒井紀伊守が、阿部閣老の内意を告げに薩摩屋敷に来た。斉彬も会った。斉彬は琉球は清国にも従っているから、外夷が予め清国の許可を得て通商貿易を求めて来たら琉球はこれを拒絶出来ない。琉球を日本域外に置き、通商貿易は琉球王限りで処理するよう黙認しておくのが、日本のためである。こう説いた。昭和年代にそれと酷似した事態が沖縄に起っている。琉球は日本から切離される。六月一日になると、島津斉興、斉彬父子は将軍家慶の前に召し出され、老中阿部伊勢守だけが立会い、特に別室に入って親しく話した。「琉球の事は総て卿に委任する。寛猛変に応じて、思うとおりに処置して欲しい。患を後日に残し国威を墜すことだけはしないように」と特に将軍の言葉が

あった。

幕府は例に依って大事を取って責任を問われるような急激な変化を忌み嫌った。阿部伊勢守は筒井政憲、川路聖謨を列席させ、斉彬に訓示した。琉球は外藩のことだから政府は強いて干渉しない。足下に委任したことで、一々指令を仰ぐ必要もなく、独存で至当の処理を下して差支えない。フランス人の強請は力を尽して拒むべきだが、交易は許してよい。ただそれはフランスだけに限って他国に及ぼすことなく、努めて事を小にして大ならしむべからず、と言う趣旨である。

その後に明らかにされたところでは、この問題は三奉行の評定に付せられた。町奉行、寺社奉行、勘定奉行で、それぞれの意見を問われた。琉球開国は長崎の貿易に影響し不利となろうと反対する意見が強かったが、阿部閣老が万一琉球でフランスと戦闘を起せば、琉球だけでなく国難となる故、この処置はやむを得ぬ。外国通商については公然と許可を下し難いが幕府も口出しせぬから、適宜に処置して然るべきものとする。フランスに貿易を許せば他国も允許(いんきょ)を望んで出ようが、琉球は国土狭く、物産も豊かでないから、広く諸国と通商する資力もない。そのことをフランスから他の諸国にさとして貰うように申入れてはどうか、正弘はこういった。濃霧の中に隠れて、物事を決定しているような態度である。すこしも先を見ないで、足もとだけの話である。

四

琉球を持つ鹿児島や、数世紀間海外の風を迎えていた長崎と違って、水戸は奥座敷にいて西方の勢力に遠い。見ようによっては、玄関のことは知らないとも言い得る。今日の日立市、幕末に水戸藩が異国船見張りの城のような陣屋を置いた助川の丘の上に立つと、前面に太平洋の浪が百八十度に近い開き方で如何にも雄大に水平線をひろげている。波濤のほかに障害は何もない大洋である。アメリカ船が現れれば、この視野の中に真向いに来るわけだが、アメリカはまだ出て来ない。後のペリー艦隊も南から廻って琉球を経て日本に来航したので、水戸は、いつも風を直接に受けない遠い距離にある。

それにも拘らず、夷狄の来襲に対して、水戸は鋭く神経を働かせた。朱子学と国学とが合体した水戸の学問は、古くから白色人種を夷狄と看做(みな)している。書斎の中で立てた学問だが、強烈で行動の野気を胎(はら)んでいた。

外国船の侵入に対して水戸の徳川斉昭の態度がまた、きびしい。文政の異国船打払令を幕府が緩和したのを遺憾として、度々、復活を提言している。阿部伊勢守と島津斉彬らの琉球の処置を耳に入れると、黙視する筈がなかった。琉球にての交易など一切許すべきでない。交易を許せば、天主（布教）通信（開国）と必ず要求して来る。その心算で「追々島を奪い、国々海岸へ寄候こと、鏡にかけ候如く候えば、願わくば一切御済ま

せこれなきが御宜しくと存じ候、唇やぶれて歯寒しと申候。（中略）開闢（かいびゃく）以来、万国に孤立申候日本を今、徳川の天下にて永世の害に相成候（緒口（いとぐち））御開きなされ候ては、決して済ませられず候故、厚く御評議にて、苟安姑息（こうあんこそく）を御用いこれなきよう至願に候。」

これは閣老、阿部伊勢守に突きつけた書状だが、斉昭は、琉球の処理に当っている島津斉彬にも、厳重に戒告した。一体、交易のことを、もう承知してやったのか？　商館など建てさせるつもりか、また浦賀などの港へ来ぬように充分申含め、承知させてあるのか？

実に精力的に、くりかえし、くりかえし難詰して来る。その当時の四十八歳のことだから、もう老年の域に入っていたが、他の大名たちが触れて来ない点を一々きびしく念を押して来る。頑固な老人で、奥座敷に引きこもっていなかった。

島津斉彬は、琉球の開国を現実の問題として抱えているので、柔軟な態度で斉昭の申入れを受流している。異様に見えることだが、日本と琉球とを別箇のように見せて、処置しているのである。内実は分明で清国の方でも承知しているのだが、日本とは関係ないことになっているのを、異人にもそのままに了解させてあるから、自分の家来が面会することはなく、気のきいた者を琉球人の姿で出して応待させることはあるが、日本人の服装はさせない。異人もそれを知っているらしいが、これも言葉に出すことはない。寛猛の処置よろしくとの命令であるが、ただ今のところは寛の方ばかりで猛の処置には出にくい。自分が見るところ商館はやむを得ず建てることになろうが、それからそれと

先方の言い分に従うことになるのは遺憾だから、その辺で猛の手段を採用する場合も在るように思う。なお鍋島、黒田両家より申立ててあるように、長崎の防備を今日以上に充分にして頂けると、その影響で中山（琉球）の方の固めもよくなると信ぜられるので、お口添えを賜りたい。

斉昭はその後も重ねて反対を続けた。話が面倒になったので、鹿児島藩では琉球王や大官たちを説いて、異人を退去させるよう琉球から清国に使節を出して運動させるようにした。これは表面では成功して、清朝から広東にいるフランス領事に交渉して、琉球にいたフランス人を引取らせるように話をつけた。つまりこれは琉球を日本の課題としないで、清朝の問題として解決したのである。

斉昭は、閣老からフランス人が琉球から退去したと報告を受けた。「夷狄の方がお前さんたちより、よく考えているよ」と、老人は阿部伊勢守に書いてやった。「琉球のような小さい国に戦争を仕掛けるよりも、先に清国を奪い取れば琉球などは何もしないで手に入るのを知ってるから、おとなしく退散して行ったのだ。この際、急いで外国船打払いを実行させることだ。」

水戸藩は尾張、紀伊と並んで幕府の御三家と称せられて重い地位に在るし、特に水戸藩主は副将軍とさえ考えられて、常に江戸に出ているように定められていた。幕府の御用部屋（内閣）を組織する老中たちも、普通でも水戸を扱いにくい。斉昭のように一々

反対して来るのは処理をいよいよ困難にする。外国の事情を隠して一般に見せぬようにして来たのは幕府の方針であったが、幕臣たちが海の外に起った甚だしい変化を知らない。一隻か二隻の外国船が来ても、そのもたらして来る意味を解しようがない。閣僚でさえ二、三の者を除いて、圧力を理解していなかった。旗本などはほとんど何も知らず、斉昭の強硬論の意気さかんなのに同感を示しているのだ。ペリー提督が軍艦をひきい開国を迫って来朝した嘉永六年になってさえ、幕府が中央の諸役人と全国の諸大名に意見を求めた時に大部分の返事は、通商を許せば国法が立たぬ。交易を許せば国家は衰微する。ただこれを断れば乱暴を働くかも知れぬから、応接を丁重にして国法を説き二度と来ぬようにさせる。その間に至急防備を充実すること、と言うのが、九分九厘に多かった。ある大名（新庄藩主）などは、「彼らに酒肴を供して油断せしめ合図を定めて艦船を焼討し上陸者は皆殺しにすること」と申出ている。ひどく旧時代で、無責任で、のんきなものと笑ってはいられない。粗末で結果を考えずに単純なのは全部に共通していた。

水戸藩で思想的に影響力の強かった藤田東湖を薩摩の海江田信義が訪ねて談話を聞いた時に、「わが皇国の情態を察するに、六十余州士気の萎靡（いび）せる今日よりはなはだしきはなし。

さきには僅々二隻の軍艦を怖れ、かえって醜虜の軽侮を受け、かつて一人の義士もなく、また一人の勇者もなく、恬（てん）として国辱を顧みず、これをわが神州の人士なお正気を存すというべきか、余は浩歎に耐えざるなり。いやしくも他の軽侮に遇うて、而して国

を開かんよりは国民挙げて死するにしかず、いささかもかれに軽侮せられて、この国を開くがごときは、一国の正気、この時をもって断滅し去れるなり。なんぞ久しく国を保つを得んや。例えば、我始めて子に面するにあたりて、まず子の面に唾して、今より子と交わらんといわば、子もし白痴にあらずんば、かならず怒りて我を殺さん、それしかり。しかれば国と国との交通を開くも、またまさにこの情理なかるべからず。しかるを前日浦賀における一事（幕府が浦賀奉行に命じペリーを引見し開国を求める国書を受領させたこと）のごときは、愚といわんか、怯といわんか、わが神聖なる国威をして一朝にして落沈せしむというもまた可なり。ああ、かの浦賀の一事に際し、余をして事局にあたらしめざりしは本邦の国運ここに窮まれるを知るに足るなり。」

海江田が、それならば先生が浦賀のことに当ったらどうなさいましたか、と尋ねたのに東湖は答えた。

「善きかな問えること。対談の席上、ペルリの首級は、かならず余の白刃一閃のもとに落ちたらんのみ。はたして然らんには、余もまた当日まさに死すべし。しかれどもかのペルリをうちて、しこうしてまた自ら死するもの、これ余が一片の正気なり。ここにおいてか、余はすでに死して跡なしといえども、この一片の正気たる、横に全国に充満し、堅に百歳に伝遺するや必せり。しこうして正気の磅礴（ほうはく）するところ、けだし国をして富ましめ兵をして強からしむるの大本たり。国いやしくも富み兵いやしくも強し、外患なんぞ恐るるに足らんや。余当日のことを憶うごとに、みずから歎惜にたえざるのみ。」

藤田東湖は学者と言うよりも詩人で、ここでも彼が信条とする「正気」と言うものについて話しているものと考えてよいのだが、言葉の上でも普通以上に行動的な点を注意すべきで、主張するところは過激で、実際に彼がそのとおりにしたら、日本がシナのアヘン戦争と同じ結果を見なかったとは言えない。しかし、彼のこの一途の物の考え方が水戸人を支配し、また天下の志士たちにも深い影響を及ぼす。文政七年イギリス船が常陸の大津に来た時に、東湖は十九歳であったが父親の幽谷が、「汝すみやかに大津におもむいて、ひそかに動静をうかがい、もし（イギリス船）放還の議の決するを審かにせば、ただちに夷人の舎に入り臂力をふるい夷虜をみなごろしにし、しかるのちに、従容官について裁断を乞うべし、一時の権宜にいづるといえども、少しく神州の正気を伸ばすにちかからん。われ不幸にして女子多く、ただ汝一男あるのみ。汝にして死せばわが祀絶えなん。これ我と汝との命の窮まる時なり。汝顧慮することなかれ」と言って家から送り出した。その燃え方と同じことである。思想よりも感動の方が人に伝わり易い。

日本は列藩に分たれて、藩ごとに学問を保護奨励していたが、儒学である点では共通していた。水戸藩だけが独特の学派を作り上げ、これが後世水戸学と呼ばれる独自の性格を明らかにするようになった。

水戸の学統は、最初山崎闇斎派の学者が築いたが明から亡命して来た朱舜水の朱子学派の影響も加わり、国学とも合体して、水戸光圀以来、大義名分に依り保守的な秩序を

指向する学風を生み出した。

光圀は大日本史の編纂を思い立った。史記の伯夷伝を読み、臣節を全うした高義を慕って修史の志を立てたと言うので、「後人をして観感するところあらしめん」とするのが目的で、科学的に探究して歴史を固めて行くのではなく、史実を整理しつつ一筋の精神の感奮を興させようとしたものである。光圀は古書を集めさせ自分で検閲し、史料を選んで侍臣に抄出せしめた、と言う。

歴史の中に秩序の規範を見つける。秩序とはいつの時代にも現在の政治体制の確認であるが、歴史にそれを求めて大義名分がその枠となり精神となった。人間よりも理が最初にある朱子学の私生児で、人間の上に道が君臨する。道は大義名分に依って現実を区画し決定する。歴史に是認を求めた故に、「皇統を正閏し人臣を是非する」ことが修史の生命となった。作った枠に秩序を堅くはめ込んで動かぬようにするのである。

これが、やがて藤田幽谷の学説に発展して形が明らかとなる。将軍が天皇を尊ぶならば、大名もまた将軍を敬い、大名が将軍をあがめるならば、藩士も大名をうやまって、上下の秩序が鞏固に保たれ、天下が治まると言う。つまり治者の発想する秩序であるが、これが幽谷の弟子の会沢正志斎の「新論」の主張となると、更に色彩を強烈にして、「神州は太陽の出づる所、元気の始る所にして天之日嗣、世々宸極を御したまいて、終古かわらず、もとより大地の元道にして、万物の綱紀たり。まことに宜しく宇内に照臨し、皇化のおよぶ所、遠邇あることなかるべし」で、日本国内だけでなく遠近を問わず

世界の全部に対して日本の天皇が中心の位置に在る如くに、飛躍した主張となる。西洋諸国の蛮夷は日本から見れば手足の末端のわけだが、これが近頃になって四海に奔走し、諸国を蹂躙し、身体で言えば貴い頭にあたる日本を凌駕しようとしているのは怪しからぬ。思想と言うよりも、詩の領域に入った主張だが、それ故にまた人の感動を呼び易かった。折りから外力が日本の近海を侵し始めたのが強い刺激となって、この調子の高い議論となったのである。

国内の問題についても、正志斎は水戸家に対する遠慮はあるが、幕府の政策を批判する態度を明瞭にし始めている。幕府を創設した家康が、封建の秩序を維持するために、本を強めて末を弱める方策を採ったが、このために本の幕府も末となる列藩もともに力を弱めて、対外の危機に遺憾あることになった。幕府は態度を改めて、本も末もともに強める政策を採って一致協力して外虜を斥けねばならぬ。

兵力を固め軍備を整え、天下のために勇気あって進むべき方向を知り、義勇海内に溢れ海内の全力を挙げて侵略者を撃攘する軍を起せば、醜虜も形を隠して国境に近づくことなく、国体をはずかしめることも防ぎ得るのである、と説く。「新論」は藩主には見せたが、出版して外に発表することは憚って行われなかった。しかし筆写したものが思いがけぬ遠方にまで有志を刺激して奮起を促すことになった。九州久留米の神官、真木和泉守などは、この「新論」を読んで発奮し遥々と水戸を訪れて来るのである。諸国の国を憂うる人々が、実際に外力に対抗する思考の仕方を何も持っていなかったのだから、

「新論」の強い言辞と呼吸に人が魅せられ、この思想を生んだ水戸は特別の土地のように眺められたのであった。

封建的秩序の理論が、窮屈になった時に、水戸学の「道」は藤田東湖の天地間の正大の気の流動体となり現実に課した枠よりも、エナージー化して、氾濫し始める。大義名分だけでは、やがて動きが取れなくなる時代が来たからである。皇統中心の水戸学派は、幕府に対する親藩として矛盾のある地位から動きがとれなくなる。この学統を背景に立っている水戸の斉昭が、その意識はなしに常に幕府を攻撃する役に廻る。闇君なのではない。幕府の老中たちよりも世の中の先が見えていながら、締木で挟まれているように鎖国論の旧套から脱し得ず、それから外に宿命のように出られない。

水戸光圀が、元禄五年に楠正成が贈位になったのを聞いて心から悦んだ逸話や、後年に朱舜水に文章を書かせて楠公の碑を兵庫に建てさせたことは一般に人の知るところだが、斉昭も神武天皇の畝傍(うねび)の山陵が荒れたままになっているのを聞いて幕府に建議して修復させようと望んだ。

幕府は政策上、天朝を尊ぶのは幕府の威厳を失うの嫌いありとして、御陵の修復を好まない。水戸が余計なことを言出したと見た。その上に財政上の手詰りからも必要は他にあって、こう言う別に急ぐ必要のない道徳的な企画に手が及ばない。

御陵の修復が容易でないのを知ると、斉昭は、自分の領内に神武天皇の社殿を造営し

ようと企画した。これは史館の総裁会沢安（正志斎）から大名が天子を祀るのは非礼であると意見が出てやむなく中止した。すると斉昭は、再び御陵の修復を幕府に建議することにして藤田東湖に立案させた。

折りから、将軍が厄年だと言うので江戸城の西丸に巨額の費用を出して、感応寺を建立すると聞いた。仏教嫌いの斉昭が腹を立てるのは当然である。やがて神武天皇元年から二千五百年が来るし、皇統の無窮、武運の長久を祈って山陵の修復を実施させたい。これは京師のためばかりでなく幕府の威信にも関係することだ。費用は御三家始め、御譜代の大名に仰せつけられれば容易に調達出来ようし、そうするのが士民が領主を尊び、領主は公辺を尊敬し奉る意義を明らかにすることともなる。

幕府が許可しないならば水戸一藩の力を挙げて、これに当る決心になった。藤田東湖に山陵修理について古い制度を調べさせ、図面を作り、石材等の予算書まで見積らせた。畝傍陵は当時、荒廃していたし、所在地も明瞭でなく、いろいろ説が分れていたので、斉昭は京都にいた家臣桑原幾太郎を派遣して踏査させ、貝原篤信の説が最も正しいと認めて、準備を進めさせた。光格天皇の崩御があって、この企画がまたしても挫折した。しかし、斉昭は断念しようとしない。機会ある毎に繰返して建議して出る。抵抗があるほど、執拗になり、幕府を困らせる。四条天皇以来代々の御陵のある京都の泉涌寺が火災になった時にも、この機会に泉涌寺を廃止し、山陵を清浄なものに修復するように関白や幕府に意見書を出した。仏寺をやめ、古制に戻そうとするのである。

水戸の代々が京都に近かったのは、当然である。竹越与三郎「日本経済史」は、「斉昭に至りて頻りに京都の朝廷、公卿と接近し、凡そ勢力ある公卿数十家、みな水戸藩主より大小の贈遺を受けざるはなく、而して往々之に添うるに和歌を以てせしが、その意、皇室の式微を慨嘆するにありたるを以て、公卿の或る者はこれを喜び、或る者はその志を怪しみたりき」と記している。水戸がどの程度に都に手を入れていたかを実証的に言うのは困難であろうが、斉昭の性情から見て、その傾きは強かった筈である。

斉昭の長姉は内大臣二条斉信に嫁ぎ、その女の広子は有栖川幟仁親王の妃となり、次姉の清子は関白右大臣鷹司政通の妻となっている。斉昭の妻吉子は幟仁親王の末女だから、京都との交通が深かったとも見られよう。公卿は官位だけ高く貧しかったから、出すものは姫より他になかった。将軍の地位が固まってから、江戸でも都の風俗を大奥に入れるのを希望したし、諸侯もまたこれに倣って公卿の娘を迎えるのが、家の格を高くするように信じた。京都とのつながりを何かの形で持っていたのだが、政治的な意見を通じることは、幕府から厳重に禁じられていた。しかし天下の副将軍の斉昭ならば、ある程度憚りなく、意志を通じることも出来たろうと思われる。これは幕府が最も警戒するところである。驕慢で幕府に対して何かと横車を押し、異論を立てる斉昭だから故意にやって見せるところもある。無責任な世間の噂話では、斉昭が幕府に謀叛もしかねぬものと見ていたらしい。江戸城の本丸が火事を出して炎上した際に、下谷の藤堂家の屋敷にいた塩田随斎と言う学者が遠く夜空に昇る火の色を見て、どう取ったのか「水戸様

が御謀叛を起した。御用心をなされ」と呼ばわって隣近所を叩いて起したと言う話が残っている。学者だから水戸学の本を日頃読んでいて、こうなるものと早合点したのだろう。このあわて者だけでなく、その後も世間では、江戸城の火事は水戸家の間者が入って放火したものと、まことらしく信じた者が多かった。水戸は勤王のお家である。幕府の決定に必ず批判的なのだとは、人の頭に自然に動いた影であろう。外国船の渡来に、処置に苦しむ幕府のかたわらで、斉昭は頑固に、ひたすらに撃攘説である。

黒船渡来

一

突然にアメリカ合衆国東洋艦隊の四隻の軍艦が、江戸に近い三浦半島の浦賀湾に入って来たのは、嘉永六年六月三日のことである。司令長官海軍少将マシュー・カルブレイス・ペリーが乗るサスクェハナのほか、ミシシッピ、サラトガ、プリマウスで、二隻は蒸気船、二隻は帆船であるが、黒く大きな船体を列ねて、狭い湾頭に続けざまに出現した。

陸上では何事が起るのかと驚き、女子供は怖れて内陸に逃げて隠れた。

夏の夕方の、まだ午後五時ごろで、海はまだ青く明るい。「投錨直前に天気はからりと晴れ渡り、富士山の高い頂きは益々はっきりと見え、遥か彼方に横たわる群峰から抜きんでて高くそびえて見えていた。」旗艦サスクェハナは三千五百トン、ミシシッピは千七百トンで、太い煙突から太く黒い煙を上げ、帆船の二隻も黒色に塗り大砲数十門を装備してある。これが戦闘隊形を採って接近して来たのである。陸地は山上に台場を作り、大砲を備えてあったが、八門あった主砲の砲弾がある時期には十六発きりなかったと記録されているくらいで、守備手薄だし、人の不意を衝いて、海面をふさぐ勢で黒船

の列が立ち現れたのだから、市民ばかりでなく、警備の武士たちも、どう処置してよいか判らなかったことであろう。

浦賀奉行組与力の中島三郎助が通詞堀達之助を随え、旗艦サスクェハナに小舟をつけ、仏文で認めて用意されていた退去命令書をペリーに渡そうとしたが、士官が奉行でなければ面会出来ぬと言って、乗艦を許さない。やむを得ず小舟の上で書きものをひろげて、高く捧げて相手が読むように示しながら、中島は堀に英語で通訳させながら自分は偽って奉行次席だと名乗り相当する士官に会いたいと申入れて、始めて船内に入ることが出来た。

先方から副官のコンテイ少佐が出て対面したので、不意に来た理由を尋ね、日本の法として外国船は長崎で応接する規定になっているから、そちらへ行ってもらいたいと要求した。ペリーの副官は、司令長官の意志を明らかにした。予は我が大統領の命を奉じ、貴国と通交貿易の約を結ばんと欲し国書を持参した。これは貴国を代表する高官でないと渡すことは許されぬ。

四日の朝には、他の与力香山栄左衛門が奉行だと称して、旗艦を訪問したが、ペリーはやはり面会しない。艦長以下士官三人と会い、浦賀は外国人応接の土地でないから国書を受けられぬ。長崎に回航してもらいたいと重ねて要求した。先方はこれを拒絶して、貴国政府が大統領の国書受領のために相当の官吏を任命しないようなれば、我が長官は武力を用いて上陸し、将軍に面会して国書を渡す手段を採る、と、はっきりと告げた。

栄左衛門は御趣旨を幕府に取次ぎ、命令を待って返事をするから、四日間待って欲しいと告げた。蒸気船なら一時間で江戸が見えるところまで行くことが出来るのに、四日は待てない。三日以内に答えるようにと言われた。

アメリカ側では、前の日に来た日本人も市中第一等の官吏だと名乗り、今日来た役人も奉行だと称したので、前日のが嘘をついたのだと知った。他の交渉を一切、拒絶して艦船を港内深く入れ、日本人に不安の念を抱かせれば、こちらの望む返事をして来るだろうと見た。栄左衛門は岸にもどって、打合わせると、すぐに馬を走らせて江戸に行き、在府の浦賀奉行井戸弘道に急を知らせてアメリカ艦隊の実状と主張を幕府に報告させた。上下ともに驚愕した。

その間にアメリカ側では各艦から小艇をおろして江戸湾内に立入り水深など測量し本牧沖のあたりまで入って来た。沿岸防衛の者が舟を出して制止しても従わない。アメリカ船が武装して江戸湾に入って来たと、急報が立った。一層人々は危機を感じた。幕府からは取急ぎ諸藩に出兵の準備を命じた。諸藩では家族を領地に避難させる用意を始め、その噂が市中に漏れたので町家がまた老人子供を郊外に逃げさせる騒ぎとなった。ペリーの態度が強硬で「大統領より日本国君へ宛てた書簡を渡すのである。場合に依っては一戦を賭して迫ることもあろう。開戦の後、若し急要の事あらば白旗を立てて来るように、その折りは直ちに砲撃を中止して軍艦も後退させ、和議の相談に入ろう」と言って、白旗を二流渡したのだから、尋常でない。

幕府では御用部屋が集って評議し、国書を拒絶することはこの場合最早極めて危険だから、とにかく受けようと決議し、念のために斉昭の意見を尋ねた。斉昭も既に事態が急迫し容易ならぬのを聴いている。何か「御良考」おありのことと存ずるので国家の為、御相談申上げると閣老から問合せると、自分が心配してこれまで建白したことも御取用いなかったのであるから、今更如何とも致すべきようこれなく、ただただ当惑致すばかりで、「今と相成候ては、打払いをよきとばかりは申兼候。」一同で相談の上、御決断あるべきである、と日頃に似ず自分の意見を明白にしなかった。

気性の烈しい斉昭のことだから、一同の評定で決めろと言っても、胸がおさまらなかった。六月七日の夜、阿部伊勢守を本郷駒込の藩邸に呼寄せて、人も船も取って然るべしと言う実行困難な策略を打明けた。そうすれば軍艦四隻が手に入り積込んである筒(大砲)もこちらのものになる、と言うのである。この密談のことは斉昭から越前の松平慶永に宛てた書簡にも書いてあるから、無根のことでもないらしい。斉昭の家臣の藤田東湖が自分が浦賀で局に当ったら白刃一閃、ペリーの首が落ちたろうと言ったのと同じ考え方である。

人心は落着かない。町に出れば、浦賀その他各所の陣屋から昼夜を分たず注進の馬や飛脚が来るのが、櫛の歯をひくより忙しく見られる。武器調度を持運び、市中の古着屋で、陣羽織、小袴、たっつけ(裁着)などをかけならべ、鍛冶屋も武具屋も急にいそが

しい。戦争など起ることを支配層の武士たちが考えなかったことだ。下谷御成道辺の武器商の店は大方売切れて、日頃十金ぐらいの具足が、七、八十両もする。高松城主松平讃岐守が沿岸守備に出陣することになり、火薬を買わせたら高い値段の上に手を廻して焔硝二貫目しか買えなかった、一貫目筒で射ったら、二発か三発分なのである。打払いなど、望んで出来ることでなかった。しかも、アメリカ船がその内、日本に来ることは、弘化三年閏（うるう）五月にやはり浦賀に提督ビッドルがひきいる二隻の軍艦コロンバス、ヴィンセンズが、日本が通商をひらく意向があるかどうか打診に来たのでも、その時は平穏に日本側の謝絶を聞くだけで帰って行ったが、そのままで済むこととは言えないのを予測つかぬわけがなかった。その上に嘉永三年にはオランダ商館長から長崎奉行にアメリカが日本に遠征艦隊を送る計画があり、海外では、アメリカ以外の国でも既にそれを承知していると知らせて来た。

アメリカではカリフォルニア州に金鉱が発見せられたので太平洋岸に人の移住が行われたのと、パナマ地峡に鉄道が通じ、また蒸気船の発明から航海がさかんになり、これまでのように大西洋を廻らずに太平洋の近道を取って、インド、シナに出て来られる。捕鯨船が日本近海に来ることもさかんになった。蒸気船は短時日で太平洋を渡ることが可能だが、長い航海には石炭を多量に積込む必要があるので貨物を積む量が制限される。それには東洋のどこかに石炭の貯蔵所が得られればその不便をなくせるわけで、アメリカの海軍は前からそれを物色していた。日本本土や琉球にそれを求め得たら、アジア諸

国との交通がどれほど容易になることか？　諸外国は、アメリカのその希望を当然とするし、アメリカ政府もまた公式にオランダ政府にその意向を告げ、日本に在るオランダ商館長から日本の政府に話を取次いで貰いたいと申入れていた。これがペリーの艦隊が日本に来る前年のことである。

オランダ政府は新しく日本に赴任する商館長ドンケル・クルチュウスに、東印度総督からの公文書を持たせて日本の長崎奉行に渡すように命じた。オランダは前にも国王の親書をとどけて親切に日本に忠告した。幕府は国交がないのを理由にして、目をつぶって見て見ぬ振りをして済ませた。もちろん、アメリカが来ぬのをよいことにして問題としなかったのである。オランダは、この無礼を怒ることなく、二度目の忠告をして来たのである。幕府はまたしても書面を受けるのは祖法の厳禁するところだとして、受けまいとした。重大な用件が内容だと聞いても、受けなかった前例もあることで、ここで俄かに態度を変えては不面目だと唱えた。だが、知らずにおくのは気味が悪いのである。通詞に翻訳させると、アメリカが通商を求めるために近く日本に対して軍艦を向ける、鎖国政策を固守する時は開戦を免れぬことになろうとの警告である。長崎奉行は、訳文に自分の意見を付けて来た。謝絶するがよいと言うのである。オランダ政府は、長崎に限って日本が各国貿易を許し、領事を置き関税を徴収し、治外法権を認めてはどうか？その際はオランダの商館長が日本側の顧問となって各国間の交渉の世話に当ってもよいとあった。

アメリカの新聞が日本が請求を拒絶した場合は、都市を砲撃し各港を封鎖し、承諾するのを見てから攻撃を停止すべきで、英仏とも共同で強力に交渉を進めるがよいと論じてあるのが、オランダ側が提出した書類の中に入っていた。老中も見た筈である。オランダの商館長は、従前からシナ人、オランダ人に開いていた長崎を他の外国船が来るように許可したところで「旧来の御定に格外相触れず」国法に背くものでないとまで掻ゆいところに手のとどくように親切に言ってくれたのだが、幕府では浦賀に黒船を見るまで、結局は事なかれで、知っていて知らぬ振りしてすましていたのだから、驚くべきことである。つまり解決困難で面倒なことだし、まだ急いで採上げなくともよいと考えたものだ。

弘化三年（一八四六）ビッドル提督が浦賀に来た直後に、斉昭が老中の阿部伊勢守に与えた手紙では、昔どおり外国船は打払うことをオランダ商館長を通じ各国に伝達させ、その上で実行するがよいと勧告している。斉昭の提案は、その場合も無邪気に類する。向後二念なく打払うよう諸大名に徹底させるだけでなく、清国、オランダの船でも、見かけ次第、打払うか計略を以て召捕ること勝手次第である。船と搭載の品どもは手柄に依り下しおかれるようにするから、「夷狄は一疋も残らざるよう召捕次第、打殺し切殺し候よう、厳重御達に相成候よう致したく候。内地の戦争は勝利これあり候えば、土地をも得候故、励み候場もこれあり候えども、異船防禦の儀は何の益もこれなく候えば、

せめて、船、筒（大砲）等にても取得候えば、少しは励みの為にも相成べく候」と書いた。これに重ねてまた言う。「漢蘭両国の夷狄さえこの地に居り申さず候えば、下官の策を御用い遊ばされ候えば、浦賀等へ寄候異人は一疋も残らず召捕り、死刑に致し船をも取上候えば、如何様の策にてこれあるや夷狄の方へは一切相分らず、打払止め候までも策と心得、この後容易に舟を寄せまじく候ところ、両国（シナ、オランダ）の夷狄どもも長崎へ入込み居り候故、蘭学等致し、夷狄びいきなる者より通じ候も計りがたく、または自慢に申聞け候人、これあるも計りがたく、万一その儀夷狄へ通じ候節は、かえって害に相成候故、一疋もなく召捕候は易く候えども、この策は致しかね候わん故、認めず。」

と附箋をしてある。つまりオランダ人やシナ人を長崎に置く限りは、そうも行かぬと前の強硬説が実行不能なのを自分でも認めている。蘭学などやる日本人に不信の目を向け警戒しているのも相変らずだが、烈火のように熱するかと思うと、たちまちに分裂して勢いを失うものの、外に現れるところは、ひたすらに武断的なので、影響力が強い。勇気だけで思慮のない人々を簡単に攘夷熱に走らせる力を持っていた。攘夷運動は実に黒船が渡来してから、さかんに起るのである。

幕府は、三日間の内に回答しなければ、戦争となる関頭に立った。黒船を目の前に並べて見ているので最早、勇気りんりんたる斉昭の主張に耳を傾けていられない。国家の安危が懸ったことで、しばらく隠忍して相手方の要求に応じ国書を受領し、アメリカ軍

艦が立去った後で、衆議を尽して国策を定めようと申合わせた。つまりアメリカ側の申入れどおり、公式に国書を受取るだけで、それ以上に出ないことである。幕府は既に、物事をその場で解決する力がないほど、弱体となっていた。アメリカ軍艦を退去させる実力は、もとよりない。

六月九日、黒船がいる浦賀に近い久里浜で、アメリカの国書を受ける旨、返事した。その場合にも、親書は受けるがこれに対する回答は、長崎でオランダ人かシナ人の取締役を介してすると言ったので、アメリカ側を怒らせた。しかし、国書に対する返事は、すぐに行われなくともよいのである。そこにも幕府側に安堵の息を感じさせるものがあった。結論を一時、先に延ばして、ひたすら帰ってもらうことである。幕府は六月七日に日光門主のところへ高家宮原弾正大弼を使者に立て事のおさまるよう祈禱料に白銀百枚をとどけた。これを水戸斉昭が批評して、「上野、御祈禱のよし、珍しき世の中ゆえ、仏風にても吹き申すべきか？」斉昭はもとより心中深く神風が吹くように祈願していたことであろう。何もかも、弛緩して、だらしなかった。

久里浜には昼夜兼行で応接所の建物の普請を急ぎ、ペリー提督と幕府の代表とが会見することになった。

日本側の記録が事務的で必要だけの記事しか残さなかったのにくらべ、アメリカ側で編輯した「ペリー提督日本遠征記」の方が精彩ある叙述に豊かである。（土屋喬雄、玉城肇氏訳本による）

「早天第八点鐘が鳴る前に、サスクェハナ号とミシシッピ号とも徐々に同湾（浦賀）を移動して行った。吾が艦隊がかく行動を開始すると同時に、同じ方向へ六艘の日本船が、但しもっと陸寄りの方向を航走しているのが見えた。その内の二艘には縞を画いた政府の旗が立てられて区別されていて、或る高官の座乗していることが明らかにされており、他の船には赤い旗が立っていて、それには供奉、すなわち護衛兵が乗っていると想像された。今まで碇泊していた場所と下手の湾とを区画している岬を廻ると、海岸で行われている日本人の用意が突然眼に映じて来た。同湾を取囲んでいる陸地には長い布の色幕が張られていて華やかに、幕の上には皇帝の御紋章がついていた。種々のはっきりした色の小旗が無数に立てられていて、その中央には丈の高い大旗が九本立っていた。この無数の小旗は両側に立てられて居り、種々の色の旗全体が弧状に立並んでいて朝日の光にキラキラとひるがえっていた。

丈の高い大旗からは豊かな朱色をした幅広い尖旗がたれ下がっていて、長くゆらいで地面を掃いていた。右のように飾り立てられた場所の前面にあたる海岸には、数隊の兵士が並列し直立して、日本人の兵力を充分にアメリカ人に印象づけるために軍隊の威力を示そうとして整列していることが明らかであった。」

隠されている攘夷の意志とは反対に、明るい夏の光の中で、平和で友交的な光景である。歴史的な日本の開国の最初の時である。すこし長いが引用を続ける。今の久里浜は、

横須賀線の終点で海まで埋められて工場が建ち、青い樹木がすくなく埃っぽく乾いた住宅地商店街で埋まっているが、太平洋戦争前までは海に向って野川が流れるまだ小さく静かな村里だった記憶がある。これはその時よりも百年近く昔のことである。

「同湾を眺むれば、久里浜村の左手には、尖った屋根のついている一群の家屋が立並び、その家並みは背後にある緑色の坂の方へ連っている高地の麓と海岸との間に建てられていて、次第に高くなって彼方の山々まで続いていた。樹木の繁茂している丘陵に取囲まれた鬱蒼たる谷又は渓谷が湾の奥に口を開き、湾曲した海岸の単調を破って風景に美しい変化を与えていた。右側には約百艘あるいはそれ以上の日本船が海岸線に沿うて打ち並び、艫には各々赤旗がひるがえっていた。全体の印象は眼を驚かすようなものではなかったが、幻想的で心地よく、あらゆるものが結びついて、気持のよい光景を呈していた。多くの丘の青々とした中腹を照らして、爽やかに躍動させているように見える晴れやかな太陽の光、華やかな旗、キラキラする兵士等で、輝かしいばかりであった。海岸の後ろ、蜒々たる同湾の海岸中央の反対側には、応接所として建設せられたに違いない建物が聳えていて、三つのピラミッド型の屋根が周囲の家々から高く抜きんでていた。その建物の前面は縞の布で覆われ、その布は幕にして両側に張ってあった。最近建てられたために、その屋根は新しくて鮮やかに見えた。尖った屋根の頂点は同じ高さでなく、遠くから見ると、巨大な穀物の堆積物のようであった。

汽船が同湾入口付近まで行くと二隻の小舟が近づいて来たし、錨をおろすとサスクェ

ハナ号へ横づけになった。香山栄左衛門が二人の通訳を伴って乗船して来た。それに直ぐ引続いて中島三郎助と供の役人一人がやって来た。この二人は第二の小舟で来たのであった。ちゃんと舷門で迎えられて甲板に設けた席へ導かれた。みな日頃の服装とはやや異る公式の正装を着ていた。上衣は普通の形をしていたけれども遥かに念入りな飾りがついていた。材料は華やかな色をした大変立派な絹の紋織物であって裏には黄色い天鵞絨がつけられ衣服全部は黄金のレースで色々な形に立派に刺繍されていた。背や袖や胸には、はっきりと着用者の紋章がついていた。浦賀奉行代理三郎助は非常に幅広くて甚だ短い袴を穿いていた。（中略）三郎助は全身を錦糸や、光る絹や、華やかな色で飾り立てて念入りに身じまいをして立派だったが、大して荘重な姿ではなかった。しかし彼の滑稽な様子のために、吾々は賞讃の心というよりも寧ろ可笑しさを催したのであった。実際彼の様子は異様に飾り立てたトランプのジャックの様子とよく似ていた。」

今日、我々が歌舞伎劇の舞台でしか見ない姿を、その日のアメリカ人が見て、今日の我々よりももっと異様な異国の時代色を感じたわけであろう。

「さて他の船艦からボートを召集するために、サスクェハナ号から合図の汽笛が鳴らされた。その日の祝典のために選抜された士官や水兵や陸戦隊を乗せたボートが三十分以内に全部横付けになった。ランチやカッターの数は十五艘を下らず、実に堂々と整列した。それに乗組んでいる人々は全部然るべき正服を着ていたので、絵のような様子を呈していた。ブカーナン艦長が自分の乗艇に坐を占めて先導をし、従者をつれた浦賀奉行

と副奉行との乗っている日本船がその両舷側を衛っていた。この二人の高官は司会者の役目だったのであって、アメリカ艇隊の案内をしたのであった。残りのボートは順序正しくその後に続き、海軍軍楽隊を乗せたカッターがそれについて行った。この楽隊は愉快な音楽を奏して祝典に活気を添えたのであった。」

長崎の出島のオランダ屋敷にあった西洋楽器やシーボルトのピアノのほかに、初めて、しかも野外で、多人数で演奏された西洋音楽だった。両刀を佩びた当時の日本人聴衆がどう感じて聞いたかを今日想像すると愉快である。

「ボートが海岸まで後半分の所へ達した時、サスクェハナ号から十三発の大砲が発射されて、丘々にこだました。これは提督の出発を報らせるものであって、提督は自分の乗艇に乗組んで、陸を目がけて漕ぎ出したのであった。

日本船に乗っていた案内者達は、湾曲した海岸の中央にあたる上陸点を指さした。そこには砂と藁とを詰めた袋でつくった臨時の埠頭が海岸から突き出していた。間もなく先発のボートがその地点に着いて、一行の指揮をしていたブカーナン艦長が岸に躍り上がった。彼は日本王国に上陸した最初のアメリカ人であった。」

「提督が（陸地に）到着すると幕僚の士官達は上陸地に二列に並び、提督の後ろに整列した。次いで行列をつくって接見所に向って行進し始めた。一行を先導した香山栄左衛門とその通訳とが、そこへ行く道を案内してくれた。陸戦隊が先頭を進み、水兵がそれ

に続き、提督は波打ち際から充分に護衛されて進んで行った。二人の剛力な水兵が合衆国旗と幅広い尖旗とを捧持した。この二人は筋骨逞しいために、特に艦隊の乗組員中から選抜されたのであった。式服を着た二人の少年が提督の先に立って、朱色の布袋に入っている箱を、捧げていた。その中には、提督の信任状と大統領の親翰（しんかん）とが入っていた。この二つの文書は二つ折型の羊皮紙の上に美しく書いたものであって、折らないままに青い絹天鵞絨で結ばれていた。印章は各々金と絹とを交ぜ織りにした紐で結ばれ、直径六吋（インチ）、深さ三吋の円形の箱に納められてあって、その箱には純金の細工がしてあった。各文書は印章と一緒に長さ約一呎（フィート）の薔薇樹の箱に納められ、その箱には全部金の錠と蝶番と金具がついていた。提督の両側について丈の高い立派な体格をした黒人が行進して行った。彼等は公然と武装をしていて、提督を衛るのが役目であった。この日特に選抜されたこの二人の黒人は、艦隊から選ばれ得る最も立派な黒奴であった。かような行列をつくったのも全く印象を深くするために過ぎなかった。

行列が応接所の入口に達するまでは、やや迂廻して行進しなければならなかった。このために護衛兵を日本人に見せつけるよい機会が与えられた。上陸地から間近に在る応接所へは直ぐに到着した。入口の前には小さい真鍮製の大砲が二門あった。それは古いもので、一見してヨーロッパ出来の大砲であることが判った。両側には一隊の日本の護衛兵が、どちらかというとばらばらになったまま群をなしていた。彼らの服装は他の兵士の服装と異っていた。右側の者は陣羽織を着て、幅広い帯で腰の所を合わせ、灰色の

長ズボンを穿き、たっぷりした広いズボンを膝の所で引緊め、頭を白布でまいてターバン（頭巾）のような形にしていた。彼等は小銃で武装し銃の上には銃剣と火打道具がついているのを見た。左側の護衛兵は、黄色い裏のついた、どちらかというと薄黒い褐色の正服を着けて、古風な火縄銃を持っていた。

提督は謁見所の戸口まで護衛されて行って、幕僚を伴って内に入った。その建物が急いで建設されたらしいことは明らかで、松材や床には番号がついて居り、あたかも前以て組合わせてちゃんと用意をしてから全部を現場に持って来て組立てたもののようであった。最初に足を踏み入れたその建物の一部は、絵具を塗ったカンヴァスをもって大部分をつくった一種の天幕で、その上には諸所に皇帝の御紋章がついていた。その広さは約四十呎四方であった。その入口の所にある広間の彼方には内部屋があって、そこへ達するには、毛氈の敷いてある小路を通るのであった。外側にある部屋の床には一面に布を敷きつめていたが、その中央には、赤くて狭長い毛氈が敷かれていて、奥の部屋に通じていることが判った。その奥部屋には一面に赤布が敷かれていて、会見が行われる壮麗な部屋はそこであった。その部屋の床は高座のように、普通の高さよりもやや高くなっていて、祝典を行うために美々しく装飾されていた。この奥部屋の間にある壁には三方に、白い皇帝の御紋章を付けた灰色の絹と立派な木綿とでつくった掛布がかけられてあって、その前方は明け放しになっていて控室と外側の部屋へ通じていた。」

ここに皇帝の紋と書いてあるのは、もとより徳川将軍の葵の紋であって、皇室の紋で

はない。ペリーの親書も宛名を大日本国皇帝陛下と字義どおり訳されたが、幕府に宛てたものだったのである。アメリカ人は、ミカド（天皇）の地位について漠然と知っているだけで、皇帝とは考えなかったのである。

「提督と幕僚とが接待の部屋に上ると、左側に着席していた二人の高官が立上がってお辞儀をした。提督と幕僚とは右側に据えられている安楽椅子へ案内された。通訳が日本高官の名前と称号とを知らせてくれた。それは戸田伊豆守即ち伊豆侯戸田及び井戸石見守即ち石見侯井戸であった。二人共相当の年輩であった。前者は一見五十歳位、後者は約十歳乃至十五歳年長らしかった。戸田侯は石見守より立派な容姿をしていて、前額は大きくて智慧のある様子をして居り、容貌も端正にして愛嬌があり、彼の同僚たる石見侯はもっと皺だらけで貧相であり、もっと智慧のなさそうな顔をしていて、二人は甚だよい対照をなしていた。二人共非常に立派な衣服を着し、その上衣は精巧な金銀の模様をちりばめてある重たげな絹の紋織であった。両侯は初めから銅像のような形をしていて、会見中ずっとその様子を続けていた。二人は決して一言も喋らなかったからである。」

日本側の首席代表は、ひとことも口をきかず、ただペリーが出入りする時だけ席から立って叮重に真面目に礼儀正しくお辞儀をした。

「提督とその幕僚とが席についてから数分間は鳴りを鎮めて、両方とも一言も発しなかった。主席通訳達之助が、最初にこの沈黙を破った。彼は和蘭語通訳のポートマン氏に

向って、手交すべき書簡が用意されているかどうかを訊ねたのであった。戸田侯がそれを受納すべき用意をしているということ、部屋の上座にある朱の箱はそれを受納する櫃として用意されたものであるということを語ってくれた。提督にその旨を報らせると、彼は次の間に控えていた少年を招き寄せた。少年は直ぐに提督の招きに応じて進み出た。大統領の書翰とその他の文書（信任状）とを容れた美しい箱を捧げていた。屈強な二人の黒人が少年の直ぐ後について来て朱塗りの櫃に進み寄り、捧持者から箱を受取ってそれを開け、書翰を取出して文書と印章を見せながら日本櫃の上に置いた――全員粛として声がなかった。大統領の親翰、提督の信任状及び提督から皇帝に宛てた二通の信書が今手交されるのである。」

アメリカ合衆国大統領ミラード・フィルモアの「日本皇帝陛下」に宛てた親書の内容は、次のようなものである。

「偉大にして、よき友よ。余は提督マシュー・シー・ペリーを介してこの公書を陛下に呈す。この者は合衆国海軍に於ける最高地位の一士官にして、今陛下の国土に訪れたる艦隊の司令官なり。

余はペリー提督に命じて、余が陛下と陛下の政府とに対して極めて懇切の情を抱き居ること、及び余が提督を遣わしたる目的は、合衆国と日本とが友交を結び、相互に商業的交通を結ばんことを陛下に提案せんがために外ならずと、陛下に確信せしめんとす。

合衆国の憲法及び諸法律は、他国民の宗教的又は政治的事項に干渉することを悉く禁

ずるものなり。余は、陛下の国土の平安を乱すべきあらゆる行動をなさざるよう、特にペリー提督に諭したり。

アメリカ合衆国は大洋より大洋に跨り、又吾がオレゴン地方及びカリフォルニア州は、陛下の国土と正に相対して横たわる。吾が汽船は、十八日にしてカリフォルニアより日本に達することを得。

吾がカリフォルニアの大州は、毎年黄金約六千万弗を産し、尚銀、水銀、貴金属及び他の多くの価値ある物資を産出す。日本も亦富裕豊饒の国にして、多くの甚だ価値ある物資を産す。陛下の臣民は、多くの技術に巧なり。両国が互いに交易して、日本及び合衆国が共に利益を享けんことは、余の切望するところなり。

貴政府の古き法律によれば、支那と和蘭とにあらざれば外国貿易を許さざることを余等は知れり。されど世界の状勢は変化して、数多の新政府が形成されたれば、時勢に応じて新法を定むことを賢明とするが如し。貴国政府の古き法律が初めて制定されたるは過去のことなり。

それと殆ど時を同じくして屢々新世界と呼ばれ居るアメリカが、ヨーロッパ人によって初めて発見せられ植民されたりき。長らくの間人民の数は少なく、人民は貧しかりき。今やその数は実に無数となり、その通商は甚だ拡大し、又陛下が古き法律を改めて両国間の自由なる貿易を許されなば両国に極めて利益あらんと思惟するものなり。

もし陛下が外国貿易を禁ずる古き法律の廃棄を全く安全なるものと首肯せられざる時

には、実験を試みるために五年又は十年を限るをよしとす。もし所期の如く利益あることが明かとならざりしときは、古き法律に復するを得べし。合衆国は、屢々外国諸国との条約を二、三年に限りて、望に従って更にそれを更新し、或は更新せざることあり。

余はペリー提督に命じて、陛下に他の事を告げしむ。吾が船舶にして毎年カリフォルニアより支那に赴くもの多く、又吾が人民にして、日本沿岸に於て捕鯨に従事するもの甚だ多し。荒天の際には、吾が船舶中の一艘が貴国沿岸に於て難破することも屢々なり。かかる場合には悉く、吾等が他の船舶を送りてその財産及人民を運び去るまでは、吾が不幸なる人民を親切に遇し、その財産を保護せられんことを願い又期待するものなり。」

次に石炭、水、食糧の供給を受けることを許されたい。また合衆国船舶がこの目的のため停船するを得るが如き便利なる一港を貴帝国の南部地方に指定せられんことを熱望する、と、極めて穏やかな要求である。が、これが、見つけ次第一疋残らず切殺してしまえと言う強い主張のある夷人嫌いの国に向けたものだから、素直に理解されるわけがない。そして役人は、形式や体面だけを見て万事を決定するのである。

他の文書はペリー提督の信任状と、提督自身の書簡であった。ペリーはその一通に、今日まで大艦隊で日本を訪ねたものはないが、その実現は時間の問題だと告げている。この書状の署名者は友好的な意図で来たことを明らかにするために艦船を僅か四艘に限った。しかし必要ならば来年春には、遥かに大きい艦隊をひきいて江戸に帰って来る。

我が方の合理的であって平和なる申入れを陛下の政府が直ちに承諾せられて、艦隊を再航させることなどないようにして頂きたいものである、と書き、別の一通には、この度の提案が、重大で且つ各種の肝要な問題をふくみ、関係事項を審議するのに多くの時日を要するものと考えるので、日本政府の右に対する回答は、来年の春、訪問する時に承ることにしたい。全部の事項が穏便に且つ両国民に満足なるように結論されるべきを信じ、また期待するものである、とペリーは書いている。

英語の原文のほかに、漢文訳とオランダ語の訳文を付けて日本側に渡されたが、それだけでなく提督の命令で、オランダ語通訳のポートマンが日本通詞達之助に一々の文書の説明をした。達之助と香山栄左衛門はこれを聞き終って、承知の意味のお辞儀をしてから、栄左衛門が立って、日本側代表の石見守のところへ行き、膝まずいて石見守の手から巻紙を渡され、それを持って部屋を横ぎってペリー提督の前に来て、やはり膝まずいて提督に渡した。

ポートマンが、

「この紙は何か?」

と尋ねた。

皇帝の受領書だと返事があった。オランダ文で書いたものに日本語の原文が付けてあった。二通の間には文章の上で多少、意味の違う点があったが、大意は、国書を受領したこと、これを皇帝に取次ぐ意志を告げてから、元来、外国に関する事務はこの浦賀の

地で処理されず長崎で行われるものなのを再三通知したが、この地に於ける書簡の受領を拒絶すれば、大統領使節の資格を持つ提督が侮辱を感ずることを考え、その尤もなることを認めたために、「日本の法律を曲げ」て上に述べた書簡をこの場所で受取った。なおここは外国人と協商する場所でない故に、協議も饗応も行い得ない。それ故に書簡が受領せられたる上は立去られたい、と書いてある。

二、三分間また沈黙が続いた。帰ってくれ、帰ってくれとばかり言う話のようだから、当然だったろう。その後でペリーが通訳に命じて日本側へ伝えさせた。我々は二、三日中に艦隊をひきいて、琉球及び広東の方面に立去るが、それらの土地へ政府から何か急な通信が送りたければ持って行ってもよい。なお、提督は来春の四月か五月に日本に帰って来るつもりだと言う意味を通じさせた。

日本側の通詞は、提督の退去とまた帰航してくることについて、もう一度仰有って頂きたいと希望して出た。重要な事項と信じ、念を入れたのである。同じ言葉で繰返して話すのを聞きとってから、その時、提督は四艘の艦船全部を率いて帰って来るのか、と質問した。

ペリーは、「全部をひきいて来る。また、これらの船は艦隊のごく小部分に過ぎないから、あるいはもっと多数の船を連れて来るかも知れぬ」と言明した。

この言葉は、すぐに日本側の、石のように黙っていた上使に通訳された。取次ぐ必要ないと取られた言葉は無言のままで置かれた。会見のために大きな建物を新築したり警

備のために繰出した人数の大げさだったのにくらべて、会見は、すぐに、することを失くしてしまった。

やがて栄左衛門と達之助がお辞儀をして立上がり、朱箱の廻りに紐を結び、提督の通訳に向って最早することは何もないと告げ、両側の席にお辞儀をしながら歩いて部屋から出て行った。

提督も退出するために立上がった。その時には、それまで無言の行をしていた日本側でも立上がって、客が席から立って出て行くのを見送った。

ペリーと幕僚は外に出たが、乗艇の来るのを待って、建物の入口にしばらく立止っていた。栄左衛門と通訳とが戻って来てアメリカ側の一人に向って何を待っているのですかと尋ねた。提督のボートだと答えると、もう何も言わなかった。「会見は全体で二十分乃至三十分以上もかからなかった。且つあらゆる点で極めて儀礼正しく行われたのではあったが、極めて形式的に行われたのであった。」

提督のボートが来て艦隊に向って漕ぎ出した時、それまで力の入れどころなく待機していた軍楽隊がアメリカの国歌を吹奏した。配置についていた日本人が、その時好奇心から列をみだして、我れ先に海岸に押出して来た。

この会見の間、アメリカの軍艦は提督の命令で、海上を制圧する位置に停止し、甲板を片付けて戦闘準備の配置に就いていたのである。陸上の日本側が敵対行動に出れば直

ちに艦載砲から全線にわたって砲弾を打込む用意が出来ていた。極めて形式的に国書を受取る手続きを行なっただけだったとしても、日本側が、平和的な態度で終始したことは、アメリカ側でもむしろ意外に思った。

ペリーの使命は成功した。頑固だった日本に、「日本の法律に背いて」まで国書を受領させたのは、これまで絶対にほぐれなかった関係を解いて一歩前進したもので、来春に再び訪れて求めようとする回答に明るい期待を感じることであった。

実は日本側は何でも早く引取って貰おうと努めていたのだが、ペリーの方でも艦隊の飲料水や石炭の準備が心配になっていたので引揚げを急いだのが内情である。日本側の追立てる意志があまり露骨である。用が済んだから、すぐ出帆して行くものと見ているのだ。そうなるとわざと悠々とかまえて、来年来る時のために江戸湾を測量し航路と碇泊地をさがしたいのと、特に艦隊を江戸に接近させて日本側の誇りと自尊心とに不安を与えれば、大統領の国書の扱い方にもよい影響があると考えた。

久里浜から浦賀奉行与力の香山栄左衛門と通詞が便乗したのを、曳航して来た小舟に浦賀沖でおろすと、アメリカ軍艦はそのまま針路を東方に向けて江戸湾に入った。

沿岸の陸上には砲台があったり、まん幕をひきまわして防備の人数が出ていたのが、驚いて外に走り出、丘の上に駆け登って黒船を見た。黒船はボートをおろして付近の水深を測量しながら進んだ。海岸から日本の政府の御用船が漕いで側まで集って来た。直接に妨害しようとはしないが、付近を前進したり後退したりして怠りなく看視している。

その内に浦賀沖でおろした奉行与力と通詞が知らせを受けて早舟で追って来て、サスケハナ号に漕ぎつけ、何故ここに碇泊するのかと咎めた。

アメリカ側では、もとより日本人の意向を排除して、江戸湾深く船を入れる決心なのである。来年の春、来る時のために浦賀よりもっと適当な碇泊地を探すのだと答えただけで、測量を中止しなかった。

翌日には、測量隊は更に前進した。多数のボートで編成されていた。川があるのを見て一部のボートが漕いで上ると、（川崎大師河原）美しく耕された緑の田園から住民が走り出て来て、岸に集った。彼らは夷人を目の前に見て、身振り手真似で歓迎の意味を示して、梨の実や水を運んで来て、ボートのアメリカ人にくれた。アメリカ人の前に出ると、木像のように固く動かぬ顔をして、一語も口をきかなかった武士たちと、この陽気で親切な民衆とでは、大分、様子が違うのである。それと見て、ボートを尾けて来た政府の御用船も側に来てにこにこして友情を示した。煙草を交換して喫ったり、うちとけて明るい賑やかな空気になった。アメリカ人の一人が腰につけていたピストルの説明を求められて、集って来た者に見せ、得意で弾を射って見せて、日本人を悦ばせた。が、そこへ厳しい別の役人が出て来て、手まねで日本人を退散させた。悪戯をしていた子供たちが叱られて逃げるように皆急いで帰って行った。

アメリカの測量隊は神奈川や川崎の人家の聚落を海上から眺め、江戸の市街は建物が低くてまだ見えなかったが、品川あたりを望遠鏡で見た。別の日には、汽船ミシシッピ

号が測量隊のボートを曳いて、江戸に六マイルの距離まで接近し、更に奥まで船を入れるのに、充分の水深があるのを確かめた。

江戸では、万一異国船が内海に乗入れて来て、注進があった場合は、老中から八代洲河岸の火消役に知らせ、同所で普通の火事とまぎれないよう早半鐘を打ち、それに応じて市中各所で鐘をつき、城に駆けつけ、持場に集合するよう命令が出て警戒していた。

現に黒船は江戸深く入って来た。夜半になってから大名屋敷から人数を品川御殿山に繰出す騒ぎもあった。町の者は、早鐘が鳴り出したらどこへでも逃げるのだと覚悟していた。往来の人の顔色も尋常でない。武士たちは皆、火事装束に陣笠をかぶり、鉄砲や槍なぎなたを携えて、ものものしい出立ちである。

太陽暦の七月十七日にアメリカ艦隊が始めて碇泊地から出て行った。風がなかったので汽船サスクェハナ号がサラトガ号を、ミシシッピ号がプリマウス号を曳航して、四艘の船が揃って滑るような快速力で外洋へ出て行くのは、確かにこの国で過去に見たことがない壮観であった。陸上には群衆が集ってこの光景を眺めた。

やっと帰って行ってくれた、と支配層は、真実にほっとしたものである。

二

別に事故なく終ったのは、上からの指令が何事も穏便に、衝突を戒める方針が徹底し

ていたからである。だが、アメリカ側の軍の指揮にサーベルを抜いて号令し振りかざすことなどあるのは、相手を斬る場合にのみ刀に手をかける日本人にはまったく予備知識のないことで、不意に見た時は、色めいた。無邪気にピストルを発射して見せてくれたのも、善意ばかりには取れないのが当然であろう。しかし日本側でも「異人調練の能整候こと、奇妙驚き入り候」と見た。

川越藩から沿岸防備に出ていた組などはアメリカ人が陣地の下の海岸に勝手に上陸し、測量などするのを眼前に見て、打払ってよいかと、早舟を出して浦賀に問合わせると、江戸表から打払いは堅く禁じられている、別段の指図あるまでは手出しはならぬと厳重に命令して来た。川越の藩兵は不平であった。これまでに夷狄になめられておりながら、沙汰のない限り何も出来ぬのなら、陣屋に帰って酒でも飲んで踊でも踊るかとてんでに小屋に帰って、武装を取除いた。強いので知られた彦根藩なども、アメリカ人の勝手な行動を見ていて何もしない。付近の住民や村役人の方がたまらなくなって苦情を入れに来た。何の役にも立たないと言う不満である。「陸を専要に守り候様にとの御下知ゆえ、浦賀にても腫物にさわる様に致し番船一艘も出さず。故に浦賀より品川まで、自在に漕ぎありき、御固四家の人数は岸の上にて見物するのみ。」幕府が弱腰だったのは隠せない。浦賀付の与力の一人は幕府のやり方のもどかしさを訴えている。

「この度の異船、蘭人より通達これあり候儀、昨年暮、奉行へ内々御達しに相成候由、しかしそれもただ来夏は来るかも知れぬくらいの事故、与力どもも一向わきまえ居り申

さざる故、掛合の節、大いに困り候ことこれあり」と言い、また「蘭人を以て申込みこれあり候儀にて、石炭置場土地借用、並びに交易を通ずることを願うということ、兼て御承知の儀にて候ところ、ことごとく秘密にのみ成し置かれ、一向お手当の儀、仰せ出されもこれなく候につき、筒井肥前守殿より、厳重のお手当これなく候ては相成らざる旨、しきりに御申上げ相成り候ところ更に御取上げこれなく、ようよう昨暮に至り四家へ御達しに相成り、浦賀奉行へも同時に御達これあり候ところ、またぞろ奉行秘しおき、与力へは一切通達これなく、さて当二、三月に至り、追々時節にも相成候につき、紀伊守殿より御手当申出のところ、一切御取用いこれなき由、おそれながら当時の御役人は、異船何ほど来るとも、日本之鉄砲にて打放さば、直ちに逃げ帰るべしぐらいの御腹合（はらあい）なるか、慨嘆に堪えず候。」

斉昭の単純無類の進言が一方にある。阿部伊勢守は開国もやむを得ぬと早く知っていながら、やはり周囲から牽制されて果断に方針を決しかねている。オランダから情報を得て、来るものと予期されていて何の対策も立てなかったし、そのことが外に知れるのを怖れて、伏せて秘密にしてあったのである。浦賀の与力の一人樋田多太郎は、ペリーの艦隊を見てから話している。「蘭人兼て申候とおり、上官の名、船数すべて符合す。」すなわち、知らずにいたわけでなく、確実な情報を得ていたのである。

アメリカ艦隊が退去した後、嘉永六年六月二十六日、幕府は米国書簡の訳文を示して、寺社奉行、勘定奉行、海防掛、大小目付等の意見を求めた。

アメリカ船が差出した国書を受取ったが、内海の御備など整わぬ内に返答を求めて来た時は、何と挨拶するか？　またその節、内海深くへ乗入れて来た場合どう処置するか、また他の外国がアメリカ書簡を請取ったと知って浦賀やその他の港へ来ることもあろうが、その場合の挨拶の仕方など、あらかじめ評議しておくべきだと考えるから意見を出すように、と言うのである。これは幕府内部のことで当然の措置と見てよい。

幕府は七月朔日になると、御三家のほか溜間詰の諸藩の藩主に登城を命じ、白書院で老中一同列席の上、首席の阿部伊勢守正弘から、この問題について一同から各々意見書を出すように沙汰した。「意見あらば仮令忌諱に触るるも妨なきを以て余蘊なく陳言すべし。右書簡（アメリカ国書）を浦賀に於て収受したるは一時の権道なるを以て、或は旧例に拘泥することなかれ」と言うのである。これも民主的で、尽すべき方法のように見えるが幕府に権威のあった時代には決して見せなかった態度である。黒船を江戸湾に見て、秘密は、最早守れなかった。それに御用部屋だけでは、如何にも、結論を打出しにくい。この異例の沙汰に踏切った時、幕府は自らの不見識と臆病な性格とを隠し切れなくなっていた。

徳川幕府の建前は、政治上のことについては、朝廷からの発言も容認しないし、大小名のとやこう言うのを一切許さないのが代々の鉄則である。七月朔日、在府の諸大名を集めて、アメリカの国書の和訳を示し、「銘々の存寄り」を尋ねたのは、実は外戦を避

け事を起さないで開国に持って行きたいのを、自分の口から言えないので、他人に言わせようとしたものである。開国は一時の権道でもよく、部分的なものでもよい、当座の難局に道を切開くために、苦慮して前例のない処置に出たものである。

前例がなかったことだし大名たちの返事は急には集らなかった。催促して集ったのを見ると、御用部屋が期待したのとは反対に主戦論と強硬論とが圧倒的である。交易御許容然るべしと答えたのは僅かに中津藩の奥平氏と、美濃郡上の青山氏だけで、その他は、拒絶の主戦論が大半で、あとは、年限なり場所を限って暫く交易を許し、あとで和戦どちらかに決定してはどうか、と言う返答である。

こういう問合せを受けた経験を持たなかったしこれに答えることを知らなかった。二百年来、幕府に対しては仰せごもっともで、一切逆らうことなく来た習慣もある。藩主も藩士も、戦争を嫌ってはならぬ立場にあり、戦争してはならぬと知っていても、それを言出しにくい。衰頽して来ていても武士である。藩の面目を思って、天下の一大事、一戦を辞せぬ、と勇気を示したかったのだろう。御用部屋が欲しがっていた返事ではない。武士や軍人は、こう言う性質の意見しか出さない。

更に、日本全国、諸藩の大部分の重役が外国船を見てなかった。よろいかぶとの戦国時代の戦争しか知らないのだ。幕臣で、明治に入って新聞記者となり歌舞伎の作者となった福地源一郎が書いた「幕府衰亡論」に、当時の武士たちの異国船打払いの兵略の一般を例示してある。「短兵接戦はわが長技なれば小船にて敵船に乗付くべし。」「日本刀

を振るって帆綱をば素麺を切るが如くズタズタに打切るべし。」「敵船の兵士等を西瓜の如くにサクリサクリと切捨つべし。」まことに勇ましいが更に実用的に見えるのは「鉄の鑿を敵船の腹に打込みて孔をあけ、水船たらしむべし。」「塵芥を水上より流して敵船の蒸気の運転を中止せしむべし。」「風上より焼草を積みたる小船に火を掛けて押流して敵船を焚打にすべし。」軍談から出た程度の知識である。

こうした勇気ある無知から出発した積極論は、実際に外国船を見た武士たちが、もう言わないことであった。しかし、せっかくの幕府の諮問も無駄だったし、老中たちを狼狽させた。「閣老およびこの機密に参与したる幕吏は大いに驚き、さありては大変なりとて、これより手段を運らし、大小名に内諭して和親説を出さしめたり。勿論、当時の大小名は、何事にもあれ、幕府の御沙汰と云えばこれを遵奉して背く事なく、かかる場合には、密かに留守居役を以て要路につき、幕閣の内意を伺い、御内意に適うようなる趣意を上申するの例もありければ、閣老、参政、要路の内諭に従い、その旨を奉じて和議を可とするの建言を差出したる諸侯」もあった。この幕閣からの働きかけの事実を、なかったこととする論者もある。いずれにしてもアメリカに対し、開国を拒否せよとする主張が圧倒的である。幕府は輿論に支持を求めたのだが、相手が支配階級の武士だったので、色のついたこの返事しか得られなかった。幕府は反って窮地に立った。幕府が迷惑としている水戸の斉昭が以前から同じ撃攘論を唱えて強硬なのである。

幕府部内、三奉行の意見は、仕方なければアメリカのみに限り年限を定めて通商を許

し、その間に軍備を整えたいと言うのに固まって来たが、大目付、目付、海防掛の職員は、通商を拒絶すべし、開戦を辞せずと言う。幕府の部内で、論議は分れていた。こう意見がばらばらになり、誰も足もとに自信がなくなると、一番強い大きい声で主張している議論を人が聴くようになるものだ。七月三日に幕府は、隠居引籠中だった斉昭に謹慎を解き、隔日に登城するように沙汰が下った。「御一門中の豪傑だが、その代りには随分うるさき御方」と言う定評があったひとだし、対外意見が過激なので知られている人物が、誰が言出したことか、顧問として自ら最高の地位で、国策の決定に参加することになったのである。列藩に対する幕府の諮問は期待を裏切って失敗であった。この無策と動揺を隠すためには、人望のある斉昭をひき出して表面に立てる必要があると見たのか、かなり危険のある飛躍的な人事であった。

黒船が立去ってもまだ世間が落着かぬこの年の六月二十二日に将軍家慶が死んだ。

水戸斉昭が急に登用せられたのは将軍が死後のことを憂いて臨終近くに言出したことだと勝海舟が書いているが、老中の首座、阿部伊勢守にも早くから斉昭をひき出す意向があった。川路聖謨や筒井政憲に再三にわたって駒込の屋敷を訪問させ、斉昭に会って時局に対する意見を尋ね、また両人からも幕府の内情を説明し、アメリカを打払うにも財政が困難で到底急には準備が出来ないこと、ここは五年でも十年でも俗に言う「ぶらかして」置いてその間に国防を固めるよりほかに方法のないことなど、それとなく戦争

など出来ない事実を告げさせた。

伊勢守は手段に窮して老中を罷めたいと言出して、家来たちに諫止されたくらいの危機に立っていた。開国をやむを得ぬと見ているが動きがとれないので、攘夷論の親玉の斉昭を迎えて、毒を以て毒を制すで実情を知らぬ過激論の過熱を鎮めようと計ったのではないか？

反対が幕府内部でも強かった。斉昭の性格から考えて平和が破られるものと心配する者が多い。また一旦幕府から嫌疑あって退隠を命ぜられた人物を起用するのは公儀の規律を破る当を失するものだとして反対したのは、水戸学と対立している官学の学者一人ならずの意見である。

水戸斉昭の人物について、やはり勝海舟の意見がある。表向きで話すことをそのまま老公の意見として聞くと間違う。発言とは反対のことを理解している一面があり、表に押立てる所と、その裏にする所がある。両面を同時に考えないと、真実の意見を掬取れまいと言うのであるが、阿部伊勢守が同席の老中たちが斉昭を忌み憚り反対するのを押切って幕府に迎えようとしたのは、斉昭の過激論の裏に意外に弱い一面が隠れているのを計算に入れて、局面打開のためにこの政治的冒険に乗出したのではないか？

本来なら自分が反対に出るところだったのを、親しく水戸邸へ行って斉昭に会い、なくなった将軍家の遺命であり新しく幼年の将軍を輔翼して外交問題に参与して頂きたいと申入れた。駒込で隠居中のこれまでも、斉昭は煩しくなるほど熱心に意見を書いて

人々に訴えていたのだが、天下晴れて登城して時局に参加出来るのを悦んだ。どれほど仕事をしようと勇み立ったかは、水戸で鋳造させた加納(カノン)砲十六門を幕府に献上し、なお外国の図面を見て設計させて造った軍艦の雛形を利根川から江戸湾に廻送させ上覧に入れることなど約束したことでわかる。斉昭が議論だけしているのではなかった確かな証拠である。

浦賀にアメリカの軍艦が来たのを知ると、斉昭は家臣のほかに、実子の八郎丸に命じて、わざわざ浦賀まで見にやっている。それだけ関心を示して積極的だった大名は、他にあまり多くなかった。水戸の那珂湊には反射炉を作って、大砲を鋳造し、一旦は幕府から禁止されたが、神勢館と名付けて大砲の演習場を水戸の郊外に作り、砲術の実技を習わせ、また銃砲製作所も新設させた。天下の望は、急にこの五十四歳の老人に集ったと言ってもよい。越前の松平慶永も、幕府に対し斉昭を熱心に推薦した一人で斉昭の悦ぶところであった。

だが、これは別の意味では、他に斉昭ほどの器量や抱負があり自信のある人物が、まだ出て居なかったと言うことなのだ。小普請入りして役のなかった勝麟太郎などは、幕府の諮問に対して、先ず軍備を整え、こちらから出て行って外国と通商し、先方がこちらに来ないようにしては如何か？　と、至極皮肉で大胆な、しかも後日考えても立派に筋が通った意見を呈出したが、無論、問題になるわけがない。学者の古賀謹一郎も、アメリカが再度来るのに先んじて、我より使を派遣して暫く回答の延期を求め、その間に

軍備を整え、大船を出して諸国と交易し国の利益を興すようにするのがおためであると主張した。地位があり、いろいろと責任を負わされている人々からは、こうしたサッパリとした意見は絶対に出ない。万事、重々しいのである。

その重々しさ、動きのとれぬ性質は、斉昭にもあった。同じように不自由なのである。御三家、天下の副将軍の地位が、実は行動する力を奪う。熱意をこめた言動も、隠居の身分の間でこそ通用する。斉昭が派手に攘夷論を唱えて攘夷主義の塊と見られ、強い感銘を与えて来たのが、その信条を実行し難い立場に送り込まれたのだ。登城するようになるなり斉昭は海防愚存と題して十条五事の意見書を閣老に示した。意見が変るわけがない。あくまで夷狄撃攘論であるが、外国の長を採り軍艦を買入れ、国内でも大名に大艦を作るのを許すことなど具体的な政策を勧めている。主戦論で激しいが、戦闘は大分、遠い先のことになる。坐ったまま、高い棚の上に在るものをおろそうとする。

三

ペリー提督の艦隊は、浦賀に来る前に琉球に寄り、この列島が欧米と日本、シナとの間を航行する船舶にとって、極めて重要な位置に在るのを知った。文化年間以来、各国の船がここに寄航し、その重要さに気がついていた。ペリーは、やがてイギリスがこの島に進出して来ることを予期した。

イギリスは、地中海から極東の海まで、マルタ島、ケープタウン、ボンベイ、カルカッタ、マラッカ、シンガポール、香港、上海と足だまりを作って、飛石づたいに進路を確実にした。ロンドンから地球の半分を蔽う道筋である。

ペリーが属するアメリカは、立遅れたが、太平洋を渡って、イギリスとは反対の側からアジアに手がとどくようになった。イギリスが精確に道を固めて来たように、アメリカもアジアに港が欲しく、必要ならばどこかに根拠地を造りたい。イギリスとアメリカと、勢力を伸ばして地球を東西から捲く形となった。勃興して来た産業資本が、原料を供給する植民地と、商品を売る海外市場を世界に求めるようになっていたのである。イギリスは、本国が小さく、資源もすくないから海外にむさぼる性質が烈しい。アメリカは国土がひろく、国内を開拓中なので、まだイギリスほど海外進出に性急でなく、競争に立遅れたが、また、やたらに勢力を張ろうと貪慾にもなっていなかった。ただ、アジアには北の方からロシア帝国が南下する危険な気配を見せている。イギリスはシナという豊かな大国に手をかけたばかりのところで、その方の経略に追われて足踏みし、まだ日本にまで勢力が伸びてない。この隙間にペリーは入って来た。日本に来る前に琉球に寄ると、ペリーは政府に迫って、乗員の滞在のため家屋を提供させ薪水糧食を提供させるようにした。農機具や野菜の種子まで持って来てあって、住民に与え、種子を蒔かせるほど用意がよかった。

ペリーは琉球の次に、更に、手頃な島を探して小笠原列島の父島の二見湾に入り、島

に住んでいたアメリカの漂流民から海岸の地所を買って、将来、事務所、桟橋、貯炭所を建てる下準備をしてから、人を遣って弟島を踏査させ、近海を測量して、琉球とも結んで考え、アメリカの飛石の一つとした。それだけのことをしてから、彼の艦隊は浦賀沖に黒い姿を現わした。その帰路には、再び琉球の那覇港に寄り、政庁に迫って、同港を艦隊の集散地として石炭貯蔵所を作り、一部の軍隊を置くことにして始めて出て行った。

ペリーの艦隊が日本から立去ってから間もなく、入れ替るようにしてロシアの東洋艦隊がやはり四隻の軍艦で長崎に入って来た。司令長官はプチャーチンであって、七月十八日入港し、長崎奉行に対し、通商の事につき国書を持って来たと通告して来た。ペリーの国書を受取った直後であったし、幕府も今度は長崎奉行に命じて素直にこれを受領させ、その代りに、すぐ退去させようとした。将軍が薨去し、後継ぎが立ったばかりのところで御用多端だから返事は直ちに出来ないと相変らずの逃げ口上だったが、プチャーチンは自分が江戸に行って商議に入りたいと申入れて、返事を催促して、長崎の港から動かず、いつ帰るとも見えず、間違えばアメリカ艦隊と同様に浦賀に押寄せそうなので幕府はまたもや難渋した。ロシアの国書は総理大臣ネッセルローデの署名したもので、両国間の国境を定め、通商貿易を起し親交を結ぼうと言うのである。アメリカの国書以上に、内容は重大な事項に触れていた。幕府の当局が直ちに答えられる性質のものでない。

幕府は例に依って、無難な返書を作り、西丸留守居筒井政憲と勘定奉行の川路聖謨などを応接掛として、長崎に赴きプチャーチンに会うように命じた。プチャーチンの側からは江戸から重臣が来るのを待ってられないから一度帰るが、再度訪問して来る場合、我が国書に返事が得られぬようならば、江戸に行って会談する覚悟であると言置いて、出港して行った。これが十月二十三日のことで、十二月五日になると、また長崎に戻って来て回答を要求した。

筒井と川路は最初使命を受けたまま旅を続けて、長崎に出た。両人とも、思慮もあり優秀な頭脳で、開国の必要を早くも感じている人々である。特に当時の日本が戦争など出来ないし、してはならぬと知っている。閣老阿部伊勢守も両人のその点を見込んで、任命したわけだが、随員の中には儒学者の古賀謹一郎のように開明の人物も加わっている。水戸の老公の意志を受けて原任蔵などが川路の供の中に加わり、交渉を監視する役にまわっていた。任蔵は水戸藩士で藤田東湖が推薦したものである。幕府の諮問に対する諸藩の返事が、ほとんど開国拒否と大勢を制して、無理解で表面は強がっている時期なのである。

ペリー提督が江戸湾深く押入って来たのにくらべて、ロシアの艦隊は最初から日本側の規律に従って、長崎に来て交渉に入った。江戸に遠いせいで、幕府も黒船を眼の前に見た時のような驚きはない。わざと、返事を遅らせれば、ロシア人が待ちくたびれて帰

って行くものと考えたわけでもなかろうが、ゆっくりしたものであった。待遇も友交的で穏やかだった。牛の屠殺を禁じてあったので牛肉はなかったが、生きた豚や鶏卵、野菜の類は供給された。「手紙をとどけるだけのことに、どうして四隻もの船で来たのですか」と、日本の役人が無邪気に素朴に質問したと記録されている。その代り、いくら催促しても、ただ今、江戸へ問合せ中だと言う返事であった。長崎奉行は、すくなくとも艦隊を江戸にやるまいとして精一杯の努力をする気の毒な立場に居た。

ゴンチャロフは書いている。

「日本人は立派な内政上の制度を作っている。即ち老中は将軍なしでは何も出来ず、将軍は老中なしには何も出来ず、この両者は一緒になっても諸侯がなくては何も出来ない。こうして彼等の制度は、アメリカ人か、我々かが顚覆することが出来ない間は、その人為的基底の上に存続するであろう。

だが彼等はわれとわが眼を頭巾でぴったりふさいでいたので、今でも頭巾のかげから世界を見ようと思うことさえ恐れている。我々が突然日本海岸に現れたために、彼等はどれほど驚かされたことだろう。四隻の大艦船、巨大な大砲、多数の兵員、未曾有の強硬な提議、独自の行動、これは一体どういうことだろう。

番船を今少しこちら（ロシア）の艦船から遠ざけよと要求した時、奉行の許可を得ずに、突然一隻をシナに、今一隻をシベリアに我々が送った時、彼等の慌て方はどうだ、その奉行は許可を得ずには一隻の船も日本の領海には泛ばしめず、ヨーロッパ人のボー

トでさえ、湾内の航行をさせない習慣になっていたのだ。だが、こんどはこちらの欲するところと欲せざるところを冷然と云ってやるのだ。彼等（日本人）は反抗しようと思う。時には昔の調子で要求することもあるが、その眼は納得して下さい、これ以上の酷い目に会わせて下さるなと拝んでいるのだ。我々の罪は一切彼等の罪となるのだ。明日我々の船が出港するということを知るや、彼等は奉行のところに駆けつけて、大慌てで許可証を持参する。私たちは哄笑する。海上に艦船を認めたら砲台から発砲するぞ、と彼等は宣言した。そしてこの宣言で発砲まで出来る大砲を持っているぞとほのめかした。我々は笑いながら、撃って見ろと答える。碇泊所内を遠いところまで漕いで歩かないように頼んで来る。すると我々は何も答えないで漕いで行く。それでも奉行は鼻をそびやかして、訊問したり主張したりしようとするが忽ち降参して譲歩するのである。」

湾をかこんだ沿岸には、急いで出兵した大名の陣屋が船から見えた。紋所を染めた幕が張ってある。海の微風で、幕が動くと大砲が頭を出した。「一個所のは砲架の壊れたのが三門、他の方は全然砲架のないのが一門」、ロシア側では、あの砲台には木製の大砲があると睨んでいた。望遠鏡があるから、何もかも隠さずに見えた。

「九月の五、六、七日には毎日御検使がやって来て、我々の訪問の儀式について打合せを行なった。こんな時諸君はヨーロッパでなら、行くか行かぬかということを交渉されるだろうが、ここでは我々は座るか座らぬか、立つか立たぬかの問題を、それから何の

上にどんな風に腰をおろすかというような問題も、幾日も幾日も議論したのである。日本人達は日本流に畳の上に足を曲げて座ることを提議した。両膝を折って、それから踵の上に尻をおろす——これが日本式の座り方である。やって見たら、どんなに具合がよいかすぐ判る。とても五分ともてるものではない。ところが日本人は何時間でもそうして座っているのだ。私達はそんな風には座れないが、奉行さんは我々の流儀で安楽椅子におかけになっては如何です、と言ってやった。だが日本人も我国流に腰をかけることが出来ないのだ。こんなやさしいことはないのに、慣れないために足が痺れるのである、『鶴と狐』の御馳走の話を思い出していただきたい。あれと全く同じことだ。」

ロシア人はアメリカ人と違って大気で辛抱強かった。公式の場合以外に上陸出来ず、夏から秋にかけ三カ月あまりを、船の上でたいくつしながら幕府の返事を待っていたのである。ゴンチャロフは、毎日日没後の空に彗星が現れたことを記している。この彗星は京都でも見え、悪いことの前兆として、人の心配の種になっていた。

彗星が現れたのに続いて、京都ではこの夏から秋にかけ、珍しい旱が続いて洛中洛外の井戸が水が涸れ、底の泥を見せた。祐宮を預かっている権大納言忠能の屋敷の井戸も用をしなくなり、新たに井戸を掘ったのが、この時のことである。

皇子の傅育に支障が生じるのを心配して、忠能が例に依って陰陽助幸徳井保源に勘文を求めると、秋の間は元からある井戸に手をつけてはいけない、新しい井戸を掘るなら

よいと、答えて来た。そこで白川村の石工三郎兵衛に命じて玄関の北寄りに地を選んで新しい井戸を掘らせた。工を終えたのが八月二十四日のことである。三丈余掘ったところで、きれいな水が湧いて来て、八尺ほど深く溜ったので、奇蹟のように思われた。二十五日に清祓(おはらい)をして、この井戸の水を皇子の御用にあてるとともに、近所にも分けてやって人々を悦ばしめた。この井戸の話を父の帝のお耳に入れると、皇子の名にちなんで、祐の井とするようにとお言葉があった。これが現在、残っている井戸である。

祐宮は、まだ誕生日を迎えていない。禁裏に近い中世の時間と、菓子と人形とに囲まれている。外の世界では、天下を騒がせたアメリカ艦隊が来年の春来ると称して立去り、代ってロシアの艦隊が長崎に入って来て、辛抱強く座り込んで、幕府を困らせているので物情騒然たる最中である。七月十七日には、福岡藩主黒田斉溥(なりひろ)から、幕府が今も固持している大艦製造の禁を解くように建言したし、八月二十九日には鹿児島藩主島津斉彬が、幕府に上申して軍艦兵器を和蘭から購入するように願い出た。何もかも手遅れになっていたので、にわかに急いだ。その時までまだ大艦の建造を厳禁したままだったのは、列藩がそれを持つのを幕府が嫌ったせいであった。ひんぴんと外国船が来るのを見て、外に対する防備の必要を初めて気がついたもののようである。蘭学の先覚、高野長英や渡辺崋山が早く唱えて、そのために一命を縮めたことが、遅れて幕府で採用することになった。

老中首席の阿部伊勢守正弘は、それを痛感する立場にある。水戸藩士の鰹重(すずき)時が蘭書

を読み造船にも通じているのを知って幕府のために大船を造らせていたが、九月十五日になって初めて、寛永以来二百二十有余年で禁令を解いた。十月に入ってから幕府は、軍艦蒸気船数艘を買入れるようにオランダに依頼した。その間に斉昭は洋式の船を造り、水戸藩主徳川慶篤からも一船を幕府に献上した。（幕府が船舶の徽号の制を定め、白地の日章旗を用いることにしたのが、次の年、安政元年の七月になってからである。）民間では、洋式砲術や調練の先覚で、迫害されて来た高島秋帆が初めて許されて幕臣の江川太郎左衛門に協力するのを許されたが、彼の意見はこの時は開国論になっていた。極めて普通の成行きなのだが、当時の世間から抜きんでた見識である。民間人の方が、相変らず囚われぬ意見を提出したのは注目を要する。

江戸の肖像画家の春木南華は、外国船撃攘など行われ難い、諸外国の開国の申入れに対し、こちらは人を選んで遊学生として外国に派遣し、事情をよく研究させ、数年後にこれが帰朝して来てから返事をするように話したら、先方も承諾してくれまいか、と言うのである。仙台藩の漢学者磐渓大槻平次は、父親磐水が蘭学を習っていた影響もあろうが、開明的な自由な立場から大胆な建議をした。ロシアに国交を許すがよい。その上で工業をさかんにし、軍艦兵器製造の業を起し、大船建造の禁を解き、すべて寛永鎖国以前に戻して、天下の耳目を新しくする必要があると言うのである。しかし、こうした民間の意見は、どんなに優れていても、政治を現実に支配している地位のある人々には、いつも不謹慎なものに見えるのが常である。

九月二十二日は祐宮の初めての誕生日である。金百疋と鮮鯛一折を内侍所に、金百疋を上御霊社に献じ、天皇に小戴（白餅の上に餡を載せたもの）一蓋、鮮鯛一折、銚子一枝を奉った。内親王、准后、新待賢門院以下、典侍女房、また中山権大納言の家人に祝いの品物を賜った。天皇からもお祝いを賜った。その他の方たちからもそろって贈り物がとどく。清酒や鯛は別として、人形や玩具が贈られて来るのは似つかわしい。中山邸では、典侍、大御乳人以下の女房、御世話卿、御用掛、医官などを集めて祝宴を催した。十月十六日は宮中で玄猪の儀が行われる。玄の日の朝、常御所で黒赤白の餅（玄猪と言う）を天皇に進めるので、別に野瀬の里からとどいた菊と忍草とを併せて天皇が息を吹かけ、紙につつんで女房たちに賜る。夜になると野瀬から取寄せた野瀬餅と玄猪で、酒を進め、五、六寸の臼に白強飯を盛り灰塩を加えて杵を添えた「つくつく」と言うのを天皇が亥の方角に向かれて杵を取って搗く。古くから守られている行事だが、この玄猪が祐宮のところにとどけられる。

意味がわからなくなっていることでも、習慣と形だけは残って守られる。これが御所の生活であった。中世の時間が動かず淀んでいるのである。玄猪の餅はこれを食する者は無病息災だと伝えられていた。いつ頃から起ったのか不明である。

その少し前、九月の末から祐宮は風邪気味で、二十八日は朝から加減が悪く、胸がつかえ、夜半まで度々、乳を吐いた。御世話卿や御用掛も心配して医師も昼夜詰めて看病

した。胸部の熱が退かないので、鍼博士藤木篤平が七日間も続けて按腹を奉仕した。三宅八幡宮に平癒祈願の使者を立て、上下御霊社で祈禱し、典侍中山績子、掌侍梅園兄子、中山綱子は、北野神社や船岡山稲荷社に祈願した。一度快方に向ったが、十月十一日になり、再び悪くなり、十五日には吐乳痙攣数回に及んだので、御所中で憂慮の色を深くした。准后から五十人口の夜食を、新待賢門院からは交肴（まぜざかな）をとどけ、和宮からも見舞の手紙をとどけて来た。御生母の典侍、大御乳人は夜中、付添っていた。十六日にも良くならず、覚勝院法務前大僧正亮恕が召出されて参殿し加持を修した。病床に侍した中山権大納言夫人が、

　此君のいまはと見ゆるかなしさを
　かみもほとけもいかに見るらむ

と、歌を詠じたくらいだし、御生母の典侍はこの夜、心痛のあまり卒倒して人事を覚えなかった。亮恕のほかに護浄院僧都湛海が命ぜられて祈禱をした。

皇子の熱がさがったのは、十七日になってからであった。この晩から亮恕が更に七日の不動法を修し、湛海は大般若経を転読した。その他、陰陽頭土御門晴雄が命ぜられて祈禱し、神祇伯白川資訓が悪気を払うために鳴弦を行なった。その頃から日を逐って回復して来て典侍もまた快くなり、二十八日には遊戯をしてお笑いになるようになった。ほとんど一カ月にわたる御病気である。

十一月に入っても、まだ完全に癒ったとは言えない。御世話卿の東坊城聡長が中山忠

能と相談し、妙法院脇門跡権僧正金剛院教全に加持勤行を天台宗に頼みたいと申入れた。教全は北野に参籠中だったが、事の容易ならぬのを見て固辞し、然らば山門の僧侶中適当の行者を推薦して欲しいと言われると、比叡山西塔常楽院願海が先日、千日の峯めぐりの行を終えたばかりなので、彼がよかろうと言って薦めた。ところが願海もまた再三辞退したが、遂に命にしたがい是の日から十五日に至るまで、妙法院に於て歓喜天浴油供ならびに仏頂尊勝秘法を修し、日夜丹誠を尽して、御平癒を祈願した。その間、諸寺院から祈禱の護符を献上するものが算え切れないくらいで、十八日には教全、願海両名を呼び皇子の前で加持を行わしめた。

十月十五日以来、御所をさがって看護につとめた典侍中山慶子が宮中に還ったのは十一月も二十三日になってからで、皇子の御悩が軽くなったのは、十二月の声を聞いてからである。陰陽頭土御門晴雄に勘文を立てさせ、二日に髪置の儀式を行なった。天皇から白練絹の服ひとかさねと、白髪綿、鮮魚一折、人形一個を祝ってとどけて来る。巳の刻に皇子は拝戴の衣を襲ね、白髪綿をかぶって頭から後ろに垂らし、宮中から送って来た帖、茵に坐らせられる。権大納言中山忠能がその後ろに侍坐して扶持し、御生母中山慶子が濃色の張着、緋の袴で陪膳を、大御乳人の押小路甫子が手長を、女嬬阿茶が役送をつとめ、昆布、鮑と土器の盃を載せた三方を御前に、その左右にそれぞれ白餅三十個を納めた折櫃六合を供え、二献の後、陪膳残盃を受けて三方をひく。次に盃を三方に載せ、法螺貝餅、雑煮等を供し、また三献あり、次に陪膳と手長等に盃を賜って儀式を終

るのである。宮中から来ている女房たちに祝酒が出るし、各方面からお祝の品々がとどく。忠能と忠愛の父子は参内して天皇に報告申上げると、天皇からは小戴（餅）と金子とを忠能とその家族に賜った。

髪置の儀式を行なった後は、頭髪や眉毛を剃らずに蓄え、新たに額に丸眉（眉黛）を点ずる例である。しかし皇子が病後なので、頭髪をお剃りになった方がよいと医者から進言した。どう言う医学的根拠があったのか、今日では理解しにくい。そこで天皇に伺って、八日には前髪を剃り、二日おいて十日は後髪を剃った。これより先、十二月四日に腰湯を使われたが、異状は起らなかった。おさない方が前後八十日にわたる御病気であったが、これで全く本復されたのである。

まだ幼い祐宮をかこんでいる人々や風習を見ると、僧正たちのものものしい祈禱だの加持だの、源氏物語や栄華物語に出て来る話とそう遠くないように思われて来る。禁じられた囲いの中は、そこだけ無風帯のように静かな時が流れているようだが、やはり外に起った事件の物音が押入って来ていた。

幕府の方針は、政治の全部を江戸で握り、朝廷からでも干渉を認めないことで貫いて来た。しかし孝明天皇御践祚の弘化三年八月二十九日に、幕府に対して御沙汰書が下された例がある。異国船が時々見えるようになったが、文道よくおさまり武事もまったく整っている今日、殊に海辺防禦堅固の旨、聞こし召されて御安慮になっておられるが、

武門の面々が洋蛮の小寇を侮らず大賊をおそれず、方針を定め神州の瑕瑾なきよう指図して宸襟を安んぜられるように、と言う内容である。孝明天皇はその時、十六歳であった。この御沙汰書の発意が側近のどこから出たかは計り難い。幕府に対して、この類の御沙汰があったことが初めてのことなのである。国の危機を感じられて出したものだろうが、その後、外国関係のことは叡聞に達するようにしたのが、重大な意義を持つ。この時、差支えなき事柄の近況を、あらまし知らせて貰えれば御安慮願えるだろうから、と武家伝奏から京都所司代に話があり所司代からこれを江戸に通じた。

御沙汰書の下った最初は、戒告の意味でもなく、未曾有の事件として、通常の見舞の意向に依ったものと思われる。それ故、二世紀間に渡って干渉を排斥して来た幕府がおとなしく受け、その後も外事問題については叡聞に達する慣例をひらいたものと見える。

しかし、かたく密閉してあった袋に小さい孔があいた。風が外に逃げるようになった。アメリカ艦隊、ロシア艦隊の渡来と重なって、外力の圧迫が加わるにつれ、空気の流失は制し得ぬこととなった。禁裏の中にも外の風は強く吹込んで来た。年々の古い行事や百人一首の歌加留多を書いたり茶筅を削るのに専念して無風帯に住んでいた公卿たちは俄かに、新しい時局について意見を問われることになった。古い昔ばかりを振向いていられなくなった。

浦賀に黒船が出現すると、幕府は京都所司代から書面で武家伝奏にアメリカ船渡来の旨を届け出た。事務的な通達であるが、「御国体に拘り候儀これ有るまじくとも申しが

たく候間」と危機感を伝えた。防禦筋の儀、格別厳重にすると誓い、なお天皇の思召次第で、御祈禱を仰せくだされるか、と所司代の心得として、申入れている。これに対して朝廷からは「万一御国体に拘り候儀これあり候ては、まことに不安に思召され候間、叡慮を以て七社七箇寺へ御祈禱仰せ出され候」と武家伝奏から通達した。「国体」の文字を幕府も充分に認めているのだ。

その間に、浦賀に来ていたアメリカ船が退去したので、京都所司代からこれを武家伝奏に通知したが、それに添えて、天皇の思召で仰せ出された異国船調伏の儀は、「御先蹤もこれあることに候えば、退帆の有無にかかわらず神国の光輝いよいよ相顕れ候よう」お続け願いたく、江戸の老中から御両卿（武家伝奏）へお話申せと言付かったと書いてある。もちろん元寇のあった弘安の神風のことを考えたもので、それだけ幕府が防備の不足を痛感し、自信を失くしていたのである。大名行列まで京都を避けて通るようにして朝廷の孤立と、密封を計ってきた幕府が神国の御光輝に自分の方から頼って出る姿勢に出たのだから過去に例のなかったことである。朝廷は伊勢両宮、石清水、賀茂上下両社、春日、平野、松尾、稲荷の七社、天竜寺、東大寺、興福寺、延暦寺、東福寺、東寺、広隆寺の七寺に命じ、七日間、四海静謐、天下泰平、宝祚長久、万民娯楽を祈禱せしめた。

幕府は、諸大名にアメリカの国書の訳文を見せて、これにどう回答するか意見を求めたが、朝廷にもこの内容を奏上せしめた。殿上で、これが議論せられた。年中行事の順

序を相談するのと違って異例の問題である。

公卿に共通した後ろ向きの性格教養から見ても、夷狄に対し好悪は明瞭で最初から交易などとは不埒至極な許せることでない。禁園の住人として一般に当然の傾きであった。この際に、関白鷹司政通一人が、アメリカ大統領の書簡を見るに、平正で別に疑うところはないと思う。なるほど我が国は近世に入って他国との交通を禁じておるが、古代中世を通じ諸蕃と往来し、鎖国後と雖も、清国ならびにオランダとは交易しているのだから、アメリカの希望を許したところで、二国に許したのを三国に許すだけのことで別に不都合はないと発言して関係した殿上人を愕然とさせた。そんな意見が関白から出ようとは思わなかったことである。

鷹司政通は、氏の長者で関白となり弘化年間に天皇不予の間は准摂政だったこともあって、三十九年間も枢機に参じ、朝廷の信望を集めていた。夫人は水戸の斉昭の姉で水戸と交信も深い。攘夷主義の斉昭の熱気ある意見もこのひとの耳に直接に入る都合だが、他の公卿と違って、ひとり大胆に開明的な自説を述べた。斉昭などの過激論を、逆に危険と見ていたのが下敷きになって、反対の見解となったのかと思われる。

議奏、伝奏を呼んでアメリカの国書について評定をしたのは、七月二十一日のことである。政通は開国の意見を変えなかった。ただ交易の場所を長崎に限って許すがよいと言った。異国船一件の処置は関東で評議を厚く尽して決定すべきことだが、朝廷に於て

も伝奏議奏両役が評議して所見を一定しておきたい。政通はこう提議した。関東より万一その措置を上奏し宸裁を請うがごとき場合に狼狽するようなことがあってはならぬ。自分はアメリカの申入れを読んで見て、慇懃にして誠信あり、一概にその要求を拒絶すべきものでないと思った。新たに通信通商を開くも決して国体を欠損するものではない。目下武門の輩も太平の風習に浸染し因循姑息に流れ、おそらくは合衆国の軍船を撃攘するの勇気なからん。軍備廃弛の今日に於て無謀の戦端を開き一敗恥辱を取らんよりは寧ろ通信通商の約を結びて国家の利益を図るに如かず。偏見のない平明率直な意見で、関白のような地位に在って、どこまでも囚われぬ自由な判断をよく下せたものと思われるが、禁裏の淀んだ空気を呼吸している一般の殿上人には、大胆で危険な言葉に聞えた。攘夷と言うのは、公卿殿上人を雷撃のように襲った感情である。

それまでは実に何も知らなかったのだ。外国人が来たと教えられると急に反撥する感情が湧き動いた。脅威と感じたのである。正体はすぐとは説明つかないが、やはり古学の思想なり、思想とまで昇華しなくとも宮廷生活の中に浸潤していた禁忌の遺伝が反応したものと見える。理由や動機は、後から探し出されて、主張に参加する。新しいことが起ってはならぬのだ。古代に良い時代があって、世が下るほど衰微の道を辿って来た人々だが、それでも生れながらに身分と特権を獲得出来る地位である。衣服、冠、履物まで、外の今日の世界とは違う様式を平気で今も守る禁園内の住人で、古い昔は自分たちによかったと、確信しているのだ。生れて来るだけで身分的特権を持つのだから、他

人を下に見る華夷の思想が、基礎にあったのは当然である。神道から言っても、夷狄は穢れたものであった。

「こちらの学風を古学と云い、学ぶ道を古道と申す故は、古儒仏の道、未だ御国へ渡り来らざる以前の、純粋なる古のこころと、古の言とを以て、天地の初めよりの事実をすなおに説き考え、その事実の上に、真の道の具ってあることを明らむる学問である故に、古道学と申すのでござる。」平田篤胤が「古道大意」にかく述べ、そこから日本が世界の中心であること、神国であること、皇室が神の子孫であることを理論として発展させた。

篤胤の生前の門人が五百五十三人で、死後に入門の者一千二百三十人と言われるが、彼の学問が直接に京都にひろがって、固定した教養ある公家の間に影響を及ぼすのには、学問としてはやや粗末だったとしても、公卿殿上人は心情の上では篤胤と同じように確信していた。篤胤が露人の北方進寇を知って書いた「千島の白波」には、夷狄は仁義も礼も知らぬ野獣の如きものであるから、畏くも神州の地に上陸を許してはならぬと説いた。水戸は山陵の回復を熱心に計ったことで水戸の学問は禁裏にも同調者を持って大日本史は献上されていた筈である。これも篤胤の夢や願望に近い。歴史が生んだ公卿廷臣と言う特殊の存在に、火を移して燃焼を見るものがあったとしたら、この方面の復古的で名分を重しとする主張が一番近い。

関白政通が、開国を許した方がよいと言った時、公卿たちは黙り込んで答える者がな

かったと言う。ひどく意外なことに聞えたのだろう、新しい思想が入る余地が彼らにはなかった。地位だけはあるが、発展する思想はない。刺激に反射することがあっても行動に出ることはない。公卿たちが行動に参加するのは、あと数カ年の動揺を待ち、外部から誘われて神輿のように担ぎ出される時が来てからのことで、受動的な性格のものである。

四

長崎に二度にわたって交渉に来たロシアの艦隊、プチャーチンとの談合には日本側はどうやら成功した。この場合、成功したとは、「ぶらかして」解決を少しでも先に延ばすことであった。出来ないと知っていても開戦を辞せずと、一般の空気が幕府の部内まで強硬なのだから、局に当る者は彼我の板ばさみとなって、それだけでも苦労なのである。

幕府がロシア人との応接に長崎に送ったのは、西丸留守居の筒井政憲と、勘定奉行川路聖謨であったが、筒井は七十七歳、川路は五十三歳で、老練の者である。特に川路聖謨は渡辺崋山や高野長英などとも交った過去があり、急進的ではないが、円満な智慧と手腕のある能吏で、財政的に戦争が不可能なこともよく知っていた。幕府は通商の要求は、将軍が代替りした時でもあり、これだけ重大な事項は、京都にも上奏し、また諸侯

の意見を聴いてから決定する運びとなるので、しばらく待って欲しい。また日露の国境については、急には画定できないが、樺太では北緯五十度の線を両国の境界とし、千島列島はウルップ島までを我が領土と定めるように両名とも力を尽せという訓令を与えて長崎に遣った。

これだけの談判を、衝突を避けながら推進するのである。阿部伊勢守は、信頼する両人にもこの条件は重荷だと気がついたのだろう。談判の形勢に依っては臨機の処置も苦しからずと、やや権限を広く認めた。周囲の条件から反ってこれは両人の責任を重くした。幕府の首脳に鷹司関白だけの見とおしと決断があれば即決できたのだが、それは望み得ぬ状態で、役目柄、至難の任務に向うことになった。

例によって煮えきらぬ幕府の回答書を受けてから、ロシア側は早くも準備してあった条約草案を日本側に提出して江戸に送るように要求した。国交を開き、大坂箱館の二港をひらき、ロシア人の貿易、居住、奉教を許すこと、領事をおきロシア人の犯罪を罰するのはロシアの法律に依ること、最恵国条款を許すことなどを規定してある。国境については日本国の北方領域はエトロフ島と、樺太島南端のアニワ港に限り、エトロフの北方の千島群島とアニワ以北は全部ロシア領とする、というきびしい要求である。

全権の背景となっている沿岸警備の諸大名は殺気をつつみ切れぬ。ロシアが暴力を以て談判を決定し国境画定を強いるものと言われていた故もある。決死の壮士を選んでおいたからそれを連れて行けとか、敵船焼討の目的で火薬を装置した船を準備出来ている

とか、親切だが物騒な申入れが両使に向って行われる。我々が死ぬのは何でもありません。それより幕府に大国の敵を作ってはならんです。行違いが起ったら私が敵艦にとどまってロシアまで行き、あちらの皇帝によく説明することにしますから、お構いくださるな、と川路から話した。それでもなお、ロシア側が祝砲を一発打出しても直ちに打払うよう命令を出してあると言う熱の上げ方である。

川路は部下をロシアの旗艦にやって、礼砲を一切撃たぬように頼んだ。

「全権方が礼砲を好まないと言われるなら、仕方ないから、よしましょう」とボシエット君が答えた。

「好まれません、好まれません」と、彼らは確証した。

「だが、若し他の提督が当地へ来るようなことがあったら」と栄之助（使者）は気遣わし気に訊ねた。「礼砲を発射致されるか。」

「こちらでは他の提督が来るという予想はありません。だから礼砲を撃つ必要があろうと思って居りません。」

火薬庫の上に座って談判するように危険な立場だった。しかし、日本側では全権の人選を誤らなかった。ロシア側のゴンチャロフが描写したその時の川路左衛門尉聖謨は日本を代表する人物として目に見えるようにいきいきと書いてある。

「この川路を私達は皆好いていた。筒井老人とは別で、意味も違うが、老人以上でなくとも少なくとも同程度に好きであった。川路は非常に聡明であった。彼は私たち自身を反駁する巧妙な論法をもって、その知力を示すのであったが、それだけでもこの人を尊敬しない訳には行かなかった。その一語一語が、眼差の一つ一つが、そして身振りまでが、すべて常識と、ウイットと、炯敏と、練達を示していた。明知はどこへ行っても同じである。民族、服装、言語、宗教が違い、人生観までも違っていても、聡明な人々の間には共通の特徴がある。馬鹿には馬鹿の共通点があるのと同じである。」

烟霧のように彼をつつんで背後を埋めているのが開戦と攘夷の過熱した空気だと言うことさえ、川路聖謨はストイックに抑えて外人たちに感じさせない。

「私（ゴンチャロフ）の気に入ったのは、川路に話しかけると、立派な扇子をついて、じっと見つめて聴く態度である。話の中程まで彼は口を半ば開いて、少し物思わしげな眼付になる——これは注意を集中した証拠である。額に浮んだ微かな皺の動きには、彼の頭の中に一つ一つの概念が集って、聴いている話の全体の意味がまとまって行く過程がはっきりと現れていた。話の半ばをすぎて、その大意を摑んでからは、口を固く閉じ、額の皺は消え、顔全体晴々となる。彼はもう何と答えたらよいかを知っているのだ。もし反意の質問で、言葉に述べたのと別の意味がかくれていると、川路は思わず微笑を浮べるのであった。川路が自分で話し始めると、一切をそれに没入して、いつまでも話し、

その時の彼の両眼は理智に輝いていた。老人（筒井政憲）が話す時には、川路は他所ごとのように、眼を伏せて老人の方を見ないようにしているが、額の皺の活発な動きと、瞼や睫のぴりぴりっと慄うところを見ると、彼が私達の話以上に老人の話を謹聴していることが判るのであった。談判は川路が一人で背負っていて、筒井は寧ろ重味をつけるために派遣されたらしかった。或いは例の人好きのする性格を見込んで選ばれたのかも知れない。

或る時、私談を交えていた時、提督（プチャーチン）は日本人が貿易を怖れるのは全く無用の沙汰で、通商は人民の満足を潤すばかりのことで、かつて通商のために衰微した国はなく、通商すれば却って富強になる、ということを説明された。

『例えばお国には日常必需品が不足しているように見受けます。窓には紙を貼ってあるが』と提督は周囲を見廻して話して行かれた。『そのために室内は暗くて寒いのです。外国人はガラスを持って来て、製造法を伝授します。ガラスは紙よりもよくて安いのです。我国には、カムチャッカやその付近に沢山の魚が獲れますが、塩がありません。お国の塩を下されば、こちらからは日本の主食品たる塩魚を持って来ます。又お国では全国民が米作にかかって居られる様だが、むしろこれを採鉱にお使いになれば、米はスンダ列島から持って来て、お国は富強になるでしょう。』

『なるほど』と川路は不意に大きな瞼を挙げて口を入れた。『外国から魚や、ガラスや、米などのような必需品を持って来て貰うのは結構なことです。しかし昨日頂戴したよう

な時計を見ると手前共は目も眩んで了うので、あんなのを外国から持って来るようになったら、日本人は何もかも渡して素ッ裸になって了うでしょう……』

川路に贈ったのは立派な卓上天文時計で、普通の文字盤のほかに、月の盈虚を示すところと、寒暖計が二つついていた。私達は皆笑った。川路も笑った。

『しかし只今申上げたのは、只あの時計が大変私の気に入った証拠と解して戴きたい』と彼は付け加えた。

そのあとで事務上の話に入りたかったのだが、何か調子がそぐわなかった。

『いやこの話は笑ったままで打切りにした方がよいでしょう』と川路は云い足して、貴族らしく悠然と立上がった。」（前掲、井上満氏訳）

小さい情景だが鮮やかに人間が見えるし会話の切返し方も見事で、相手方の追及を軽くかわして苦しい境遇に置かれたひとのようには見えない。江戸から返事があって相変らず、的を外し具体性を欠いていた。北辺の国境のことを論じて、どちらも譲らずロシアは樺太もエトロフも自国の領土だと主張するし日本側もきびしく反論したので、結局、翌年双方から委員を出して決定することに話合い、通商条約の件も返事を後日に延ばすことにした。ぶらかして話を先に延期するのが目的だったのだとすると、日本側は成功したのである。これはペリーの場合と違って、プチャーチンには背後からの本国の要請が強くなかったせいらしい。

プチャーチンは不満のまま、また出直して来ると告げて長崎から立去った。これが安

政元年の正月のことで、ペリーの二度目の来訪と入れ替ることになった。八月になるとプチャーチンは軍艦ディアナ号でまた箱館に来た。次いで九月十八日には大坂湾に入って来て天保山沖に碇をおろした。

平穏な態度だが、大坂湾に外国船が現れたのは最近に未曾有のことである。京都所司代から郡山藩に伏見街道を、亀山藩に山崎街道の警備に当るよう命令し、京都市中には彦根藩から増援させた。彦根は以前から京都の警備に当り本能寺に駐屯していたので、藩主井伊掃部頭直弼も京都に入った。京都から大坂は目の前である。江戸湾に来たのを聞くのとは違った大きな聳動を都に与えた。

朝廷は、またもや七社七寺に祈禱を命じた。祈禱で解決できることのように見える。ただ安心する為であった。

大統領の国書の返事を、来年の春受取りに来ると言置いて立去ったペリーのアメリカ艦隊が、やがて来朝するだろうとは、幕府も考えていたろうが、アメリカから求められる回答の準備もしなかった。怠慢のことには違いないが、封建制と鎖国の二百年余の習慣から、どんな問題も甘く見る性質、神経質な癖に手を出さずに放置して自然の解決に委ねる暢気さが、支配階級に在ったのではないか？　それだけ権力に自信があった。ところが、今度は幕府の内部で、力の分裂が起った。根拠なく大勢は対外強硬論であって、そのために天下の信望が水戸の斉昭に集って、戦争など出来ないと知っている幕府の御

用部屋が、対外問題については斉昭を特に顧問に迎えているのである。

安政元年の正月、プチャーチンが二度目の訪問で、まだ長崎にいる間に、ペリー提督のアメリカ艦隊は、もう琉球に来て、江戸湾に向うところであった。

正月十一日になると、浦賀奉行戸田伊豆守氏栄から、外国船七艘が伊豆沖を通ったと幕府に知らせて来た。それ以前に、この数日来、駿河、遠江沿岸に外国軍艦が出没し、それも一隻でなく、数隻だと、注進がしきりだったところである。数日前に長崎を退去したプチャーチンの露艦が北上するものかと思われたが、これはアメリカ軍艦が、約束した春よりも早く来航したもので、旗艦サスクェハナ、ポーハタン、ミシシッピの三隻が蒸汽船で、サザンプトン、マセドニアンが大砲を装備した帆船である。やがて、バンダリア、レキシントンの二艦も追着き、全部で七艘、前年よりも大艦隊で、江戸湾に入り小柴沖に碇泊した。

浦賀奉行は、すぐに配下の与力を送って、浦賀に回航するように伝えたが、アメリカ側では応じなかった。

幕府は内海警備の列藩に直ちに出兵を命じた。また江戸市中の戒厳を指令し、前の年で懲りていたので物価の昂騰を抑える処置に出た。異変ある時は早鐘木（はやばんぎ）を警報に用いる。不時登城、屯集その他について応急の指令が出た。本牧、神奈川、大森、羽田の海岸に、続々と兵隊が送られた。冬晴れで、雪につつまれた富士の峯が、他の季節より、彫刻されたように鮮明に見える毎日が続くのだ。浦賀奉行が派遣した組頭黒川嘉兵衛が米艦を

訪い、ペリーに会おうとしたが拒絶せられ、参謀長ヘンリー・アダムスに会って浦賀で応接するから、あちらへ回航されたいと申入れたが、これも拒絶された。ペリー提督は前年の場合よりも日本側に威嚇を与えて、要求を容れぬわけに行かぬようにする決心で来た。春に来ると約束したのより早く来たのも、ロシア軍艦が長崎に来ていることや、フランス軍艦が日本に向う形跡のあることを知って、他国に先手を打たれまいと急いで来たので、今度こそ自分の手で日本の開国を成功させる決心を固めていた。ペリーはこの訪問が失敗となったら琉球列島を武力征服して、占領する意志を持っていた。そのために、江戸湾に入ってから故意に示威的に振舞い、日本側が意図を怪しむことにも遠慮しなかった。

日本側では交渉して会見の場所を決めるだけでも、たっぷり十日あまりも時日をかけた。その間にアメリカ側では端艇をおろして内海を測量し、一隻の軍艦は小柴沖の碇泊地から離れて本牧の沖に来て泊り、やがて他の六艘も前進して神奈川沖に来て、六郷川口、羽田付近の測量を開始した。まったく、人もなげな行動で、アメリカ軍艦が羽田沖まで来たと警報が入って、江戸では、高輪、深川、洲崎、芝浜に、川越、桑名、金沢の諸藩から一番手の人数を繰出して警備させた。皆、戦闘の経験などない軍隊である。

老中阿部伊勢守が斉昭に、アメリカ側の態度が強硬だから漂流民の救恤を許し、また貯炭場に無人島の小笠原島を貸すことも認めたいと申入れた。家来の者をやって、藤田誠之進（東湖）に取做（とりな）しを依頼したのが、正月二十三日のことである。ここまで来て、

幕府はまだこの程度の返事しか考えてなかった。

またこれに対する斉昭側の返事は、依然として否定的で、不可とする。藤田東湖の意見は無人島に石炭を置かせ、イギリス人ロシア人などが来て盗むようなことが起ったら問題だろうと言うし、斉昭は浦賀でアメリカ人に不法に応接を許したらイギリス、ロシアの軍艦も浦賀に来る。「墨夷（アメリカ）ばかりの事、強訴におそれ、一つも御済ませに相成候わば、果して後の憂いは鏡にかけ候ように」明瞭だから拒絶せよと言うのであった。

老中たちは、板ばさみの境遇からどう脱け出るか、もがいていた。

これに対して、斉昭は伊勢守に、度々書簡を寄せて意見を与えた。応接の寛猛など臨機応変にするのはよいが、我国二千五百年余の間、前例のなかったことを半年一年の内に挨拶を求めるなどとはあまりに短気のことで、人心も決して服さず、整うべきことも整わぬ。当寅年より巳年春まで三ヵ年の間は有無挨拶に及びかねる。篤く評議、日本国中承知の上、返答すると話してはどうか、と言う話を繰返して、些末なこまかい注意を添えて来る。諸家の警備が海岸に幕を打廻してあるのは案山子と同じことで、失敗だから、五、六丁ほど奥に引込み、山の蔭や木蔭に陣をとり、様子が知れぬようにした上で、昼はもとより夜中も松明などつけて海岸を見まわること、また外国船が長く滞在すると東海道は勿論、浦賀近辺その他の駅々村々が疲弊し耕作も仕事もならず万民の怨みを買

うのは容易ならぬことだから、何事も差置き救助の手段をするようにと、この場合、幕府で問題にしそうもない話にも触れて来る。「異賊へははれものにさわり候ように致し御国大切の百姓をば塵芥の如くむごく致し候えば、つまる所その禍、異賊よりはおそろしく、くれぐれも厚く御勘考の事。」

幕府の方針が動揺してまだ落着かないのにくらべ、アメリカ側の態度は、不動のものだった。必要以上厳格に日本に臨む方針である。ペリーがアメリカの海軍卿にあてた通信の中に日本側の要請を拒んで、わざと困らせるようにした動機を明らかにしている。いつまでもあいまいな態度でいる相手方に服従を強いるよう、殊更に威嚇的に出ていたのだ。

「もし余が、最初にとりたてる立場より少しにても譲歩せんか、日本人は勝利を獲たりと思惟するならんと確信す。且つ一度予め決定せる余の意嚮を変更せしめ得ることを発見すれば、彼等は忍耐の力をもって余を動かし商議決定に至るまでの他の多くの場合にも余を手間取らすことを試みるならん。されば、あらゆることを省みずに確乎たる態度を示し、譲歩的態度を示すよりも寧ろ頑迷なる強情を立つることこそ、まことに賢明なるものと思われたり。（中略）かかる甚だ聡明にして偽り多き人民とあらゆる事務を行うに当っては、実に以前外国文明諸国及び野蛮諸国の住民との決して少なからざる接触に於て得たる余の経験を利用するの利益多きを発見し、且つかかる経験によりて、儀礼的なる人民に在ってはあらゆる虚式を排除するか、然らざれば、ユダヤ王ヘロッドにも

まさる虚傲、虚飾の態度をとるの必要を知りたりき。

余は両極端を採りたり――虚飾を示すの適当なる場合には大いに飾り立て、かかる虚飾が吾が掟の精神とそわざるときはそれを避けたるなり。又如何なる場合にも、些も身分の優位を認めずと決心して、如何に高き位階の日本役人とも常に全く対等に会見したり。されど彼等国民の比較的身分高き者等は、これ等の高官に対して身を屈しひざまずきいたりき。（中略）余のなしたる頑強なる主張については余が、又協議の場所を変更せしめ、かくて同帝国の四人の諸侯をして艦隊に追随せざるを得ざらしめ、政府をして他の建物を建設するの労と費用とを払わしめたることについては余の周囲の者全部の判断が、恐らく傲慢なりとの非難をうけん。されど余は単に、熟慮の後に決定したる政策を固守したるに過ぎず、且つそは今日まで、よき効果を齎し居れり。」

日本側では浦賀を応接の場所として選び建物まで普請したのに、ペリーはこれを蹴って、もっと江戸に近い土地を会見の場所にするように申入れた。足もと定まらぬ日本側が、この一押しで更に動揺を来たした。

日本側は、どうかして提督を浦賀に引戻そうとしたのだ。江戸に迎えて堂々と会ってよいものを、本牧沖から浦賀まで僅かの距離でも江戸から遠ざけようと努めたところが今日、奇妙に思われるくらいに臆病である。体面を損ねる危険が将軍の膝下で起るとしたら、封建の体制に致命的な打撃となる。人々は、外国艦隊の強力な姿を江戸湾に見たくない。しかし、彼らは、そこに侵入して来て、ある日には羽田沖よりもっと江戸に近

く船を進め、マストに昇ると、町が遠く見える地点に出ていた。二月に入ると、ペリーは全艦隊を神奈川沖に進め、これに上海から回航せしめた軍艦サラトガが合体して、海上の威容を更にきびしく見せた。

応接の場所を神奈川に近い横浜に定めて、アメリカ側の同意を得たのが、正月が終ろうとしてからである。

斉昭は二月二日、四日と登城して幕府の評定に出席し、交易を許してはならぬとの主張を依然として繰返した。幕府は林大学頭、井戸対馬守を米使応接掛に任命して神奈川に派遣してあったのを呼戻して報告を求め討議に参加させた。林大学頭は、従来漢文を用いた外交交渉に国内第一の学者としていつも首席全権に立てられた慣例から、この度も任命をみたひとである。浦賀に向う前に極めて強硬論を主張していたが、現地でアメリカ軍艦を見てから、主張を改め、和議に傾いた。臆病風に吹かれたと非難されることになった。

斉昭も出席し、老中若年寄以上海防掛が集って報告を聞いた。去る二十五日初めて会って話すと、アメリカ側は通信交易のことを強硬に主張し、「否とは言わすまじき勢」である。そのことは故なく御許しあるべきものと心得ている様子だ。これを容るれば、直ちに帰国するだろうが、御評定どおりに聞かせては直ちに江戸湾に乗込み御老中方と討議に及ぶべく、それも御許しなくば兵端にも至るであろうと述べた。

斉昭はその日のことを手記に残している。

「林大学、井戸対馬にも逢候ところ、両人とも墨夷を畏るる事虎の如く、奮発の様子毫髪もこれなく、夜五つ時まで営中に居候えども、廟議少しも振い申さず、いたずらに切歯するのみ。」

また翌五日の斉昭の手記は、こうである。

「昨日廟議の模様少しも振わず、去月下旬より昨日候までの模様、墨夷の鉾を折き候評議これなく、只々和議を主とし、我等一人不承知ゆえ、老中始め総がかりにて我等を説きつけ、是非和議に同心いたし候ようにとの事にて、憤悶に堪えず、このまま便々登城致し候ては恐入り候ゆえ今日は風気と申立て、登城延引。」

阿部伊勢守は林大学頭、井戸対馬守の出発の予定を差留め、書簡を送って次の日に斉昭が登城してくれるように申入れた。幕府に確信も決断もないことは、斉昭が出て来ないのを見て、老中たちは、またもとの意見に戻って通信通商は許さぬと言うことになった。斉昭一人の不承知が幕府の方針を覆して了うのである。六日の評定では、またもや米国に和親通商を許さぬことを決定した。米使応接掛は再び神奈川に向った。幾度評定をくりかえしても、この壁は崩し得ないのである。

七日には斉昭は江戸にいる水戸藩士にアメリカ船に対し非常準備を命じた。市中は平穏であった。見物船を仕立てて黒船見物に出る者が多いので、幕府がこれを禁じた。庶民は、これから何が起るのか一切、知らない。黒船に対し敵意などは無論なく、好奇心

だけやたらに強いのであった。

ペリーが上陸し、我方と談判に入るのは二月十日と定められ、横浜の応接所の準備が完了した。

「横浜前面の場所には、全艦隊が戦列を作って投錨するのに正に充分な余地があった。」ペリーの「日本遠征記」は談判に向うアメリカ側の準備を明らかに描いている。「数艘の船艦の大砲をもって海岸全体に亘って牽制し得る提督の九艘の艦隊――すなわち旗艦たりしフリゲート艦ポーハタン号、同じくサスクェハナ号、同じくミシシッピ号及び帆船マセドニアン号、同じくバンダリア号、同サラトガ号、同サザンプトン号、同レキシントン号、同サプライ号を碇泊せしめたのは、この場所であった。サプライ号は後で艦隊に加わったのである。

神奈川は全く大きな町で、条約商議に携わる日本委員連の滞留地であった。又艦隊がその前面の湾内で射程以内の距離まで近づくことが不可能でなかったならば、ペルリ提督も商議の場所として同地を選んだであろう。それが不可能だったので提督は、艦隊にとって一番適当な碇泊地を調査し報告するために派遣せられたブカーナン艦長とアダムス艦長との選定に同意して、横浜を選ぶ方をよしとしたのであった。」

当然のことだろうが、アメリカ側は直ちに戦闘に入ることも予定して、海上に展開したのである。陸上の日本側にもその覚悟はあったろうが、もとより近代の軍隊ではなかった。各藩毎にばらばらに陣を構えただけのものである。アメリカ側の準備と対照的な

一例は、松代藩の佐久間象山の横浜陣中日記にも現れている。

「某（それがし）は軍議の役にて、是日同じく出立つべかりしに、別に公の事ありて其翌七日暁に打立つ。川崎の駅にて昼支度ととのえ、夫より供人をば跡に残し、某ひとり馬を早めて加奈川（神奈川）の駅に入らんとする頃、其駅にかねてより旅宿を定め、こたびおおやけより応接の事掌（つかさど）らしめらるる方の旨承りて事の齟齬なからんように心づかいする留守居何がしの許より、一人の小もの走らせて申すようは、昨日打立ちたる人数も川崎の駅の泊より、火器の類は大小に限らず尽（ことごと）く、むしろ包にして送るべしと美作守殿（浦賀奉行）よりのさしずにてその通りに計らいし事なれば、某が持たせたる砲までも掩（おお）い包みて人目にかからぬ様にすべしとの事なり。」

何事も秘密にする作戦である。そう出来るような小さい規模でもあった。

運ばせて来た大砲まで、菰で掩い隠せと注意を受けたのは、「異船この海岸より十町ばかりの所に碇を卸（おろ）したれば、このあたりを往来する人馬はかの方（アメリカ軍艦）の遠見の鏡には、もののいろめも鮮やかに見えるべし。応接のかりや（仮屋）を浦賀に建てらるべきを、中ごろにしてやめられたるも、かしこは固めの人数など多くうるさしとて夷人の嫌いし故に、その申すに任せて横浜にせられたるよし。もし海岸に大小の火器を運ぶさま、かの船にて見つけなんには、その非難を申してここを、やめん事計りがたし。かくてはゆゆしき事なれば、かれ等が目にかからぬ様ありたきとの沙汰とぞ聞ゆる、

その事あとより来る供人に心得させ、某は加奈川の駅留守居何がしの宿所に立寄り、応接の日を問うに九日なるべしと答う。とかくする内雨降り出づ。人馬の足も疲れたれば此所まで着きぬるよし、総奉行のもとまで申送り、この夜はここに宿る。」

佐久間象山は洋式の兵法にも通じていた。それが持場に大砲を運ばせて行くのにこの調子なのである。軍艦七艘を敵にまわしても応戦出来るものとは考えられなかったろう。この怠慢で悠暢な敵前の行動とは反対に、幕府の首脳の間では開戦論が支配的なのである。強い影響力のある斉昭だけでなく、福井藩主の松平慶永がまだ若く活発にこれに呼応して、斉昭以上に積極的に条約拒否を、老中に進言し続けた。

慶永は、鳥取藩主池田慶徳、徳島藩主蜂須賀斉裕、熊本藩主細川斉護等の同意を求め、通信交易拒絶を幕府の方針として確立するように熱心に勧説する。水戸の藤田誠之進、福井の鈴木主税、中根靭負、熊本の長岡監物等が藩主の下知に従って、各方に斡旋に努めた。横浜でペリーと第一回の会談が行われた後にも、この過熱した空気は去らない。彼より兵端を開いたら御国体を汚さず一同奮発討伐すべき儀は勿論であると阿部伊勢守も答える。そうなった時の危機の深さを閣老たちは充分に理解している筈だが、ぐるりが激昂して向見ずなのである。

二月十日、ペリーが上陸し、横浜で行われた日米第一回の会見では、薪水食糧の給与、漂流民の撫恤のことを容認してから、ペリーが修好通商条約案を我が方に渡した。幕府は返事を出さない。ペリーは書簡で林大学頭まで条約の締結を催促して来た。林大学頭

から、漂民の救助と薪水の供給以外は要求に応じ難いと返事した。

その間に、ミシシッピ号の水夫が病死したのを、横浜元村の増徳院に埋葬を許した。松平慶永がこれを知って激怒して、中根靭負に命じ深夜伊勢守を訪問して建白書を渡させた。

アメリカ人の死体を横浜に葬ったのは神国の土地を汚したものである、交易許諾の名は用いずともこれを内諾したのと同様で、当路の有司は悉く後世の歴史家に売国の賊臣として伝えられるだろう、この不埒を働いた応接の人数を罷免し、外事に明るい筒井、川路などに当らせ、なお水戸前中納言（斉昭）を挙げて用いて政事を総裁させるように、と言うのである。

これを容れたら全部の崩壊である。明日のことは不明のまま対立が続いた。その間に、多勢のアメリカ人が来ていることだから、思慮なくのんきに変った行動を採る男が出て来た。サスクェハナに乗って来た牧師でビッチンガーと言う男が上陸して、ひとりでどこまでも歩き出し、神奈川を通りぬけて川崎まで出て来たので、大騒ぎとなった。

「（三月十四日）一人の日本役人が神奈川から大騒ぎで来艦し、非常に興奮した様子で、一人のアメリカ士官が神奈川の町を通り過ぎて、大急ぎで江戸の方へ歩いて行ったと報告した。その報告者の言うには、アメリカ士官の現れたために大いに興奮を起して居り不愉快な結果が起りはしないかとの恐れがあると。」

戦端の起ることも予想され、陸上はどこも警備されて殺気立っている中である。

「日本の役人達は、これを聞いて、そのアメリカ士官の行為は、日本の国法と、提督が日本人と結んだ約束とを破るものであると主張した。この事実を報告されるや、提督は直ちに大砲を発射するように命じ、且つボートと士官全部とを各自の乗艦に呼び戻すための信号が発せられた。提督は又艦隊所属の全人員に対して直ちに乗艦に立ち帰るべきことを命じた命令書を作成して、各方面に送った。この命令書の写し一通は、その時ポーハタン号上にいた日本役人によって即刻急送され、江戸への途にあると報告されたアメリカ士官を追掛けた。」

意外の出来事で、ペリーも驚いた筈である。

ビッチンガー先生は、海岸を散歩している間に好奇心から、制限された地域から外に出て了った。何を見ても物珍しいので、歩き始めて、神奈川宿に出た。そこで数人の日本役人と通訳に話しかけられた。引返してくれと懇願されたのだが、目的を思い止まらず、日本の役人がついて来るのも平気で旅行を続けて、遂に川崎に入った。役人を従えたままである。六郷川があって、そこを渡らないと、江戸へ行けない。舟があったので船頭に向う岸へ渡してくれと掛合ったが、役人たちが付いていて目配せしたらしく、金をやっても舟を出さない。そこで歩いて渡る気になったらしく上流の方へ向って、ようやく渡れそうな地点を見つけたところで追掛けて来た人間に提督の命令書を渡された。「彼はそれを読み、更に四歩歩み、再びそれを読み、次いで突然引返し艦に帰るべき意

図を告げた」と、日本側の報告は書いた。どうも、帰りたくなかったらしい。

「彼は散策中に日本最大の町の一つ、すなわち神奈川の町を見る機会を獲たのであって、同町は、多数の幅広い街路を有し、稠密な人口を擁して、全く繁栄の姿を呈していた。彼は数軒の住居や寺院に入り込んで見たし、また執拗な忍耐によって或る商店でアメリカの貨幣と交換に日本の銭を獲ることに成功した。日本当局はこの貨幣のことには特に当惑したらしかった。」（日本遠征記）

無邪気なビッチンガー氏が勝手に交易を開いて了ったからであろう。日本側の町奉行支配組与力の御用日記には、次のように記録してある。

「横浜へ上陸致し候異人の内一人、昼九時過、同所より陸通り当所へ罷越候につき見物人大勢駆け集り候間、下役同心差出し相制し候よう仰渡され候間、岩附恵十郎、吉沢仙右衛門差出候ところ同夜五時頃引取り来たり。右異人は士官の内ベッヒンジャルリと申すものにして、江戸の方を指差し早足に歩行、浦賀与力通詞等、差留め候えども聞入れず、その上子安村醤油渡世海保と申す方に立入り、その身所持の銀銭を差出し通用金と引替くれるよう手真似いたし立去らず罷在り候につき、壱分銀一つ見せ候ところ、理不尽に懐に入れ、それより六郷渡場へ罷越し、是非渡船差出候よう再応、仕方（手真似）いたし候えども、その以前に船残らず江戸の方へ岸へ払置き候ゆえ、致し方なく大師河原の方へ参り、大師堂に参詣いたし、塩浜羽田あたり立花家御固の様子一覧、六左衛門渡へ参り、またぞろ船差出し候ようにと仕方いたし候えども、取合わず候ところ、帯剣

を抜き威し候てい致し候えども、差構わず候ところ、漸く元の道へ戻り候内、森山栄之助追駆けまいり候に行き会い、同人種々申しさとし、生麦村より船に乗せ元船へ送り遣わし候。」

六郷川は川留となって交通が出来なかった。川崎宿では民家は表戸を閉め、路地口には縄を張って、入れぬようにした。陣中を歩きまわって覗かれた大師河原の柳河藩は仮想敵の一人が後の方から出て来たのは、迷惑のことで、老中への届出には、「如何の訳にて上陸致し候や、素より言舌相分り申さず」と、先方は何があるか知らずに見物に入ったのだろうが、こちらは手出しはならぬことで薄気味悪く感じるだけである。見られて不利となるようなものは、陣中とは言え何も無かった。

ともあれ、夷人が一四、東海道に出て来て江戸に向って歩き出した。人騒がせになったのは当然だが、破裂の導火線ともなり得ることで、江戸にも早馬を飛ばせ、しばらく緊張を感じたものだろう。ビッチンガーが子安の醤油屋に無理に置いて行ったアメリカ銀三ドル半を翌日になってから、森山栄之助が、持参して返し、ビッチンガーが持って行った日本の金銀銅貨を返すように求めた。話があいまいになって、別れたが、一週間ほど経ってから返して来た。こんな小さい事件でも、江戸で談判の成行きを見まもっている強硬論の人々を更に刺激した。

日本側の委員は、薪水の補給と漂流民の取扱いだけを承諾し、一切を長崎で処理し、その他の交易等の条項は、五年後になって取極めると申入れた。相変らず逃げを打って

いるのだ。ペリーは、長崎以外に琉球と松前を、即時かまたは六十日以内に開港するように要求して出た。日本側委員は琉球は外藩の土地であり、松前は大名の領土だから領主の同意を得ずに独断で開港することは不可能だと答えた。するとペリーは、松前が独立国なのなら我々が松前に行き直接に交渉して開港させるようにすると主張して日本側を沈黙せしめた。

ペリーは次第に威嚇するような言葉を用い始めた。最初から五ヵ所の港を開くよう要求していたのだが、当分二つの港をどこに決めるか、延ばすとしても下田、箱館、那覇だけは即時開港の条約を結びたいと提議し、日本側は下田の開港に難色を示したが、結局、港を開いても十ヵ月の間はアメリカ船の要求する物資を供給することは出来ない——つまり港を開いても交易をしないことを了解させて我方の面目を立てた。

三月三日に日米間で調印された日米和親条約は日本が遂に鎖国を廃して国を開いたものである。怖れて交易とは書いてない。合衆国の船が下田、箱館の二港に渡来の時、「金銀銭並びに品物を以て入用の品相調え候を、差免し候。尤も日本政府の規定に相従い申すべく、且つ合衆国の船より差出し候品物を日本人好まずして差返し候時は受取申すべく候事」と、条約文第七条にあるのが、内実は交易を許したのである。しかし、この案件についても老中方は思い切りが悪かった。委員に対して食料薪水石炭の外、入用の品物などあるか、と問いただしている。苦労した委員が途方に暮れるわけである。結

局日本人だけはこれを交易と解釈しないことにするのだ。

条約では、「合衆国の漂流民その他の者ども当分下田箱館逗留中、長崎に於て唐和蘭人同様閉籠め窮屈の取扱いこれなく、下田港内の小島周り凡(およ)そ七里の内は勝手に徘徊致し、箱館港の儀は追って取極め候事」とあって下田で出歩く範囲を規定している。のんきな牧師先生が勝手に東海道を江戸に向って歩き出して人騒がせをした後のことだから、老中たちは外国人の遊歩範囲を出来るだけ狭くしたい、と望んだ。この七里が周囲でなく直径では許されない、と非難した。「両国政府に於てよんどころなき儀これあり候模様により、合衆国の官吏のもの下田に差置き候儀もこれあるべく、もっとも約定調印より十八カ月後にこれなく候てはその儀に及ばず候」としてアメリカ領事を下田に置くことも、あいまいに規定した。火傷するものを見たようにこれにも難色を示した。この条文に依ってやがてタウンゼント・ハリスが日本に赴任して来ることになる。老中たちはアメリカ人が下田に来て館舎を建てて、住むことは承諾出来ないと言う空気であった。

談判委員は衝突を極力避け平穏に事を運べと上から命令されていた。ペリーの方は、戦端を開くのも辞せない強い態度を露骨にして談判に当った。威嚇して承認を強いるようにしたものである。その事実を委員たちは老中に上申した。ペリーの迫る態度が極めてきびしい。「万一書翰（大統領の国書）中の儀、御聞届これなきに於ては使節の役目相立ち申さず候につき、やむことを得ず戦争に及び候とも、志願相立ち申さず候ては本国へ帰船仕りがたく、これに依って数艘の軍艦を用意仕り罷りあり、尚追々本国より軍

艦差送り候儀に御座候」と言葉に出して言った。自分たちは最も穏便に計らうよう内命を受けて談判に入ったもので、最低限で折合うこととしてこの条約書を交換したと陳述した。

開国反対の松平慶永は、家臣を老中の首席阿部伊勢守の屋敷に遣って、応接委員が閣老に実を告げず、談判に臨んでやむを得ざるの故を以て彼の要求を認めるようになることは起らぬか、と尋ねさせた。伊勢守の返事はこうである。「今回の事、古来の法を変ずるのは実にやむを得ざる所で、遺憾極りないが、今日、諸有司諸大名に於て通商拒否の議論が一定せず、閣議は平穏結了の事に決した。然しながら通信交易は直ちにこれを許さず、五年後に返事を与えることとし、これらの相談には水戸老公も加わり同意したことで、応接の者から一々稟議して決定するのだから閣議と齟齬することはない。」別の場合の返事には、「政府が昔日の威勢を持っているのなら、彼の要求を拒絶出来ようが、国論も一定せず諸有司、諸侯の意見が皆異っている上に、武備も整わず、遺憾だが、彼の要求の幾分を容認する以外に方法はなし、ただ挙国一致結合して兵備を整えた後に他の道を考えたい」と、伊勢守は言っている。漂い着いた岸辺を漸く告白するようになった。

鹿児島藩主、島津斉彬も、幕府が通商を開くよう約束したのを聞いて、心配した。斉彬も、まだ開国反対であった。島津氏の薩摩は、琉球を使って中国との間に貿易の経験があるから、その利益も知っている。開国に依って、独占的な立場を失う危険があった

だけでなく、日本中が反対していることだから異論を立てるものでなかった。斉彬は、松平慶永に手紙を送って、「政府は大船製造が出来るようになったら、こちらから出交易を開く意向らしい。御用部屋でも、とかく通商の利益を信じるような口気が感じられる」と言ってやった。彼の開国反対には特別の政治的意図があったのである。他の何も知らぬ発言と違い、貿易の利益に無知の人物ではなかった。

斉彬は、林大学頭、井戸対馬守などの応接掛にも対面し、事情を聴いた。「如何に懇談して拒まんとするも彼肯ぜざるに大いに困み、唯、表面交易の名を避け、彼の需要品を売渡すと言う窮策に出でたり」と、林は説明した。漢学の大家で、文章もよく書けたろうが、外交の内容、交易の性質などについては、斉彬ほど理解してないのだ。斉彬は更に質問した。「では先方が商品を持って来て強いて交易しようと言ったら、如何がなさるのか？」

応接掛の返事は、その場合は已むを得ぬと思うと言った。つまり交易はこの先アメリカ側の出様ひとつに従うことになる。この、性根のないあいまいな態度が、日本を開国させた。その後の日本の歴史を世界史の中に組込むことになる。まだ開国はしていません、と言続けている間に。

漢文の大家が首席全権だった応接掛の中で、伊沢美作守が骨っぽい人物なのを斉彬は知っていた。この男だけ引留めて、どう思うかと意見をただすと、測量を拒絶したいが、

どうも困難であった。だが手前にお任せくださるのでしたら必死に争って、せめて河川の測量だけは断乎として拒否出来たと思う。いちいち、御老中に伺いを立てるのでは手強い談判など出来ませず、また軍備なきことで何分に苦しむことが多いのです、と答えてから声を低くして美作守は告げた。「ペリーは容貌雄偉、威儀堂々たるもので、我が林、井戸など相手になれるような人間でない。御両人とも彼には威圧されて、実は言うことも言えないのです。」

不思議な情景に見える。風采の相違よりも覚悟明確なのと、あいまいなのと、気魄の違いである。これで曲りなりに、幸運が日本を世界史の舞台に送り込むことに成ったのは皮肉なことで、その後も屈折は多いが、鎖国は始めて終った。その和親の象徴のように、アメリカ大統領から将軍に献上品が贈られ、こちらも答礼に大統領始めペリー以下に国産の品物を贈呈した。

幕府から贈ったのは、梨地蒔絵松竹梅の料紙硯箱、黒蠟色蒔絵桐に鳳凰の机、銀金具吉野山絵の書棚、その他は紅白の羽二重、紋縮緬、吸物椀の類に、米二百俵、鶏三百羽、白鞘刀、通用金銀などである。硯箱も吸物椀もアメリカ人が貰って、使い道はなさそうだが、そんなことは構わない。バナナや極楽鳥、鸚鵡のような天然のものよりほか出せない土人と違って、人が細工した美しい工芸品だったのは、まだしもだった。アメリカ側の献上品は、これはまた日本人の目から見たら風変りな美しいところは少しもない実用の器械、銃器、農具、柱時計などの他は、電信機やら汽車の動く模型だった。非美術

的で真黒で、柄ばかり大きく渡されただけでは何にするものかまったく意味が判らなかった。（日本が華奢な美術品や工芸品だけでなく、工作器械やカメラ、トランジスタラジオ等をこちらから送るようになるのには、これから百年近く後の現代を待つことに成るのだ。）

「ペリー提督日本遠征記」を見ると、日本人がこの、あまりきれいでない実用の器械類に対して示した無邪気な驚きと好奇心の模様を描いてある。

「贈り物が正式に渡されたので、特にこの目的のために選抜されたアメリカの諸士官と労働者達とは、それを展覧するために、毎日精を出して荷を解き、整理した。日本の役人達もあらゆる便宜を与えてくれた。日本の労働者達は、不良な天候を防ぐために種々の品物を覆う小舎を設け、また小さい機関車の円周軌道を敷設するために少しばかりの平地が指定され、電線を張るために竿を持って来て建て、日本人はあらゆる労働を少しも辞せず、機械の整理と組立ての結果を無邪気な、小供らしい喜びをもって注意していた。ドレーバー氏とウィリアムズ氏の指図によって、電信装置は間もなく仕事ができるように準備された。電線は真直ぐに約一哩（マイル）張り渡された。一端は条約館（談判場）に、一端は明らかにその目的のために設けられた一つの建物にあった。両端にいる技術者の間に通信が開始された時、日本人は烈しい好奇心を抱いて運用法を注意し一瞬にして消息が、英語、和蘭語、日本語で建物から建物へ通じるのを見て、大いに驚いていた。毎日毎日、役人や多数の人々が集って、技手に電信機を動かしてくれるように熱心に懇願し、通信を往復するのを絶えず興味を抱いて注意していた。

小さい機関車と、客車と炭水車とをつけた汽車も、技師のゲイとダンビィとに指揮されて、同様に彼等（日本人）の興味をそそったのである。その装置は全部完備しており、且つその客車は極めて巧みに設計された凝ったものではあったが、非常に小さいので、六歳の子供をやっと運び得るだけであった。けれども日本人は、それに乗らないと承知ができないので、屋根の上に乗った。円を描いた軌道の上を一時間二十哩の速力で真面目臭った一人の役人がその寛かな衣服を風にひらひらさせながら、ぐるぐる廻っているのを見るのは少なからず滑稽な光景であった。

彼は烈しい好奇心で歯をむいて笑いながら屋根のはしに必死にしがみついていたし、汽車が急速力で円周の上を突進するときには、屋根にしがみついている彼の身体が一種の臆病笑いで、痙攣的に震えるので、汽車の運動するのは何だか、極めて易々と動き突進する小さい機関車の力によるというよりも、むしろ不安げな役人の巨大な動きによって起るもののように想われたのである。」

「日本の役人は依然として、アメリカ人が人民と交際するのを甚だ猜疑していて、それを阻止し得るためにあらゆることを行なったが、しかもなお人民と大いに交際が行われたのは当然であった。艦隊の船艦は、毎日水と食糧との供給をうけた。今や、政府の役人達は、それに対する支払いを受けることに同意したが、なおあらゆる制限を固執して、水、食糧の供給のためには自分達の小舟と労働者とを使用した。けれども、物資を持っ

て艦へ行ったり来たりする必要や、電信装置及び玩具の汽車を準備したりそれを動かしたりすることに伴って、アメリカの士官や水兵、陸戦隊と、日本の官吏や役人や労働者達との間に殆ど毎日交渉があった。

日本人は何時でも、異常な好奇心を示した。それが満足されるためには、合衆国から持って来た珍しい仕掛けの色々な品物、種々の機械装置、巧妙珍奇な色々の発明品が、充分な機会を与えてくれた。彼等は、彼等にとって驚くべき程不思議に見えるあらゆる物を、極めて詳細に検査する事だけに満足しないで、士官や水兵につきまとい、あらゆる機会を捕えては衣服の各部分を検査したのである。士官達のレース付きの帽子、長靴、剣及び燕尾服、水兵達の防水帽、ジャケツ、ズボン等、全部極めて詳細に検査された。新しい型や最新流行のものを探す仕立屋も、この穿鑿好きな日本人以上に観察が強要的ではあり得なかった。日本人は広幅織物に触れて見、長い繊細な手でけばを撫でおろし、こちらの衿の折返しを引張ったり、あちらのカラーを直したり、ポケットの深さを測るかと思うと、珍しそうに寛濶な水兵服の奥を覗いたりした。彼等は熱心に、外来者の衣服にくっついている何かを手に入れたがり、特にボタンに非常な欲望を示した。彼等は何度も何度もボタンを乞い、その安価な贈り物を貰うと直ちに満足を示し、且つあたかも極めて高価なもののようにそれを仕舞いこんだ。彼等がボタンに恋着し、その価値を高く評価したのは、その品が日本には稀だからによるらしい。何故ならば、不思議な事実ではあるが、簡単で便利なボタンが、日本の服装品に殆ど使用されていないのであっ

て、紐と色々な帯だけが、衣服をしばる唯一の方法なのである。艦隊を訪れると、役人とその従者たちは決して休むことなく、あらゆる隅々を覗き廻り、大砲の砲口をのぞき、珍しそうに小銃を検査し、索をいじり、ボートをはかり、機関室を熱心にのぞき、巨大な蒸気汽罐を動かすために機関士たちや労働者が忙しそうにあちこち働くのを注視していた。彼等は単に眼で観察するだけでは満足せず、ゆるやかな上衣の左胸の中のポケットに何時でも持っている書き物をする材料、すなわち桑樹皮製の紙と墨及び毛筆を絶えずとり出して筆記をし、スケッチをした。（中略）

平民は日本の役人達よりも遥かに吾々と親しくせんとしているのが見られた。平民が、処罰される恐怖だけでアメリカ人と自由な交際を結ぶのを思いとどまっていることは明らかに見える。然し彼等は上役から厳重に監視されているのである。実際、役人は平民と同数位いるのだったから。

もしも人々がその本来の性向のままに委せられ、多数の密偵に非常に疑い深く監視されていなかったならば、多分日本に於ても琉球に於けると同様に、艦隊の訪問中にあらゆる階級と、より密接な親交が生じたであろう。何びとも、最高の役人さえも、一人若くは一人以上の同僚と一緒でなければ重要な公務を委託されないのである。その同僚は常に怠りなく、いささかでも落度があれば、それを見付け、それに注意しようとしていたのである。」

鎖国が人間を小さいものにした。生活を発展のない貧しいものに狭めていたことは、

アメリカ側に贈った品々を一目して判ることである。そこで日本側では、日本にも巨大で強い人間がいるのを見せるつもりで、相撲年寄追手風喜太郎、玉垣額之助に命じて五斗俵を二俵も三俵も軽々と担うことの出来る力士たちと、幕内で特に大柄の者を二十五人連れて来させ、ペリー提督の前で海岸に積んである米俵を扱って見せた。一度に二俵を運べないものはなかった。ある者は一俵を歯にくわえて運び、また両腕で一俵ずつ抱えて、宙にとんぼ返りを打って見せた者さえある。日本側委員は、一人の力士をペリーの前に連れ出して、大きな体に手で触らせた。大きいだけでなく極めて硬く発達していた。ペリーが腕をつかんで見て、大きいのと硬いのに実際に驚いた表情を見せると、その相撲は得意満面の様子で、喉を鳴らして笑った。その時代には、他に見せるものもなかったのである。

野火

一

アメリカ人牧師ビッチンガーが単純な動機から冒険に出発して人を騒がせたのに対して、日本人の側からも小さい事件を起した者があった。この方は、ビッチンガーほど、白昼、天下の公道で大騒ぎを起したのでなく、暗い夜の闇にまぎれ、ひそかに行われたのである。

ペリー提督は、神奈川条約の調印を終ってから、旗艦とも二隻の船で四月九日に江戸湾を一巡し水深の許す限り江戸の近くまで行って、十一日から船毎に日を異にして順に出帆して行った。提督のポーハタン号は、ミシシッピ号とともに伊豆の下田に向い、港内に錨をおろした。

ここが最初の開港場となるのである。先発の諸艦もここに集っていた。数日間ここに碇泊して、下田湾の内外の測量を行い、港の入口にそれまで知らなかった暗礁があるのを発見し浮標（ブイ）を置いて安全を期した。調査を行い海図が作られる間に、ペリーは数名の士官と共に上陸し、日本の役所を訪問して歓迎された。

日本側の組頭は黒川嘉兵衛であった。最初から顔馴染の通詞頭森山栄之助も、神奈川

から急いで追って来て、何かと世話に当った。最早、軍艦の者は自由に上陸して、町の中を初め、許された遊歩範囲内を歩くことが出来る。日本の民衆が面白がって側に来て、一人二人から手真似で話しかける。日本側の役人がそれを嫌って、追い散らしたり、アメリカ人の行くところへ必ず二、三人の武士が離れずついて来て、行動を監視した。ペリーはこれを条約違反だとして、きびしく詰問し、いつまでもこれを続けるなら再び艦隊を連れて江戸に乗込んで抗議すると言って威嚇した。すぐに効目が現れた。しかし、日本の役人は、町の人間がアメリカ人に近付くのを好まない。アメリカ人が上陸すると町の人間は命令されたとおり逃げるし、商人の店も戸を閉めて家の中に隠れて、ひっそりとしている。いつも人影のない町を歩くことになった。

「今や艦隊中の士官達は毎日上陸したし、またしばらくの間はその行動を阻害される様子も、その歩行を監視される様子も、一見前よりは少ないようであった。かかる上陸を行なった或る日、一団の人々は郊外を通り越して田舎に入り込んだ。その時二人の日本人がついて来るのを発見した。然し最初は二人の密偵が監視しているのだろうと想像したので、殆ど注意を払わなかった。けれどもその二人は秘かに近よって来る様子だし、またあたかも、話をする機会を求め度い様子なのを見てとって、アメリカの士官たちは二人が近づいて来るのを待った。話をして見ると、その日本人が地位と身分のある人々なることを認めた。各々相当の身分を表徴する二本の刀を帯び、立派な金襴の幅広くて短い袴を穿いていたからである。彼等の態度には上流階級通有の慇懃な洗練さがあった

が、明らかに安心し切っていないような、且つ何か疚しいことを行おうとしている人々のもっている気おくれの様子をしていた。彼等はあたかも、自分達の行動を見ている同胞が誰も手近にいないかを確かめるように、秘かに眼をあちこちに配り、それから士官の一人に近づき、その時計の鎖を讃めるような振りをして、畳んだ紙を上衣の胸に滑り込ました。彼等は意味ありげに唇に手をあてて、秘密にしてくれと懇願し、急いで立去った。」

二人の男が渡して行った畳んだ紙は日本語で書いた手紙であった。艦隊乗組みの通訳ウィリアムズが、これを逐語訳すると、次のような文面である。

「日本江戸の二学者、この書を高位の士官達及び事務を取り行う人々の閲覧に供す。余等自身は微賤なるものなる故、余等の学識は乏しく浅きものなり。それ故に余等は貴下の前に出づることを恥ずるなり。余等は武器の使用に熟練せず、兵法及び軍律を談ずること能わず、些々たる職務、及び怠惰のうちに徒らに年月を送れり。然れども吾等は諸々の書物を読み、風聞によって欧米に於ける習慣と教育とを多少知りたれば、多年の間『五大陸』を周遊せんことを欲せしも、あらゆる海外交通に関する吾が国の法律は甚だ厳重にして、外国人の入国も日本人の渡航も共に同様に禁ぜらるるが故に、他の国を訪問せんとする余等の希望は、呼吸を阻まれ歩行を束縛せられいる者のそれの如く、徒らに『吾々の胸中を往来して常に亢奮せしむ』るのみ。幸にもこの海上に、貴下等の艦隊の船多数到着し、長く滞在したるため、余等は心のままにそれと親しみ入念に調査す

る機会を得、貴下等の親切と寛仁とを充分に確かめ、他人に対する貴下等の顧慮をもよく確かめ、多年の思い再び燃え上がりて、その思いは正に奔流せんとす。」

原文は漢文で、必要なく装飾的で物々しい言葉を連ねてあった。アメリカ人では読みづらく意味を取るのに苦労したろう。誤訳も多い。書き起しの文章は、「日本国江戸府の書生瓜中万二、市木公太、書を貴大臣各将官の執事に呈す。生等賦稟薄弱、軀幹矮小、固より自ら士席に列するを恥ず。未だ刀槍刺撃の技を精しくする能わず。未だ兵馬闘争の法を練る能わず。汎々悠々として歳月を忙悩す。支那の書を読むに及んで、稍欧羅巴、米利堅の風教を聞知し、乃ち五大洲を周遊せんと欲す」と言った調子である。アメリカ人の訳文は、瓜中、市木の人名を除いて、記してない。手紙の内容を伝えるだけで済むからである。

ここに漢文の英語訳の、また日本訳を最後まで掲げる要はないだろう。二人が望むところは外国へ連れて出て欲しいと言うことである。「夫の長風に駕し巨濤を凌ぎて、千万里を電走し五大洲を隣交するを視ては、豈特跛躄の行走と、行走の騎乗との譬うべきがごとくならんや。執事、幸に明察を垂れ、請う所を許諾せられなば何の恵か之れに尚えん」とあるのは日本でも解読に苦しむ日本文だった。これは、「皆さんは嵐をものともせず巨浪を押切って、数千数万里を疾走し、五大洲の沿岸を進んでおられる。我々はこれを見て、いざりが立つ者を、立つ者が騎乗の者を羨む譬えどころではない羨望を感じ

る。だから、あなた方の船に乗せて海外へ連れて行って頂きたい」と言うのである。眼の碧い人間に向って、おそろしく難解な言葉で話しかけたものだ。日本の知識人の間では、漢語が人を強く動かす作用をする時代だったからであろう。

その翌る晩（太陽暦四月二十五日）午前二時頃、汽船ミシシッピ号の夜間当直士官は、舷側に小舟が着いて人が何か言っているのを聞いた。舷門に出て見ると、早くも舷側の梯子を登って来る二名の日本人を見つけた。誰何すると、船に乗るのを許されたいと手真似で伝えた。

「彼らはここに留めて置いて貰い度いと非常に熱望しているらしく、乗って来た小舟がどうなるかも構わず、それを投げ棄てるつもりだとの意志を表わし、海岸に帰らないと云う決心をはっきりと示した。ミシシッピ号の艦長は、旗艦に行くようにと指図した。彼等は小舟に引返して直ちに旗艦へと漕ぎ去った。港内の浪が高かったために、多少の困難をしながら旗艦に到着した後、舷梯にすがって舷門に登るか登らないうちに、彼等の小舟は偶然か又は故意か、漂い去った。甲板に達するや、士官が彼等の現れたことを提督に報告した。提督は両人と相談させるため、及び時ならざるに訪問した目的を知るために、通訳を寄越した。」

この時のことを当人が後に書いた文章で見よう。

「夷舶中に入る。舶中に夜番の夷人五、六名あり。皆或は立ち、或は歩を習わす。一人も尻居に坐するものなし。夷人おもえらく、吾等見物に来たれりと。故に羅針等を指示

す。予、筆を貸せと云う。手真似すれども一向通ぜず。頗る困る。その内日本語をしるもの、ウィリアムズ出で来たる。因て筆をかり、米利堅にゆかんと欲するの意を、漢語にて認め書く。

ウィリアムズ云く、何国の字ぞ。予曰く。日本字なり。ウィリアムズ笑って曰く、もろこしの字でこそ。」

ウィリアムズは、前の手紙の翻訳をして首をひねって難渋した男だから、こうひやかして、一本取ったのである。

「又云う。名をかけ、名をかけ。よって、この日の朝、上陸の夷人へ渡したる書中に記し置きつる偽名、余は瓜中万二、渋生は市木公太と記しぬ。ウィリアムズ携えて内に入り、朝の書翰を持出し、この事なるべしと云う。吾等うなずく。ウィリアムズ言う。この事、大将と余と知るのみ、他人には知らせず。大将も余も心まことに喜ぶ。」

両人とも小舟に乗って浪に揺られて来たので、ひどく疲れているように見えた。「又彼等が立派な地位の日本紳士なることは明らかだが、その衣類は旅にやつれたような風が見えた。二人とも二本の刀を佩く資格があるもので、一人はその時まだ刀を一本帯びていたが、他の三本は小舟の中に残して来たのであり、その小舟は刀と一緒に漂流して行ったのである。彼等は教養ある人達で、支那漢語を流暢に形美しく書き、その態度も鄭重で極めて洗練されていた。提督は来艦の目的を知るや、自分は日本人をアメリカにつれて行き度いと思うこと切であるけれども、両人を迎えることが出来ないのは残念で

ある。提督は彼等が政府からの許可を受けるまで拒絶せざるを得ないのであるけれども、艦隊は暫く下田港に滞在している積りだから、その許可を求めるには充分な機会があるだろうと語った。」（日本遠征記）

両名ともペリーの返答を聞いて、ひどく当惑し、もし陸に帰れば我々は斬首刑に処せられる。このまま船に置いて貰いたいと熱心に頼み込んだ。ボートがおろされて送る用意が出来た。その時になっても彼らはボートに乗るのを拒んだが、やがて不幸な運命に従って梯子を降りた。

両名とも流して了った小舟に大小の刀とともに罪の証拠ともなる品々を残して来たので、これが役人に発見されれば、一大事であると言い続けた。ウィリアムズは、水夫に命じてあるから、帰る途中でその舟をさがしたらよいと言った。しかしボートの者は真直ぐに陸に漕ぎつけ、二人を上陸させたので、舟をさがすわけに行かなかった。ボートを降りた地点は、岩だらけで藪の繁ったところだ。夜は暗いし、道は知れず困りきっている間に、夜が明けて来た。小舟を見つけることは、最早、考えられなかった。両人とも万事休すと覚悟したらしく、村の名主に自首して出た。

「翌日の午後、大島遠征延期を願う急用で江戸から下田にやって来た主席通訳栄之助がポーハタン号に来艦して、司令官副官に面会を乞い、副官に対し『昨夜発狂した日本人二人がアメリカ艦隊中の一艘に赴いた』ことを述べ、旗艦に来たかどうか、もしそうな

ら、その両人は何か不埒なことをやらなかったかどうかを知り度いと願った。司令官副官は次のように答えた。すなわち非常に数多くの者が商売のために絶えず小舟に乗って海岸からやって来るので、来艦した二人を正確に覚えているのは困難であると。然し少しも悪いことが行われなかったということ、又そういう事実を聞き及んだこともないことを断言した。それから通訳に対し、あなたの言った日本人は無事に海岸に到着したかどうかと訊ねたところ、それに対しては『到着した』と言う大いに満足すべき答えがなされた。」

明らかにアメリカ側では、二人の日本人を庇う気持に動かされていた。

「提督は通訳の来艦を聞き、又二人の見知らぬ来艦者の行動に関して日本当局が明らかに懸念していることを聞いて、まき起された興奮を静めるため、且つは極度に厳格な日本の法律で追求されることの確実な彼の哀れな二人のために、出来るかぎりの仲裁をさせるために、一人の士官を陸上に派遣した。（中略）当局者の同意がなければ同国人を一人でもアメリカ船に迎えはしないから、今後心配する必要はないとも通達した。もし提督が自由に自分の感情の赴くままにしようと思ったならば、アメリカ人が日本に現れたことによって刺激された自制なき好奇心を満足せしめ度いとの欲求から明らかに日本を逃がれようとした、かの哀れな日本人をば喜んで艦内にかくまったことだろう。けれども、曖昧な人道心以上に重要な他の事を顧慮する必要があった。人民一人の逃亡を黙認することは日本帝国の法律に反することであり又いやいやながらもすでに多くの重大

な譲歩をした国の諸規定に対してあらゆる顧慮を払って従うことこそが唯一の真実の政策であった。日本帝国はその臣民が外国に向って出奔する場合には死刑に処すると定めて、それを禁じている。そして艦隊内に逃がれて来たかの二人は、アメリカ人から見れば罪のないものに思われようとも、彼ら自身の法律から見れば罪人であった。その上、二人の日本人自身の述べた説明の言葉を疑うべき理由がなかったとしても、彼等の言明している動機とは別のより立派でない動機に動かされたのだということもあり得ることだった。アメリカ人の節義を試めす策略であったかも知れなかったし、又或る人々はそう信じたのである。提督は自分がその犯行を如何に些々たるものと考えているかを役人たちに印象せしめようとして、注意深い努力を払い、その犯行に課せられる刑罰を軽くされるように望んだ。この事件は、同国の厳重な法律を破らんとし、又知識を増すために生命をさえ賭そうとした二人の教養ある日本人の烈しい知識欲を示すもので、興味深いことであった。日本人は疑いもなく研究好きの人民で、彼等の道徳的並びに知識的能力を増大する機会を喜んで迎えるのが常である。この不幸な二人の行動は、同国人の特質より出たものであったと信ずるし、又人民の抱いている烈しい好奇心をこれ以上によく示すものはない。ところでその実行は、最も厳重な法律と、それに違反させないようにするための絶えざる監視とによってのみ抑えられているのである。」

ペリーの「日本遠征記」は、このくだりで、高い防波堤をもやがて越えるようになる日本常民の潜在するエナージーを予見しているが如くである。

「この興味ある国の前途は何と味のあるものであることか、又付言すれば、その前途は何と有望であることか！」

数日後にアメリカの士官の一団が上陸して下田の郊外を散歩すると町の牢獄の前に出た。動物の檻のように前方に格子に閂をかけて狭い牢屋の中に人が監禁せられている。何気なく見ると、先夜、小舟を軍艦に漕ぎ寄せて来た例の二人の武士であった。彼らは自分達の不運を冷静に耐え忍んでいるらしく、アメリカ人士官を見ると、親しみのこもった嬉しそうな笑顔さえ示した。

士官の一人が近づくと、紙がなかったので有合わせた板切れに牢内から次のように書いて渡した。その文章は通訳が間にいたのだろうが、アメリカ人にも深い感動を与え、「遠征記」の中に死に面して哲学的安心立命の境地にある非凡にして驚嘆すべき標本として記載せられた。

「英雄も一度その企画を誤ると、その行為は悪漢盗賊と同じに見られる。我々は群衆の見る前で捕えられ縄を打たれて永く監禁されている。村の長老や役人の我らに加える待遇は侮辱的で真に圧制的だ。けれど我らは省みて内にやましいところは一つもないので、現在は英雄が果して英雄にふさわしいかどうか試す時だと見る。我々は日本六十余州を歩くだけでは物足りなかったので、五大洲の周遊を企てた。我等の多年の心願であった。この企画は不意に躓き、狭苦しい檻の中に入れられ飲食、休息、坐臥、睡眠も困難であ

る。どうやってここから脱け出られるか。泣こうか、愚人のように。笑おうか、悪党のように。我等に許されるのはただ黙っていることだけだ。」

原文は、格調のある詩のような漢文だが、アメリカ人に平明に伝えられた文の内容はこうである。アメリカ人は「遠征記」にも書いたが、二人の武士の船に来た動機を、日本側の役人の術策に依るものかと疑ってまともに受けず、警戒して斥けたものだったが、二人の態度は素朴で真実に見え、純粋さに感銘を残したものであった。今、この心情の清潔で気高い文章を読み、彼らが船にいる間も怖れていたように捕縛されて通行人にも見える路上の狭い牢獄に監禁されているのを見ると、彼らの企画が無類に一途に突詰めたものだった美しさに、人間的に心を動かされた。アメリカ人は疑って掛かったが、彼らの方では今に立到ってもアメリカ人の善意を信じ切って、自分たちが不当に扱われたとは感じていない。きれいな人間たちだと判るのである。

「（ペリー）提督は二人の日本人が投獄されているとの報を受けるや、司令官副官を陸上に派遣して、二人が来艦した者と同じ人であるかどうかを非公式に確かめさせた。その牢獄は前に記した通りであったが、人はいなかった。」

二人の姿はもう見えないで牢は空になっていた。牢番たちの話では、両人とも中央の命令でこの朝江戸に送られたのであった。二人はアメリカ軍艦に出かけたために逮捕された。下田の役人にはこの事件を裁く権限はない。政府に報告した上で、政府が引取って、刑を決定するのである。

二人は、二十八日の朝、海岸に送られると柿崎村の名主の家へ行き、正直に事情を話し、やがて同心が迎えに来て舟に乗せられ下田の番所へ送られて、取調べを受けた。「万死自ら分とす、一事隠す所なし、願わくば筆を提げて是れを記せよ」と潔いのである。ここで縄を受けて、長命寺に置かれた。

数日経って黒川嘉兵衛が吟味に当った。その時は漂流した小舟の中に残してあったアメリカ人に渡した手紙の原稿や、佐久間象山がくれた送別の詩など、所持品とともに発見されて役人の手に渡っていた。始末を聴き取ってから黒川嘉兵衛が、「汝に父はあるか」と尋ねたので、「ある」と答えると、母はと問う。あると答える。すると、「そこもとも聖賢の道を志す者が、御国法を犯し、父母の憂をなす。心得違い、まことに気の毒と思うが、今となってはどうもしてやれぬ。善く覚悟するがよい」と言葉をかけた。これに対して「万死自ら分とす。今日に至りて復た何の覚悟かあらん」と答えただけで沈黙した。

江戸から受取りに来たのは同心二人に岡引五人で、両人の者を綱で縛った上に、足枷をかけ、手錠をおろし、鵜鶏籠に入れて護送するのだ。宿に着くと各自に四人ずつ寝ず番をつけて警戒した。長州藩の松陰吉田寅次郎と、金子重輔で、二十五歳と二十四歳であった。

両人とも揃って若い。松陰は、夜も、寝ず番を相手に快活に話す。「皇国の皇国たる所以、人倫の人倫たる所以、夷狄の悪むべき所以」を、下田の獄中にいる間から番人に

話したのを、護送の間も番人に説いて聞かせた。一風、変った囚人である。「獄奴蠢爾と雖も、亦人心あるもの。涙を揮って、吾輩の志を悲しまざるはなし」と自分で記している。自信ではない。ひとりでに燃える熠のようなものである。休む時がない。

吉田松陰が国禁を犯して海外に渡ろうとしたのは、浦賀に黒船を見る以前からのことで、一時の出来ごころでなく、深く考えて決行に出たことである。彼自身これを「深密の謀、遠大の略あり」と称し、また「海外に往き、万国の情形を詳審し、以て国家の為に膺懲の大策を立てんと欲す」と役人の吟味に対して隠さず目的を答えたくらいで、友人の一部はその志を以前から聞かされていた。また、彼の師、松代藩士の佐久間象山にも計り、象山もこれに賛成して、最初は嘉永六年九月に江戸を出てプチャーチンのロシア軍艦に乗せて貰うことを考えて、長崎まで行ったが、軍艦が出港した後だったので、遠い道を行って目的を遂げなかった。

ペリー提督のアメリカ艦隊が来たのを知ると同志の金子重輔と相談して、今度こそ、その機会を獲ようとした。長崎まで行って失敗してから半年後のことになる。

松陰は、「身、皇国に生れて、皇国の皇国たるを知らずんば、何を以て天地に立たん。故に先ず日本書紀三十巻を読み、之れに継ぐに続日本紀四十巻を以てす。その間、古昔四夷を撫服せし術にして後世に法とすべきものあれば必ず抄出して之れを録し、名づけて皇国雄略と為せり」と言い、「蘭夷の我が国に航するは必ず爪哇より発す。乃ち爪哇

の事、審かにせざるべからず。故に海島逸誌を編む」と書いたくらいで思想は単純だし、夷人嫌いで、強硬論である。若くして山鹿流の兵法を講釈するくらいに人に認められていたが、過去の学問の亡霊、それも無用に帰したものを教養として背負込んでいたのも事実である。蘭学とは縁の遠い青年で、漢文の翻訳書を読むぐらいで外国の事情にもうといのだが、やらねばならぬことを直覚すると、すぐにそこへ身をもって出て行っている率直さがある。アメリカに行くことも誰よりも先に考えて、佐久間象山に希望を打明けた。

彼はシナの学問教養から受けた思想から夷狄を嫌っている。実に何も知らないのだ。しかし、その知らないところが彼には自分を押出して、知らぬ対象の中に身を投じる充分な理由となった。謙遜で、誠実無類の魂で、何の為に自分が動いているのか、漢文の誇張を入れていかにも堂々と自分で理由をつけるが、その動機を自分が常に信じているものとは限らない。弟子たちに向って、「君らは功業の為にしているが、私は忠義のためにしているだけだ」と言ったことがあると言われる。この忠義と言うのは必ずしも対象はない。自然発火のエーテルのように純粋に自分が燃え立つ性質そのものである。皇国の為とよく言うが、この皇国と言うのは、彼の場合、人が普通に言うのとは違う場合が多かった。常識の皇国以上のものを深く考えているか、あるいは、常識の確立にまだとどかず、星雲のように燃える気体の如き姿のものを考えているのだ。古風な彼は、外国船の出現に依って明らかに脅かされた。彼が知らぬものだからだ。外国船は標本だけ

のものである。その背後には広大な夢のような未知の国土があり、異質の文化、文明があるのが感得された。それを彼は嫌悪しているのだが、知らないから自分で行って見極めないと不安だった。そこで二年か三年でも、先方（敵）の形勢事情を探究して帰って来たら国の為になるのではないか、と考える。国の為とは、決断のあとから生じて来る考え方で、それより前に彼はただ出かけて行こうとする。この一念発起のほかには、松陰はまだ分国に割拠した田舎の、世間知らずの二十五歳の青年である。師事して相談にも出る佐久間象山は、老人と呼ぶほど遥かに年長、四十の坂をなかばまで出た分別あるひとで、自分が冒険して出国する意欲はないが、松陰が決行するのを佳しとした。

アメリカ船に乗るつもりで江戸を出発する前に、彼は兄に誓書を出して以後狂暴なことをしないと約束し、「鎌倉に隠れて書を読まんと欲す。」叔父が鎌倉の瑞泉寺の住職となっていたから、そこへ行き、静かに勉強すると話していた。翌日は、友人多勢と京橋際の伊勢本と言う料理屋に集って酒を飲み、計画を打明けた。即座に賛成してくれたのは一人だけだったが、やがて他の者もよかろうと認めた。松陰はその時の様子を、回顧録に書いている。こう言う国法を犯す計画を友人にも、自由に話し、人々がこれに賛同して出たことに、これまでになかった新しい意志を、人々が持ち始めたことがよく判る。

「予が策を語り且つ諸子の論を請う。初めは深く然りとするもの永鳥一人のみ。すでにして衆皆之れに同ず。ただ宮部曰く、『是れ危計なり』と。意甚だ痛惜す。衆皆宮部を駁す。来原、永鳥黙然云わず。久しゅうして来原突然曰く『夷情を探問するは当今の務

むべき所か』。宮部曰く『固よりなり』。来原曰く『実に然らば事の当に為すべきをなす、何ぞ成敗をとわん、一跌首を梟する。吾れ寅二に於て憾みとなさず』と。」

そのために刑死することもやむを得ない、と友人たちまでが揃って認めた。

「また久しゅうして永鳥おもむろに曰く『勇鋭力前は吉田君の長所なり、縝密持重を以て是を止めんと欲す、吾れ其の事を成すことなきを知る』と。余（松陰）乃ち毫を揮いて曰く、『丈夫見る所あり、意を決して之を為す。富岳崩ると雖も、刀水（利根川）竭くと雖も、亦誰れか之を移易せんや』と。宮部その留意なきを知り遂に之に同ず。佐々痛哭流涕して曰く『神州の陸沈此に至る、君それ何の術を以てこれを維持せんと欲するか』と。余も亦覚えず流涕、遂に共に誓って曰く、『寅（松陰）すでに断然危計を行う。固より自ら期す、一跌して首を鈴森（刑場）に梟することを。然れども諸君今日より各々一事を成して国に酬いば、その間成敗なきに非ずと云うとも、何ぞ国脈を培養せざらん、如何如何。』衆皆之を然りとす。かくて日も西に傾きければ永訣を告げて、余独り先ず寓に帰り、渋木（金子）と謀り結束す。」

松陰が身を寄せていたのは、鳥山新三郎と言う鍛冶橋外桶町河岸で私塾を営んでいた兵学者の家で、この人にも情を明かし、所蔵の唐詩選掌故二冊を望んで、餞に貰った。アメリカ船へ行くのに持って行くつもりである。ここで衣類などは売って現金にして、携えて行くものは、鳥山に貰った小さい本のほか、和蘭文典前後編、訳鍵二冊と、これ

も小さくて提携に便利な小折本孝経正文である。アメリカへ行くのにオランダ語の本や、唐詩選や孝経で、変った選択とも言えようが、松陰の性情が現れている。

やがて、前に別れた友人たちが見送りに来て、門外までついて出た。佐々淳二郎（肥後藩士）などは、まだ涙のあとを顔に残している。金五両を出して路費の為に、また着ていた衣服を一枚脱いで、持って行くよう渡して立去った。永鳥は、世界図をくれる。宮部は自分がさしていた刀をとって松陰のと交換し、また鏡をくれた。この宮部鼎蔵（ていぞう）は肥後の志士で、九州から出て来て萩の城下に松陰を訪ね、江戸に一緒に出て来た男である。

この人々と袂を分ってから、松陰は木挽町の松代藩邸に佐久間象山に別れを告げに行ったが、象山は沿岸警備に神奈川に出陣していて不在だったので、家人に手紙を託して、江戸を離れ鎌倉に籠って勉強するから、当分お目にかかれぬと告げて立去った。

松陰はそれから芝の赤羽橋で、宮部と落合う約束であった。同行する筈の金子重輔のほか、永鳥、鳥山などが名残りを惜しみ、ここまで送りに来ていた。海を越えアメリカに行くことで再び顔を見ることが出来るかどうか、危んだのであろう。宮部とは行き違って会えなかった。松陰は、金子重輔と夜中歩いて街道を下り、保土ケ谷まで行って泊った。

翌日朝起きて保土ケ谷の宿で、アメリカ船に投ずる手紙の文章を作ってから、付近を歩き、髪を結ったり風呂に入ったりした後、午後から横浜に出て、沖にいるアメリカ軍

艦を見ようとした。横浜村に入ると、象山の下僕で顔見知りの銀蔵と言うのに偶然に道で出合った。象山に会うのは遠慮する決心でいたが、漁師の舟を出してアメリカ軍艦の側まで行って見る方法はないか、と相談した。すると銀蔵は、実は手前の主人が今夜、漁師のように装って軍艦を見物すると仰有っておいでですと話したので、松陰は象山の陣屋を訪ねて連れて行ってくれと頼み込んだ。象山は、それは丁度よかった、夜が更けて人が寝鎮ってから舟を出させようと言う。そこから松陰は保土ヶ谷の宿に引返して、所持品を持ち、初夜（午後八時）になってまた出かけて横浜の象山の陣屋に行った。ところが故障が起っていた。舟を出すことも承知だった漁師らが、夜舟を出してはお咎めを受けるからと急に断って来たのだ。叱りつけて出させることも出来かねる。松陰もその晩は象山の陣屋へ泊ることになった。

次の朝になると、象山が、浦賀の組同心で吉村一郎と云うのが近頃神奈川に出役（しゅつやく）で来ている、これに手紙を書いてやるから、水や薪を軍艦にとどける御用船に乗せて貰って側まで行って見るのがよかろう、船内の様子もわかり、場合に依っては異人の顔も覚え込んでおいて、あとの計画を立てるがよかろうと言ってくれた。この時は、計画を象山に打明けてあったと見える。吉村あての紹介状を貰い、漁師の舟で神奈川へ渡った。偶然にも雇った船頭が、話して見ると、夷人のことにくわしく、船の側にも度々行っている。この男を利用することを思いついて、吉村に頼むのを急に中止した。

夜になってまた横浜に戻る時に、同じ舟に乗る約束を船頭とした。松陰は、仙台藩の大槻平治（次）が神奈川に来ているのを思い出した。大槻は、磐渓と号して仙台の医家の生れだが、父磐水の代から蘭学をおさめて、海外に向って目を開き、江川太郎左衛門の弟子となって砲術の皆伝を受けた。幕府が開国の是非を尋ねた時に、ロシアに通信を許し、工業をさかんにして軍艦兵器の製造をさせ、大船建造の禁止を解き、日本を寛永の鎖国以前に戻すのがよいと大胆に進言した人物である。このひとが漁船に乗ってアメリカ軍艦に近付き、シナ人で羅森と言うのが通訳で乗込んで来ているのに詩を作って贈ったと聞込んでいたので、何か良い方法はないか、相談したいと思ったのである。その上で松陰は、いよいよアメリカ軍艦の側まで行くつもりになり、昼間の船頭を呼んで酒を充分に飲ませ、酔ったところで上手に頼んで、軍艦の近くまで舟をやって貰うことにした。成功したと思った。夜になって舟に乗込み、多分の金をやって、アメリカ軍艦の方角に漕がせた。ところが途中から船頭は尻ごみし、何と話しても沖に出てくれない。

やむなく横浜に上陸した。折りから佐久間象山が家来を連れて歩いて来るのに会って、この話をした。この夜もまた象山の陣屋に泊ることになったが、象山から別の船頭に話して軍艦に接近しようと計った。そこで、かねてアメリカ人に示す為に書いた文章を象山に見せると、象山が読んで、ところどころに筆を入れてくれた。神奈川から帰った時の舟が浪で揺れたので、連れの金子重輔が舟よいで早くから寝ている。なおって、よくなったというので、丑（うし）時に出かけようとすると船頭が風が変って浪が高くなったから、

舟を出せないと言った。三人で海岸まで出て浪を眺め、残念と思いつつ諦めて引上げて来た。

次の日、八日には朝から象山と酒を飲んで暮し、午後本牧まで行き地形を調べ、海上に山のような浪の立つのを眺めて帰って来て、その日は保土ケ谷に帰った。すると松陰のことを心配して永鳥三平が江戸から来て、宿で待っていた。そこで赤羽橋で別れてからの事情を話して、夜になった。松陰は先に書いた投夷書に、この夜、追伸を付けて、「横浜村南、海岸断絶、人家なき処にて、初更火を点じて号とする故、脚船にて来り迎えよ」と書いた。昼間、本牧を見に行った時に、その場所を予定して置いたと見える。そこへ行って暗いところで火を焚き合図したらアメリカ人がボートをおろして迎えに来てくれるように、と、相手が来てくれるものと信じている。こちらの誠意が通じて、必ず迎えが来るものと思って疑わない。

次の日には永鳥三平を宿に残し、金子と神奈川に行って、吉村一郎に会い、象山の手紙を渡した。吉村は任務を終り、浦賀に帰ろうとしていた。鯛屋三郎兵衛が舟を扱っているから訪ねて御覧なさいと言って、吉村は出立して行った。

両人は鯛屋に行って尋ねると、今日は薪も水も軍艦に送りません、明日おいでになって御覧なさいまし、と言う。その間に、今日はアメリカの船の者が横浜に上ると聞いたので、駆けるようにして急いで横浜に行った。居たら手紙を渡すつもりであった。

横浜に着くと、もう船に帰った、と聞かされた。金子がくやしがって、今夜どこかで

舟を盗んでアメリカ船に漕ぎつけましょう、幸いに海も静かだし、私は舟を漕げるつもりですと言出したので、松陰も、そうしようと承知した。砂浜を歩いて行くと、小舟が二隻引揚げてあった。ただ艪がないので、さがし歩いて小屋の中に数梃あるのを見つけ「事成れり」と悦んだ。

そこで保土ヶ谷の宿に帰ると、宿屋の方で両人の行動を怪しみ始めている。江戸に帰ると言って、夕方に出かけて、途中小提灯を求め、神奈川台で酒を飲み、深夜になって横浜に向った。

昼間見ておいた舟をさがすと、人が乗って行ったと見え、見つからない。また風が強く、海は山のような浪である。村の犬が二人を見て集って来て吠え立てた。雨の降り出した中を、保土ヶ谷に帰ったのは夜が明けてからである。もとの宿に帰るより他はない。いよいよ疑いを深めたらしい。永鳥三平がまだ泊っていた。

「また、いけなかったのですか。」

と言う。松陰は笑って、幾度失敗しても、やりますよ、と言った。

「天の我れを試みる、我れ亦(また)何をか憂えん。」

こう言うのである。

実際に下田で捕縛せられるまで、松陰も連れの金子重輔も機会を獲るために努力し尽した。最早、執念の如きものであった。真直ぐに、ひたぶるに目的を追求した。翌日も

雨だった。することもなく旅宿に居ると、来原、赤川が雨を衝いて江戸から様子を見に来てくれた。赤川淡水は萩の生れで、松陰の門下だった青年である。来原良蔵も長州の福原氏の生れで、養子に行った者である。膝を寄せて善後策を相談した。その後で、永鳥も同行して神奈川の宿に移ることにした。江戸から来た二人はそのまま帰って行った。

神奈川の旅宿の主人は、永島源吾と言い、七十を越した老人だったが、まだ元気さかんで、この辺の御用聞きの取締りをして、博徒などに睨みがきいていた。アメリカ軍艦の牧師ビッチンガーが気まぐれを起して江戸に向って歩き出した時、この老人が真先に川に走って行き、六郷の渡舟を全部対岸に追いやって、アメリカ人が江戸に行けないようにした。その事件当時のことが自慢で、松陰などに話してくれた。松陰がこの話を聞いてどんな心持でいたか亭主は感じないのである。この日は雨なので、薪水を沖の軍艦にとどけない。翌る日は天気になって、積入れの船が出ることになったが、与力などの役人が乗組んで行くので、松陰の希望は達せられない。「茫々然として旅舎にて日を消す」である。

次の日十二日になると、アメリカ艦隊が出港して下田へ行くらしいと、どこからとなく伝えられた。薪や水の積込みは昨日で終り、今日は舟を出さない。遂に何も出来なかった。永鳥もいつまでも様子を見ていられないので江戸に帰った。次の日は朝から何となく外があわただしい。どうも軍艦が出帆するらしい様子だがアメリカ人は狡猾だから日本側から与力が問合わせても、返事をはっきりさせない。その内、午近くから一艘ず

つ錨をあげて出帆した。一隻だけ残って、あとの船は全部、江戸に向って走っていると言うので、役人は騒動した。松陰も金子も急いで支度して、走って道を急いだ。羽田まで行くと、アメリカ軍艦は既にその付近の海上まで来てから、進路を変えて、もとに戻って行った、と聞かされた。

松陰は金子と相談し、急いで下田に行くことに決めた。永鳥三平に送る手紙を書いて、神奈川の浜屋に頼み、別の書簡は松代藩の者を見つけて佐久間象山に渡して貰うように依頼した。夜は、また保土ケ谷に泊った。宿屋から見たら、何ともあやしい行動をとっている人間である。出たり入ったりする。それも、夜半や、あけがたまだ暗い内のことが多かった。アメリカ軍艦が立ち去ったので、警衛に当った松代、小倉の両藩の兵は、この日直ちに陣払(ばらい)して引揚げて行った。象山もこれに従って江戸に帰って行った。松陰が象山に宛てた手紙には、「万事蹉跌、一も意の如きものなし、将(まさ)に去って下田に往かんとす。亦定策あるに非ざるなり」と告げたが、まだ断念するのではない。あくまでも下田へ行き、誠心を貫いてアメリカへ行こうとしている。右へ左へ馳けまわり、もう、たいてい嫌になりそうなものだが、雨でも消えずに火は燃え続けた。そして、彼はアメリカ人と接触に成功したところで、拒絶せられ、失敗する。

吉田松陰も金子重輔も、学問教養は旧式の経学の型で、感動を新しい時代に得ているものでなかった。蘭学から刺激を受けた高島秋帆や高野長英などとは異っている。長英は捕吏に囲まれて自決し、おとなしい渡辺崋山が切腹するようになったのも、間接にし

ろ海外の空気に動かされて物の考え方を改めたからである。松陰は、古い自分の考え方を変えてはいない。古い教養の枠のまま、国外に出て外国の事情を見て来ようとして、日夜その為の苦労を重ね奔走しているのである。松代の佐久間象山や仙台の大槻磐渓の如き、多少なり目醒めた人々が松陰を援護し助言するのは当然である。しかし、松陰の周囲にいる友人たち、これも古い思想教養しか持っていない人たち、肥後から出て来た宮部鼎蔵とか、長州から上京していた青年たち、それに松陰の江戸滞在中、宿をしてくれた鳥山新三郎（このひとも安房の農家の生れで、表面は旗本溝口十郎の家来と自称しているが、塾をひらいて人に教えていた庶民出の町学者である）などが、松陰を送り出すのに、お互いに涙を流して議論し、遂に「行け」と言って送り出したのである。華山や長英が苦しんだ末に遂に死に就いたような時代とは、世間の人を動かす空気が急速に変った事実を証明している。

黒船が現実に日本の海に出現したのが大きい。しかし、保守的な傾向の無名の青年たちを刺激したのは、動かずにはいられぬ気運が全国的に起って来ていたものと言えるのだろう。

松陰と金子は、下田に来て、アメリカ軍艦を沖に見てから後にも、アメリカ人に手紙を渡すまで一週間を要した。その間、海岸に出て沖を見たり、一度は川につないであった舟を盗んで漕いで出たが、浪が高くて舟を捨てて岸に登った。まだ夜が明けず、真暗

である。柿崎弁天の祠に入って寝て、疲れたので朝になったのも気がつかずにいると、人が来て祠の戸をあけたので、両人ともひどく驚いた。「而してその人の驚くこと更に吾等より甚し」である。

そこで山一つ越えて隣の部落に行き漁師の家で朝食し、ここで長時間、睡らせてもらった。柿崎に帰ろうとしたが、雨となって宿がなかった。下田に来る途中通った山の峠の休み茶屋に行き泊った。その次の朝、柿崎でアメリカ人を見て、意を決して、手紙を渡した。沖のアメリカ軍艦に向け小舟を漕いで出たのは、二十七日の夜のことである。江戸を出てから二十日あまり経っている。その間、連日、終始変らぬ目的のために、野宿したり雨に打たれて歩きまわっていたのである。

護送されて江戸に入ったのは四月十五日である。北町奉行所の仮牢に入れられ、松陰は板縁で金子は白洲に坐らせられて奉行の調べを受けた。大体、下田で取った調書をもとに訊問が行われた。下田では佐久間象山が送った詩の件について尋ねられただけだったので、奉行の訊問に対して、今度のことに象山は関係ないのだと答えた。奉行は言った。修理（象山）が既に捕えられて、その方が横浜の陣所に出入りしたことも自白した。その方の申すことを聞いていると、国の為を思い一死を覚悟の上行動したもので、その志も明らかだが、修理のことになると隠してあいまいな返事しか出来ぬのは、恩を思い、師をかばうつもりであろうが、修理は隠そうとはしていない。その方も隠さず事実を申せ。汝等は、象山に命じられて、アメリカ船に乗込もうとしたものであろう。

松陰は横浜で象山に相談したのは、どうやって夷船に近づくかであって、その他にはアメリカ人に渡す文章を見せただけである。事実、自分たちがアメリカ軍艦に行くものとは象山はまだ考えていなかったろうと答えた。

役人たちは、象山の声望の高いのを憎んで罪に陥そうとしていた。いや、象山が計画を立て両人に実行せしめたのだろうと言うので、我々は人の指図を受けて大事をなす者でないと答えた。

松陰が投獄せられたのは、東口揚屋（あがりや）であって、象山は東奥揚屋に入れられていた。

「さて佐久間翁、隣牢にあり、時々声音は聞え候えども話も出来申さず、嘆くべし、僕一身は言うに足りず。翁は一時の人傑、空しく囚繋に陥ること是また僕が至らざる処、その罪謝するところを知らず。」

松陰は四月十九日に白井小助に与えた書簡の中にこう書いている。板壁の向うに象山の話声が聞えていたのだ。

幕府の役人の方は、まだ日本が開国を許したとは認めていなかった。象山は因循な彼らを相手に屈せず抗論した。

「昨年来の事は古今の大変で、政府に宜しく非常の政策があるべきである。国家多事でまだ命令して有能な者を外国に遣わすようなこともしてないが、今ひそかに海外に出て夷情を探って帰る者があるなら、その罪をゆるして国の為に用いるべきである。私は洋書を見るようになってから十年にもなるから、他人に譲るところないと信じているが、

それでも海外の事情となると、靴を隔てて痒を掻くの思いが甚だ深い。それ故に志ある者が海外を見て来るのを望んでいる。」

これでは役人の憎しみを買うだけである。しかし、象山は主張した。既に国法を犯してアメリカ船が港に入った。内海を測量し、兵員を上陸させ、我を威嚇して要害の地を開港せしめた。然るに彼の力を知り彼の国情を究めんとする忠良の士に縄を打って獄に投ずるとは、盗賊を防がんとせず、手足を自ら縛して賊のなすがままに任せるのも同然である。これまでの死法を守って、こちらは一向外国の長所を取るべき手段も考えず、海外の形勢、事情をも探ろうとせぬ。国に忠なるものとは言えないのではないか？　それに比べれば、吉田らが死を賭して努めた特志は正しいのである。

松陰が初めて獄内に入ると、牢内の慣例で衣服をぬがせて頭にかぶらせ、牢名主がきめ板で背中に一撃を加えて言った。「善く聞け、日本一、三奉行入込み東口揚屋とはここだ。うぬは命の蔓を何百両持って来た。」隠して持って入る金次第で、牢内でいたわってもらえるのである。松陰はここでも正直に答えた。自分は伊豆の下田で逮捕され、持物を全部没収されたから、一銭も持って来ないのです。名主は怒って言った。「奉行に慈悲があっても獄中に慈悲なくば、命はないぞ。向う見ずな奴だ」と言われたのに、「どうもやむを得ぬ。私は罪人として死ぬのを自分の運命と覚悟している。だから死ぬことは怖ろしくないのだ。」

二

四月に入牢し、牢内で暑い夏を過ごしてから九月十八日に刑の言渡しがあった。金子重輔とともに藩に引渡して幽閉されることに決した。「父百合之助へ引渡し、在所に於て蟄居申付く」と言うのが幕府の命令で、予期されたものより処分が軽かった。

しかし、長州藩の江戸屋敷は幕府の咎めを怖れて、松陰の罪を重く扱った。九月二十三日に、麻布の藩邸を出て、郷里に送られた。護送の役人が同情のない男たちで、出発してから三日目になって、手錠を昼間だけ取外してくれたが、道中、午飯の時など駕籠を地面に置いて外に出るのを許さず、膳を地面に据えて食わせた。役人は座敷に上がり昼間から酒を出させて長い時間をかけて食事する。夜も自分たちはそれぞれ良い部屋を取り、一番悪い部屋に松陰たちを駕籠のまま座敷へ上げて、そのまま寝させる。

金子重輔は、江戸の獄舎に在る間に重病となり、出牢の時も床に寝たまま担ぎ出された。着替えもないので、垢と汗でよごれて、目もあてられぬ状態であった。藩邸に引取られても着替えもくれず、薬も与えられない。牢屋で着ていた袷(あわせ)のまま駕籠に押込まれて江戸を出た。死骸を運び出す黒門から送り出されたが、病苦の身を道中駕籠に揺られて行くのは重態の病人の耐え得るところでない。極度の疲労による下痢の為に不潔耐えがたい状態で、着替えを都合願いたいと繰返して願い出るが、言を左右にして、いつま

でもそのままに差置かれる。この非人間的な待遇が松陰にもすぐ判るので、松陰から強硬に抗議して出た。鞠子の宿に着いてから、下役人が地面に蓆を敷いて金子を引出して衣服を脱がせ、紐つきの小布団だけまとわせて、着ていた袷の汚れた部分は剝取り、ずたずたに切って汚れた分を捨て、残った分を駕籠に敷いて、その代りには何も着せずに、重病の人間を駕籠に戻した。

夜になって松陰が、どうだ、着替えをさせて貰ったかと問うと、この始末で、金子の返事は、「裸にされるよりもそうでない方がよかった。着替えどころではない」と言ったので、松陰が怒って掛りの者を呼びつけ「我々には新しい衣服一着が下しおかれたと聞いたぞ、それを出せ。拙者がこう申しておると豊田（上位の役人）に言え」と、どなる。豊田様の仰せでは、新しい衣類は国に帰って萩に入る日に着せるのだから、道中で着せてはならぬと言いつかっておりますと言う返事である。これが役人の常識なので、封建の世の中の暗さ、非人間的な無知の忌わしさを感じさせるものだが、この時代には普通と思われ、不審ともされなかった。

松陰はいよいよ怒って、自分が着ていた実家杉家の紋をつけた絹の綿入れを脱いで、駕籠の外に出して、これを重輔に着せるが、豊田には決して言うのでないぞと言付けた。小者はどう取扱ってよいか、相談して愚図愚図している。叱りつけて無理に金子に着させるようにした。松陰も伝馬町の獄を出た時から単物の上にこれを上張りにしただけだったので、秋深い道中に単物一枚で風が冷たかった。駕籠の中に布団があったのを、雲

助が蓆を着るような姿で体にまとって寒さをしのぐ。金子重輔はもとより、とんでもない。お心持だけで有難い、先生に寒い思いをさせて私が暖まる気になれませぬ、どうぞ私のことは御心配くださいますな、悪い奴に送られることになったのも運命ですと言う。

このことが護送の役人豊田又左衛門の耳に入った。さすがに当惑して、萩に入る時に見苦しくなく新しい衣服を着せようと思ったのだが、そんな具合ではやむを得ぬから出して着せようか、と言出した。

重輔は自分は凍死することに決めたのだから衣服など要らぬと言立て、松陰もまた単物に布団をまとって拒絶し続けた。だが、重輔は肺を患っていたのである。役人の方から詫びて出たので、やっと衣類を受けることになったが、心外に感じたことだろう。萩に着いて分れて松陰は野山の獄に、重輔は別に収容されたが牢内で死ぬ。「これ等の類は護吏に在りては固より当然ならん。是れを亡状と云う者は囚徒の言なり、看る者疑いを致すことなかれ」と松陰が書いたのは、時代の因習に人間が抵抗できなかったことである。

しかしここで吉田松陰の遍歴の旅は終る。まだ二十五歳の若さである。そしてその後、僅か三十歳で刑死するまでの五年間に、牢獄と幽閉との中に暮しながら、自分に代って明治の時代を作る若い弟子たちを教育して送り出したのである。

松陰は萩に着くと野山の牢獄に収容された。二十一歳で初めて九州に遊び、その翌年

藩主について江戸に出、鎌倉、相州、房州の沿岸を歩き、更に藩邸を脱走して水戸に遊び、二十三歳の正月も同地で迎え、月末から白河、会津、新潟をめぐり佐渡に渡り弘前、青森、盛岡、仙台、米沢等を歩いて一旦江戸に帰り、郷里萩に帰ると、許可なく亡命した罪で士籍を奪われたが、藩主毛利公が惜しんで父杉百合之助から十年間諸国遊歴を願出させて、これを許すようにした。二十四歳であった。また旅に出て、讃岐、摂津、河内、大和を経て伊勢大廟に詣で、次で、美濃、信濃、上野国を通って江戸に入った。ここで海外渡航の為に長崎に来ているロシア軍艦に乗せて貰うつもりで、九州に向い、途中京都に寄り、大坂から船で熊本を経て長崎に着くと露艦は出港して、もう居なかった。行っても間に合わぬかも知れない計算のない計画で、途中も急いだとは見えぬ。そこで萩に帰って来たが、一週間も留まらず、熊本から訪ねて来た宮部鼎蔵、野口直之允と同行、周防の富海から船に乗り京都を経て、江戸に出た。それから二カ月後にペリー提督の軍艦に乗ろうとして、神奈川から伊豆を駆けめぐったのだ。

最後の奔走は渡航の目的があって動いたものとしても、それ以前の旅は、別に目的はなかったと見てよい。知らぬ土地を見、そこに住む人を訪ねて意見を交換する。二十一歳の時の九州遊歴には途中平戸に五十数日も滞在し、葉山佐内、山鹿万介に会って、山鹿流について教えを乞い、また長崎では唐通事に支那語を問い、唐人屋敷やオランダ商館を見学し、オランダ船も見ている。無邪気なまでに働く素朴な好学心は、少年のものの如くである。

各地できまって訪れるのは、文武知名の人々である。江戸で佐久間象山、水戸には水戸学にあこがれて行ったのだが、会沢恒蔵、豊田彦二郎等を訪問し、その学派の人々の話を聞き、太田西山に徳川光圀の故宅を見、瑞竜山の墓所に詣でている。その他、熊本では横井小楠、京都では梁川星巌、森田節斎、梅田雲浜、鵜飼吉左衛門に会った。平戸の例は別として、長い間、教えを求めて滞在するのではなく、一日か半日会うだけのことが多いが、とにかく行く先々で、知名の人を訪ねて、よく話を聞いた。

机に向って読書する時間などこの五年間に稀れにしかなかったろう。旅行ばかりしている。それもどれほど遠方でも自分の脚で歩くよりほかない時に、旅を苦労ともしないで、青森から長崎まで、どこへでも実直に歩いて行く。何かに憑かれているのである。伊勢神宮や水戸となると目的が定まっているわけだが、ほかの場合の彼の遍歴は、ただ未知のものに誘われて若い日を旅から旅に過ごし、その土地で聞えた人があれば訪ねる、と言った具合で、プログラムは持っていない。

訪問を受けた方でも、長州の萩の者、なにがしと時に変名さえ名乗るだけで、先触れもなく玄関に立って、おそらく数時間、学問の話をして、そのまま別れて立去って行く青年を変った男と思って見送ったことであろう。何の為に来たのか分るまい。それは、訪ねて来た当人が、説明もしないし、またよく自分でも知らないのである。彼の旅に目的はない。渇きに似た欲求が彼を動かす。何はともあれ、そこへ行って見る。青春の彷徨の如きものだが、彼のは容赦ない渇望である。それまでの学問から、皇国の為と案を

立てているが、それは彼自身の渇きを癒やす為である。実践については、アメリカ軍艦の訪問で証明されるとおりに、実に無器用で、一途に自分を押出すだけで、成功するまでに無駄で余計なことばかりして苦労をする。その苦労が彼のような純粋な魂には、当然のものに見え、天が英雄を試みる為に課するものと正直に信じられ、「万死自ら分とする」のである。

日本歴史を書いたG・B・サンソム卿が松陰のことを叙して「吉田寅次郎、彼は当惑させられる性格の持主であった。彼の伝記を粗略に読むと、彼が愚か者で、狂信的で無能であったとの印象を受ける。彼は高邁な理想、雄大な構想、野心的計画で充満していたが、大小を問わず着手したすべてのことに失敗した。それは常識の欠如に基づくといえよう。外国の研究者がなぜ彼があれほどまで同時代人の心に強い影響を及ぼし、また後世の人から法外に賞讃されたかを理解するのは、この点で容易なことではない」としている。経歴から見ると確かに当ってないとは言えない。松陰はまだ青年であった。学問知識も通常のものである。だが、生れつきの純粋のものが三十歳の短い生涯を通じて素朴に燃え続け、やすむことなかったのが、若い子弟に感化を及ぼした。

萩に帰って、一年間を野山の獄に入れられて暮したが、処置が幕府の命令以上に過重だととなえる声も出て、藩政府も出獄を許可し、実家杉氏の宅に幽閉するようにした。現在もその建物が、松陰が閉じ籠っていた小さい部屋とともに残っている。

旅ばかりしていた松陰が、仏壇を置いた三畳ばかりの狭い場所に寝起きしている。外部の者と面会は許されなかったが、窓が畑に向いて開いていた。近くから読書を教わりに来る少年たちが出て来た。同じ棟に納屋があって、やがて生徒と並んで米をつきながら本の素読を教える時もあった。萩地方の米をつくのは台柄と称して、中央に鳥居というのがあり、これを持って体を支える。搗く者は鳥居の後に立ち、助手が前に立つ。松陰は鳥居の上に見台を作り、門人を助手にして米をつきながら本を読ませて教えた。

家の近くに村の塾があって、親戚の久保五郎左衛門が子弟を集めて教授し、松下村塾の名を伝えていた。これは十年ほど前に玉木文之進が起した小さい学塾で、松陰も少年の日に門人となって教育されたものである。

幽閉中の松陰に弟子が出来て教えて貰っていると聞くと、松下村塾の生徒の中からひそかに講義を聴きに来る者が出た。やがてどちらからともなく合併したような形となった。杉氏の邸内は畑が多かった。生徒が来て見ると、松陰は畑に出て草を抜いている。生徒もそれを手伝いながら、歴史の話や本の読み方を松陰が話すのを聞いた。先生も生徒もそうしているのが楽しそうに見える。

松陰は父や叔父と相談して松下村塾に富永有隣を招いて師とし、やがて杉氏の宅地内に小さな家のあったのを手に入れて、松下村塾の校舎にした。杉氏の家の前で、数歩で行ける隣の棟である。表向きの塾主は久保氏だが、事実は松陰が支配した。幽閉中の松陰にすぐ弟子入りは出来ない。富永有隣がしばらく教えてから、隣家へ行くのが許され

る。塾生がふえた。安政四年の歳末には、十数名となった。旅どころか外出も公然とは許されぬ体なのである。ここで子弟を教育するのを楽しみにする心境に入った。しかし、外の世界の動きが相変らず彼の心をとらえて切ないくらいである。梅田雲浜のような志士が萩に来て、松陰と会って国事を話すこともある。外界と断絶されたわけだが、それ故に一層、時局に関心を深めた。アメリカのハリスが来て領事となって下田に留まり、幕府が遂に開港する時が来た。江戸にいる桂小五郎や、京にいる久坂玄瑞、梁川星巌などに意見を送ったりして時事を念頭から忘れ去ることはなかった。自分が出て行けぬだけに国を憂うることが深い。素養から言って、尊王問題を取上げた。その結論として幕府を敵視するようになる。時局に痛切に感じている多くの困難を天皇に対する忠誠の教義が解決するように見えて来たが、それだけでは外国を相手の問題を乗切れるものではない。国のどこかが悪いのだが、それがどこか判らない。自分たちが持って来た学問や文明が無力のようにも見えて来る。過去とは別の、何か新しい原則が樹てられれば時勢を好転させ得るのではないかと考えて、それが発見出来ないのに当惑しまた迷うのである。

弟子たちに対して松陰は必ずしも、よい学問の師ではなかった。松下村塾で彼が教科書にしたのは、「論語徴集」や「十八史略」、国学の「古事記伝」、水戸学の「常陸帯」などであり、米を搗きながら「大日本史」を読むこともある。これらの学習が若い子弟の心をとらえるものでなく、味気なく、つまらなくも見えた筈である。村塾では兵学を

教えなかった。西洋の事については清国人魏源の「海国図誌」を始め、その他の訳書を用いたが、これは松陰の本筋の学問ではない。しかし畑の草を抜きながらの雑談に、この一介の村の先生の尋常でない人格があとで気がついたとしても弟子たちに自然と伝わった。門人天野御民が明治三十年に伝えたのに誤りないとすると、「先生門人に書を授くるに当り、忠臣孝子身を殺し節に殉ずる等の事に至るときは満眼涙を含み、声を顫わし、甚しきは熱涙点々書に滴るに至る。是れを以て門人も亦自ら感動して流涕するに至る。又逆臣君を窘ますが如きに至れば、目眦裂け、声大にして、怒髪逆立するものの如し。弟子亦自ら之れを悪むの情を発す。」

この少年たちが、久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤利輔（博文）、品川弥二郎、山尾庸三、白井小助、赤根武人など維新の変革に参加するように成長した。

松下村塾の在る場所は、萩の城下も場末の村であって、ここに住んでいるのは武士も下級軽輩の者ばかりで、松陰はもと藩主に兵学を講義したり藩校の教師だったことも家中では記憶しているが、現在は罪囚なのである。勢力のある良家の子弟が、入門して来ることがなかった。

門下に集った入江九一、山県小輔、品川弥二郎、杉山松助、野村和作、吉田栄太郎、伊藤利輔など、維新から明治にかけて大働きをしたものたちだが、皆、下士か足軽の身分の生れである。松陰の生家、杉氏が家禄二十五石の貧しい収入で、当時の下級の武家

の例に漏れず家の周囲に畑を作って家計の資としている。松陰が養子に行った吉田の家も知行五十七石六斗。学者の家であった。松下村塾が多少さかんになって一棟増築した時も、大体は大工がやったとしても、壁を塗り床板を釘で打つ仕事は、門人たちが集ってやった。貧しさに慣れている青少年で、家の中の仕事に人手を借りることをしない。村塾に寄宿する者が、自炊で、掃除から洗たくまで一切自分でしたのは固(もと)よりである。

隣家の杉氏にある松陰の幽閉室とともに、松下村塾は今日もほとんど昔のままの形状で萩に残っている。松陰神社とか、記念館とかにものものしく包囲され、公園の中に在るように周囲がやや騒々しいが、村塾の粗末な和普請の古家を裸で見ると、昔これが村道の果てにあり、先生も弟子も畑の中で雑草を抜きながら歴史を論じ経書の話をしていた姿が泛(うか)んで来て、感動を覚える。貧しく小さい家である。

少年たちは五十人と居たわけでもなかったが、松陰の感化を受け、明治の新しい時代を作る為にここから門出した。その道程で生命を捨てて倒れる者を順に出しながら、残った数名の者が日本の近代化に成功するのである。師の松陰は、わけもなく外国船に乗ってアメリカに出て行こうと企てて幽閉の身となり、やがて安政の大獄で再び江戸に引出されて斬首せられた。しかし短い歳月をこの先生に教えられた青少年が攘夷の運動に身を投じて倒れ、幕府を倒して新しい時代の門を開く仕事に参加した。師の松陰が、その為にはどの原則に依ってよいか、何をしてよいかわからずに迷っていた時と同じく松陰の弟子たちも成功する方角の確認もなしに、捨身自殺に近い過激な行動に一途に進ん

だ者が多い。松陰が松下村塾で指導したのは、結果として学問は初歩の政治学のようなものだが、弟子たちが受けたのは、行き詰った現状を打破して何かわからぬ新しい使命につくための人間的誠意と熱情であった。

燃えるような熱意に私心なく身をゆだねる人間の典型を若い者たちはこの先生に発見した。サンソムが、なぜ松陰が同時代人の心に強い影響力を及ぼしたのか外国の研究者にはほとんど理解しにくいと言ったのは当然なのである。日本人ならばこれが解るとも最早言いえないのである。まだ一部の貧しい武士たちの間に、その貧しいことの故に実際的な打算や私意のなかった倫理的に高貴な時代に日本がまだ在ったことも原因の一つであろう。これは、点々と自然発生した野火の如きものであった。燃え立って他に発火を誘いながら自分は燃え尽きて灰となって地に鎮まって行く。更にまだ若い日を、松陰があてもなく全国を歩きまわり、次々に師を求め、大きな渇きのように自分たちの当面する問題の解決を求めたのと同じく、学者でもない全国の青年たちが何か不明のものに動かされ、遠国に人を訪ねたり、漫然と、京都に出て来るようになっていた。熊本で会った人間や、京都で知合った人間が、萩城下の松下村塾にわざわざ訪ねて来て、旅装のまま狭い玄関に立つこともある。共通していたことは、彼らは、ほとんど貧しい士分の家に次男か三男に生れた人々の場合が多い。農村からの離脱者もあった。一様に強い渇きを覚えていることが共通した。

松陰は、一カ所に落着くことを知らぬ魂の原型であった。至誠を以て臨めば、かなう

者はないと門人たちにいつも言い聞かせた。自分も心を集中させるものを求めている。それに師匠と弟子と、あまり年齢に相違がないことがあっても不思議はない時代であった。松陰はその人たちを、「あなた」と、ていねいに声をかけたと言われる。弟子入りして来た若者に挨拶するのにも「御勉強なされられい」と優しく告げたもの、と門下の一人が話している。人には優しいが自分は燃え尽きて行くきびしい炎の塊であった。

実妹の話に、「松陰は幼少のころより遊びということは知らざるものの如し。年頃の朋輩と伍して紙鳶を揚ぐるとか、独楽を廻すとかの戯に眩ることは絶えて之なく常に机に向いて青表紙（漢書）を繙くか、筆管を操るかの外、他あらざりき。」長じてからも酒も飲まず煙草も喫わない、柔軟ではあるが謹厳であった。

「三十年の生涯は短くと言わば短きも、一般より観れば、妻を迎え家を成すべき年たりしなり。罪ありとせらるる身で表沙汰に妻を娶るわけにも行かざるも、せめて世話する婦人位を近づかしめては如何にやなど」話してくれる者はあったが「松陰は生涯婦人に関係せることは無かりしなり。」

三

ペリー提督の黒船に人の注意が奪われている時期に、東北の一隅で、もしかすると黒船以上に大きな事件が起っていた。かなり長期間にわたって、外部に対して事実を伏せ

ていたので、地方的の事件でもあり、一般には知られずにいた。これは南部領の農民が三万人に近い大人数で、田畑を捨て集団となって雪崩のように領内を横断し、隣国の仙台領に入って保護を求めた事件であった。

百姓が耕している土地を捨てるのは、生活を放棄することである。封建の体制は彼等を土地に縛りつけて置き、他所へ移動も転業も許さぬのを秩序として成立した。太閤秀吉の検地から一地一作人としてそれが起り、また刀狩りで百姓町人から武器を取上げ、武士だけにこれを持たせて、組織の基礎としたのを、徳川幕府が引継いで封建支配を完成した。農民は土に縛りつけられている。労働単位として命をつなぐ程度に米を残すのを許されるが、収穫の大半を年貢として納める。夫役労働を取上げる台帳として村々の戸籍があり、土地から離れる自由は農民にない。武士が町人百姓になることを禁じるのとともに、農民が田畑も作らないのは許されない。百姓は地につきたるもの、である。

農村は、ほとんど自給自足の自然経済で、買う必要のあるものは塩ぐらいで、衣類も女たちの手作りだし、住居も入会地の茅や木材で用を足し、貨幣など持たない最低限の生活であった。土地について働くからこれが可能なのであって、江戸時代の農民は二百年あまりも、田畑から離れることなどほとんど考えられないくらいきびしく狭い鋳型に従って来た。耕地を失うことは無宿者になることで、野たれ死の運命を約束することである。農地を捨て逃散するのは百姓一揆の手段の一つとして、解決の絶望的な場合に採られた。

この嘉永六年（一八五三）五月の南部領の農民の逃散の場合のように各地方の村々の農民が三万人も結合して、武器を持ち、途中打毀しを行いながら逃散したような大規模な騒動は、江戸幕府創始以来、一度だって見なかった出来事である。忍従して奴隷に近い生活をしていた農民が、南部領内の広範囲にわたって準備して事を起した。ペリーが四隻の軍艦をひきいて最初に浦賀に姿を見せた六月三日より僅か一週間ほど前のことである。彼らは国境への関所を破って仙台領の唐丹村に雪崩れ込んだ。一揆を起した時の三万人の人数とは、近代の軍隊でも軍団以上の集団である。

仙台領に入るまでに、彼らは自衛組織を作って行進し、南部領内を長距離にわたって横断した。最初に一揆が発生したのは九戸郡の野田である。「白布の半てんに赤布のたすきをかけたる者百人、浅黄布の半てんに白たすきがけ三百人、何れも武勇の者共集めける。種ヶ島四十挺、かます背負いは六十四人、竹杖に鑓を仕込み、のぼり小旗に小〇と書きたる旗一本、赤根染めの旗一本、白地に壱番と書きたる旗一本、都合三本押立」て、ほら貝を以て行進の合図をした。人を怖れ夜の闇にまぎれて、夜逃げや駆落ちするのではなく、旗を立て大手をふるう行動である。小〇と旗に書いたのは、農民一揆にふさわしく「困る」の表示であった。種ヶ島銃四十挺は、狼が出るのを退治するためと称して以前に役所から借出したものや猟銃である。これも南部の山村らしいことだが、赤旗にあたる赤根染めもむらさきと共に南部の土産で草の根から得た独特の染料である。

準備は前の年から出来ていた。五年ばかり前、弘化四年の冬にも経験があって、六万

両の御用金を領内の町人百姓に分に応じて賦課して来たのに対し最初二千人の一揆が起り、野田の代官所に、射殺した狼の血だらけなのを二、三匹持って来て投込み、どっと、農民がときの声を揚げたので、会所の役人がふるえ上がって逃亡した。小本村の弥五兵衛と言う六十四、五歳の老人が指揮者で、各村毎に印のある旗を立て、各自兵糧を準備し、整然たる行動で南下し始めた。

地方の役人の力では、最早、制止出来ない。この時は冬のことで、雪も地上にあり寒風吹きすさぶ中であったが、夜になって焚火するのがすごい勢のものに見え、御用金の取立てに出張した役人など、周章(あわ)てて逃亡した。宮古あたりの代官所の手勢でも防ぎ切れない。やがて閉伊三郡の領民が一万二千人も集って一団となり、南部の支藩にあたる遠野城下に強訴(ごうそ)に向った。指揮者がよかったので一揆の行動は秩序も正しく、早瀬川原に野営し、「碁盤がかりに四方四面の備えを立て、横立十文字自由に相働き申すべきていに相見え、もっとも寒中の野陣に御座候えば用意金を以て松明(たいまつ)を小山の如く買い調え、四方八方に松明をもやし、前後を定め非常をいましめ、まことに武士にまさってしずまり返って控えたることとて、古今稀なる強訴なるべしと諸人きもたましいを失い、恐れをなした」と言うのが誇張のない姿である。

多勢で盛岡から駆けつけた役人たちが一揆の取調べに当ろうと試みたが、農民たちは受付けず、石のように沈黙している。役人の方が狼狽した。手を尽して返事を求めると、

「願いの趣は相談の上明朝申上度候」と言っただけで、また沈黙を守るのである。盛岡から派遣されて来た重役が、翌朝暗い内に出て行って要求を問おうとすると、「一揆の先手、三笠松のさしものうごかすと見えしが、数万一揆ども、一度にどっと後ろむき、ときの声を上げ、山も崩るるばかりに叫んで、騒々しきなり。」

藩の役人を忌避して、全然、相手にしないのだ。数万人が一せいに背中を向け、ときの声を揚げた。嵐の海を見るように手がつけられなかった筈である。当惑し切った。遠野の役人が間に入って取りなして、ようやく一揆側の意向をさぐり出した。藩が向けた役人の取扱いは絶対排撃して受けようとしない。この結束を切崩しなど出来るものでなかった。

やがて提出させた歎願状には御定役御年貢のほかは、御用金など一円（一切）御免願いたい。毎年米のみならず大豆や塩まで御買上で、支払いもなく迷惑しているところに、今度の御用金で宮古通に三千五百二十七両、大槌通に三千四百八十両、野田通に千四百三十両仰せつけられた。この御用は絶対に撤回して貰いたい。その他のこまかい要求をそれぞれ箇条に分けて書出して、文面は歎願の形だが、強硬な申入れである。藩庁は駅馬を始め、雑多な夫役に百姓を狩出してそれが年々、ふえるばかりだし、あらゆるものに礼金とか雑事銭が課せられる。沿岸地帯で漁に出るが、漁船に極印を受けるのに以前は百文の御礼金だったのが近年は壱貫百文をお取立てになる。漁獲に対しても一貫匁につき弐百文を取られる。年貢のほかに、各種の名目の税が課せられる。百姓は困窮の極

限に来ている。

農民が提出した願向きは十八カ条に達していた。その十二カ条が許可せられ、残る分は盛岡で吟味の上、各代官所に沙汰を下すと回答があった。全部を免ぜられるまで引下がらないと強腰であったが、宮古、大槌方面の農民がこれを宥めて、取扱いを受けることにした。二週間も続いたこの一揆も十二月五日から遠野を引揚げて帰路についた。遠野藩では本所までの食糧として米八百駄を支出し、遠近に依り量を変えて分配し、米より銭を望む者には銭を与え、帰路に乱暴をしないように厳重に言渡して引取らせた。

人数が一万二千人で一揆が二週間にわたって支配階級に抗争したのは、南部藩でも空前のことである。(森嘉兵衛「旧南部藩に於ける百姓一揆の研究」)それに特徴のあるのは一揆の行動が秩序ある統制を以て遂に、弘化四年の御用金の重課をはねのけ、一揆の目的を貫いたことである。これには、良い指導者があったことが与って力がある。前出、小本村の弥五兵衛、栗橋村の三浦命助などが、それであって弥五兵衛などは、六十数歳と伝えられ、天保七、八年の百姓一揆以来、南部の藩政を変革し、自分たち農民の生活を改善するためには南部領内の者全部が結束して一揆を起し藩を覚醒せしめなければならぬ、それで良くならぬ場合は仙台なり公儀に強訴しても目的を達しなければならぬと、前から熱心に村々を説いて歩いていたのだから、事を起した時も一致協力が急速に出来た。弥五兵衛は、遠近の農民の間に「小本の祖父」と呼ばれて知られた。遠野城下の強訴が終って一揆が鎮まってからも、まだ充分な解決でない。また間もなく農民に形を変

えて増税重税が負わされると見て、また村々を遊説に出て、歎願書筆墨料として各部落から一人一文宛て徴収して再起の時の軍資金に準備した。

南部藩では一揆の後で、密偵を放って首謀者の探索を開始し、「小本の祖父」が遠野から宮守、大迫（おおはさま）、雫石あたりまで遊説に歩いているのを嗅出して、嘉永二年の正月に入ってから二子通上根子村で、徒目付工藤乙之助の手で捕え、盛岡に送って牢に投じた。前の遠野強訴から僅か一年三ヵ月後であるが「正月十日過ぎか、二月初めには催し仕り、御在々一統起り立ち、その節には中々、御国にて埒明申さず候間、仙台へ罷越し、松平陸奥守様へ願上げ、公儀へ申上候心根につき」と言うまでに早くも、次の大規模な一揆が組織されようとしていたのである。「小本の祖父」は冬の長い国の寒冷な牢内で、命を果てる。しかし、一味と見られて北郡午滝へ追放された安家村の淀屋敷の俊作、同村の忠兵衛とが間もなく配流地から逃亡して村に帰り、「小本の祖父」の遺志を継いで、次の蜂起の準備をした。

百姓は「多くは封鎖された一藩一村に籠居して世態を知らず、僅かに氏神、おしら神、隠念仏（かくしねんぶつ）を中心に結合して種々の禁忌を遵奉し、ゆい的（協同）耕作をなして、米・粟・稗・菱・蕎麦を生産し、牛馬を飼育し、酒・煙草・灯火を自給し、長い冬の農閑期を手工業に利用し、自らの生活、生産の各要具を自給すると共に剰余を市日に販売し、馬を利用せる運搬労働と相俟って生活費の半を補い、辛うじて生計を保っていた。平常は米

麦を上納して稗を常食とし、生活に窮すれば草根木皮を食し経済余力は殆どなかった。」（前出森博士著書）

「百姓は死なぬように生きぬようにと合点致し収納申付け」と言うのが徳川幕府の農業政策で、これらの零細農家を土台として封建領主、武士、商人から成る社会が成立している。

支配階級が米穀経済から貨幣経済に移行しても、圧迫はいつも底辺の農家に重く掛って来る。武士たちは扶持米を売って貨幣を手に入れるのだから、貨幣の需要が増大するにつれて、最初、四公六民と言われた生産物（主として米）の分配が領主の必要から五公五民となり、七公三民となって行き、農民に誅求（ちゅうきゅう）が苛酷に掛って来る。米の掠取である。農家はやがて豊作の時には特に米を手もとに持ち得なくなる。権力を以て、そうするのだ。その上に南部地方には、よそよりも農作にむごい天候の激変が多かった。その場合、農民を訪れて来るのは饑饉である。封建制度は、領主に依って国が分かれている。藩毎に別の国であって、饑饉の場合の協力関係は行われない。その善意が働くとしても交通輸送の不便は、現代からは想像のつかぬものなのだ。昔の饑饉は、貨幣があっても解決のつかぬ極度の性質のものだった。

江戸時代初期の南部藩は、砂金、馬の産出がある上に米作も豊かで、五、六年に一度の凶作があっても、藩の財政に動揺のない富裕な条件に恵まれていた。これが太平の時代に入って軍馬の需要がなくなり、あまた在った金山銅山の廃坑が続いて起ってから、

藩の財源は急速に涸渇して来た。中期に入ってから藩は北辺の防備の任を受けて、松前に出兵し、財政窮乏の折りから、警備の費用が容易ならぬ負担となった。この場合でも封建の体制下では、公儀や隣国に対する体面があって支配階級はお上の御威勢で圧制を庶民階級に振り向ける。藩士の俸禄返上、独占専売制度、新税の創設、御用金の徴発、米雑穀の強制買上げなどと、考えられる限りの対策を行なうのだが、そのために商人階級が利益する機会が多くなり、宝暦の饑饉以後になると、町人が勢力をひろげて社会的に重要な役割を演ずるようになる。藩の財政の窮乏に乗じ貨幣の力で種々の利権を獲得し、重要産物の専売などに依って、以前は庶民のものだった利益を吸い上げて壟断する傾きが生じた。物価が騰貴するのは当然である。村々でも貨幣が入用となる。売りに出すような米は最早残ってないのである。

高利貸が村に入って来て、土地を収奪し、昔からの農家が、小作農、名子、日雇に転落して行く。高利貸や地主の出現と町人の勢力勃興は、幕末のどこの藩でも共通して起ったことだが、海運がさかんで農民も商業の余慶を受けた長州藩や瀬戸内沿岸の諸藩と違って、南部地方のような農産水産に専ら依存する藩政では、町人階級も他国から入って来た近江商人などが利権を収奪して、領主とともに農民を圧迫する側に立つ。農民たちは、搾るだけしぼられて、しぼりかすのようになっていた。南部藩では領主が元和元年に入国して以来、二百三十年間に、およそ五十回の歴史的な凶作饑饉があったことが記録された。五、六年毎に必ず、天候の不順が起り、その度に農民に餓死者を出す。封

建制がきびしいので、領内に食糧が尽きても、「穀止め」で他領から応急の食糧を得る道がない。

饑饉の惨害を専ら受けるのも田畑を守る農民であった。徳川氏には農業政策はあったが、農民政策はなかったと、言われても否認出来ぬことだ。凶作の場合、餓えて野たれ死するのは、武士や商人でなく、皆、田畑を守る人々であった。人為的原因に依る苛酷な宿命が天災に伴う。封建制度が「穀止め」を行い、しかも百姓を不作の土地に縛りつけて、動くのを許さぬ。百姓は、社会経済の変化とともに住みにくくなる一方で、いつも天災を受けとめる役に立たされていた。

封建時代の地方の凶作による饑饉は、ほとんど今日考えて真実とは思われぬ程度である。感情も人命も無視したアジア的と言ってもよい現象になるのである。例えば天明三、四、五年を中心とした数年にわたる凶作に依り、南部藩の総人口の四分の一に当る七万五千百八十人が餓死した。その数カ年に、中央からも近接の他領からも救援なく見捨てられる。しかもそれが制度に由来するものだから、怖ろしい。

東北地方を旅した橘南谿がその惨状を記録している。

「天明三年卯の春奥州羽州大いに饑饉して、人、相食うに至れり。その頃京都にて南部津軽の困窮の沙汰おびただしく聞えて人々聞き知れることなり。予が奥州に入りしは午年（天明六年）の春なれば、もはや国も豊かに食もたるべく思いしに、卯年の饑饉京都

にて聞きしに百倍の事にして、人民大かた餓死し尽して、南部津軽の荒涼なる、まことに目もあてられぬ事どもなり。

先ず出羽国秋田を過ぎて東北の方に入る事数十里ばかりなりしに、路傍に人の髑髏あるいは手足の骨などあり。皆、いと白がれたり。異様なるもの見るも不祥なりとて顔をそむけて通り過ぎつるに、一里一里進み行くほどに甚だ枯骨多く、朝の間は五つ見し午過ぎて十四、五も見しと言うほどに、その翌日は二、三十も見つれ、またその翌日は五、六十もありというにぞ。後には目なれて格別に不祥とも覚えず、杖もて動かし見るに火葬せし髑髏と違い生骨の事なれば、牙歯も全く備わり、婦人の顔あり、小児の頭あり、老人壮者皆それぞれ見わけつべく、肩肘そのほか腰眼等の骨の模様、逐一にくわしければ、よき医者の稽古なり。丹生（連れの者）によく見よなど進（勧）めて道すがら見る事にはなりぬ。なおこの他、路傍五町七町ほどずつには塚の形ありて、いまだ草も繁らず、その上にあやしげなる塔婆に餓死のもの幾百人埋葬の塔婆など書きたるあり。（中略）これその土地のものにあらず、饑渇に堪えかね他国にのがれ出て命をつながんと、南部津軽の地より出で来たるに、途中にて行倒れたるものどもなり。

それより津軽の地に入りては枯骨甚だ多く、田の中、畑の上、溝の中、軒の下など満ち満ちて珍しからぬ事なり。津軽の入口碇ヶ関という所は町中に温泉もあり、諸方よりつねづねは入湯の者も多く、この辺にては最も繁華の地なり。此所に一宿せしかば亭主に此所の荒れたる事を尋ねる。亭主いう。此所は三百軒の所なるが、大かた餓死して人

の活き残りたる煙の立つ家は、今わずかに八十軒にして、その中に男子は多く死して、今は生残るは大かた女ばかりなり。男女配合して見るに男一人女四人半にあたるという。

それより段々と奥深く入り行くほどに、荒れたること甚しく、外が浜通などにては、一宿一在所一軒も残らず、皆死に絶えたる所甚多し。たまたま一村に活きてある人も、ようよう細々と煙を立てる家二、三軒、あるいは五、六軒ばかりあり。青森などは津軽中の第一の大湊にて殊に繁華の地。遊女町も常々さかんなる所なるに、その荒れ甚し。善知鳥（うとう）の宮のあたり、もっとも甚しく、宮も頽廃し、安方町八百町のところに今は僅かに三十七、八軒残れり。そのあと皆、死に絶えて軒端やぶれ壁崩れて、町の傍のみ残れり。外が浜など通行せし時も向うに見ゆるこそ家建も大に見え、家数も数百連なれば、行きて休息せんとするに、煙たつ人の住家は一軒もなく、ただ茅葺（かやぶき）の屋根のみ残り、風雨に壁崩れ障子破れて、かまどのあたりと見ゆる所に例の髑髏骨ころころと残り、あるいは夫婦と見え親子と見ゆれども、誰れ取収むる者もなく、そのあわれ、中々いうもさらなり。農夫浪人も大かた死に失せて、早朝に宿りを出るより夜のやどりまでは、人影というものは逢見ること稀にして、ただかの白骨の路傍にみちみちたるに、目の穴口のはずより、いと白き細長き草生い出たるが、風にひらひらと吹きなびきたるさま、しきりに心細く物すごきに気おとろえ、足つかれ腹さえ餓えたれば、草原にしばし休らい、いかに国の限り尋ね探るもよき程なり。この奥に用事ありというにもあらず、いざこれより引返さばや」と連れの者に告げたのだが、勧められてまた前進して行くが、夜毎の

泊りに饑饉の年の話を聞くと、おそろしいことばかりである。

「さて夜毎の泊り泊りにて、その年の事ども尋ねけるに、あわれにも又おそろしき事ども数々なる中に、女鹿沢という所に宿しける時、その亭主の語れるは、卯年饑饉に及び五穀既に尽きて、千金にも一合の米を得る事能わず、草木の根葉その他、藁糠あるいは犬猫牛馬鼠鼬に至るまで力の及ぶほどは取り尽して食し尽して、後には道路に行倒れ、みちみちたる死人の肉を切取り食う事になりける。」

重い運命を背に、牛馬のようにただ働いて来た百姓たちを、饑餓が追詰める。救うもののない世界である。パール・バックにシナの黄河の洪水を描写して、氾濫する水に両親が赤子を投込んで自分たちが生き残ろうとする。あれは大陸に起る天災の場合であるが、これは災害だけでなく社会構造から百姓たちに困苦が集中せられるのだ。人間が死人の肉を切取って食うまでに変化する。「是も久しく饑えて自然と死にたる人の肉ゆえ、既に腐りたる同然にて、その味甚だ悪く、生きたる人をうち殺して食うは味も美なれば、弱りたる人は殺して食うも多かりしなり。」

既に地獄の形相となる。宿屋の者がこの村にあった事実として南谿に伝えてくれたのである。

「この近隣にも家内追々餓死して、親一人むすこ一人のみになれり。隣家に行って言うよう、さてもお互いに空腹なる事なり。我家にも既に家内みなみな死に失せしに、御覧

の如く今は男子一人のみ残れり。是も殊の外にかつえれば、二、三日の間には死すべし。とても死にゆくもの、いたずらにせんよりは、息ある間に打殺し食せんとおもえども、さすがに親の恩愛手ずから打殺すに忍びず、此故にそこもとに頼み申すなり、我子を打殺し給らば、その御礼には肉半分を贈り申すべしと、まことしやかに頼むにぞ、隣家の男大いによろこび、半分の肉をだに給らばいと安き事なりとて、やがて有合いける鉈を携え行って打ちけるに、さなきだに死せんとせしむすこ只一打に息たえぬ。かの頼みに行きし親、傍に見居たりしが、すかさず隣家の男をまさかりにてしたたかに打つ。隣家の男も饑え疲れたる所なれば、何かもってたまるべき、そのまま息絶えたり。さて一計策を以て両人の肉を得たれば、早速に二人とも料理して塩漬けし置いて一月ばかりを凌げり。近所へは隣家のもの饑えたるあまり此の子を打殺し喰わんとせしゆえに、仇を報ぜりと吹聴し、公然として二人の肉を甘んぜり。近所のもの、その姦計をにくめども、皆々うえつかれて、相互に親子兄弟と言えども打殺し喰う時節なれば、誰れ咎むるものもなかりしが、彼の男も遂に餓死し終れり。」

南谿が泊めてもらった家は、土蔵四、五棟もある大家で、米も雑穀も貯えがあったが、近所の者に少しずつ出してやっている内に、「世間の困窮益々甚しく、他国よりは一粒も入り来たらず、このていにてはやがて我々も餓死すべく見えぬれば、その時にいたり急度思案を改め、とても一国の人民を救わん事、千石万石の米にて足るべからず。せめては我家に年来養うところの男女の命を救うべしと、それより他人に与える事をやめて、

わずかに一、二十石残れる米を我が人数の用となして居たりしに、饑渇のもの日々多くなり、食を乞うもの山のごとくに出て来たり、後には数百人みだりに家の中に押入って食物を奪い去る。その勢い次第につのり、昼夜の差別なく数百人攻め来るに、食物を奪われては家内の存命かないがたければ、手勢にてこれを防ぐに、敵は大勢なれども数日饑えつかれたるものどもなれば、味方一人して敵十人を拠りちらす。されどもこの働きに昼夜もいとまなければ、三度の食事という事もなく、漸く握飯を立ちながら喰うて、飯をたく事かない難ければ、土蔵の中に閉じ籠り家内のもの入れ替りて飯をたきて握飯を調う。諸方とも皆この如くなりゆけば、饑えて食を奪う手だて尽きて、それより大勢松明をともし来たりて、家毎に火をつけて、そのまぎれに食物を奪い、国中一統に日夜の放火おびただしく、某（自分）の家へも日夜大勢来たりて火を放つ。家土蔵を焼かれては籠るべき所なく、また家内皆餓死に及ぶべしと、昼夜火を防ぐ。屋敷の構えの入口入口、軒端に人を分けて張番してこれを防ぐに、僅かに三十七人の手勢、中々行きとどかねば、きょうは家も焼け失せぬべき、あすは土蔵も焼落されんかと、安き心もなく、（中略）（その内）天の時いたりて秋田より米入りたり。またこの国の人民も餓死すべきものは大かた死につくして、乱暴もすこし静まり、不思議に三十七人の家人、一人もつつがなくて今日にいたれりと語る。」

中世の餓鬼草紙そのまま、現実が地獄の姿である。南谿の報告が作りものでないことは、天明の凶作の状況を記した「動転愁記」がある。著者は明らかでないが遠野あたり

に住んだひとの日記である。

「盛岡御家中四戸覚右衛門殿知行三戸在にて、実子二人食殺し候女これあり、捕人遣わせられ候ところ山に駆け入り、漸く尋ねさがし鉄砲にて打留め候由。」武士は、辛くも道徳を守っている。「何処の女にて候や、早瀬川原へ七、八歳の娘を召連れ、石を枕にさせ初めは髪の虫など取りくれ候ていに見え候ところ、手ごろの石を振上げ力に任せて頭を一打うち付ければ、わっと泣出し、以来は喰いたい喰いたいと言わぬ故ゆるせゆるせと詫びすれども、めった打に頭を微塵に打ひしぎ、息絶えもせぬに川に押入れ、その身は目をすりながら行方知らずになり候。諸人見聞の人落涙せぬはなし。」

四

南部領の嘉永六年の一揆の相談は、三月に入った頃から行われていた。野田の山中に火の手を合図に数百名の百姓が集って手筈を合議した。遠野唐丹寝物語には「野田と云う近辺に八方より見える高山あり。一両日前夜、毎夜、夜中に及び彼の山に野火の如く火燃え上がり数多の百姓集り夜明け退く事三夜なりと。右の趣き官所へ注進ありければ、官所にても隠密をもって事の様子を伺いけれども何事か更に知れず。」

極めて巧妙に計画せられ準備を進めた。これは弘化四年の遠野の強訴が、その後願いの条件が破棄せられ、効果なかったどころか、以前に増して重税を課せられたので、田

ノ畑村の忠兵衛、喜蔵、多助などが村々を糾合して大がかりに仙台領へ越訴を企てたのである。前のように藩を相手に取るのは無益と悟り更にきびしい手段として他領に出ようとした。

「三閉伊愁記」に「お国の内には、とても難住の間、浦々の船共を奪取、漕出し、唐天竺の浦々なりとも風に任せ漕付け候てもこれより住みよからん。これほどの艱難せば何国なりとて住まれぬ所やあるべき」と言う考え方を百姓が持ち始めた。極端に追詰められた決心である。

ロシア人が北辺に現れるようになってから、藩では松前出兵などで入費に苦しみ、この春に二度も御用金を申渡して来た。北上川一帯の農村が、前の凶作饑饉の痛手から回復していないので、太平洋沿岸地帯から取上げざるを得ない。遠野強訴の原因となった巨大な御用金を、一旦取下げながらその後再び上納を厳命して来た上に、別に新しい調達を企てた。

財政の窮乏を打開するために町中で金を献上した者を士分に取立てる例があった。その中から、もと煙草職人の石原安兵衛と言う者が、同じく町人から出世した中島李右衛門、田鍍茂右衛門とともに若年寄に登用せられて、政治を左右するようになり、藩の蔵元の大坂商人、鴻池伊助、肥前屋篤兵衛に加えて地元の井筒屋、鍵屋などの豪商に金銭預切手を発行させ、これを租税として徴収すること、何時たりとも正銭と引替えることを条件として、藩内に強制通用させ、これで直ちに藩士の給料などを支払った。

融通力なく信用のない預切手が領内に氾濫したので物価の奔騰を来たした。正金は姿を隠し、切手の引替えは延期を続けたので、購買力は下落し、その間にも手に詰って小額の切手を出したので、商人は嫌って物を売らなくなり、その穴埋めがまたしても百姓の負担に課せられた。豊作の年だったことがかえって農民の禍となるのだ。武士たちも窮迫した。殊に献金や賄賂で町人が士分に取立てられた成上りの役人の富裕なのにくらべて、彼らに押しまくられて失脚した武士たちが術なく不平でいる。彼らは俸禄を削られた上に、預切手で扶持されたのでは、昔のように衣食出来なかった。生活の為に盛岡を離れて、野田あたりの農村に引籠っていた者たちがある。その者の中から農民に同情し一揆に加勢して、戦術に助言を与える者が出た。田舎にこもって、釣をしたり寺子屋風に読書きを教え、謡曲の師匠などして生計を立てていた者たちである。藩士の身分だが、とっくに階級から離脱していた。金のある町人の藩政への新規登用と言い、浪人が農民に加担したことは封建の秩序が持ち切れなくなって一部から崩壊し始めたわけである。封建の名分は既に立てられなくなっていた。町人の一部が旧武士を追って藩政を指揮し、農民を搾る仕事に参加し士分の間から農民に加勢する者が出たのである。

農民が祖先伝来の土地を捨て、唐天竺にでも渡って住もうと、考えるようになったのは、封建の秩序を根元から揺さぶって顚覆に近付けるものであった。三月の御用金収奪を見て、野田通の百姓が先ず蜂起し、代官所を襲おうとした。代官の側でも盛岡から同心組二百名の加勢を得て鎮圧の態勢を取り、願いの筋があるなら盛岡に取次ぐから穏や

かにせよと申渡した。

「百姓の中より五、六人進み出て申す様は、我々共、願いの筋とても更に無く御座候。かねてお上の御触れには、御用金を納めかね候者は勝手次第国元を立退き候ように、仰せつけられ候間、我々この度他国へ罷越し日傭を働き、また奉公にても仕り、御用金を上納奉り老人妻子を養い度く存じ立ち候なり。依ってここお通し下さるべしと申しける。」（遠野唐丹寝物語）

抵抗出来ない言分である。だが耕作者を失った土地は、最早、田でも畑でもない。饑饉の時とひとしく不毛の荒野に戻るのである。役人側の返事を聞こう。

「御役人これを聞きて、成程もっともなる申分なり。さりながら大勢来たることなれば、只事ではあるまじ。一々申すべし。さなくば一人も通すこと相ならず、と力み返って申しければ、百姓どもこれを聞き、声を荒げ、その方どもの知れるところにあらず、先年遠野様お引受けなされ、御書付を下されてさえ解らぬ者を、汝等成上りの身として取上げようとは片腹痛し、匹夫に劣るその方ども何が解るものか」と、罵り返す気勢である。

「役人大いに腹を立て、百姓分として上を恐れざる過言、不届者と叱りければ、百姓共カラカラと打笑い、汝等百姓などと軽しめるは心得違いなり。百姓の事をよく承れ、士農工商天下の遊民、皆源平藤橘の四姓を離れず、天下諸民皆百姓なり。其命を養う故に農民ばかりを百姓と云うなり。汝等も百姓に養わるるなり。この道理を知らずして百姓

などと罵るは不届者なり。そこをのけて通せ、と大音に呼ばわりければ、役人大いに腹を立て、過言千万用赦ならず、一々引取縄を掛けて城下へ引けと、下知をなせば、百姓共カラカラと打笑い、一万人の縄代と御伝馬代を取るのが上分別、犬や猫にても、おのれ等の縄に掛るものか、グズグズ言わず、そこ通せ、異議に及ばず皆殺しと言葉の下より相図（合図）と見えて、一番の旗を二、三度振り回すと、一万余人の人々、一度にどっと鬨の声と諸共に、押寄せ来る有様は、今や天地もくつがえすかとあやしまれ、あだかも津波の湧くが如くなり。」

武士たち二百人としても、百姓は一万人を越す人数で、押合い打合うとなると、阻止出来るものでない。力と力とならば身分についた相違はない。盛岡から来た役人が右往左往して散乱して逃げ隠れ、指揮者の代官藤井又蔵が鬨の声におどろいた馬から逆さまに田圃に落ちた。「これを見るより寄手の中より若者一人馳せ来たり、藤井を押え取り、藤縄をもって松の樹へ逆さまにくくりつけたり。藤井の陣羽織を旗印になし、大小・駕籠・鎧・挟箱はこなみじんになしけり。」

昔のこの種の書きものにつきものの癖はあるが、実状から遠いものではない。一揆は一万三千人となった。南下して、かねて金納に依り武士に取立てられ、大披鉄山を管理して村民を鉱夫に徴発して酷使した佐藤儀助と言う男の屋敷を襲撃し、鉱山の設備を破壊し、資金を取上げ、次いで野田村、苅屋村の徴税役人の屋敷を襲い、宮古に入った。

先発に人を出して家毎に参加を勧誘し、村の肝煎りに交渉して、人数を出させた。承

知しないと火をつけて焼払い、家蔵を打毀す。日頃、強欲で庶民を苦しめたと知られた地主、高利貸、租税徴収所、輸出入税取立番所など次々に破壊し、人数は進むほど増加した。手がつけられなくなって役人は逸早く逃亡し、無人の境を行く勢いで南下し始めた。この大行進には、男だけでなく女子供も加わっていた。

「或は笠編笠等を冠り、幼を背負い、或は風呂敷包等腰下に銘々椀を下げ、扇子或は団扇を持ち、鯨を揚げ、貝を吹立て、老小男女打交り、女は幼子を背負い、或は抱き、押入、たすき、人数の外何れも叺風呂敷包を背負い、村毎に手拭類の物を携えて騒ぎ立て、人数の多少に拘らず一ヵ村を一組と定め、未の刻より申の刻まで引も切らず、鬨を揚げ貝を吹き棒を振回しながら理不尽に山田町に押入り人数大凡八、九千人なるべし。その内極老の者も見え、婦人は稚子を抱きかかえ、或は背負い、坊主、山伏の類まで押入りは只事ならざる有様」と言うのが山田町へ入って来た時の姿である。女や子供も入り濁流のように雑然と押入って来る大集団なのであった。「あまり愁訴の人数大勢にて御役人何方へ罷越候や分明これなく」と称される。

山田町に入ると、ここで休憩し、一揆中より老幼婦女を帰国せしめ、一揆を整頓し大槌町に押寄せ、所在に人を合流させて、なお前進した。

九戸郡の野田を出発してから大略百キロの距離を歩いて、六月五日に釜石に達した。その時は一万六千余人の団体である。前進して隣国の仙台領へ入る予定だが、弘化の時のように遠野に出ると言い触らさせた。国境を突破して他領に入ると知れたら南部藩が

天下に面目を損ねることで、武力で干渉妨害に出るに違いないからである。山田を通過した時分から、地方役人は勢を食止めることが不可能と見て、急に一揆を懐柔する方策に出て、宿役人などが出て宿舎を割りあて、酒・餅・飯など出して機嫌を取り、乱暴させぬようにした。

越境して仙台領に入る危険を感じ始めてから出役の役人たちも、採る処置に窮した筈である。「遠野唐丹寝物語」に言う、釜石に入ってからである。「ここに盛岡役人、平田村猪又市兵衛を呼寄せ申しけるは、この度押寄せの者ども他国へ越し候趣きに相聞え候なり。大勢の事なれば、なかなか止る事叶うまじ。さればとて、止めんとすれば毛を吹いて傷を求むるの道理なりとは云うものの、見逃がし通しなば、吾々共無調法または他国に対し面目なし。それに付いてはよき工夫もあらば、取計いくれ候ように。」

平田には国境の関所がある。これを一揆が破り隣国に逃散することがあっては一大事だと言うのである。

この猪又市兵衛と言うのが、役人の意を迎え、警備してある本道に一揆の人数を通さず間道を行くように仕向けた。好意あるらしく金を与え、平田関所が盛岡から出た兵力に鉄砲を持たせて固めてあるから突破するのは容易でないと告げたので、一揆は関所破りの罪を被るのを避けて、教えられた篠倉の間道に出た。

これが女子や老弱の通れるような道でなく険岨な道で、これらを釜石に返し屈強の若

者ばかり越境したが、夜に入ってから二万九千人の半分が落伍して帰る者を多く出して、朝になって無事越境したのを見ると一万三千人ばかりだったと言う。計略で、道でない道に追込んで一揆を分裂させたものである。それにしても、その日の九つ時分、仙台領の唐丹村の東片田浜に一揆の人数が入ったのを、知らせを聞いて仙台藩の役人が来て見れば、「数万の百姓にて浜辺も山も皆人なり。」

実際に越境した人数は八千人以上と算えられた。記録のあるものには仙台藩の役人が間道を来るのは許されぬ、本道を来よと命令したので、また道を引返して平田村の関所を通って仙台領に入ったと書いてある。罪を軽くさせる配慮だったのだろうか。仙台側の調べでは、平田の関所にいた南部の役人が、朝のうちは二百人もいたのだが、午後になると逃げ隠れるように引上げて行って、ほとんど無人になっているのを承知していたというのである。

盛岡から一揆鎮圧の総大将として家老南部土佐が三百人あまりの手勢をひきいて出役したが、一揆の猛勢に大迫町に滞在したまま施す手段もなく見送っていた。その間に二万に余る大一揆が釜石に向い、租税取立役所や高利貸などを襲撃し、警備の役人たちは一せいに逃走して、国境の番所も防ぐ者なく通過させたものだった。

知らせを受けて仙台藩から役人が出て取調べに当った。越境した人数は記録により一定してないが、実際に仙台領唐丹村に入って給食の手当を受けた人数は八千五百六十五人であって、一揆が書付けにして仙台領民になりたいと志願していた人数は、遥かに多

く一万六千人である。これは南部領で準備した際の人数で険岨な道に途中で落伍した者が夥しく出たせいもあろうし、仙台領に入ってからも、やはり自分の土地や妻子に心を惹かれて、離脱する者も次第に出た。百姓が住みなれた土地から離れるのが不自然で異常の経験なのである。その後、最後まで仙台領に留って故里に帰ろうとしない覚悟の人数は二千九百九十七人であった。一揆の性質として、おどされて狩出されて参加した者、女子供が加わっていたとしても三万人に近い大集団が三十里にわたって領内を横断し、隣国に越訴する勢を見せたのは、前例のない騒動であった。

彼等は仙台領に入った山野に蓆を敷いて静粛に控え、仙台藩の役人の取調べを受けた。その間に狼狽した南部藩から引取り方を申入れに使者を寄越すと百姓たちはいきり立って罵って追返した。何を願い出るのか、と吟味すると、先の領主南部甲斐守が江戸に隠居させられたのに盛岡に戻ってもらいたいこと、この度罷越した百姓の全部を御抱え願って生活出来るようにして頂きたいこと、または閉伊三郡を公儀の御領にして下さるか、それが出来ぬ時は仙台様御領にして下さるように、との願書である。百姓たちが南部藩の政治を否認し、領土の一部を天領か他領に変更して貰うように望んで出たのである。慈悲を願うのではなく、藩政を拒否する内容なのである。

仙台の家中も封建の体制下に在るものだから、これがどれほど容易ならぬ破壊的願望なのか解るから、おのれ等は不届者である。下として上を謀る条、謀叛と同様である。さようなるたわけ事は当国にて受けらるべきでない、と叱りつけて、拒否して立去った。

仙台側のこの形どおりの名分論で、一揆の側でも失望して離脱して行った人数もあった。しかし、大部分の者は残って居坐っている。仙台藩では食も与えねばならなかった。改めて代表者を陣屋まで呼出して彼等の意志を確かめて、くわしく取調べると、一揆の原因を四十九ヵ条に分けて申告した。藩政の圧制に依る窮迫の事情を箇条にして書出したものである。これは重税に反対し、諸役人がやたらに増加し、そのために負担が農民にかかることなど、逐一書立ててある。内政暴露で南部藩としては立つ瀬がないことである。寺社奉行を仙台の陣屋に寄越して何とかして百姓を引取ろうと苦心したり、寺の和尚などまで向けて説得を計ったが、この願い成就致すまで帰国しない。四十九ヵ条相叶わざる時は仙台領民にして欲しい、「大工もあり、鍛冶屋もあり、また舟乗りも有り、百姓も御座候間、御当国にて御使い下され度」と決心を変えない。

封建時代の農村で僧侶の権威と信望は大きい。殊に盛岡の本誓寺の院家と言う格の高いのが、頼まれて百姓の説得に唐丹村まで来た。一揆の代表を呼出して希望を聴くと、自分たちを公儀の百姓か仙台藩の百姓にしてくれるか、四十九ヵ条の願いの筋を文政の昔どおりに戻して欲しいと主張する。坊さんの方は現状維持の神経しか頭が動かないから、「上と下との習にて、たとえてみるならば高き天のつぶきは自面を汚すの道理なり。汝ら返って糺命受牢会をなし、その上にて終には命をなくし、骸は川原にさらされ、跡を弔う人もなく、あまつさえ名を悪人と人に呼ばれ、この世からなる地獄の苦しみ、こ

の理をよく考えて、改心をなし強訴の儀は止るべし。さある時は、過って改むるに憚ることなかれ、且君子は罪をにくんで人をにくまざるの道理なり。我等代って国主様へお願い申上げ、汝等の命乞いをなし、我が身にして、若き者はもらい下げ、元百姓となし、汝等（責任を取り）坊主になればとて妻子に別れるにあらず、我が宗門の有難きことは、妻子なりとても妻子に離れず。天窓の丸くさえあらば、その身そのまま家内むつまじく此世からの仏なれば、御上に於ても御用捨下されることは我れ受合なり」と大層有難いお説教をしてくれた。

仙台藩でも多人数の一揆に食を与えていつまでも預かっておくのは閉口なので、村々の代表を一両人ずつ残し、他は帰国しても咎めのないよう南部側に交渉して、百姓たちを説得した。そこで四十五人が残って、先発の二千余名が唐丹を出発して帰った。仙台藩から見送りの御小人百名ほどが、国境の平田まで行ったが、南部側からは連絡に役人が一人も出ていない。関所は空っぽで、百姓たちは仙台の人々に礼を言って大手を振って通ったが、間もなく鬨の声が起ったので何かと思うと、仙台領へ逃散の時、通れないような悪い路を教えて、一揆が割れるようにした平田村の市兵衛の家を襲って、粉微塵に打ちこわしたのである。

翌日にも二千人ばかり帰国した。この日は盛岡側は二百人ほどの人数が警備に出た。すると百姓たちは、唐丹の役人に対しては土下座して礼を言い、「盛岡の役人に向っては尻をまくり、棒を出し、こぶしを握り、頭をたたくまねをして通り行き」反感を憚ら

ず露骨に見せた。

本誓寺の院家さまは、あとに残って一揆の総代四十五人を説き伏せる任に当ったわけだが、三人の代表が帰って有難いお話を取次いでいる最中に、野田の者が使いに来て、故郷では盛岡から役人が来て一同の親、兄弟、妻子を召捕ろうとしたと知らせた。百姓たちはまた不穏となり、もう一度仙台領に戻ろうとして出発したところが、宮古通り中ノ台と言う場所に数百人の役人が出て、弓、鉄砲を構え陣幕を張り、遂に発砲したので、馬之助、大助の両人が先頭で打破って通ろうとしたが、馬之助が射殺され、一同は山に隠れ、間道を通って出ようとしている。噂ではこちらの四十五名の者もだまして引取り、国中を引廻した上で村々で仕置きにかけ、「その類をたやすとのこと」だと知らせて来た。

これで一同が最後まで抵抗して、始めの計画をつらぬく決心となった。返事を待っている本誓寺の老僧に向って態度を明瞭にした。「百姓ども外に願いも御座なく候。御院家様は御国の事御存じなきものと相見え申す。」とにもかくにも御捨て置きください、と言うのである。

南部藩では、百姓たちに白昼関所を破られ、大挙して隣国に越訴したのを、外部に漏れぬように隠すのに汗をかいて懸命であった。大披の鉄山が破壊されたことも、領内に向って何とか言いまぎらそうとしている。決して村方が困窮の為にやったのではない。そとから入って来たのが、「無頼の悪党ども打寄り、奸計を以て百姓ども狩立て衆力を

相たのみ、人家へ押入り、金銭持取り強盗の業に候。」その上それぞれに手当てしたから、城下は勿論のこと他の村方にも一人として入ることは出来ない、と触れを廻した。

しかし、実際のところ二万人もの一揆が押寄せ津波のように領内を横断して隣国へ入ったのだし、それと聞くと、他の地方でも所々の農民が蜂起した。仙台側からも抗議して来たのだが、藩を支配していた役人が、藩主の耳にも入れず、秘密に解決しようと計った。その結果はいよいよ混乱したものになり、仙台に越訴した百姓の大部分が帰ったのを見ると、一度引上げた租税取立ての役人がまた職務の執行に村々に入って来たのだから、無事では済まなかった。

百姓たちは言立てた。我々は仙台様お預りの者で、言わば仙台の百姓なのだ。この土地だって、やがて仙台の領地となるかも知れないのだ。

ここまで来ても、南部藩の当局はこの一揆の新しい性質を理解しなかった。在来、幾度か繰返されたように愁訴や嘆願ではなく、これは藩の政府を否定する革命的性格のものである。そんな大胆な反抗を農民が抱き得ないと信じているから、藩では封建領主の体面の問題と考えるだけで、内外に隠して始末する方針であった。

他の地方では稀れにしか起らないような饑饉で鍛えられた農民が真実に必死の境地に追詰められていた。妥協しないわけである。家中でも老臣とも称し得る経験ある人々の中に農民に同情者が出た。このまま捨置けば南部藩の運命に影響が及ぶと見て、藩主に

警告しようと企てた。町人出身で藩政を支配している者が自分たちの失政が現れるのを嫌って、これを阻止し、逆に謹慎を命じた。沙汰を受けた者の中に遠野の領主まで入っていた。小一揆が各所に起った。仙台領の唐丹村にいる四十五人の総代からは、もう一度、皆で逃げて越境して来るように、その節、村の百姓の人数や牛馬の数を調べて書出して持って来るように、と指令した。これは、土地ぐるみ南部領から分離して、仙台領にして貰おうとする予備行動である。封建下に型破りの計画と見るべきものだった。

七月に入ると、遠野に再建された役銭取立所が表と裏とから放火せられた。発見が早くて大事にならなかったが、一日おいて数百人の一揆が襲って来て、徹底的な打毀しを行なって、姿を隠した。月のなかばに入ると、野田通りに一揆が起り、千六、七百人の農民が結束して、再び南下して仙台領に越訴しようと行動を起した。唐丹村にいる四十五人の指令に従ったものである。

藩では出兵して宮古の女遊部河原で、これを食止め、大砲まで打込んで、双方が武力衝突に入った。厳重な警戒線を突破することは困難で山地の密林に逃がれ、一部の者二百人が間道を通って仙台領に近付き、四十五人の者に連絡し、約束どおり一揆を起して来たが、ここまで来て藩の警戒がきびしく前進出来ないと知らせた。

八月に入ると、大槌通りに起った別の一揆がまた二百人ほどで間道を越え仙台領に入ろうとした。役人が押留めようとすると、願いの筋はない、唐丹にいる仲間を見舞に行くのだと言立て、制止するのを突破して越境した。その他にも、反抗して蜂起した小暴

動は一々、挙げるわけに行かない。皆、愁訴ではなく逃散が手段でもない、徹底的に反抗する行動である。唐丹村の四十五人の者からは、もう一度、決行すれば仙台藩の方でも三閉伊を仙台の領分にしてくれそうだから、一統そのつもりで村々の肝いりが指導して出発して来るように、と郷里の村々に向って督促した。中央では幕府がペリーの黒船の騒ぎで地方のことなど構ってやれない。この機会に百姓たちを騒がせて土地を併呑することも出来そうだと仙台の家中でも考える者が出たのだろう。領主の威令は行われず百姓が帰就を決定する力を持つように見えた。昔は起ることのなかった事態なのである。仙台藩でも、南部側に解決を請求しているのに誠意ないと見て、これまで隣国のよしみとして公辺にも伺いを立てずに来たが、百姓が安心して帰郷出来ないようならば気の毒だが、幕府に届け出て、何分の沙汰を仰ぐようにしたいと通達した。

南部の当局は俄かに狼狽した。緊急の対策を施さねば藩の破滅になるかも知れない。周章(あわ)て始めると、もろく弱かった。一揆の願い条を吟味して大半を承認し、首謀者の家族で投獄してあったのを直ちに釈放すると答えて来た。四十五人の者は必死の覚悟である。帰村の儀不承知と言出した。ここに到って、仙台藩でも公儀の老中久世大和守に内々に事情を伝え、四十五人を唐丹から離れしめ仙台の城下に送って南部藩との交渉を拒絶した。

最早嘆願は百姓たちでなく、南部藩の仕事となった。水戸の烈公や、阿部伊勢守以下の老中に運動して内済にして貰うよう嘆願して廻った。仙台藩にも再三、頼み入れた。

一揆が望んだとおり当路の者を罷免し、却下した条件も大方認めることにして、仙台藩から四十五人の者を説得して貰うように頼み入れて全面的な降伏であった。百姓たちは、始めて武士を軽蔑することを教わった。南部に関する限り、武士階級の農民に対する支配力は急速に衰弱した。「かかる目出度き世と成りしも皆、我々共の命を捨て働きし故なるべし」と百姓たちは町人に向って威張ったと言われる。「以来、神仏を拝まんより我々ども拝めなどと申触らす。」百姓一揆が、武士に勝つ時代が来ていたのである。

五

南部藩は本来、天然の条件が悪く饑饉までが見舞い易いのだから、例外的に不利な立場だろうが、百姓一揆は天正十八年（一五九〇）から慶応三年（一八六七）までの二百七十八年間に日本全国で二、八〇九件起り、一年間の平均は一〇・一件になる。これが幕末に近付くほど頻繁に沸騰し、天明六年に三三、同じく七年に四四、天保の十四年間には三五九件に達している。（青木虹二「百姓一揆の年次的研究」に依る）

天保八年には幕府の元役人（与力）であった大塩平八郎が救民の旗印を掲げて大坂市中で武力蜂起した。上下を驚かしめた事件である。半日で鎮圧せしめられたが、市民の窮乏を見るのに忍びず、幕府の元役人が思い切った行動に出たのだから影響は深刻であった。九年には佐渡で一万人が起って打ちこわしを行なった。直接には凶作の被害から

発生するものだが、農民の生産力で武士階級を養わせる社会の根本的な規制が、働く者を窮迫させて凶作を機会に暴発するわけである。

現実的な性格から農民は元来が視界が狭く当面の事しか見なかった。その他のことを構うだけの余裕もない。圧制を加える領主や代官しか眼中に置かなかった。南部の一揆も革命的でありながら仙台領の百姓にして貰うか公儀の直属にして欲しいと希望するのにとどまる。

しかし、農民の生産力の収奪の上に立っている支配者から見れば、容易ならぬ時勢が来ているのを感じたわけである。佐渡の大一揆の後で、水戸の徳川斉昭が、「近年、参州甲州の百姓一揆徒党を結び、又は大城（大坂）の奸賊容易ならざる企仕り、猶当年も佐渡の一揆御座候は、畢竟下々で上を怨み候と上を恐れざるより起り申候」と将軍に建白した中に言った。歎願が反抗となり、農民一揆が世直し一揆の政治的色彩を帯びて来たのである。

南部藩のその年の天候まかせなのと違って、長州や薩摩などは米作のほかの生産を奨励して、藩で買上げて大坂などに送り貨幣を集め得た。舟運もさかんで、手段のない国々とは違って、農家も新しい生産経済に入った。それでも、天保二年周防長門で十万人が暴動を起した一揆は、藩が設けた産物役所反対を動機としたものである。封建制下では、百姓は終始、武士に踏付けられて、饑饉の一歩手前で命をつないでいる。ところで、農民の労働で遊んでいて養われた武士の生計が同時に次第に困窮して来た。

中世と違って、武士が田畑のある土地から離れて城下町や江戸、大坂のような都市に集って住むようになった。都市は小さい城下町でも消費だけのもので、貨幣経済である。山川菊栄さんが「武家の女性」で幕末の水戸の武家の生活を回想して書いたのを見ると、女たちは屋敷の中で畑を作り、糸をつむいで機を織り、家族の衣類まで自分で作って外に出て買うことをしない。一年中の漬物も味噌も自分たちで準備した。中流以上の家柄の人々だろうが、伯母が年始の贈り物に持って来たのが、自分で針を持ってさした雑巾と、自分で削って作った竹箸だったと言う質素なものである。現代の人は、贈り物に雑巾を貰うことを考えないだろう。

水戸藩では、進取的な徳川斉昭が異国船の出没を見て軍艦を作ったり新式の大砲を鋳造する為に領内の寺々の梵鐘を供出させ、家中の扶持を削って召上げることを度々した。士分の生活も苦しいのである。内職して補っている者が多い。これは、地方のどこの藩でも同じような状態であった。節約を迫る生活で水戸では斉昭の気性が派手で金づかいが荒いから、一層家中の生活に緊縮が重く課せられた。従って領内の農家が貧しくて苦しい。藩では、農民に献金を奨励し、金を出した者を郷士として士分に取立てた。水戸は大義名分の家元ながら、厳格に差別して来た身分が金で買えるような時代が来ていた。世の中は「日の暮れ際」と適切なことを言ったのは、他の誰でもなく水戸の御隠居の斉昭なのであった。

永く平和が続き、戦場に出る用事が失われた。武士たちの大部分は、役付にならぬ限

りは、格式だけで遊んで喰っていた。生産からはまったく遠ざかっていながら、米で俸給を受けていた。都市や城下の生活は、時代とともに消費を増大させ、支出ばかり膨脹する。幕府、諸大名の窮乏は早くも元禄時代から現れた。町人の驕りが極まったと称せられる時代に、もう財政が手詰りになり、享保年間に「旧臘など御米これなく候て、小身の者ども、切米扶持など極月（十二月）二十七日まで渡り申さず。殊のほか難儀致し、かように手つまり候ては、如何成り申すべきと、執政の衆、難儀と存じ候」と室鳩巣が書いている。俸給が滞ったのだ。これが一時的の現象でなく躍進的な傾向である。封建の体制が確立されたと見えた時、武家が一せいに消費階級となり国家に重い負担となったのである。

諸大名は大小となく国用不足に悩み、「家臣の俸禄を借る事、少なきは十分の一、二、多きは十分の五、六なり。」それでも足りず、江戸、京、大坂の金持の町人から借金する。借りるばかりで返すことがないのである。年々の利子が積って、巨大の額に達した。「昔、熊沢了介が、藩内諸侯（諸大名）の借金の数は、日本に在りうる金の数に百倍なるべしといえるは、寛文延宝の年の事なり。それより七十年を経たれば今は千倍なるべし。今、諸侯の借金を数の如く償わんとせば、有名無実の金、何れの所より出んや。然れば、ただ如何にもして当前の急を救いて、その日その日の時を過ごすより外の計なし。」これが幕府の中頃のことである。

百姓は地虫のように土にへばりついている。武士は何もしないで生活しているようなものだったがもともと消費階級。「武士の知行は皆商人に吸取られるなり。畢竟、精を出して上へ奉公をして、上より賜る禄は御城下の商人の物と成り、馬を持つことも成らず、人を持つことも成らず、冬春の切符の間には、質物にて取続き、あるいは町人に仕送りと云うことを頼みて、己が身上（財産）は人の手に渡るように当時は成り極まりたるは哀れなることならずや。畢竟は、箸一本にても銭を出して買調えざれば叶わざることなる故に、かくの如く成りたるなり。」

江戸時代を通じて、官学の朱子学の倫理的影響もあろうが、武士たちは一様に町人階級と言えば利益の打算以外は念頭にないものとして、軽蔑の目を向ける習性を持っていた。町人は公的に社会階層の最下位に置かれ、法律上の制限をさまざまに課せられた。町人がしてはならぬ箇条が多いのである。「事実いかなる封建貴族にあっても、徳川の道学者、立法者ほど、利殖及び蓄財に対して大きな嫌悪を表明しているものはない。」（E・H・ノーマン）観念だけから生れた結果だろうが、「武士は喰わねど高楊子」の痩我慢の気質を持つ反動で、利殖のためには手段を選ばない町人階級を人間として下等のものとして軽んじた。家康遺訓百箇条は、武士を保護して、町人百姓に対する切捨御免を行政慣例として許している。同時に、幕府も諸侯も封建時代の支配者は、町人の富の力を嫉妬し、反感を抱いた。ヒステリックにも見えるほど、私生活の内容に立入って禁令を出した時期もある。町人は絹の着物を着てはならぬ、何をしてはならぬ、武士には

許されていることを制限して、させないのである。

幕府の中期、宝永三年十一月に、大坂第一の富豪淀屋三郎右衛門が、身分不相応の奢りをなしたとの理由で、闕所（けっしょ）となり財産を政府が没収した。手代新助は牢内で斬首刑となり、また淀屋の為に官辺に賄賂を入れて罪を免れるよう運動すると称して淀屋から金を出させた野田屋太郎兵衛、天満屋権七郎、医師元栄、山城又兵衛、宮村長右衛門の五人は、千日前で獄門にかけられた。

当時、淀屋が没収された全財産を、竹越与三郎「日本経済史」が引用した伊勢松坂小津清左衛門の旧記によると、現代の金にしたら、どのくらいの額になるか、一億二千百八十六万七千六百十両と当時のものとしては驚異に値するものである。淀屋は西国諸藩の廻米を引受けて売買して儲けたので、正米相場で築き上げた財産で、大名でも百万石以上のものでないと出来ない贅沢をした。町人に有るまじきことと、政府に睨まれる原因となった。自分の働きで作った財産だから勝手に費消したものとしても、これは町人の身分に許せぬものと見られた。

淀屋の富を推測する為に、没収された財産の目録から、目ぼしいものを書出して見よう。

土蔵が七百三十カ所。金屏風が百五十枚、五百石積より千石までの本船（もと）が二百五十艘あった。ほかに女房の船が二十七艘。贅沢なものとして、繻珍（シチン）唐人形、りう久花毛氈（もうせん）五百五十枚、いんこ哥鶏、いんこ張がん、いんこのすずめ、金銀の鳩。千二百両より千五

百両までの茶碗三十七個、枝珊瑚樹六本、琥珀、瑪瑙とりまぜ百七十三、水銀十五万斤、腰物（刀剣）七百腰、辰砂七万斤、朝鮮人参七十七斤、びろうど五千反、しょっこう（蜀江）錦十釜、唐渡猩々緋二千反、唐（遠）目がね大小百七十、水晶の障子四十八間、唐より渡る金碁盤、その他。とうてい全部を挙げられない。有金は三百五十万両、銀十五万貫。そして諸大名へ貸金一億万両、公卿へ貸銀八千貫目、諸士衆へ貸金二十万両余となる。土地家屋となると一々ここで算えていられない。一町四方の家が大坂で十二カ所、表口十八間より三十間の家二十カ所、表口十町に五丁の家三十カ所、表口二十間四方の家三百五十カ所。米など置く必要からであろうが、お伽話の金持もこれほど物を持つまい。六年に一度饑饉が来る奥羽の民から見たら、この世に在り得ることと信じられたろうか。

江戸時代の米収穫高は、新田開発などを進めて末期に入ってからは、三千万石を超え、その内四百二十万石が将軍に、二百六十万石がその家臣に分与せられた。幕末になっても将軍は日本の総収穫高の四分の一を握っているわけである。各種の財政収入はあっても、根本は収穫された正米がいのちであった。

幕府の中期に淀屋の財産を没収して、直接生産などしない町人がこれだけの巨大な富を持っていたのを知った時、武士階級が破倫のことと考え、憎悪の目で見たのは自然であろう。いつの間にか一豪商が大大名にひとしい財産を擁していた。社会の最下層と看

做す町人が封建の秩序に背くものと見た。都市城下町の発展から、米穀経済が貨幣経済に改まって来ると、米穀の収入に頼って来た幕府や諸大名の財政が支出ばかり多く苦しいものになって来た。権力の成因が米穀収入にあったのである。しかし、中央の政権が小さい大名と同様に農民の、農奴的労働の収益に依存した。鎖国で外国との貿易はなく、生産も国内向けの米が中心だったから明日の発展がないわけである。自由におかれた町人だけが繁栄の要素をつかむことが出来た。

全国的に散存している幕府の直轄地、「天領」は米を作るだけで他の産業の発達をあまり考えなかったのは、中央から赴任して来る代官が短い年月で更迭するせいもあり、官僚的な支配で実績だけ上げ変化を好まない習性がついた。後年に強大な藩が行なったような立て直しや、産業の改革は見られず、直轄地が睡ったようなのが幕府の経済を時代が進むほど赤字の大きい重苦しいものにした。中央集権で全国の統一を幕府が成功したように見えたが、地方の列藩はまだ半独立国のようなものである。漸次、藩の産業を発達させ、国力の内容を変えて来る。それでも、生産に参加しない家臣を多勢、遊ばせて抱えた封建的体制のことだから、内輪の経済は長い間どこの藩でも窮迫し、京大坂の町人から金を借り入れて不足を充塡することが多かった。米を江戸、大坂に送って蔵元の町人に売捌いて貰ったり、米の代金を前借して正米を後から送るほかに、借金をする。次第に町人との関係が深まる。幕府の政治の形態が固まるのにつれて借金の必要が生じて来たのも不思議なようなものだが、つまるところ無用になった兵力をいつまでも社会

の上位の雛壇に据えて、下部の農民の限られた労働に頼る封鎖的経済が原因なのだ。苦悩の原因が幕府のみならずどこの藩でも組織の内部に在ったと言い得る。封建の囲みの外に金の援助を求めるとなると、城下または都市の商人に依存することになる。

例えば、後の藩政改革から余裕を得て第一の強大の国となった薩摩藩の場合を見ても、江戸時代の中期に、既に琉球貿易をさかんに行なっていながら「元禄時代を通じて物入多く借金も増し、その返済に窮したため、同十二年には家中諸士に半知に近い借上を命じ、正徳六年には諸役人の俸禄を半減した。」財源に窮した結果、延享年間になると、人別税、牛馬税まで課した。節約令は度々である。この窮乏の上に、幕府から木曾川の治水工事を命じられてますます困難を極めた。文化文政年間に入ると、文化四年に借金が百三十万両だったのが、文政の末には三都、南都及び領内の借金五百万両に及び、昔からの銀主も金を出してくれる者なく窮乏の極に達した。当時は参府帰国の費用も調達しかね、江戸在番の人員に対する給料も払えず、諸物購入の代金も出ず、江戸屋敷の金庫も空になり、人夫を雇うことも出来ないので屋敷中、雑草だらけになっていたと伝えられた。（土屋喬雄「封建社会の史的分析」）

幕府の隠然たる一敵国と見られたくらいに強大と信じられた薩州藩でこれである。しかし、いざとなると大名は封建の名分を強い楯にして、最後の手段として「御断り」に出る。負債の支払いを単純に拒絶するのである。武力はあり門戸は高く、金を貸した町人が催促しても強制する力はない。そのために破産した商人が有名な家だけを算えても

元禄以来算えきれぬほど出た。薩摩と細川との九州の二大名が、借金踏倒しの両横綱として三都の富商から嫌われ警戒を受けた。「その内に細川家は前々より、不埒なるお家柄にて、度々町人の借銀断りこれあり、この節、辻玉屋、家原、皆々此のお屋敷へ大分の滞り故、つぶれ申候」と三井家の祖先、三井高房が子孫を戒めた文書の中に、書いたくらいである。

「お断り」に困惑して商人が江戸に訴えて出ても、大名と町人の貸借を裁く道がないから受付けてくれない。ひどいのは、金を貸した礼に土分に立てられ扶持米を貰っていた町人が「お断り」に迷惑して訴えて出た時、家来の身分にありながら主を訴えて出るとは不埒なりとして、逆にきびしく叱りつけられて帰った。直参だろうと外様だろうと武士は相身互いのせいである。

大名貸は、他の貸金と違って高利で、順当に行けば、町人はひどく儲かる。それに何と言っても大名は毎年の米の収穫を確保していた。大名に金を融通し、一定の利息を取り秋の蔵米の売上代金で相殺する。「大名借りの金銀、約束のとおり取引これあり候えば、この上もなき手廻しにて、人数はかかり申さず、帳面一冊にて天秤一挺あると埒あき、まことに正真の寝て居て金儲けとはこの事なり。」（町人考見録）

大名の方でも「御断り」に出るのは、よくよくのことで、町人の実力が加わるにつけ、用を足してくれる富商には扶持米を出して、土分にしてやったり、付け届や進物を与え、

饗応もして機嫌を取るよう、専門の係りの家来が要るわけであった。幕末に近く天保年間になると、武家が売りに出す払い米が年額ほぼ四百万石で、その四分の三が、町人に貸金の利子でただで取られる悪い状態となっていた。しかし、大名と富商との密接な関係は、危険になっても打切ることは出来ない。食うか食われるかでなく、商人の方が大名を取って食うのである。

「当時町人の勢いには一言もこれなく候。これに依り町人の手に付き、下に廻らず候わでは、武家方金銀の融通に相成らず候と申す儀は、如何にも口惜しき次第に御座候なり。右の通り、三百万石は永代町人の擒(とりこ)にて、年々の収納は引当のほか余分は稀れにて、大概は空身の上のやりくり台所故、武士の町人に手をたれ腰をかがめて、万年頭の上る折なき」と言われた。

大坂商人の諸侯に用立てた金は六千万両の金額に達していた。町人の側でも「御断り」に対して共同戦線を張り、仲間で相談して締貸しの手段をとった。そうされて了(しま)っては大名ももう動きが取れない。係りの武士が苦労して機嫌をとる役に廻る。「主君のためなれば武士道も捨て、町人の太鼓持をするなり。」実に、武家と農民とだけで成立して動かないものと考えられた体制の中に、時代が進むにつれて公儀も大名も食って了う幅大きく強力な階級が生れていたのである。

商人は全国的に営利の手をひろげた。一揆の原因ともなった遠い南部藩の不換紙幣、預切手の発行に大坂の蔵元商人、鴻池伊助や肥前屋篤兵衛が参加した。この鴻池は加賀、

広島、阿波、岡山、柳河、五家の大名の掛屋を兼ねていて、諸大名から返礼に受ける扶持米だけでも合計すると一万石に達した。旗本でも一万石の格式は、最上級の武家である。町人ながら、いつの間にか、大名の家の用人格、留守居格になっていたわけで、これが本業でなく、金を貸した余得の一部に過ぎない。

しかも、封建の武家の威厳は、江戸城や諸国の山のような居城で象徴される。かぶさって全社会の上に重い蓋をしたような規制で町人や農民を隷属させ威圧している。南部の百姓一揆の場合のように領主が否認され、役人が公然と軽んじられるようになったのは、新しい事件で、まだどこの大名の城下へ行って見ても、封建の規律が揺がず領内に及んでいるように見えた。武家町は、昔どおり整然と静粛である。しかし、その内部に入ると、お手許不如意で家中の禄を減じ、借知といって給与の部分的不渡りがどこでも普通に行われていた。下級武士は屋敷の中で内職して手間賃の収入を計る。江戸でも御家人の株が売られて、百姓町人でも株を買えば御家人の身分に成り得たが、地方でも金さえ出せば軽輩の武士には取立てて貰えた。武士と百姓町人との境目が、低いところで混乱し、入りまじったばかりでなく、中流以上の武士が町人の家に婿入り養子縁組する者まで現れた。侍屋敷内を町人に貸すことがはやり、小身者は大かた表口門の外は町屋にし、人を抱える身分の者は下屋敷はあっても家令も置かず、隠れて菜園を作った。内職はやがて奨励される。昔からの土地の名産となって今日にも残っている細工ものや織物、手工業の物産の多くが、諸国の小身の武士たちが、内職に作ったものである。

江戸あたりでは鈴虫を育てたり、金魚を飼ったり、鶯を好い声で鳴かせるように育て、菊、花菖蒲、万両などを植えて売らせるようなことから始めて、器用なのは根付の彫刻、筆作り、団扇、提灯貼り、下駄の表、唐傘など、家の内に坐って出来る細工仕事から始めて、小金貸し、仕送りの賄、対談の掛け引、地面屋敷替えの世話、養子嫁入りの橋渡しなどの仕事もある。

武士がなかばまで商人か手工業者化していたのだ。しかし、彼らは武士だから両刀を公然と持つのを許されている。これを悪く利用することを覚えれば、百姓町人をおどかして稼ぐことも可能なのである。段々と崩れて来る世の中と言うより他はなかった。

武士の収入は、言わば土地を所有することなしに土地にしばりつけられていた。商人は土地の束縛なく、金を動かして、どこの地方からでも利益を吸上げることが出来た。

黒船が来て、諸大名が沿岸警備の命令を受けて出動すると、川越侯一手の人数でも日々五百金あまりの入費で、これが十幾日も続くと何千両の入用となったと記録された。通常の経済で耐え得る負担でない。財政困難となること目に明らかである。ペリー提督の黒船の出現は、闘わずに武家に手痛い打撃を与えた。

幕府の下知に応じかねて口実を構えて逃がれる藩も出た。幕府の威令は行い難い。この場合も、三都の富豪は物価の騰貴に依って儲ける一方である。武士は、先祖伝来のものと限らず、具足など整えて家に持っていない者が多く、急に買いに殺到したので、値

段が急騰した。槍や鉄砲もそうである。陣地に供をする従者も屋敷に置いてなかった。

具足より利足のたかい世の中に
御手当どころかすねあてもなし

と、武家の手許不如意をひやかした落首がある。

幕府は財政に困難して来ると、度々、貨幣の質を落して、改鋳の益金で不足を補おうとした。当然その為に諸式が騰貴して、自分並びに四民が苦しむことになるが、目前の必要に追われて、御用金と改鋳に頼るより方法がない。やがて改鋳の益金を考えずには財政を賄うことが出来なくなった。天保十三年の幕府の歳入の半分が改鋳益金で、通常収入の年貢金の五十五万余両と同額に達している。物価がまた騰貴するのは当然である。それがまた武士たちの生活に浪を大きく、きびしく一々ひびいて来た。

文化十三年に武陽隠士の匿名で、かなり古風で厳格な武士的な態度で世相を辛辣に書き、「世事見聞録」と題したものの中に武家内部の困窮と衰弱を書いたものがある。そのくせ困りながら武士の生活が、贅沢になっていたのは皮肉な現象と見えよう。

「今世酒食の奢り菓子の好味、山海を尽して、たとえば一人前一度の料理の価、米二、三俵にいたり四、五俵にも当るなり。菓子一つの価、米一升または二、三升にも当る所あり。」米の高で収入を量る時代だったから、当然、この尺度の見方が成立する。「居宅の結構大造になりしことは、今愛宕下にある所の松平隠岐守屋敷は、もと福島左衛門太夫正則の屋敷なりしという。福島正則は安芸備後両国の主にて高四十九万五千石なり。

殊に世に聞えたる猛将にて、いささかも人に後れざる人傑なり。その猛将の二カ国の威を以て取構えたる屋敷なれば人並みよりも勝れし造作ならん。しかるに今に至っては隠岐守高十五万石の屋敷にしては、外並みより小造にて棟も卑しく甚だ見苦しき事なり。今の振合にくらぶれば十万石以下の屋敷の程に見ゆるなり。すべて昔の屋敷分限を見るに何れも地面狭かりしに、今は大名の地面広大にすること制限なし。（中略）造作の善美大造になりけれども、前にいう如くその屋敷内に住むところの侍は柔弱軽薄のものにて、昔の侍の五割も十割も衰えたるなり。すべて諸大名参勤交代の節の供人数も減り、江戸詰の人数も減り、馬の数も減り、武具馬具のたしなみも減りたるなり。その人馬の減りたる事、暮し方少なくなりたる事、十万石の人は昔の五万石にも及ばず、万石の人は昔の五千石に能わず、千石の人は昔の五百石よりも手薄なり。これ衣食住に増長し諸失費の多くなりたる、武士の権威の薄くなりたるが故なり。」

武陽隠士は、懐古的で、昔はよかったとする老人らしいが、経済の移り変りが表面に現れて見える部分を、昔とくらべて話しているのである。実は隠士の説くが如く人心が遊惰となったせいばかりではなく、世の中が無用としたものに自然に省略をほどこして来ていたのだ。

「御番の往き返り、他行の節、馬に乗りしも止め、鑓を持たせしを略し、侍若党連れたるも省き、また衣類も四季節々の物、質の入れ替えまたは懸売りのせり呉服といえる物を借込みて漸く間を合せ、またはその甚しきに至りては、御番に出る時は質屋より偽り

て取寄せ着用いたし、帰りたる時は直ちに元の質屋へ返すなり、下人どもこれを嘲りて、上げ下げの上下を着て御番の上り下りを致すとて主人を侮り、（中略）自然と主人の威も衰え、妻子を始め厄介等の行状崩れ、家来も突上り、殊に極りどおりの切米給金等も渡さず、後には毎度催促に逢う度毎に主人の方より詫るようになり、用事を申付けるにも気を兼ね頼むようになり、後には主従同輩のごとくなり行く。」

公式の記録や歌舞伎の舞台に出ている厳格な武家の行儀はここにはない。人々は武陽隠士とともに時世を歎きながら傾いた斜面を徐々に降下していたのである。

人が各自の家の中にいて落着かなくなった。黒船の騒動で、動員されて他国に送り出されただけでない。生れた家に昔のように静かに住み続けることが困難になった。誰かが外に出て口を減らしてくれるのが望ましい。二男三男など、部屋住みの者が家に居づらくなる。封建の家族に、以前なかったことである。

土屋喬雄氏の前出の書に、旗本や陪臣の家計について引例しているのを、紹介しよう。安政二年だからペリーが来て一、二年後の話と見てよい。江戸の私学者大江季彦の「経済新論」の記述によると、何ほどに倹約しても一人の所用に定限がある、方今の有様では不足勝ちであると断って、「今二百俵取の士を挙げて例と為し、玄米七十五石、四十二両相場にして金八十四両なり。夫、婦、子三人、侍一人、中間二人、婢二人、此飯米平均四合、一年二十六石五斗なり。残五十三石五斗、此代金六十四両と銀十二匁。侍給

金四両、中間二人六両、婢二人四両二分なり。一人の雑用月に五匁にして、一年二十両なり。中間の看板、帯、桐油、笠など金三両とし、残金三十六両。勤仕入用、家作、贈答など十五両と見て、残二十一両二分。主人の衣服七両、妻五両、子三人九両として、残金二分なり。」（ママ）これでも借金がない家の場合で、借財があったらその元金や利子の支払いがあって、二分も残るものでない。

二百俵取りの者で以上のとおりだとすると、御家人の三十俵三人扶持の者はどんな生活だろう。これも蔵宿に借りがない場合の話である。蔵米を十両で売り、地代収入二両をあわせて、この男の現金収入は、十二両である。これを一カ月に宛てると金一両と言うことになる。家族六人の暮しなので三人扶持では食糧に足りないから、三十俵の半分を残して家族の食糧に宛てる。現金の中から勤め向の入費と雇中間の手当を減じると、残る金は六両前後である。月々に配分すると二分になる。これで衣類から、塩、味噌、薪炭、油、蠟燭、紙筆、親戚間の贈答、病人、普請などの用に宛てる。この男は、御家人として自分の生活は中の上だと言っている。「総じて御家人と云う者は高の上下に拘らず、只借財の多少に依って、高禄の士といえども僕如きより尚困窮に迫る者多き者なり。況んや小供多き上に多借ある者の如きは、ほとんど見るも中々に厭うべきものありとす。」

地方の陪臣の家計となると、また別である。

「諸士の知行、現米四十石を賜るを高百石の士と云う。この現米四十石の内、五石をば

昔より旅役出米とて万石以上より一、二人扶持取りの者まで一統にこれを召上げ玉う。」

お上に公然と取上げられるのである。

「また、御倹約とて、御家来中の石米を召上げらるるを十五石掛りというは、四十石の内、嘗て召上げられる旅役出米の五石を添えて、十五石を召上げらるるを云う。また半知と号するは知行四十石の中から二十石召上げらるるを云う。三つ成と称するは十石召上げらるるを云う。（中略）さて三つ成にて高百石の士、現米三十石を以て家内およそ主従七口（人）を養うとして、一口を一日五合と計り、一年の食糧十二石六斗となる。近年の米価賤しくして、銀百匁に一石八斗九升あるいは二石に至る。その中を取って一石九斗に沽却するときは、その価九百十五匁余となる。これを以て萩（城下）住居の量となし、凡百二十匁を出して人の小さき長屋を借り、また百五十匁、百匁を出して奴婢を置き、百二十目を出して一年の炭薪を買う。これは定まりたる費用なり。総計四百九十目となる。余財四百二十五匁にて、衣食に供するときは半年の糧もあるべからず、況んや百石以下の者をや。然るに小扶持の者の萩に住居するは、奴婢をも置かず、朝夕粥をすすり僅かにその日を凌ぎ、幸にして飢えず、こごえざる者なり。この諸士武気を失い、廉恥の風地を払い、心あくまで卑劣になって、詐偽弁口、商売に勝る所以なり。」

これは、長州藩の場合だが、国用不足で、家臣の俸禄を借りるか取上げる慣例は大名に一般である。返さなければならぬ性質のものだが、これは借り切りで終るのが普通であった。武士を階級の最高のものとして権式を維持させた社会だが、幕末に近づくほど、

先細りとなって、誰だろうと明日に向けて不安が感じられた。世の中はどこへ行くのか？　この先どうなるのか、封建制の特権の上にあぐらをかいて暮して来た者たちだが、自分たちを囲んでいる壁のようなものを破って外に出て、貧しくとも心の寄りどころのある生活はどこかにないか、と尋ねるような人間が出るのは当然であった。

厄介丸

一

江戸時代を通じて朝廷が政治には一切関係しないように定めたのは、徳川家康の公武制であった。それから二世紀あまりの歳月を、昔ながらの年中行事を繰返して、中世のままの薄日の影の中に置かれて来た。

外国船が近海に出没し、北辺を脅かして外寇の防禦が上下の問題となってから、弘化三年八月二十九日に朝廷から初めて幕府に勅旨が下った。「密に聞く、近年異船各地に見ると。然れども今や文修り、武整い、海防の備亦欠くるなきが如くなるを以て叡慮を煩したもうに足らずと雖も」実際の状況や経過から見ると、随分、皮肉な批評になったことだが、文も修まらず武も整っていなかったのである。「近ごろ、又その風説屢々起り、うたた軫念あらせらる。なお武門の輩洋蛮の事は小寇を侮らず、大敵を畏れず、克く籌策を立て克く部下を指揮し神州の恥辱を招くことなく、宸襟を安んじ奉るべきなり。」

特に幕府を諭した。朝廷が政治に干渉する発言を下したわけだが、幕府の側もこれを怪しまず、礼を奏上させ、それから後は所司代から武家伝奏を介して外事関係について

は幕府の方から朝廷に報告する措置を採るようにした。外事を国内の政治と区別して考えたとしても、幕府の伝統的な方針から言えば異例のことである。将来幕府の運命を決定する緒口となるものとは予測出来なかった。

その後も、アメリカ艦隊が浦賀に入って上下が動揺すると勅命を以て外夷退散の祈禱を行わせ、幕府も所司代からこれを願出た。苦しい時の神頼みで、幕府からこれを願出たのは、窮地に立った自覚が深く、頼るところを模索したのであろう。朝廷に対する儀礼として挨拶しただけのものでなく、内容のある奏聞である。元寇の時に朝廷が神社に祈って神風が吹いて敵艦が覆滅した話が、幕府の有司の頭にあったものか、人々が創造の力を失くしていて、ただ過去の歴史の中にある類例を振返って見たのである。

徳川家定に征夷大将軍宣下の勅使として、伝奏三条実万（さねつむ）と坊城俊明が江戸に下った。嘉永六年十一月二十七日に江戸城に迎えられて閣老に鷹司関白の書簡を伝えた。米国から届いた国書は容易ならぬ神州の一大事でお上も深く宸襟を悩まされていると言う、警告に似たものである。

その時の閣老阿部正弘の返事がこうであった。

黒船の一件は家定も深く心配し老中も種々評議を尽しておるが、軽く処置は下し難い。つまり軍備のことが、施設を怠っているのではないが完全とは申し難い。一時のことは出来るが、一度戦闘に入れば中途で止めることは出来ず、整備を終らねば断乎たる処置には出で難い。それが故に評定が結論を見ないでいる。今のところ外国に対しては、し

ばらく平穏の手段に出て、彼が暴行に出る際にはこれに応ずる処置に出る。

この儀については深く叡慮を悩まされ関白殿も憂慮のことと察せられる。「上には専心叡慮を安んぜんとせられること当然の御事にも、生等一同にも其心得にて力の及ぶ限り尽瘁し居れり。若し叡慮に於て御希望の次第もあらせられなば御遠慮なく仰出されたく、然るときは其方針によりて処置することもあるべし。或いは伝奏より勅旨を伝えられても可なり。今回両公と会話したるは幸の事なれば、朝廷と武士との間意思の疏通せんことを望む」と言う返事をした。これは三条実万の覚書に記されている会話だが、かなり重要な談話である。

伊勢守の話は関白の質問が形式的なのにくらべて、誠実な態度である。遠方から見ている者と、危機に当面し苦慮する者との相違なのである。しかし、幕府はこの時の談話に依って、伝奏を介し勅旨をお伝え下されてよい、と、約束らしいものをした。これが後の問題になる。外国関係については一々幕府から奏上する、勅許を得べきものとする考え方に道をひらいたからである。

安政元年の正月、ロシアの使節が下田に来た時に、幕府は朝廷に奏聞した。二年七月には禁裏付の都筑駿河守を上京させ、駿河守が「異国の事情を相弁居候事に候間」所司代によく話して叡聞に入れ、時勢よんどころなき訳柄については所司代同道で関白に直談して了解を求めるように指令した。これは米露英三国との条約の写しをとどけたので、駿河守は所司代脇坂淡路守と鷹司関白に会って説明し、関白から条約書を叡覧に供

した。

伝奏を経て所司代に勅諭が下った。

「魯西亜、英吉利、亜米利加の条約写を叡覧に供したるに、幕府従来の処置振り殊に叡感あらせられ宸襟を安んじたもう。老中の苦心、主職の尽力、深く宸察あらせらる。」

朝廷は幕府が開国条約を締結したのを嘉納された。これは後日に、そうでなく反対になるのである。

日本の国の中でも出入りを禁じられた囲いの中に古風な生活が睡ったように静かに営まれている。ここに住む一団の人々に取って、外国船の脅威は、間接のものと信じられながら未曾有の衝撃であった。外の風を受入れなかった小世界に、無気味に吹込んで来た。これまでになかった経験で、防禦は、武家の役目だが、これが充分に実施されて不安なきものとは、信じかねたのである。黒船は関東で大砲で打払ったら、南の海上を廻って淡路島を占領し、摂津に上陸し、都に攻めこんで来るだろう。万一の場合、御遷幸になる場合も考えて置かねばならぬ、と、人々が話すようになっていた。夢でも仮説でもなかった。関白を中心に公卿の往来合議が急に繁くなった。

京都に於ける幕府の代表、所司代がいろいろの質問を受け、近畿警備について警告された。京地最寄りの海岸へ不意に入船した折りは、どうするか？　浦賀にいる亜墨利加船が若狭の海に廻ってきたら、都まで僅か十里の距離で、まことに恐るべきである。公

儀は、これに対する備え方を何とするか？　臆病な人が多く、疑心暗鬼に類するが、真剣であった。安政元年の所司代は、脇坂淡路守である。如何に優れた人物でも、不安に充ちたこれらの矢継早の問合せに、満足な回答は出来なかった。

沿岸の防備も入費が大変で様々の困難を生じ、充分でない場合、京都をどこの兵隊が守護に当るのか？　大変の場合、堂上方がとりみだして混雑し、容易ならざる騒動になるのは知れたことで、所司代はそのことを考えねばならぬ。昔の兵乱の時にも遷幸のことはあったが、その時でさえ公卿は徒らに狼狽した。今度は外国軍隊の侵入を迎えるのだ。堅固な城廓でも大砲に抵抗は出来ない。御所の築地内で防ぐようなことは不可能なのである。遷幸もけわしい山の奥を選ぶのがよく、都に近い彦根の井伊掃部頭、伊勢の藤堂和泉守を始め、近江、大和の大小名に守備させたいと言うのだが、この人々も江戸近辺の沿岸防備に軍隊を出している。ここで東西の両本願寺に僧兵を組織させて事に当らせてはどうか？　京都奉行浅野中務少輔、岡部備後守が所司代に対して出した意見書がこれであった。東西本願寺は、僧侶ながら平常旅に出る時も帯刀して出る。「門徒遠国近国には七万の余これあり。暮し方も相応に相見え候えば、差支なく御固め出来申すべきやに存ぜられ候。」つまり、金もあるしと言うことで、自分たちの手もとの貧しさを告白していた。

すくなくとも、武家が国防に確信を失くしていた。実際に彼らは新しい戦争を知らなかったし、古い戦闘に耐える体力も失っていた。その間にも、京都の万一の際の守備を

譜代大名でなく薩長などのような外様の藩に委ねることは、公儀が嫌っている。諸大名が朝廷と親しくなる機会を塞ぐ為に、江戸に参観交代する途次でも、大名が京都に泊るのを許されていない。ここで列藩の兵力を御所に接近を許したら、江戸の将軍の地位を危くせぬでもないと、警戒するのだ。悪い場合は、将来西国の強大な諸侯の誰かに将軍宣下の道をひらくことも考えられるものとした。そこで、武家に関係ない両本願寺に僧兵団を作らせようとする。武士が階級の名誉とした任務におのれから自信を失ったのである。しかし、この計画を実現する決断もなかった。朝廷は、幕府の足もとの危いのを一層感じるようになった。

安政元年九月十八日に、プチャーチンのロシア軍艦が大坂湾に現れた時は、禁裏に多大の衝動となったのは言うまでもない。長谷川肥前守から武家伝奏への届書は、「事柄相分りがたく候えども、右は魯西亜船にて、先ず平穏の体に相見え候旨、同所奉行どもより申越候間、この段御承知のため申上候」と極めて事務的で簡略である。京都の町触れは、安心して渡世するよう、火の元など別て念入りにするようにと例に依って例の如きものであった。

あいまいなほど、不安がつのる。武家伝奏から幕府が京都の守備に緩怠なのを咎め出た。「実に朝廷の大事、忽にすべからざるなり。既に去る七月所司代へ申達する儀は唯今の要害なり。然り而して今に至りて無音、関東（幕府）緩怠の至、嘆慨すべし。いよいよ忠精を励むべきの時か」と非難して出た。

所司代は、手の及ぶだけの手配をして、付近の大小名に出兵を促し、山崎口、伏見口を固めさせた。

ロシア軍艦は、十月三日の朝大坂湾を出て行って無事だったが、都では主上を彦根に移しまいらせ、御所を焼払うのだと、噂が市中にひろがって人心を不安にした。この間に、禁断の区域の中にも外の町の物音がひびいて来るように、攘夷と言う俄かに強い声がどこからともなく起って、禁裏の中に風のように吹きまわった。

京都で攘夷の声がどこから最初に揚がったものかは、不明である。京都全体の空気の中に在った感情が急に熱度を昂めて来たとも言えよう。

都の居住者は、禁裏を囲む公卿諸大夫のほかは、無数にある社寺の神官僧侶で、町人はその下に在る。気風が一体におとなしいわけである。職方の者たちも御所や諸宮家、寺社に入るのを第一の名誉として暮して来た。古い土地で、禁裏中心に代々用を足して続いて来た関係である。職人らしくなく気性もおだやかで腰が低く行儀もよい。

伝統や風習を大切にして平和に暮して来た市民であった。新しい風を受けつけようとしない。剣術の道場は見られぬが学問の塾は多かった。禁裏お膝もとと言うのを慕って、町に住み学問好きの町家の者を集めて教えていた。生活の余裕のある大坂が近い。そこの商家で学芸の保護者は多い。町に住んで学問をしやすい土地となった。地方の藩校とは違って、個人の力で塾を経営出来たのも都だからであろう。公卿で和歌や書道を教え

て家計の資とする者もいる。僧侶、神官とて、祭や古い習俗の奉仕者だが国学に熱心なものがいた。その当時出版社は京大坂が中心で全国を支配していた。本屋もある静かな町で、おだやかに暮している人々である。この人々から攘夷の狂熱の焔がひとりでに上ることはない。しかし、都住いの学者として名の知れているのを慕って、地方から訪ねて来る古典や学問の好きな人々がいる。地方からの客と接触する間に攘夷の声は起った。御所の公卿たちよりも、公卿の家に出入りする町の学者や、公卿屋敷の諸大夫にその影響が現れ、時勢を慷慨する話の間に漏れるようになった。

水戸学も国学も顔を過去に向けている。黒船が来る前後の時節から、諸国から京に上って来る者が目立って増加した。浪人もあるが、いろいろの理由から藩を離れて来た武士が多いのである。地方の屋敷町に居ては志の伸ばしようがない。貧しい家からはみ出して了った若者たちで漠然と明日に不安を感じながら都に出て来たような人々なのだ。若い吉田松陰がそうであったように現状の不満や渇きが若い精神の刺激となって家から離れさせている。他国を見る為に郷里を出て来た者もあろうが、何をする目的もなく上京して来る。双六の上りは昔から京ときまっていたが、お上りさんで京名所を見物に廻るのでなく、目的も用事もなく何となく都に出て来る者が多くなったのは、特徴ある傾向である。寛政の昔にも上野国の田舎の村から京を慕って上京した高山彦九郎の例がある。高山彦九郎は太平記を読んで興奮して十八歳で京都に出て学問をし公卿や知名の士と交際し、その後は天下を周遊し、奇行多く、当時三奇人の一人に算えられたが、熱情

家で郷里に引籠っている間に京都が大火だと聞くと昼夜兼行で上京するようなこともする。ロシア人が北方に侵入する風聞が伝わると、憂国の情から歩いて松前から蝦夷地の様子を見に行った。京に上って、三条河原で土下座して御所を遥拝した話は世に有名だが、歴代天皇の御諱、山陵まで暗記していて一つも誤らなかったと、彦九郎の訪問を受けた菅茶山が書いているくらい尊王の態度が深く熱心であった。

北辺の旅に向う時に、水戸に寄り、後の水戸学の立原万、藤田幽谷とも交りを結んだ。石巻に後醍醐天皇の塔婆があるのを知って、道を遠しとせず訪ねて拝みに行った。それも少し遅れて同じ塔婆を訪ねた蒲生君平が、ここに変った男が来なかったかと樵夫の男に尋ねると、十日ほど前に旅の武家に頼まれてここに案内したが、そのひとは水をあびて礼服に着替え、塔婆の前に土下座して何か書いて来た文章を読みながら一句毎にしゃくり上げて涙を流しながら朗読を続けた、と話したので、彦九郎だとすぐ解ったと言うのである。

他人から見れば如何にも奇行と思われる行動に出たもので異様に見えたことだろうが、自分だけの力で何も出来るのでないのに、ひとり慷慨し、人心を憤って、最後には旅先の久留米で自害し、四十七歳の生涯を終った。彦九郎ほどの感情の昂ぶりを見せないでも、国学や水戸の学風を多少知る者は御所のある京都を心のふるさとのように慕って上って来た者が多い。その人々にも、京都は睡ったような土地で、過ぎた昔のものだった筈である。

この大部分は年齢の若い人たちだが、京の町儒者や、国学に傾倒する神官たちと言葉を交える。公卿堂上人に近づく機会は稀れだろうが、それが出来れば上京者は無上に光栄に感じる。まだ階級的感覚が支配的であった。地方になくて都だけに在る公卿は、田舎武士には別格の無条件の尊敬に値するものに見えるのだ。現実に接して見た公卿の生活は予想外に貧しいものだったが、外来者には高い権式を見せて、他人をいつも下位に見る。幕府の所司代でさえ武家伝奏の公卿以外に、直ちに面会はなかなか容易でないのだ。田舎から来た者から見れば疑いもなく雲の上の人であった。

アメリカ艦隊の渡来、特にロシア軍艦が都に近い大坂湾に押入って来た現実が、禁裏を中心に市中の人心に危機感を与えた。遷幸の噂さえ立って、公卿は恐怖した。しかし、彼らは伝統的に囲いの中にいる。確実に新しい情報を自分で得ることはない。所司代以下、幕府側もまた正確には知っていないし、臨機応変の処置に出るだけの準備もない。攘夷の呼び声が恐怖心から公卿から出た。

王朝時代から忌事の多い朝廷では、外国人を穢れあるものと信じている。中国人とも朝鮮人とも違って、紅毛人はまったくの夷狄であった。さげすみも生理的に近い。すべてまだ知らないことだから理由なく毛嫌いされた。人類ながら禽獣に類するものと人が信じた。その夷人どもが襲来して来て、国土の神聖をけがし、自分たちが囲んで心安らかにいる禁裏に侵入することさえ考えられた。平田篤胤の一派の国学が教えたのもこの

積極的困難の打破の考え方だし、水戸学が伝道したのも、外に対して日本の神聖を守ることで、現に水戸の御隠居の徳川斉昭が大砲や軍艦を作らせ、副将軍として政府の弱腰を叱咤し舵を向けさせようと努力しているのが、決断を以て攘夷の方針に出ろと言うことであった。水戸は他の大名と違って昔から京都から親近感を持たれていた。

朝廷は、幕府が米英露の三国に平和裏に国をひらいて外国との衝突を回避したのを、好しと承認された。危機を免れた安心があったからである。しかし、内心では、斉昭の勇気のある言説を頼もしく思う傾きが強かった。神の国として、当然そうあるべきことだったし、危険を眼前に見て夷狄の装備に敵しがたいのを知った当局と違って、京都に居ては直接に現状を知ることがない。攘夷が好ましいのであった。この時勤王の志の厚い京の町の学者の中から夷狄の掃攘を口にするものが多く出た。外国船の帰国を神々に祈念する神官たちが攘夷の道に幕府が出るべきだと思うのは自然の方向である。

現状不満から、何とはなく京都を慕って上京して来る武士たちの間に、攘夷論は、彼らがまだ明らかには持っていなかった目標を与えるものであった。動揺の中に彼らは、多少なり水戸の学説に触れ、また頼山陽の日本外史を読みなどして、不安の烟霧を透かして、漠然と道があるのを教えられていた。その道は日本の過去からつながるもので消えかけていたのだが、日本の国が外国の軍艦に脅かされていると知ると、抵抗の意志が人々の心に燃え立ち、水戸の影響を新たに確かめ始めていた。

禁裏は、政治にも、民間の事情にも、制度からも、永年の習性からも疎くなるように

出来ている。外の風をもたらす者は、公卿の家に仕えて外部と交渉のある諸大夫や、公家侍である。その人たちが、町の学者、上京して議論の多い熱心な人々から意見を聴取し、新しい情報を、主人の公卿に告げる役をした。太平無事に慣れて穏やかに暮すことだけを一念としている人々だ。聞いても間接の事には無感動でいる堂上方が多い。反って、諸国の有志とともに真剣に禁裏の将来や国事を憂いて、このままで居てよいのかと考えるような人々は公家に仕える諸大夫の中から出た。この人たちは、主人の公卿のように家柄に依る特権を持たず地位の保証はない。五摂家などには譜代の家来もいるが、多くは、町や田舎から出て、採用されて忠実に主家の用事を果している人々なのである。

武家と町人との切線が入りまじって、あいまいになったように、やはり多くは経済的な理由から、公卿の家臣と、外の町の者との身分の交流が行われていた。養子や婿に入って、諸大夫の名跡を継ぎ、何々の守を名乗るのである。ここでも金で下級の官位を買うことが許されていた。例えば町の下駄屋や蕎麦屋の主人でも、「大和大掾」と言う官が欲しい、白い着物が着たい、装束が着たいと言うので、金を出して運動すると、仲立ちする公卿があって正月の官位宣下の時に、辞令がさがるのであった。彼らに許されるのは、七位である。

一条摂政家の侍だった下橋敬長が大正十年七月に宮内省図書寮で、維新前後の宮廷の公事について話した速記の中にこの辺の消息が次のように出ている。

「五位と六位とは、其間に非常な違いがあります。六位と七位の間は又ひどうございま

す。それで其時分には従五位になりたがったものです。五位になりますと、御所へ馬へ乗って入ります。（その資格が認められる。）六位ですと、外で馬から降りて馬を引かして入らなければならぬ。それから姿を御覧になりましても太刀は五位は金装梨地です。六位は黒漆銀装です。とんと違います。又其時分の七位はひどいものです。魚屋或は蕎麦屋の親父、そんな者が皆七位になるのです。」

下橋氏の談話を続けよう。

「図書寮の例で申しましょう。図書寮には史生（ししょう）が三人居ります。近頃の史生では、御維新で士族になりました舟木と云うのは、笹菱屋長左衛門という小間物屋、また小島という史生も同上。安田というのは下駄屋です。下駄屋か蕎麦屋かそんなものです。」

一条摂政家の侍で陸奥守を称していた下橋氏は、その経歴からも、昔風で階級的な物の見方をしたらしく感じられる。

「此三名は皆、図書寮の長野と藤井とへ出入りの商人で、そういう所に居りましても、家は皆金持です。唯、七位が欲しい。大和大掾という官が欲しい。白い着物が着たい、装束が着たいと云うので、金をどんどん出しよる。長野や藤井は貧乏です。藤井は図書寮は無禄で鷹司様の御近習で食って居りました。長野は扇に絵を描いて食って居りました。」

ここでも町人の経済力が貧乏な公卿方を圧倒するのだ。

「そんなもので、史生は皆金持で、史生になりたいと言えば、何時でも入れます。旦那様、どうかあなたの下役にして下さいと、魚を売りに来て頼む。それを長野と藤井が承諾すれば前（任）の奴を免（職）じて仕舞う。私が史生であるとしますと、下橋敬長、図書寮史生を免ずと云う辞令を渡して仕舞います。」

簡単である。

「そうした所で、正七位下と大和大掾と云う官位は、天下の宣下ですから、なんぼ長野、藤井でも勝手に取上げる訳にはいきませぬ。是は職事へ願わなければならぬ。職事から順を経まして、議奏、伝奏、五摂家へ、辞さして呉れと云うことを願わなければならぬ。それを関白さんから天子へ申上げることになって、辞官、返上位記と云うことになる。そうすると魚屋なら魚屋を、長野の家か藤井の家へ呼んで、苗字はありませぬから藤原何某とか源何某とか書いて、図書寮史生に補すと云う辞令を与えます。判任ですからそれで宜しい。そうして、此者に命じましたと云う事を職事へ届けて、地下次第へ書入れて貰います。これも勝手にはいかぬ。矢張、勅問日に朝廷へ出さなければならぬ。そうすると、正七位下に叙す。伊勢大掾あるいは武蔵大掾に任ずと云うことになる。そこで地下次第に書入れます。史生はやろうと思えば何時でもやれます。そうして上のお役人さんは二人ですけれども、史生は皆金持です。唯それになりたいのです。七位の装束を着る。それが嬉しゅうてならぬのです。家へ行って見ますと、ちゃんと、菊の御紋の付いた高張提灯を立てて置きます。一方では蕎麦屋をして居たり下駄屋をして居たりしま

す。それでも天子の御直臣には違いありませぬ。それで、悪い事を致しましても、徳川様の、今の巡査が踏み込んで召捕ることは出来ませぬ。若し悪い事でもありますと、徳川の捕手が行って、外へ呼出して門口に出た所を、御上意と縄を掛ける。家へ這入ることが出来ぬのです。それからまた、無心者が来ませぬ。今の御時節と違いまして、お公卿さんにも乱暴な者が沢山ございまして、冬も単衣を着て新しく買うことが出来ない。またそれが自慢で、此頃も折々無いではありませぬが、絵を描いたりして金を貸せと云う。貸さぬと、そこらに在る茶碗や何かを打ちつけて割って仕舞います。そう云う乱暴者が入りませぬ。それで成って居ります。兎に角、七位にはそう云う者がなるのでございますから、とんと有難味がないのです。無位無官の方が余ほど良いのです。そうして図書寮の中でも史生は呼流し（呼捨て）です。又、藤井の家などに始終、来て居る。私どもが参りますと、下橋さんにお茶上げいと言われて、お茶を持って来ます。帰る時には史生が玄関の式台に平伏します。私共は知らぬ顔をして辞儀もせずに降りてやる。」

不思議な心理だが、菊の御紋の提灯を出して装束を着ける身分が、禁裏近くに暮していると羨しいので、金のある町の商人が無理してその地位を望んだのであろう。七位の者は、史生以上の仕事につけなかったと言うのは、禁裏内で設けてあった防禦線らしい。下橋氏の話の中に、装束をつけることの名人で藤井総博と云う正七位下伊予掾だった者が、七位であった為に会頭と云う役になれない。そこで正七位下と伊予掾を返上して、自分は西園寺家来になった。これは無位無官だから、望まれて衣紋方の会頭に呼ばれて、

人に稽古をつけるようになって出世した。不思議な区別だが、金のある町人が禁裏に入る傾向を停める手段で、こんな規制が出来たのであろう。差別好きなのが公卿の性格である。

公卿の家にいる諸大夫は、これと違って親子代々奉公を続けている者が多い。大名の家老に当る地位もあれば、用人格で外から雇われている格の低い者もある。この外から入った者が、漸次、禁裏の中の一つの実力となって来たのである。

行動的諸大夫の典型的な一人が、田中河内介である。河内介は中山権大納言忠能の屋敷に諸大夫として天保十四年から仕えていた。文化十二年（一八一五）の生れで、但馬国出石郡神美村香住の医者小森正造の次男である。

村の先生に学んだ後に、出石藩の儒者井上静軒の門に入った。家業の医師になる考えはなかった。学問に熱心で、二里の道を塾に通い儒者として身を立てる決心であった。二十一歳の年に静軒の学友を頼って京都に出て、後に山本亡羊の塾に学んだ。やがて自分も私塾をひらいた。京に多い儒者であった。中山忠能の侍講となったが、重厚な人柄を見込まれて、中山家の家臣、田中近江介綏長（やすなが）の家を継ぐことになり、諸大夫に進み河内介に任ぜられ、従六位に叙された。

中山家では庶務を担当し、忠能の子、忠愛、忠光の教育に当った。その間に、東坊城聡長を助けて、類聚国史（るいじゅうこくし）の校訂などをして、無為凡庸な公家侍とは違う学識を示した。

但馬の田舎の村から出て、都で従六位の河内介になったことは、篤実な性格に感動を呼び、いよいよ学問を励むようになった。

嘉永五年三十八歳となった。この年の九月に中山家では、後の明治天皇、祐宮（さちのみや）の誕生があった。御生母、中山慶子が御所に出るまで、河内介はその学習を補導したことだし、中山家の諸大夫として養育の世話をした。その姫君に皇男子御誕生となって、河内介の感激は、誰びとにも勝っていた。農村生れの自分の一代に、こう言う時にめぐり合うことがあるとは信じなかったからである。自分が類聚国史校訂を手伝った東坊城聡長がお世話役だから、河内介は一層うれしく、御誕生前後の雑務に奔走したことである。

御降誕御用を仰せつかった時、彼は歌を詠んで権大納言に奉った。

吾君と吾大君のためならば
　骨を粉にしてなにいとふべき
　骨を粉にくだきてのみか命さへ
　かねてぞ君に委ねつる身は

祐宮は、やがて皇位に即（つ）きたもうおひとである。その方が、四歳で御所に迎えられるまで中山邸で御養育したのだから、諸大夫の河内介の任務は大きい。祐宮はよく病気をなさった。お側にいて、河内介は、どうかしてお強い方にお育てせねばならぬと心を労する。河内介は、もう本など読む時間を失った。御養育は女性方のすることだが、河内介は気遣って、影の形に添うように忠誠に心を用いた。側に仕えて注意をこめて、見ま

もっている。この男が外の世界の動揺を最も敏感に感じていた。主筋の公卿は、ほとんど外のことに冷淡か無関心でいた時代だが、祐宮が成長された時、やがて皇位を継いで、天皇とならせられる時に、外の時世はどうなっているか。田舎出の人間の重厚さの上に、都に出て町の生活で揉まれて気働きで周囲を観察することを覚えてから、公卿に通じる優柔で無気力な頼りなさを、よく知っていた筈である。儒学者だった彼が、やがて学問を捨てて徐々に行動の人と変化した。

祐宮の誕生に際して、中山家から大坂の坐摩神社に安産の祈願を依頼する手紙を送ったのも河内介である。皇子が安産になるよう、御著帯の時に祈願を送ったのが最初で、自分で大坂まで足を運んで祈願したこともあって、坐摩の社の神官渡辺近江守の下にいた佐久良東雄、島男也と偶然に出会った。この二人が、河内介と同じような経歴で、佐久良東雄は常陸国土浦藩の郷士、島男也は水戸の郷士の出身だが、故郷を離れて畿内に出て来た人々である。どちらも身分のある武士でない。志を立てて上京したと言うものの、何をすればよいのか、まだ充分に知っていなかった。その頃から度々と見られるように現状不満を感じ、ある者は故郷にいても食えないからだろうが、誘われて他郷に出て、機会を待っている人々なのである。風雲を得ることを、待っているのである。佐久良東雄は、一度僧侶になったのを還俗して、坐摩に来て神主の手伝いをしている。島男也は撃剣が出来たので、大坂の上町で町道場をひらいていたのを渡辺近江守が招いて坐摩の境内で剣道を教えるようにさせた。どちらも遊歴の士である。階級的には放浪者で

ある。中山家から祈願に来た田中河内介と、同じような境遇だし、話が合って親しみを覚えたのだろう。佐久良も島も、多少なり水戸の学風を受けた者たちで、禁裏への忠誠を無条件の信条とする。河内介の祈願のわけを聞いて、他人事でなく感激し発奮した。

浦賀にアメリカの黒船が現れたのを聞いて佐久良東雄が詠んだ歌がある。

畏きや大王(おほきみ)の辺(へ)に　事しあらば　太刀取帯びて　こよひにも　いでいなん　われを
大船の　思ひたのみて　妻子等が　寝たるを見れば　涙しながる
　磨　剣
こと（事）しあらば　わが大君の大御(み)ため
命死なむと　とぎしつるぎぞ

その他に、

五月雨の頃
一日二日こもりをるさへいぶせきに
我大君はいかにますらむ

京都に上り御所の門前を過ぎる時には必ず地に跪(ひざまず)いて涙したと言われる。

歌は自分でも余技と称していたが、僧となって最初についた師の坊が、経文よりも国学を教えてくれた。常陸の真壁に近い楽法寺の住僧で恵岳と言うのが「万葉集要抄」の著書もあり、このひとの影響で、古学の本を弟子にも読ませたのである。後に真鍋町の

善応寺の住職に転じたが、土浦の商家の主人で、国学を学んでいる色川三中、藤森弘庵、大久保要、水戸の藤田東湖、会沢安などと往来し、自然と水戸学派の影響を受けた。真鍋の町でも「気ちがい坊主」と噂されていた。変り者に見えたのだろう。やがて僧侶でいるのを恥とした。還俗を思い立って、法衣と念珠を焼き、身体を浄めて寺を出て、国学の友で土浦の色川氏の家に行き、預けておいた衣服と袴をつけ、七日間絶食した。桜、乃至(たいし)佐久良東雄と名を改めたのは、鹿島（神宮）に参詣して桜の木千本を寄付してからだと言う。気負いが感じられる。もとの苗字は飯島であった。郷士の家だったが、普通の武士でなく、藩の者に見下されるのを嫌って僧となり、また転身して京都に出て住み、志を同じくする人々と交りを結んで勤王のために働こうとした。

ひとあゆみ　あゆめば　あゆむ度ごとに
みさとにちかくなりしうれしさ

江戸を出て京に向った時の歌で、都への傾倒の仕方がもとより尋常でない。

しかし、これは期待が外れたようで、京都は東雄がいた水戸の周辺ほど人が覚醒した様子はない。公卿たちは何もしようとしてないのである。そこで大坂に来て坐摩神社の近くに住んだ。

大坂は商家の都市だが、活気があり、学問を好み無為を嫌って変革を望む空気が町にあった。そこで塾をひらき国学を講義した。京都ほど空気は沈滞していない。だが、佐久良東雄の望みは、あくまでも京の禁裏の傍に住むことだったろう。伝説にはまだ常陸

にいる間に、藤田東湖から水戸藩に仕えるように勧められた時に東雄が、自分には既に主君がある故、徳川の支流である水戸などにお仕えはできないと答えた。もと僧だったことは承知していたが、仕官しているとは聞いてなかった東湖が、その御主君と申されるのは、と尋ねると、東雄が膝を正して「おそれ多いが、ただ今、僅か六万石の賄料で京都においでます今上陛下こそ、この東雄の御主人で御座います」と答えたので、東湖がしばらく返事が出来なかったと言う。東湖は水戸家の家来だったからである。

島男也も、水戸の郷士の出身である。一度、藩に仕えたが、なぜか浪人して、大坂の上町に住んでいた。郷士だった者は、移動が自由で、京に集って来る有志の者が、郷士か農家の出の者が多いのが、一つの特徴である。百姓出でなければ、藩を脱走して浪人した者である。主人があっては勝手を許されない。島男也は剣を習っていたので、道場をひらいて坐摩の神官、渡辺近江守に迎えられて、境内で人に教えることになった。中山権大納言に仕える田中河内介が、この両人と似た農村出の経歴で、抱く志も通じ合っている。坐摩の社に祈願に来て、両名に会うと、素直に胸をひらいて語り合うことが出来た筈である。河内介も、まだ公卿の家の執事で、過激なことを口にする人柄ではない。佐久良、島は河内介が禁裏のお側に仕え、しかも皇子御生誕のことで奔走しているのを聞いて、羨むとともに、皇室の弥栄をおのれらも謹しんで祈念する心であったろう。

後に万延元年に桜田門で井伊掃部頭を要撃し暗殺した水戸浪士の首謀者の一人、高橋多一郎父子が大坂に逃がれて来て東雄の家を頼って来たので、東雄は男也と相談して、

生玉神社の近くにある男也の寓居に匿った。このことが発覚し両名とも捕われて前後して獄中で死んだ。勤王家として別に行動に出ぬまま、世を終ったので、同じような境遇で志を抱きながら消え去っていった人々は、両人のほかにも多かった筈である。国学と水戸学の信仰者は諸国に出ていた。いわゆる草莽の間に特に多いように見える。飛躍を期する衝動がこの人々の間に生れて潜在していたからであろう。東雄が捕えられる前に遺書を託したのは偶然に訪ねて来た津和野藩士で国学者の福羽文三郎（美静）である。この人もその時はまだ無名の有志で、同学の故に東雄を訪ねて来たのである。こう言う交友も時代の特徴であった。

祐宮の誕生があった九月二十二日に、河内介は坐摩神社の渡辺近江守にそのことを急いで私信で知らせた時も、この二人の同志のことを忘れず、手紙の追伸として書き添えた。

「追申、桜、島両氏へ、早々御通達可被下候。憚ながら申候。下官事、本文之刻限、上々都合に存候。返す返すも歓涙禁じ難く、恐悦之至に御座候。以上。」

歓涙禁じがたく、とはまことにこの誠実な人柄らしい。これは私信で内報である。

引続いて公文も河内介が認めて届けた。如何に河内介が悦んでいたか目に見えるようである。この田中河内介は三長と陰口されるほど、背が高く、髯が長く、帯びている刀が長くて、人に目立った。中山邸から離れた町（寺町五条上ル東側）に住んで、そこか

ら通ったのだが、木訥で謹厳な武士で、中山邸で祐宮が生れて、お仕えすることになったのに、真に生甲斐を感じたようである。朝早く中山邸で門番もまだ起きない内に通って来て、大きな拳で門の戸を叩いて起すのが近隣の注意を惹いた。宮仕えするのに似ず丈の高い無骨な大男だから目立ったのである。

河内介の妻は、養父田中近江介の長女である。長男、瑳磨介が生れた。河内介は幼い時からこれに学問を習わせ、厳格に躾けた。後に中山家から離れてから父子ともに勤王の実践運動に身を投じたのは、祐宮が安政三年九月二十九日に中山邸を出て御所の親王御殿に移られてからのことで、それまでは謹厳に奉仕して、特別な行動に出ることを戒めた。

佐久良東雄や島男也のほかに遠く九州の小河一敏などと、書状を交換して志を通じ合ったが、志士的な過激な気鋒は外に現わさない。日の御子のお側にいる諸大夫として、どこまでも慎重に戒めていたのだろうが、接触する殿上堂上の人々や、周辺に集まるようになった朝野の有志については人間を厳格に批判して見ていた。遠方の同志に与えた書翰にこれが示されている。祐宮のお側にいることで、河内介は私情を抑えて秘していたが、眼光鋭く、周辺の人々を観察していたことが知れる。

やがて、井伊掃部頭が幕府の大老となって有名な安政の大獄が起った。その時も河内介は局外から観察している人間であって、紛糾の中に身を投じてない。彼が生死を顧みず行動を起すようになるのは、もっと後のことで、大獄で捕われて志士たちが関東へ送

られた日にも、河内介はその人たちについて日頃、見出していたことを九州の小河一敏にあてた文中に物語っている。

逮捕された人々の氏名を挙げ、寸評を下しているのである。鷹司殿諸大夫小林式部少輔については、「平生武器を好むの癖あり、慷慨の人」と言う。三国大学については、「金持儒者かと存候。」水戸家留守居、鵜飼吉左衛門、画工宇喜田一蕙、同じく松庵については、「共に尋常の人」と言い、儒者池内大学については酷評を下して、「元知恩院御内、その後不首尾にて放逐せられ、当時浪人、詩歌を好みて名あり。刀剣売買を好くし、京儒皆これを賤しむ。畢竟、馬鹿の間違い」、西園寺殿諸大夫藤井但馬守は「尋常」、三条殿諸大夫森寺若狭守は「愚人」、梅田源二郎（雲浜）は「若狭の産、尋常有志の人」、鷹司殿諸大夫の高橋兵部権大輔は「無学、尋常、大慾」、青蓮院宮御内近習伊丹蔵人は「尋常の愚人」、最後に頼山陽の息子、河原町三条、頼三樹三郎については、「山陽外史の次男、京にて儒者店、放逸酔狂、論ずるに足らざる人物、僕等これを避く」としている。

きびしいし、なすところのない諸大夫の平凡尋常さなど、おのれがその立場なので、よく観察しているのだ。まだ、ほんとうに維新の為の人は出ていなかった。田中河内介は、自分の主家、中山権大納言に対しても、容赦なく見るだけのことを見ている。

「主家大納言殿は議奏にて候。この節御役不潔の事に存じ候。伝奏広橋殿も、江戸より銀百枚貰われ候。みなみな天子の御顔に泥ぬり、三公（鷹司、近衛、三条）を入道させ、

右の家来を江戸に渡し入牢させ、種々御はたらきの御勤功にて関東より進められ候事にて候。堂上方中にも御機げん取りに、御一統へ二万両参り候。未だ御配分はこれなく、京都もやくたい、この上は兵乱より外はこれなしと存ぜられ候。」

河内介は、偏見のない人間の目で物を見ることを知っていた。御所の内部の無気力と日なた水の腐敗を見落すことはない。更に、この上は兵乱より外はこれなしと極言した。大男の彼が抱いて歩いたり、馬になって背にのせて廊下を四ん匍いで歩いた幼い祐宮の前途に、どんなものが待っているか、どんな人たちが取巻くことかも、ひそかに慮って憂いていたのではないか。

祐宮が親王御殿に移らせられるのを送って、やがて彼は中山家から立去る。微力を知りつつ、未来を作ることに突進するのである。

中山邸から離れてから僅か五年後になって、この田中河内介が、倅の瑳磨介とともに腥惨な他殺体となって、嵐のあとの瀬戸内の小豆島福田村の浜辺に打揚げられたのを、村の者が発見した。難船の水死体ではなかった。発見した村の百姓で漁夫を兼ねる伊右衛門と言う男の口述書に依ると、文久二年戌五月朔日夕七つ時から東北風が強くなったので早目に網を船からおろし、船をつなぎとめて帰宅したところ、追々風雨烈しく物すごくなった。二日朝になってから、浜に出て網も船も取入れたところ、沖の方から異体のものが打揚げられて来たのを見つけ、村役場へ届け出ようとするところに、年寄りの

貫作というのが、やはり嵐で浜を見まわりに来たので知らせ、変死体なのを確かめた。前後して、二つの死体が打揚げられた。二体が親子のものであるとは、もとより知らなかった。

屍体の検案書が残っている。（豊田小八郎「田中河内介」）

文久二歳戌五月二日、大北東風にて大荒の節　当村浜辺打揚死人の記録

「年齢凡そ五十歳余りにて、少し白髪これあり、惣身瘠たる方、丈高く、惣髪にて、凡そ二番生かと（意味不明）相分りかね、山伏のごとく、頬髭三、四寸程、只腮のまわり髭延しこれあり。

着類。縞縮緬にて、紺浅黄の棒縞袷せ、但し裏花色ちぢぶにて、袖の内紅のつき合を着し、肌着襦袢、凡そ唐毛綿類。但しかねきん木綿かと申様の白無地にて、袷帯博多をしめ居候。但肌帯なし。

右死人、左の脇腹に一寸ほど刀疵これあり。右の脇にも少々切疵これあり。」

これが田中河内介で、次が倅の瑳磨介である。

「歳齢二十二、三と相見え、随分肉太き方。惣髪にて山伏の如く、是は頬髭御座なく、着類、紺浅黄棒縞縮緬単物、白襦袢、下に唐更紗にて、模様は黄赤黒、至って細き唐花模様、筒袖襦袢着し、上着白地かすりの浴衣を帯し、紺縞の博多帯をしめ、紺足袋をはき居り申候。但し肌帯なし。

右死人、左の横腹えぐり疵これあり。右切口より臓腑六、七寸程出て居り申候。脇の

下にも一寸程の刀疵一ヵ所これあり。」

もとより二体とも他殺体であるが、そのあとに続く記録がなまなましく無慙である。

「右の死骸、両人とも辰の刻時分に打上り、凡そ改め見申候ところ、未だ血の色変る事これなく、凡そ丑の刻時分に相果て候ものと相見え申候。右両人とも、後手に縛りあり候えども、縄の掛け方、番人の相懸け候とも相見え申さず。男結びに致し、首より掛け、後にて縄をねじ両手を縛りこれあり候。

右の足に、両人とも凡そ巾四寸、厚さ二寸五分ほどの木にて、足がせを入れ、およそ八寸あまりの釘にて、右の木両方より縫留に致し、右縛り縄、老人の方凡そ船手の縄と相見え申候。猶また若き方の分は、凡そ八合苧ほどの細き縄にてこれあり。

若き方壱人、横腹切口少し上の方、白木綿凡そ七尺あまりにて、腹帯をしめ居申候につき、右の帯解き見申候ところ、田中河内介男主馬介（モトノママ）藤原嘉猷と書き記しこれあり。且また右腹帯の下、少し下の方に白木綿にて、細きたすきに似たる一重まわりのくけ帯をしめこれあり。

右両人とも、腹中に水呑み候てい更にこれなく見請け申候。もっとも水中より打上り候儀に候えども、粗々改め見申候ところをこれに記す。」

これが権大納言中山忠能の諸大夫だった田中河内介の最期の姿で、船具の縄で両手を後ろに縛り足かせをかけられていて、脇腹を刀で刺されて殺害され暗夜の海に投げ込まれた。嵐の浪に送られて磯に打揚げられたものであった。

河内介が中山邸を離れてからの凡そ五、六年の間に、安政の大獄があり、桜田門の井伊大老の暗殺があった。諸国の志士たちが別に為すこともなく時局を見送っていた時期が過ぎて、無名の彼らがいつの間にか時局に介入し、渦紋をひろげる役をするようになっていた。謹厳で進退に節度のあった田中河内介が同じように能動的な行動人に変身していたのである。

寺田屋騒動として知られた事件の中に河内介がいた。自分もリーダーの一人として、公家と志士が合議の上、クーデターを敢行しようとして九州諸藩の有志と集ったのが、事破れ、関係した者がそれぞれの藩に引渡された。河内介は浪人の身分なので、鹿児島へ送られることになり、大坂から船で護送される途中、明石か垂水あたりの海上で、ひそかに片付けられたのである。

田中河内介父子が関係した寺田屋の事件のことは、後に書くことになろうが、ここでは、この五、六カ年に河内介の境遇が如何に烈しく変化したかを注意するのに止めたい。祐宮のお側に仕えていた折りに、謹厳におのれを持して諸大夫としてひたすら忠誠に奉公していたひとが、義挙と信ずる過激な集団行動の指導者の一人となっていた。その時河内介の年齢は五十歳に近く、その頃の世間では隠居を考えても自然と見られたであろう。その河内介が事件の中心に立ち、やがて倅とともにこういう最期を遂げるようなった。

田中河内介だけの変化ではなく、時代は急速度に転換した。世間が如何に動揺し激しい変化を続けたかを証明しているのだ。各人は別個に離れて住んでいて各自の小さい火種を暖めていた。これが順に相寄って火度を高め急に燃焼して、音を立てて野を焼く火焔となって燃え立つようなものである。中山家に仕える間から、田中河内介は、豊後国岡藩の家中の小河弥右衛門一敏と文通があった。小河一敏も、寺田屋事件に関係して上京することになったが、それまでは遠国で顔を見たこともなく、手紙だけ、やりとりしていつか心中を打明けるようになった交際である。一敏が書いて残したものに、「故ありて一敏、十年ばかり前の方より、書翰にて互いに思いを通わしけり」と、河内介のことを書いている。

河内介が豊後の竹田にいる一敏に宛てた書翰に、「京都にも有志の人は少なく、一人半はこれあり候えども、今半分も六カ敷候」と、交る人物のすくないことを告げ、「この頃、勢州の社司上京、これは拙共（自分）に可啜人（共に血を啜るほどの仲）に御座候。このほかに寺田と申す者は、有志の者、しかし町人にて候。」

勢州の社司と言うのは、山田大路親彦と言う伊勢の松坂の旧家の生れで、山田の神宮の御師の山田大路三郎太夫の家を嗣いだ。この家は薩摩大隅日向三国を檀所（分担地区）としていて毎年家来の者を遣って、神宮の大麻と暦をくばり、また三国から神宮に参詣に来る者を自分の家に宿泊させる仕事をしていた。河内介が仕える中山家と縁続きで、文通し交際を深めたと見える。

この書状で自分も告白しているように、田中河内介の交友範囲は広いとは言えなかった。交通不便の時代である。遠国に友はあっても、なかなか訪ねて行くようなことは出来ない。その代り、遠く離れていても一旦信じ合えば、身辺にいる者にも明かせぬことを、書送ることも出来たのだろう。

万延元年閏(うるう)三月が終ろうとする時に、伊勢の山田大路の紹介で、是枝柳右衛門貞至(さだのり)と言う男が、京都に河内介を尋ねて来た。

この年三月の初めに江戸で井伊大老が暗殺されたのである。是枝柳右衛門は、鹿児島の谷山郷の商家に生れたが、家業のかたわら私塾をひらいて人を教えていたが、国事を憂うるようになった。鹿児島は階級制度のやかましい国柄だから、武士に生れなかった是枝を相手にしてくれる者がない。志はあっても話相手が得られないのだ。同じ谷山郷の関山家の家中に、美玉三平と言う武士がいるのと交際を結ぶことが出来た。美玉三平ももとは武士でない。焼酎屋の倅に生れたが剣道を学び、学問を好む性質で士分に取立てられる機会を得たのだが、もとが町家の生れなので、他の武士とは違い偏見ない態度で、是枝柳右衛門を認めて世に出るようにしてくれた。道がひらければ、交友の範囲もひろがり、やがて柳右衛門は郷士たちの間に迎えられ、家中の誠忠派の運動にも加入した。

この是枝柳右衛門が、安政の大獄を知り江戸に上って井伊大老を暗殺しようと志して、この三月十日に国を出た。その時はもう水戸の浪士が桜田門で大老を襲撃して成功した

後だったが、遠い鹿児島の是枝の耳にはまだ入っていなかったので、自分がやるつもりで出発して日向の細島に出て便船を待っている時に、初めて、桜田門のことを聞いた。遅れたかと思っても、そのまま引返す気にもなれない。京都へ上ることにした。

桜田門の事件の直後だし、京都付近は、是枝のような、正体あいまいで武士とも浪人ともつかぬ人物をやたらに入れるような状況ではなく、探索方が出て極度に警戒厳重である。桜田門の指揮者、高橋父子が逃がれて上方に出たと噂された時でもある。高橋父子が、大坂で佐久良東雄、島男也をたよって匿って貰っていた時期だったのも奇縁である。

是枝柳右衛門は困って伊勢にまわり、薩摩の人間だから山田大路の家に泊り、偶然に親彦に会うことが出来て事情を話すと、それは都では田中河内介にお会いになるがいい、御紹介しましょうと言うことになった。

そこで是枝柳右衛門は近江路を経て、都に向う。途中、水口の駅で、故郷の人伊牟田尚平に偶然に出会った。伊牟田も早く脱藩して国事に奔走している男である。後に是枝と行動を共にするのだが、その時は、旅の空で偶然の出会いである。伊牟田は江戸に向うところであった。道ですれ違うところを、お互いに気がついて名乗り合って話した。

是枝は井伊大老の暗殺を企てて故郷を離れて来た男である。伊牟田は後に江戸麻布中ノ橋北側でアメリカ公使館の通訳官ヒュースケンを暗殺して逃走した浪人の中に加わっ

ていたと噂された男である。どちらも、性格的に、暗殺者らしい暗い影を不思議なくらいに持っていない。

再会を約して別れた。ひろい日本だが、旅をしていると、どこかで人と出会うことがあるのである。通る道が大体主要な街道ときまっている故もあるが、人間がまたどこでもよく動きまわる時代が来ていた。是枝柳右衛門も田中河内介と言う人間がいることを知らなかったが、伊勢で御師の山田大路の家に泊ったばかりに、京都に出て訪ねることになった。

商家生れの田舎儒者、是枝柳右衛門を、河内介はその頃住んでいた丸太橋東詰の家で迎えた。信頼している山田大路の紹介なので、初対面の扱いではない。時節柄町の旅宿に泊ると、幕府の目がうるさかろうから、むさくるしいがこの家にお泊りなさいと申出てくれた。悦んでその好意を受けて、連日お互いの胸中を語り合った。埋れていた火種が、風に会って赤く燃え出るようなものである。

河内介は、柳右衛門に肩衣袴(かたぎぬばかま)をつけさせて、中山邸へ連れて行った。御所に出た後だったのか、忠能は権大納言の衣冠束帯のままで、柳右衛門を引見した。河内介は永年の奉公で慣れているが、柳右衛門は遠い九州から出て来て、殿上人に公式の形に近い謁見を許された。目を瞠(みは)ったわけで、素朴に深く感激した。あとは奥殿に誘われて、くだけた話をした。何を聞いても柳右衛門は感動する。特に印象を受けたのは、田中河内介が権大納言のような高貴の人の前に出て、自由にくつろいだ態度でいたことである。やが

て遠い舟旅をして、故郷に帰ると、柳右衛門は、田中河内介の重厚な人柄を誠忠派の人々に熱心に話した。

文久元年正月になると、河内介は倅瑳磨介と、甥の千葉郁太郎を連れて、西国に下り、最初に多年の文通相手の小河一敏を豊後の竹田に訪問した。一敏が九州各地に在住する尊敬する友人を紹介して会うようにしてくれた。久留米の水天宮の神官で、つとに水戸学を慕って遥々と水戸まで行って会沢安などに会って来た真木和泉守を訪ねた。和泉守は罪を得て数年前から屏居中で面会が許されなかった。

阿蘇から熊本に出た。熊本では肥後の松村大成、筑前の平野二郎、熊本の川上彦斎（げんさい）と会った。そこから博多に出、太宰府に詣で更に下関に出て、後に高杉晋作などの資金の後楯になった船問屋の白石正一郎とも会い、吉田松陰の妹婿の久坂玄瑞とも識り合った。

この旅行で、河内介は俄かに交際をひろげ、思想的に躍進して王政復古の運動に従う確信を築いたように見える。帰ると、やがて河内介は、諸国の運動の京都での連絡先となった。二年、三年前の、自ら戒めるきびしい性質の人間ではなくなった。京都の家は、諸国の同志が連絡に来て潜伏する場所となった。京都に遠い地方の同志は、河内介の働きで、勅諚を頂くか青蓮院宮の令旨を仰いで九州で旗を上げれば成功するものと信じていた。河内介は、いつの間にか渦の中心に立つ。火の玉と火の玉とが相寄り合って、西国全円に野火となってひろがりそうな勢いに見えた。

文久二年に薩摩の島津久光が千余名の家臣を連れて東上することになった。志士たち

は久光の部下が大小の火器をおびただしく持って出たので、ただの東上でなく事を起す意志があるものと誤り信じた。この機会に事を起して、久光が大坂にいる間に、勅命を下し、大坂、彦根、二条の城を攻め、聖駕を大坂に移して、東海道を攻め下ろうとも言い、幕府の勢力を上方から追放し、朝命を四方に下して兵を募ろうとも言出した。世間がこう変って来るとは不惑の年齢を過ぎた河内介も夢のような心持だったろう。

西国諸藩の同志が続々と上京して来た。薩摩、長州、土佐、熊本以下、脱藩者や浪士が多いが、河内介のいる位置は、禁裏とこの浪士たちを結びつける極度に緊張した重要な線の上である。その時、この運動に参加した薩州藩士を島津久光が寺田屋に人をやって上意討ちに掛けて鎮圧を命じた。人々の希望や期待とは反対に出たわけである。気負い込んでいた列藩の志士たちも手が下せなくなって屏息した。田中河内介は、京都に於ける立場を失い身を寄せる場所を失くした。

先ず自分たちで兵を挙げ、関白九条尚忠と所司代酒井忠義を屠って見せれば列藩も奮起して義挙の味方につく筈である。この謀議には、薩摩の藩士が中心になった。有馬新七、田中謙助、後の陸軍大将元帥大山巌となった弥助、前に出た是枝柳右衛門、三島弥兵衛（後の警視総監・通庸）、西郷信吾（後の海軍大将・従道）などである。久留米の真木和泉、長州藩士久坂玄瑞、入江九一、寺島忠三郎、佐世八十郎（後の前原一誠）などが、これに気息を通じ、九州竹田から同志を連れて出て来た岡藩の小河一敏が田中河内

介と連絡を取って肩を入れていた。途中で袂を分ったが出羽の浪人清河八郎の他に、藤本鉄石、安積五郎などの過激で知られた志士たちも離れて関係していた。河内介の周囲に集った人間の輪は、これほど広く各様で大きく広がっていた。祐宮の養育に当っていた静かな時期とは河内介の身辺も世間も、まったく変っていた。

伏見の寺田屋で薩州藩の者と久留米藩士がそれぞれの部署を定め出発しようとするところへ、藩主の後見役の島津久光が派遣した九人の者が来て、首謀者の有馬新七以下四人を二階から呼びおろして、主命を伝え、おだやかに藩邸に来るように説いた。承知しないので、上意と叫んで斬りつけ白刃相撃つに到った。

その時、田中河内介も真木和泉も同じ階下の裏座敷にいたが、薩州藩同志の激しい争闘をとめようもない。見る間に首領有馬新七等六名を討たれた。田中河内介が出て、討手の奈良原喜八郎等と話合い、残った者は君命に従って錦小路の藩邸へ行くことにした。鎮撫に向った藩士の側にも死者重傷者が出た。烈しい乱闘で、屋内は畳も襖も飛散る血汐で染められていた。

長州藩士で義挙に参加するために上京して来た久坂玄瑞以下は一度入った河原町の藩邸から田中河内介の丸太橋の家に移って準備をして待っていたのである。夜半になってから、この変事の知らせを受け、中止と決した。

小河一敏とともに豊後竹田から参加した岡藩士の一人が当夜のことを記している。これは第二陣として、遅れて舟で淀川を伏見に上ったのである。

「二十三日午時前に八軒屋に至り三十石船に乗込む。淀船の船頭ばかり横着なるはなし。促せば促すほどずるけ、漸くにして夕刻に至り船を出す。桜の宮に至る頃は、已に薄暮頃なり。夜半何所なりけん、一隻の下り舟に行逢う。『伏見で軍が始った』と言いて行き違う。これ必ず事の敗れたるならんと感ず。晩伏見に着き、船を板橋の薩邸前に繋ぐ。邸内には数百の提灯縦横に奔走す。果して知る、事の有りしを。留守居本田弥右衛門迎接し、事変の始末を告ぐ。邸内に滞在す。待遇甚だ厚し。朝飯を饗せらる。糧食体の物に非ず。饗膳の如し。夜来の混雑言うべからざるに、寺田屋の修繕も夜中に竣え、又我一行の突然未明に来たれるに、かく接待まで手の廻るには驚きぬ。かく物の運びてこそ、戦にも勝利をば得べきなれと感じ合えり。つらつら寺田屋の様子を見るに、番頭は店頭に坐し、自若として何も平常に異る体なし。畳は新しきを敷き、建具も張替えたる様なり。柱より框二階根太等、一面に新たに埋木し、煤さえ拭いあり。ただ土間の土は入れ替えたるのみにて、まだ、たたき漆喰いを施さざるのみ。此の混雑の際、かく速かに修繕を施し、一日の営業を欠かしめざる、薩摩の手の廻れるには感服したり。」

片付けた後の様子が、反って事件のなまなましさを感じさせる。

岡藩士の一行は薩藩から厚く待遇されて、やがて本国に帰ることが出来たが、リーダーだった小河一敏は、咎められて永く幽閉されたようで、その後は鳴かず飛ばずの生涯であった。ただどこから聞出したものか、彼が書残したものが、当時、薩州藩でかたく口留めして秘密にした田中河内介父子の最後のことを、最初に世間に知らせた。都と九

州の竹田との遠く隔った間で手紙ばかりやりとりして結んだ久しい親交が、敗れたこの事件のあとでも、小河一敏に河内介のことを忘れがたく感じさせていたのに違いない。

「田中父子及宮門（海賀）、郁太郎、主計等は、いずれも船中にて殺されたる由聞えければ、その次第を薩人に問えども秘して之を詳かにせずと雖も、その後仄かに聞くところに拠れば、船は二艘に分れて、一艘は田中父子のみ、一艘は宮門、郁太郎等並びに薩人を乗組ませ、それぞれ警衛の人数付居たる由にて、警衛の人々は田中父子を殺せと、官吏の内命を受け居たる由にて、その内の某、河内介に向い、その旨を告げるに、河内介は神色自若として、然こそありつべく思い居たるなり。疾く疾く殺すべしとて、襟を披き胸を明け両手を差上げたるに、警衛の人々共にためらいたれども、官吏の差図に随わざれば、己が身こそ危けれとて、思い極め、直ちに刺殺したりとぞ。」

嵐の日の小豆島の浜に浪で打揚げられた父子の死体は首から縄をかけ後手に縛り、足かせまではめてあったのだから、最後の際に襟をひらき両手を差上げて河内介が疾く殺せとは言わなかったろう。手足を束縛したままむごたらしく刺したのである。小河一敏は河内介辞世の作と言う歌をどこから聞き出したものか紹介している。

ながらへてかはらぬ月を見るよりも
死して払はん世々の浮雲

薩州藩では河内介を殺したことを家中を戒めて厳重に外部に漏れぬようにした。しかし、その下手人は発狂したと伝えられている。

伊豆の下田は安政元年十一月四日に大地震とこれに続いて襲ってきた津浪の被害を受けた。当時、大坂から回って来て港内に碇をおろしていたロシアの軍艦も大破して航海が出来なくなったくらいである。「田面へ汐押来たりたり。間もなく市中土煙立て、けしからぬ騒ぎなり。火事かとおもい見るまに大荒浪田面へ押来たり、人家は崩れ大船は帆柱を立てながら飛ぶが如くに田面へ、ドッと来たりたる体、おそろしとも何とも申すべきようなし。その時、居合せ候もの共、大勢思わず茨をわけ木を伝いて、道なき山をひた上りに上りたり」と、当時ロシアの使節と談判に当るために下田に居た川路聖謨が遭難の模様を書いている。

川路が翌日見に行くと、陸地の田圃の中、海から離れた二十町前後のところまで、三、四百石の廻船や千石船が押上げられ、付近に死体が散乱していた。地震よりも津浪が数回に亘って押寄せて来たのであった。「夕がた見れば死人を掘出し居たり、魯西亜船に助けられたるもの、三人もあるよしなり。魯人の話にては、魯船の脇を、百人もその余も流れ行きたるものありという。魯人は死せんとする人を救い療治せしとて、助けられし人々泣いて拝むなり。恐るべく心得べき事なり。」その時の破壊から漸く下田は復興して来たばかりのところである。

安政三年七月二十一日（一八五六年八月二十一日）夏の海の青い沖合からこの港にアメリカの旗を掲げたフリゲート艦が入って来た。ペリー提督の黒船が来て以来、下田の

町の者は外国船が入って来ても以前ほど驚かなくなっていた。これは軍艦サン・ジャシント号で、ペリーが結んだ和親条約に従って、大統領から日本駐在総領事に任命されたタウンゼント・ハリスが赴任するのを送って来たものであった。

普通の町の人間と違って役人はこれを意外とし、相変らず迷惑のこととした。確かに招かれざる客である。しかも先方の申出を聞くと、領事として上陸して下田に住み、新たに通商条約の内容を日本側と交渉するのだと言う。上陸して居住すると言うので驚いて、そんな約束はしてないと拒もうとした。これは、ペリーの条約のアメリカ文の翻訳と日本語の訳文とが相違して、「この条約調印の日から十八カ月の後には、合衆国政府は何時なりとも、下田に居住する領事または代理官を任命することが出来る。ただし、両国政府のいずれか一方がこの配置を必要と認めた場合に限る」とあったのが、日本文では「両国政府において、拠(よんどころ)なき義これあり候模様により」と言う風に書いてあったのが行違いの原因である。

退去を求められて、ハリスは拒絶した。自分は英文の条約を正しいとすべきだし、これが問題となるなら両国政府間で交渉して決定すべきで、領事に任命された自分の知るところでない。自分は大統領の命令で任命されて来た。だから、その命令どおり行動するだけだ、と答えた。

タウンゼント・ハリスは一八〇四年十月四日にニューヨーク州で生れ、下田に来た時は既に五十一歳十カ月の年齢であった。(坂田精一「ハリス」)学歴も中学卒業だけで、

父や兄が陶磁器輸入商をしていたのを手伝った。陶磁器は東洋の特産だし東洋に関心を抱くような種子がこの若い時から植付けられたとも言えるだろう。商売もかなり成功し、中年に達してからニューヨーク市の教育局委員となって、子弟の学校教育に熱心に従事した。同時にプロテスタント教会の仕事に肩を入れた。アメリカ流の独学で立身した人物で、真面目で信仰心が篤く、一代を謹厳に独身で通した。

四十五歳を出てから、兄弟の店が不況で破産したので、自分だけ独立して東洋貿易を志して、船で東洋と往復するようになった。支那にいる間に、台湾を合衆国が金で買ってはどうかと意見書を提出したりした。国務長官マッシイが友人であった。そんなことから政治や外交に興味を持ち、寧波（ニンポー）の領事に任命されたが、これは副領事を赴任させただけで自分は行かなかったらしい。ペリー提督が二度目に日本に向うと聞いて、連れて行って貰うように運動したが許可を得られなかった。最後に日本に来るまでの八年間に、彼がクリスマスを迎えた土地を自分で思い出して日記に掲げてあるのを見ると、一八四九年には北太平洋上、翌年からマニラ、ペナン島、シンガポール、香港、カルカッタ、セイロン島で迎え、一八五六年が日本の伊豆の下田だったと記されている。五十歳になろうとして、東洋に旅をしているのが累年である。何が動機だったのか、外交官となって日本へ行きたいと望んで、本国政府に運動した。東洋の他の国を知っているのだし、資格は確かに充分にあった。一八五五年大統領にあてて書いた手紙に、ハリスが日本を訪問したい強い願望を熱心に披瀝したのが今日も残っている。

ハリスは大統領にこう書いている。シナの弁務官と駐日領事と、どちらかを選べと言われたら、私は地位として低い駐日領事を躊躇なく採る。

「私は日本に居る間に耐えねばならぬ社会的流謫や、私が生活しなければならぬ精神的孤独については充分に承知し、それに耐え得るための用意がある。私は独身者だから、家庭をなつかしんで案じて顧みるようになったり新しい家に耐えられなくなるような束縛を何も持たない。閣下よ。私は友人たちを訪問したいために休暇を願ったり、日本を好まないという何らかの理由で、地位を離れるようなことは致さぬ覚悟であって、自分の任務を果すために、ひたすら献身する覚悟でいることを御信頼願いたいのです。」

五十二歳の初老のひとが、どうして未知の国の日本に来て、風土も習慣も違い、言葉さえ通じぬ人間の中に入って住もうとしたのか？　初期のアメリカ人らしい開拓者の精神も残っていたろうが、世界に向ってまだ開かれてない東洋の最後の一つを、自分が行って門戸を開いて見せようと、功名心も動いた。（そのほかに彼は幼少の時から変らぬイギリス人嫌いで、英国が前の鴉片戦争に続いて、小さい商船の被害に口実をつけまたもや中国に向って侵略戦争を決行し、次には日本にかかるのだと香港の総督が広言したと聞いて、時期的にもこれに刺激された。アメリカの為にも日本をイギリス人の手にかけさせまいと意気込んだ点があったようである。）

ハリスの日記を見よう。二日後には下田に入る船上で、一八五六年八月十九日のくだ

りである。五十二歳になろうとする老人が、オランダ語が話せる書記としてヒュースケンと言う青年を連れているとは言え、そこに単独で住む為に、どんな国かもまだ判らぬ日本に接近しつつあった。

「火曜日、よく眠れなかったので――私が間もなく手がけねばならぬ日本と私の任務のことが、どうしても私の頭について離れなかった。眠りを誘うような、あらゆる方法をこころみ、フランクリン博士の空気浴をやることも忘れなかったが、午前四時をすぎるまで眠れず、そして六時に呼びおこされた。七時に朝飯だから。

艦は、昨夜中、時速平均約十ノットで、よく航進していた。きらきらした美しい朝、風は順風をつづけているが、昨夜よりも強くない。一羽の信天翁（あほうどり）を見る――私が一八五〇年十月にカリフォルニアの沿岸を最後に出発して以来、最初に見た信天翁を。その鳥は、まるで友人のように見えた。確かに、旧知のように。

我々は今日、九州の沿岸から東、約七十哩（マイル）にあるが、この海は人間に関するかぎり一つの沙漠のようである――一艘の船も、ジャンクも、ボートも、如何なる種類の舟をも見ない――そして、このことは合衆国よりも人口稠密な一帝国の海岸に近づいてからも、なお同じである！　太平洋の対岸（アメリカ）の、渦巻く生活と、なんという対照であろう！　私は日本に駐劄（ちゅうさつ）すべき文明国からの最初の公認された代理者となるだろう。このことは、私の生涯に一つのエポックをつくるものであり、日本における諸事物の新しい秩序の発端となるであろう。私は、日本と、その将来の運命について書かれるところ

の諸々の歴史に名誉ある記載をのこすように身を処したいと思う。（中略）今夜も美しい夜。かがやいた月と星に、心地よい軟風。大気は酸素にみちて、熱帯の諸地方とは著しく異っている。私は大気の刺激的な、心気を引立てるような影響を敏感に感ずる。」（坂田精一訳、ハリス「日本滞在記」岩波文庫）

個人的な野心が伴っていたとしても、ハリスの志は清純で真実である。それ故に、知らぬ国に間もなく近付こうとして、海がただ一面にひろくまだ何も見えないで空虚なのに焦慮に似た感動を知り、また一羽の信天翁を認めて自分が遥々と渡って来た大きな距離を感じたのであろう。このハリスを迎える側の日本の方は、どんな風な状態だったのか？　ハリスは知らぬが、全国的に攘夷熱が昂まって、次第に抑制出来ぬものになろうとする危険な時期にあった。下田の奉行たちは、なんとかして、この迷惑な風来な異人が一刻も早く引取って帰って貰いたく希望した。上陸して、これからここに住むなどとはとんでもない。とにかくあの大地震の津浪で町がさらわれて、貴下が泊る家など見つからないだろうと言うのである。

ハリスの強い意志は、これに屈しない。条約に基づいた自分のこの国での任務にどうでも就くと主張する。ここでその趣旨が、理解されないならば、自分が江戸へ行って日本の政府に話して解決する。この申出には日本側で役人が一番閉口する。初めて、一応の上陸が認められた。しかし居住とは別だと考えて当分のこととして、ペリーの艦隊が

来た時にもアメリカ人の休息所として認めた柿崎村の玉泉寺を陸上の宿舎とした。ハリスは、ヒュースケンと中国人の従僕五人とともに玉泉寺に入り用意して来た必要な家具を船からおろして運び入れさせた。

九月、残暑のきびしい日本の、草深い田舎の寺の本堂で第一夜を迎えた。

「九月四日、木曜日、

興奮と蚊のため、ひじょうに僅かしか眠れなかった。——蚊はたいへん大きい。」

藪蚊だし、秋口の蚊である。刺されると痛い。あくる朝、「午前七時に、水兵たちが旗棹を立てるために上陸した。荒い仕事、はかどらぬ作業。丸太がたおれて横げたが折れる。幸いに誰も怪我はない。とうとう艦から加勢を受ける。旗棹が立った。水兵たちがそれを廻って輪を作って整列する。そして、この日の午後二時半に、この帝国におけるこれまでの最初の領事旗を私は掲揚する。厳粛な反省——変化の前兆——疑いもなく新しい時代がはじまる。あえて問う——日本の真の幸福になるのだろうか?」

下田の玉泉寺の前庭に星条旗が高く掲げられた。そしてアメリカ人が本堂に入って、がらんと空虚に広かった畳の上に、寝台を置き、椅子、テーブルを並べ、台所では食事の支度をして、何か肉類らしく油でいためている臭気が寺の門の外まで漂う。日本の役人は、当惑し切った。攘夷の声がやかましい国内に、やがてこの事実が知れた時、不穏な事件が起らぬとは誰も言えなかった。何とかしてごまかして、異人たちに早く引揚げて貰うことだと思う。驚いたことには、その夕方になると港内にいたサン・ジャシント

号が碇を上げて出港して行った。アメリカ人二名と、従僕のシナ人を陸上の玉泉寺に置去りにしてである。

領事館が曲りなりに出来て、アメリカ旗を掲げる柱も高く立った。サン・ジャシント号は、来朝の任務を果して帰り、領事は日本に居残って、これから定住する。「光栄の中に私を独り残して」とハリスは言う。

「柿崎は小さくて貧寒な漁村であるが、住民の身なりはさっぱりしていて、態度も丁寧である。世界のあらゆる国で貧乏にいつも付き物になっている不潔さというものが少しも見られない。彼らの家屋は、必要なだけの清潔さを保っている。土地は一インチもあまさず開墾されている。その地面は非常に起伏し、熔岩の峰あるいは火山からふき出された固い粘土となってそびえたち、そして耕作に適しないほどけわしいのであるが、山羊がこの地に輸入されていないのは惜しいことだ。これらの高地は、山羊のために立派な放牧地となるし、山羊の登攀性からみて、彼らのための居心地のよい場所となるであろう。山羊の乳は栄養にとむ食料となるし、チーズもそれから作られる。そしてこのことは日本人が獣肉を食わないとしても、彼らにとってそれを飼う一つの目的となりそうである。」

牛乳が欲しいとハリスから話があった時、日本側では「牛乳は全く児牛に与え、児牛を重に生育いたし候こと故、牛乳を給し候儀、一切相成りがたく候間、断りに及び候」と答えた。それでは、母牛を求めて自分たちの手もとで乳をしぼるようにしたいと言う

と、「牛は耕耘その外運送の為第一のもの故、土人ども大切にいたし、他人に譲り渡し候儀決して相成りがたく候。」不親切ではないが、型どおり後日の責任を取るようなことはしまいとする。そこで山羊は当地にあるか、と言えば、「当表はもちろん近国にも一切これなく候」「さ候わばホンコンより取寄せ、この辺の野山へ畜い置き候ては如何にこれあるべきや」「山野へ放し飼いの儀は相成りがたく候」「構内へ差し置き候儀は如何に候や」「豚同然のもの故、構内へ差し置き候儀ぐらいの儀は苦しかるまじく、放し飼いは相成り難く候」である。

ハリスには日常の必要品なのだから、この返事を聞いて腹も立ったろうが、その無理解と不便とを覚悟の上で赴任して来た男である。食肉の入手には困難したが、鹿、野兎、野鳥など日本人が時々とどけてくれた。特に天城あたりのものらしい猪の肉はハリスを悦ばせた。「たいへん軟かく、汁気があって、すぐれた芳香をもち、美味な牘の肉と豚の腰肉の中間あたりの味がする。」

必要な日用品の供給を日本人が何かと渋るのは、ハリスが居たたまらなくなって、ホームシックを起して帰るようにさせる方針なのだ。こちらは、辛抱強くいつまでも腰を据える決心である。畑に蒔く蔬菜の種子までアメリカから持って来てあった。星条旗を庭に立てた翌日には、ハリスは玉泉寺の鐘つき堂に鳩小屋を作って、持って来た四つがいの鳩を飼うようにした。「今夜は蟋蟀族の奇妙な昆虫の声をきく。その鳴声は、あた

かも大速力で走る豆機関車のようであった。部屋部屋に蝙蝠がいる。大きな髑髏蜘蛛を見る。この虫が立つと、その脚が五吋（インチ）半におよんだ。家内を走りまわる沢山の大鼠を見て、気持が悪くなる。夜になって軽い驟雨。」（九月六日）

狭い立場の日本側の役人は逃げ口上に嘘ばかりつく。「私に途方もない嘘をついた役人に、私は腹を立てた。私はあからさまに彼らに言った。諸君が嘘をついていることは、私に分っている。もし私に諸君を信用して貰いたかったならば常に真実を語る必要がある。もしも、諸君に許与する権能がないか、又はそれに関して諸君が相談をしたいと思うことを私が要求する場合は、私に対して返事をする用意がないと、率直に言ってもらいたい。私に対して嘘をいうのは私を子供同然に扱うもので、それによって私は侮辱をうけたと考えるだろう。私の国では嘘をつく者は軽蔑される。人を嘘つきと呼ぶことは、その人に与える最大の侮辱である。今後、もし私に何か話す場合は、ただ本当のことだけ話してもらいたい。そうすれば諸君を尊敬しようが、私に嘘をつくときには、そうすることができないと。」

日本側の記録では、ハリスの言葉はこうである。「何事を申立て候ても、速かに相弁じ候ようこれなく、眼前にこれあり候をも、先ずこれなき旨相答えられ、強（し）いて乞い候えば漸くして御弁じ下され候段甚だ心得がたく、役人の申分すべて虚言多く、虚言は諸洲の悪（にく）むところ、右様これなきよういたしたく。」こう通訳せられる。

追返して仕舞う算段で、生活を不自由にさせ、孤立状態に置くのである。アメリカの

代表であるのに、江戸からは誰も会いに来ない。土地の奉行を介して江戸と交渉するのだが、返事はなかなか来なかった。来ても下役人から口頭で知らせて、書類の形の公文書に依らない。ハリスは怒ってこれを言詰った。しかし、不自由な中で辛抱強く彼は雪解けを待っている。

その間に従僕のシナ人が外出すると三人の警吏が尾行し、果物を買いたいと言ったが拒絶された。井戸端にいた男に水を飲ましてくれと頼むと、いけないと言って、茶碗を持ったまま逃げて行った。奉行にこれを抗議すると、「調査して見る」と、ゆっくりした返事である。しかし、その代りに見事によく熟した葡萄と柿が手に入った。果物は当地にないとそれまで言続けて断っていたのである。日本の自然は美しい。ペリーの和親条約で、外国人は七里の距離の範囲は散歩出来る約定になっていたので、時折りハリスは付近を歩きに出て、陶磁器輸入商人だったのには考えられない博物の知識で日本の動、植物や耕作や水利灌漑の状態を観察して歩いた。山に登って富士山を見つけた日もある。

ハリスは、その間に日米の貨幣交換の比率の問題、下田と箱館におけるアメリカ国民の居住権問題等について、交渉を要求し、幕府と接触に入ろうと努めた。日本側ではハリスを江戸に出府を許すまいとして、下田奉行に命じて交渉に当らせた。日本側では一々、江戸に伺いを立ててから答えるので、例に依って、談判がはかばかしく進行しない。ハリスは不足がちな生活に辛抱強く耐えて、通商条約の協定に江戸に出る日を待っていた。大統領の親書を日本の皇帝に呈し、あわせて日本の安危に関する重大事件につ

いて直接日本政府に知らせることがあると公式に書簡で申入れたが、幕府はそれに対して例の如く返事も送らず、下田奉行から口頭で断らしめた。ハリスの親切と善意を、避けているばかりなのである。その苦慮もあってハリスは健康を損ねて、病苦に悩んだ。胃潰瘍だったようである。

上陸したまではよい。あとは孤立した生活であった。その上に本国のアメリカ政府から十八ヵ月間もたよりがなく、祖国からも捨てられたような心が動くのである。日本側はハリスの焦燥を緩和しようと企てて、気に入った女があれば世話すると露骨にすすめた。クリスト教徒で酒も飲まず、独身で既に老年に達しているハリスはそんな勧告に心を動かさない。ハリスの病気の時に看病のために、お吉と言う寄航船の洗濯などしている女が玉泉寺へ雇われて行った。お吉は、舟乗相手の娼婦であった。看護婦というものを知らない日本側では妾と思い込んで、支度金を大げさに二十五両もハリスに要求した。要求どおりハリスはその金を渡したが、三日目にお吉を解雇した。お吉の性質は自堕落で潔癖なハリスの気に入る筈がなかった。

鐘つき堂のハリスの鳩は猫にとられてしまった。だが、ハリスはずっと前に頼んであって、例の如くなかなか持って来て貰えなかった乗馬を、やっと手に入れて散歩に使うようになった。

あらゆる意味で孤独は続いている。

翌年春になって、三月八日の正午頃、丘の見張所から号砲一発が鳴りわたった。外国船が見えた知らせである。悦んで近くの丘に上って見ると、三本マストの船に星条旗を掲げたものである。その内に水先案内人に信号しながら港内に向って進んで来たが、水先案内の舟が出て側まで行った時に何故か帆をあげて沖へ退いて行き、江戸湾に入り次いで南の方に姿を消した。「何を意味するのか。まるで幽霊船のようだった。」

失望とともに、真昼の明るい海上に幻影を見たような心持だったろう。次の日の朝この船が戻って来た。アメリカ船であったが、本国政府がハリスに寄越した船ではなかった。メッセンジャーバード号は、箱館を経てアムール河まで行く途中であった。船にあった四カ月ほど前までのアメリカ新聞を読むことが出来、大統領が代ったことをハリスは知った。新しい大統領はハリスが二年前にイギリスのロンドンで会ったことのあるブカナン氏であった。やや心を明るくする知らせである。

七月二十三日になってから、また丘の見張所から船の来た合図の号砲が発射された。「この十一カ月間私が味わったような孤独の生活をしてきた者だけが感ずることのできるような歓喜をもたらした。ヒュースケン君は鹿のように号砲の丘の頂へかけあがっていた。息をきらし、汗をかきながら戻って来て、一艘の船が港の南十哩（マイル）ぐらいのところに見えるが、風が弱いので、しばらく入って来ないだろうと言った。」この船がまたそれほど近くまで来ながら入港しなかった。次の日の夜明けに起きて、江戸と南太平洋を見渡せる東の丘へ、ハリスが出かけたが、船はもう見えなかった。島流しの俊寛のよう

なものである。

夏が過ぎて、秋に入った。サン・ジャシント号でこの土地に置去りになってから一年と四日目になって、待ちに待ったアメリカ軍艦ポーツマス号が、遠方から礼砲を山にとどろかせながら入って来た。

シナの上海から来たので、大陸の戦況、イギリス軍の侵略の模様を聞くことができた。それればかりではなく、日本側の冷淡で寄せつけない方針に向って孤立無援でいたハリスに、小さくとも母国の軍艦が来てくれたのは無二の味方を得たことになる。

日本側では、この軍艦でハリスが江戸へ乗込むだろうと予想し、眠っていた人間が急に目を醒ましたように活発に動き始めた。軍艦を江戸にいれぬようにするために、ハリスに出府を許し、その期日を通告するように御決断を願うと急使を立てた。局面は一転して、ハリスの前に頑固な扉が向うからあいた。下田奉行がハリスを呼び、大統領の書翰の件で江戸から回答が来て、幕府の熟議の結果、最高の礼遇を以てハリスを江戸に迎え、将軍にも謁見し、その節大統領の書翰を捧呈することに決定したと言うのである。圧迫が急に除かれた。青空の一部が姿を見せた。

それにしても日本側は例の如く慎重過ぎるほど慎重であった。出発の前までに、普通の旅の準備ではなく、さまざまの煩しい用心と注意を働かせた。江戸に出る許可があってから、出発の日までに、二カ月も待たされた。

「今日私（ハリス）は、将軍というのは彼らの正しい名称ではなく、『大君（たいくん）』と呼ぶの

が正しいのだと知らされた。将軍とは文字通りに『大元帥』であるが、大君は『偉大な君主』を意味すると。日本人の本性が、ここにもあらわれている。一年あまりも私は、彼の支配者のことを将軍と言い、又そう記してきたのであったが、彼らは何らかの説明をも私にあたえてはくれなかった。しかるに今、私が江戸に出発しようとする前になって、私にその真の言葉を知らせるのだ。」

天皇のことはハリスは知らされていない。ハリスは徳川将軍を皇帝の位に在るものとこれまで信じて来た。大君と言う呼名は初めて耳にするものだった。もちろん日本で通用するものでなかった名称をどうして、日本側がハリスに知らせたのか？　将軍を、これまで以上に権威あるものに見せようと望んだものか？

出発の日が来た。一八五七年十一月二十三日、月曜日である。日本の暦では、十月七日である。

「今朝八時に、私は江戸への旅に出発する。私は馬に乗った。ひじょうに天気のよい朝であった。私の旅の重大な意義を考え、江戸へ上ろうとする私の努力が成功をおさめたことを思うとき、実に溢れるように生気をおぼえた。

アメリカの国旗が私の（行進の）前にかかげられ、私は、これまで鎖されていたこの国に、この旗をひるがえすことに、本当の誇りを感じた。」

玉泉寺を出て一哩ばかり行った地点（中村）で、ハリスは行列の本隊が彼を待ってい

るのに会った。そこで行列を整えて正式の出発をする。

「私の行列の先駆は菊名（菊名仙之丞、下田奉行付調役）で、キャプテン（大尉）に相当する身分の陸軍士官である。彼は馬と駕籠と普通の駕籠人足と従者をもっている。彼の前には三人の若者が、いずれも先端に紙切れをつけた竹の棒をもって進んだ。彼らは、代る代るに、『下に、いろ』『下に、いろ』とさけんだ。それは、『シット・ダウン』『シット・ダウン』という意味である。彼らは四百ヤード前にたって進んだ。彼らの叫び声はきわめて音楽的にひびいた。

菊名（仙之丞）の後に、私の護衛者二人にまもられたアメリカの旗がつづいた。それに次いで、私は六人の護衛者をしたがえて、馬をすすめた。私の駕籠（のりもの）と、十二人の駕籠人足、その人足頭、靴持などがそれにしたがう。それから、ヒュースケン君が二人の護衛者にまもられながら乗馬でくる。その後に彼の駕籠、駕籠人足など。その後から、私の寝具、椅子、食物、トランク、それに進物をおさめた荷物をかついだ従者の長い縦列がつづき、私の料理人とその助手がこれに連なった。

下田の副奉行が、自分の供廻りと、それから柿崎の村長（名主役）と、最後に下田奉行の秘書役をしたがえてつづいた。オランダ語の通詞が一人、駕籠でヒュースケン君の後から運ばれた。行列の人数は全部で約三百五十人をかぞえた。」

大行列である。普通の道中と違って、供立（ともだて）そのほか見苦しくないようにした。手厚い待遇で、まだ後年のように攘夷浪人の襲撃の危険を特に用心してなかったように見える

のは注意に値する。攘夷の熱病が全国に流行するのは、ハリスが通商条約を結んでから後のことで、当局以外は外国人を好奇心を以て歓迎する。遠方から見物に沿道に出て来る。ペリー提督の乗艦の、茶目な牧師がひとりで江戸へ行く気でのこのこ歩き出して、行く先々で怪物が出たように大騒ぎになったのとは違う。これは公式に幕府に迎えられて行列を作って行進するものである。

「私の駕籠人足は、背中に合衆国の紋章のある紺衣を着ていた。これらは、より抜きの屈強な男たちで（私のは十二人、ヒュースケン君のは八人）日本人としては極めて丈の高い方であった。私の駕籠人足は、プリンス（守）以下のそれには禁じられている特別の装飾をつけていた。それは非常に硬くこわばらせた木綿の布で作られているもので、前後に摺（たた）んだ幅三吋（インチ）ほどの襞（ひだ）がついている。その長さは約三十吋で、その一端を右肩下に斜めに下げて帯の中にさし込ませ、上端は胴の右側から少し突きだしてある。その上端から二条の白線が斜めにすべての襞の上をずっと通っている。身体の動作で、その襞が、多少扇の作用のように、開いたり閉じたりする。そして、それは日本人によって極めて美しいものと思われている。」

最初の夜は梨本で寺に泊った。次の日、天城峠を越え、下田、大島とその火山、並びに駿河湾、江戸湾などの大きな眺望を、秋晴れの空の下に見た。日本の秋の美しさを感じたことであろう。湯ヶ島へ下りてから富士山を見た。「名状することの出来ない偉大な景観」荘厳で孤高な姿は、「私が一八五五年一月に見たヒマラヤ山脈の有名なドヴァ

ルギリよりも目ざましいとさえ思われた。」

幽閉されたような生活からハリスは、あけひろげた広い世界に出た。しかし、例に依って、小さい衝突が二、三起った。箱根の関所で、駕籠の戸をあけて役人が中を覗き込んで検査すること。ハリスは合衆国の外交代表者だから、そんな検査を受ける理由はない、私の駕籠の中に何があるかは、君たちが知っているのではないか？　と主張した。東洋風に官僚的に盲目的に守られている形式習慣と、西洋風の合理主義との衝突である。これが次の場合にも現れる。

川崎で泊ることに定めてあった本陣が、ひどく荒れ果てて戸や窓はしまらず、障子は破れていて、風が自由に部屋に吹込む上に室内は汚れて不潔である。ハリスは別の宿を取りたいと申出た。下田から付いて来た副奉行は、身分のある者はどこの駅でも、本陣に泊るべきものだと決めている。

ヒュースケンが外に飛出して、万年屋という旅館を見つけて帰って来た。副奉行は、庶民の泊る宿屋へハリスが行かぬよう懇願した。

その説明によると、どこの本陣でも、ハリスの入る部屋の床は他の部屋よりも約三吋高くなっている。余人と同じ高さの床にハリスを置くことは、ハリスに払うべき尊敬を減少させる。大君から最もつよい命令が出ており、ハリスは日本で最も身分の高い人たちに与えられる名誉のあらゆる特別待遇を受けることになっているのだ、と。それはそうだとしても、ハリスは納得できない。低い場所でも椅子にかけたら、高い畳の上より

高くなるのだから。

ハリスは川崎で日記の中に書く。

「この川崎は、ビッチンガー牧師を『押止めた』場所である。合衆国の蒸気船サスクェハナ号付のこの牧師が、江戸を見ようとして突進してきたとき、この町の北側を流れる六郷川で渡舟を出すのを日本人が拒絶したのであった。日本人の言によれば、この僧職の紳士はこの川を渡ろうとして、あらゆる種類の努力をした。そして、しまいには剣を抜き、それをかなりの大力で振りまわしていた。そのとき、即時帰船するようにとのペリー提督の厳命が彼のところへとどいたのである。

彼が『面白半分』に剣をふりまわしただけだと思うと、日本人はこっそり（ハリスに向って）付け加えた。『精神の剣』によらずして、『肉体の武器』にうったえることは、アメリカの牧師としては寧ろめずらしいことである。」

前身は陶磁器商のタウンゼント・ハリスには、どこか牧師風の精神的な面がある。川崎の宿で迎えた降臨節における第一日曜日に、ヒュースケン一人を牧師とも会衆ともして、一緒に祈禱書を読んだ。そのことだけを言うのではなく元来が精神家の性格である。そして彼を向うにまわす日本の攘夷家が、また精神主義者なのである。川崎の旅宿で祈禱書を読んだことについては、ハリスはこう考えている。「この土地で、しかも人に聞えるような高声で安息日におけるキリスト教の祈禱が捧げられたのは、疑いもなくこれ

が最初のことであった。この場所は、江戸から僅か十三哩の近くにある。それに又、かかる行為を死罪をもって罰する法律（キリシタン禁制）は、今なお実施されているのだ。」

前に神奈川付近を通る時に日本の庶民が見物に立つのを見ても、ハリスは反省的な物の見方をしている。彼の精神主義は決して独断的な、他人を考えぬものではない。

「見物人の数が増してきた。彼らは皆よく肥え、身なりもよく、幸福そうである。一見したところ、富者も貧者もない――これが恐らく人民の本当の幸福の姿というものなのだろう。私は時として、日本を開国して外国の影響をうけさせることが、果してこの人々の普遍的な幸福を増進する所以であるか、どうか、疑わしくなる。私は質素と正直の黄金時代を、いずれの他の国におけるよりも、より多く日本において見出す。生命と財産の安全、全般の人々の質素と満足とは、現在の日本の顕著な姿であるように思われる。」

ハリスの行列が川崎を立って、品川、高輪を経て江戸に入り本町二丁目から堀端通り、小川町を通って、九段坂下牛ヶ淵にある幕府の蕃書調所に入った。江戸に入ると、また道筋に並んだ人数が多い。ハリスは品川から宿舎に入るまでの途中の道筋に並んだ人数を距離と人が作った厚みから計算して十八万五千人ぐらい居たろうと推定した。

「私の通る道筋に立つことを許された者は、いずれも道の両側に各五列に並んでいた。辻々では、あまりに大きな群衆を制するために木戸を鎖していた。そして、私がそれら

の街を見上げたり、見下ろしたりしたときに、彼らは男女の大きな塊のように見えた。品川から私の宿所まで――七哩あまりの距離――最も完全な秩序がたもたれていた。何らの大声も、叫び声も聞えなかった。このような大群衆の沈黙は、なんとなく恐ろしい気がした。」

この大群衆が、彼らの上に新しい運命の開けることを知っていたとは言えない。ハリスも、この大群衆の沈黙の中からやがて何が湧き起って来るか、もちろん予測出来なかったろうが、日本が新しい時代の扉の前に立ち、自分がそれを開くことになった使命を深く感じている。西方からの潮が、堰をきってこの美しく静穏な国土に、流れ込むのだ。最後まで残ったこの国に東と西とが出合うのである。

宿舎に宛てられた蕃書調所ではハリスが下田で対面している井上信濃守が出迎えて案内に立った。蕃書調所は、洋学を研究し洋書の翻訳に従事していた場所で、後の大学の前身にあたるが、むろん、純粋の屋敷風の大きな日本家屋である。ハリスの為に寝台と数脚の椅子とテーブルが準備してあった。牛ヶ淵の水のある濠を隔てて千代田城の高い石崖がある。その地続きが、やがてハリスが対面する大君が住んでいる場所であった。

信濃守がハリスに話してくれた。群衆の接近を封じ、事故の起るのを未然に防ぐために前夜から市中の見附門を閉鎖したこと、何も異変が起らなかったので幕府では皆が悦んでいることなどだが、やはり異人のハリスを江戸に入れることを怒ったり甚しく非難している勢力が一部の上層にあって、人々の憂慮の種子となっていたのである。

二

ハリスに倖せだったことは、時世に対し目醒めた理解ある人々が、少数だが幕府の内部に生れて来ていたことである。旧慣や規制に縛られて動きがとれぬ旧時代の官僚ではなく、新しい事物を迎える用意のある人々である。

その人々が、ハリスの接待委員に任命されていた。林大学頭や鵜殿民部少輔のように神奈川でペリー提督と応接した経験者のほかに、川路左衛門尉（聖謨）や井上信濃守、永井玄蕃頭のように、小身から抜擢された知的能力ある人々である。やがてこの人たちが条約談判の日本側委員となる。下田奉行の井上信濃守が、ハリスの宿舎の亭主役となった。亭主役でなく、番人と呼ぶ方が適切だろうとハリスは考える。信濃守は、毎日ハリスを訪問して来て行きとどいた世話をし、勝手に市中に出ることなどないように戒める役をした。

ハリスが城内に老中首席の堀田正睦（まさよし）を訪問して挨拶した時も、信濃守は介添役として付添った。堀田備中守正睦は、阿部伊勢守正弘に見込まれて外事掛の閣老となったが、外国の事情に明るく開明的な考え方なので、水戸の老公などは、蘭癖とあだ名して嫌っていた。正睦は四十八歳の初老に入った年齢だったが、ハリスは、「三十五歳ぐらい、背のひくい、知的で感じのよい容貌をしていた。声もひくく、やや音楽的なひびきを持

っていた」とノートしている。

この訪問の際に、やがてハリスが将軍に謁見する時の、挨拶の言葉と答辞について打合せが行われた。謁見の日にも、日本側では理由を告げず早目に登城させて、将軍の前に出る時の予行演習を謁見室でさせようとした。ハリスは出来るだけ穏やかにこれを拒絶して、信濃守を失望させた。将軍の前に出るのは、粗相でもあったら責任者が切腹を命じられる、大変なことなのである。ハリスは、宮廷の一般的な作法はどこの国でも似通ったもので、決して失敗しない。日本の礼式については貴方からいろいろ説明を受けているし、私は西洋の作法でやるのだから、構わないと主張して断った。

謁見は太陽暦十二月七日に行われた。

「謁見の時刻が到来したことを知らされた。私は、同じ場所に沢山の彫像のように静坐している気の毒な大名たちの傍を通った。そして、彼らの前列までいったとき、その列の前を通って、彼らの右翼へ向って進み、そこで立ちどまった。信濃守は、その場に平伏した。私は彼の後に立ち、ヒュースケン君が私の直ぐ背後に控えた。

私は屋外に眼をやって、一階建、瓦葺の木造建築に囲繞されている一つの小さいコートヤード（中庭）を見た。

単独の謁見室は、大謁見の行われる室と同じ外見をしている。しかし、それからは、例の襖（ふすま）で隔離されているので、大名たちは私の出入りを見たり、謁見の際の口上を全部きいたりすることはできるが、その室の中を見ることはできなかった。

やがて合図があると、信濃守は手をついて、膝行しはじめた。私は半ば右に向って謁見室へ入っていった。

その時、一人の侍従が高声で、『アメリカ使節！』と叫んだ。私は入口から六呎（フィート）ばかりのところで立ちどまって、頭を下げた。それから室のほとんど中央まで進み、再び立ちどまって頭を下げ、又進んで、室に端から十呎ばかり、私の右手の備中守（正睦）と丁度相対する所で停止した。そこには備中守と、他の五人の閣老とが、顔を向けて平伏していた。私の左手には大君（たいくん）の三人の兄弟が同様に平伏し、そして彼らのいずれも、私の方へ殆ど『真ん向き』になっていた。数秒の後、私は大君に次のような挨拶の言葉をのべた。

『陛下よ、合衆国大統領よりの私の信任状を呈するにあたり、私は陛下の健康と幸福を、また陛下の領土の繁栄を、大統領が切に希望していることを陛下に述べるように命ぜられた。私は陛下の宮廷において、合衆国の全権大使たる高く且つ重い地位を占めるために選ばれたことを、大いなる光栄と考える。そして、私の熱誠な願いは、永続的な友誼の紐によって、より親密に両国を結ばんとするにある。よって、その幸福な目的の達成のために、私は不断の努力をそそぐであろう。』

ここで私は言葉を止めて、そして頭を下げた。短い沈黙ののち、大君は自分の頭を、その左肩をこえて、後方へぐいっと反らしはじめた。同時に右足をふみ鳴らした。これが三、四回くりかえされた。それから彼は、よく聞える、気持のよい、しっかりした声

で、次のような意味のことを言った。

『遠方の国から、使節をもって送られた書翰に満足する。同じく、使節の口上に満足する。両国の交際は、永久につづくであろう。』」

日本側の記録では、上意「遠境の処、使節を以て書翰差越し、口上の趣、満足せしめ候。猶幾久しく申し通ずべし。この段大統領へ宜しく申し述ぶべし。」

ハリスが謁見した大君の衣服は、絹でできて金刺繍をほどこしてあったが、普通想像されるような王者らしい豪華さはなく、刀にも黄金や宝石の装飾がなかった。「私の服装の方が彼のものより遥かに高価であったといっても過言ではない。」ハリスの服は、国務省で定めた型による金で縫取りした上衣と、幅広い金線が縦に通っている青い色のズボン、金色の房のついた上反り帽、真珠を柄に嵌め込んだ飾剣を帯びていたのだから、なるほど将軍の服装の方が簡素であった。

ハリスは日本側の接待委員と接触して聞取った話から判断して、大君は自分の意見がなく、彼を囲んでいる人々の意見をロボットのように述べるものだと観察した。謁見の場合でも大君の答辞は、事前にハリスに内示され、閣老が作るものなのを明らかにしていた。それならば、ハリスは閣老たちに説いて納得を得ればよいのである。その工作はやがて毎日のように行われた。日本人は貿易が役人の仲介なしに行われるようなことを実はまったく知らなかった。我々はこれらの問題に全く暗い。それ故に子供のようなも

のだから、貴下は我々に対して辛抱強くなければならぬ。貴下の話してくださることには全幅の信頼をおくものですと謙虚な話し振りである。この人たちに限るものかも知れないが、ハリスのような男を感動させる素直な態度であった。

ハリスは、通商条約の基本を書いた紙を渡して、逐条説明した。

日本側から質問する。

「ミニストルを都下に置き候儀、和親の国は相互に置き候や。」

「是は一般にて、支那の外は何れの国も都下に差置き申し候。ミニストルは、何国も互いに差置き候えども、小国にては差出し候に費用相かかり候間、差出さざることもこれあり候。もっとも、大国より差越し候節は、費用等、その国に相かけざる故、差置き申し候。」

幕府の高官に理解困難だったのは、政府が介入することなく町人同士が自由勝手に通商する点である。ハリスはこれに説明を下した。

「勝手の交易と申し候は、租税差出し候えば、政府の手を経ず、御国の民人と自国（アメリカ）の民人と、相対（あいたい）にて交易致し候ことに御座候。西洋各国交易の法は、皆商人相対にこれあり。政府にては一切携わらず候。もし政府にて交易致し候えば、甚だもって威を落し申し候。」

日本側が慎重だったせいもあるが、そんな初歩的な問題が、この国には耳新しいのであった。商人階級がそれだけの実権を持つ点を、武士たちはあやしんだ。しかし、この

エリート達は、すぐに本質を理解した。ハリスは下田あたりの臆病で小心な役人を相手としているのと違って話しよかった。

「私は、スチーム（蒸気）の利用によって世界の情勢が一変したことを語った。日本は鎖国政策を抛棄せねばならなくなるだろう。日本の国民に、その器用さと勤勉さを行使することを許しさえするならば、日本は遠からずして偉大な、強力な国家となるであろう。

貿易に対する適当な課税は、間もなく日本に大きな収益をもたらし、それによって立派な海軍を維持することができるようになろうし、自由な貿易の活動によって日本の資源を開発するならば、莫大な交換価値を示すに至るだろう。この生産は、国民の必要とする食糧の生産を少しも阻害するものでなく、日本の現在有する過剰労働などを使用することによって振興するだろう。諸大国は競って強力な艦隊を日本に派遣し、開国を要求するだろう。日本は屈服するか、然らざれば戦争の惨苦をなめなければならない。戦争が起きないにしても、日本は絶えず外国の大艦隊の来航に脅かされるに違いない。何らかの譲歩をしようとするならば、それは適当な時期にする必要がある。艦隊の要求するような条件は、私のような地位のものが要求するものよりも決して穏和なものでない。平和の外交使節に対して拒否したものを、艦隊に対して屈服的に譲歩することは、日本の全国民の眼前に政府の威信を失墜し、その力を実際に弱めることになると述べ、この点はシナの場合、すなわち一八三九年から一八四一年に至る阿片戦争と、その戦争につ

づいた諸事件、および現在の戦争とを例にとって説明した。

私は外国事務相に、一隻の軍艦を伴わずして、殊更に単身江戸へ乗込んできた私と談判をすることは、日本の名誉を救うものであること。問題となる点は、いずれも慎重に討議さるべきこと。日本は漸を追うて開国を行うべきことを説いた。」

今日ならばハリスの進言は、常識を出ない普通のことであった。だが、この平易のことが日本では実現にいろいろの困難があった。ハリスは、これについて、一、江戸に外国の公使を迎えて居住させること。二、幕府の役人の仲介なしに、自由に日本人と貿易させること。三、開港場の数を増加させること、を要求した。

ハリスはアメリカ人だけの特権を要求しているのでない。アメリカ大統領の満足するような条約ならば西洋の諸大国は直ちに承認する。その上にハリスが望むのは、日本に阿片を持込むことを禁じることだ。大統領は現に日本を脅かしている危険を日本人に知らせたいのだ。日本を繁栄な、強力な、幸福な国にする方法を知って貰いたいのだ。

熱心に話し、また具体的であった。日本側の記録にもそれが筆記されている。

「今またイギリス、フランス一致いたし、唐国へ戦争しかけ申し候。只今のところにてはこの上の行末如何相成り申すべきや、実に計りがたく候。ただ今の姿にては、何事もイギリス、フランスの望み通り聞き済み候よう相成り申すべく、左もこれなくば、全国皆英仏両国の所領と相成り申すべく候。」またハリスは訪日の途中、ホンコンで総督ジ

ョン・ボウリングに面会した時、ボウリングが政府から日本への使節を内命されていること、右の内日本へ渡来の節は、日本人のこれまで見及ばざるほどの軍船を率い、「江戸表へ罷り出で、御談判仕り候心得の由に御座候。フランスも同様につき、参り候節は、一同に罷り越すべく候」と威嚇ではなく、熱心に警告している。

日本側はこれに対して、いろいろ質問してハリスの説明を聞いた。ここにも列席して、その場では反対もせず沈黙していて後で外に向けて批評して話した者があったと見える。中根雪江の「昨夢紀事」には、「この時参り合わせたる人の語るを後に聞けば、備中殿（堀田正睦）はいたく辟易せられ、啞に掌の黄蘗とやいえらん如く、目瞬き大息せらるるまでにて、差定めて申さることは一もなく、又彼（ハリス）は事なれたるさまにて、憚るところなく種々に論らいたり。備中殿は折々に、それはその筋の懸りの者へと譲り聞えられ、或は、宜しからんように頼み聞ゆるなど言わるる有様、傍なる海防がかりの人々は冷汗を流して聞き居たることにて、ハルリスが思わんところも恥ずかしき限りなりけりとぞ」とあるが、それは、そうとも言えなかったろう。

堀田正睦はハリスの話す事情がよく解るひとだから、真実に国の明日を憂慮する心で発言もすくなく、ひたすら耳を傾けていたのだろう。「私（ハリス）の言う所を十分了解できぬときには、度々質問を発した。私の演述がおわったとき、外国事務相は私の通報に感謝し、これを大君に伝達の上、然るべく考慮することにすると述べ、これは、これまで幕府にもたらされた問題の中で最も重大なものであると語った。」

ハリスは、その後も返事を待って江戸に滞在している。堀田備中守は、日本人は重大な用務をアメリカ人のように迅速に処理しない。大勢の人々に相談しなければならないのだから、多少時日も待って貰わねばならぬと断ったが、何の沙汰もなく一カ月近く経った。

どうなるのか不安な上に心配である。ハリスは漸く苦情を申入れた。世話役の井上信濃守が、一日、間を持たせて、もたらした返事はこうであった。外国事務相は、あなたの苦情が正当なことを認めたが、幕府は現在、極めて苦境に立ち、当局は御意見が日本の最善の利益のために申されたことと了承するが、大君の兄弟、諸大名、武士たち有識者を納得させる必要がある、この人々の承認を得るために日夜苦労しているのだ。大君の一人の兄弟が九州にいる。(島津侯のことか、紀州のローマ字綴りの誤りか)そこへ手紙を送って、返事をとるので、どうしても時日がかかるのだ、と。

これは例の逃げ口上ではなかった。堀田正睦は十一月十一日に、三家、三卿、溜りの間の諸大名にハリスの申立書を差渡し、意見を求めている。外国事務の大命を受けた堀田正睦は個人として、開国のやむべからざるを覚悟していた。

堀田正睦が貿易掛に下問した条項の中に次のような言葉があった。一般には、いまだに問題がこのあたりに低迷していたのである。

「外国御処置の大本、旨趣、隣国の交る道を以て致すべきや。夷狄を処する道を以て致すべくや。この大本、掛りの人々見込み一様ならずしては、取調向、諸事行違申すべく

間、とくと討論決定いたし置きたく候こと。」

三

外国の艦隊が現れてから、沿岸防備が無に等しいのを幕府も認めた。鎖国制度を続けて太平無事を信じて来た幕府は、列藩の兵備を廃止させ、軍艦はおろか、制限以上の巨船の建造を厳禁して来た。意図して日本の国防を裸にしておいたのである。天保年間に水戸藩主徳川斉昭が先覚者として北辺の防備を唱え、大砲や軍艦を造ろうとした時にも、幕府は野心を疑った。慎しみが命じられたくらいである。

さて黒船が眼前に現れてからは、裾に火がついたように軍艦を造らしめようとした。統一国家の如き体裁でいながら、列藩の軍備の強大になるのをまだ中央では怖れていた。そこに、外国軍艦が水平線の彼方、外から出現した。兵制を革めねばならぬ、巨艦を作らねばならぬ。

嘉永六年（一八五三）九月十五日に幕府は英断を以て大艦建造の禁を解いた。寛永十二年の禁令から実に二百十数年目である。二世紀間、念頭におかなかった大船建造に、飛びつくように急いで着手した。技術も、冬眠させ凍結させてあったのである。

ハリスが来朝する二年前のことだが、相州浦賀港で英国船「バーク」型の一船を造った。鳳凰丸と名付け、安政元年五月試運転を行なった。長さ二十二間、幅五間、帆柱二

本の帆船である。これと前後して、薩州藩で幕府の許可を得て安政二年に起工、同二年に竣工して、昌平丸と名付けた船を江戸に回航して見せた。老中阿部伊勢守が島津斉彬と共に乗って江戸湾で運転や大砲発射を見た。これを、島津藩から幕府に献上した。長さ十五間、幅四間、深さ三間というので、鳳凰丸よりやや小さいが、何噸積にあたるか不明である。これら内地製の帆船は、外形だけを洋式にしても構造に調子の悪い点があって、どこかにくるいがあり能率的に航行できなかった。「製艦ノ基礎タル竜骨ノ製ヲ悉サズ、随テ諸部ノ法ニ暗ラシ、近日成ル所ノ諸船、外面装備ハ洋法ニ擬スルト雖モ、船質脆弱、或ハ速力遅鈍ニシテ実用ニ適セズ。」（勝安房「海軍歴史」）

これよりも以前に幕府は水戸斉昭の発議を容れ、江戸の佃島で西洋型の軍艦を造らせることにした。斉昭自身時々出かけて親しく指導し、材料を集め工事に着手させた。螺旋釘など当時は作る器械が日本になかった。職人が鑢で削って一本ずつ作るような手間をかけた苦労な仕事になった。ガラス板も遠く和蘭に注文する。錨索は斉昭の考案で、全国から婦女子の髪の毛を集めて、より合わせて作って見た。試験のために水に入れると、忽ち、ほどけて綱の役をしなかった。

二年近くかかって出来上がって旭日丸と命名して進水させたが、船体のバランスが悪く、思うように進まず、幕府がおしまず費用を出したのに船は傾いて用に足りぬ。口の悪い世間が、旭日丸と言わず、「厄介丸」と称した。「動かざる御世は動きて動くべき船は動かずみともなきかな」と落首に詠んだ者があった。「みともなき」のみとは水戸を

諷刺していた。福沢諭吉の「福翁自伝」にも、当時、天下の期待を集めていたのは、水戸の御隠居であったと遠い九州の大分でも人気があったことを記している。事ごとに元気で積極的だったからである。旭日丸の建造失敗は、不幸なことだったが、二世紀の空白な期間があって、技術を知らず、目分量で計って形を模したようなことだから、外国船に対抗して成功する筈がなかった。

旭日丸の建造には失費が多く、勘定所でも負担に苦しみ、中止を願って来た。御用部屋の閣老も中止する方がよいと発言した。上席の阿部正弘ひとりが老公の望むとおりにさせて、「老公の御性格は閑散無事にお耐えにならぬ。何かお仕事を差上げておけば、終了に至るまで刻苦勉励なされて余念なく、尋常の人の耐えぬところを御我慢を続けられる。老公に対して恐懼に耐えぬところであるが、軍艦建造をお願いするのは、お好みになるところをお頼みして、過激の御気性を緩和して頂くのである」と言って、人々をおどろかしめた。軍艦を造らせておけば、政治向きについて干渉して来るのを避けられるという苦しい思慮であった。厄介丸は失敗した。自分でなければならぬという自ら気負うところの強い烈しい性格の斉昭には、この失策は痛恨事だったろう。

阿部正弘も建艦が失敗するとは予期しなかったろうから政治的に斉昭を陥れる計画などはなかった。しかしこのあたりから、老公の建議を一々構っていられなくなったのは、時世が急迫して来た故であろう。

斉昭の勧告で、仏教寺院の梵鐘の類を出させて鉄砲を鋳造する命令を幕府が出した。

これが当然に寺々の反感を煽った。「水戸の法華僧日華という者が、梵鐘毀鋪令発布を以て奇貨居くべしと為し諸宗寺院を煽動し、足下と拙老とを排擠(はいせい)せんことを企つ」と、大名だけに気の弱いところが一面にあって、斉昭から正弘に相談してくると、正弘はこの機会に、世上の嫌疑もあることだから、当分、単独にてお目どおり仕ることはやむを得ず御辞退申したいと答えてやった。精力的過ぎて会えば実現不可能な話が出るのをこの機会に回避したわけである。

幕府は嘉永六年に大船建造許可を出す以前に、和蘭に軍艦二隻を注文した。国内の造船が思わしくない。長崎出島のオランダ商館長は、アメリカやイギリス、ロシアが強引に日本に入って来るようになったのを見て、自国の日本貿易独占の地位が危くなったのを感じ、諸外国と通商が結ばれる以前に、古くからの日本との関係を新しく密接にしておきたいとあせって努めていた。嘉永五年六月に長崎に入港したスームビング号で、新任の商館長ヤン・ヘンドリック・ドンケル・クルティウスが赴任して来て、日本の為に親切に働いた。本国政府の命令によってペリーの来ることを予告したのも彼である。幕府が軍艦や兵器を外国に注文する考えがあるのを聞き知ると、大きな取引になるのを悦んで勧誘にあたり、また蒸気船一艘ぐらいは寄付してもよいし、場合に依っては操縦法ぐらい教えてもよいと申出た。

一介の商館長であるが、ドンケル・クルティウスはスームビング号の艦長ファビュス

中佐に説いて、日本の軍艦の注文を永続的にオランダに取るためにも、日本人に海外教育をすることを考えてくれまいか、と話した。

船を買ったところで扱い方に暗ければ用をなさない。長崎滞留中に限るわけだが、船打建方、航海術、蒸気仕懸方など伝授するという。長崎奉行の伝達を聞いて、幕府でも悦んで、詳細を知ろうとした。ファビュスの計画に依って海軍を創立しようと言うのである。ファビュスも熱心になって、第一回の意見書を書き、安政元年閏(うるう)七月二日に提出し、通詞が翻訳して、二日後に奉行に渡した。世界の海運状況、汽船が出来るようになって帆船が無用になったこと、造船所の必要なことなど五十四項目にわたって、くわしく書いてあった。一週間後に出した第二回の意見書は、更に具体的にオランダから招聘する教師の人数、伝習の科目、備砲のことなどで、七月十日に提出し、次いで一週間後に、教師の手当、給料、待遇、オランダ語学校を設ける必要など、こまかく書いて進言した。この計画に基づいて幕府は軍艦二艘をオランダに注文し、これに海軍技術の教官が乗組んで来るように求めた。

スームビング号は安政元年九月に長崎を出帆して、ジャバのバタビヤに帰った。艦長ファビュス中佐から詳細を総督に報告した。日本側とこれまでの交渉が一切、商館長の意見で進められて、オランダ政府の許可を得てないものだったからである。オランダ国王から将軍に船を献上すること。「右献上船の出費につき考えるに、日本人は一旦蒸気船を所有しその操縦法を学ばば、必ずや追て又多数の注文を発するに相違なからん。然

らば右献上船の出費は優に償わるべしと言うべきなり」と、商館長はバタビヤ総督に申告している。貿易の利益から計算したものであった。

オランダ政府もバタビヤ総督からの伝達を受けると、商館長の提案に同意した。蒸気船スームビング号を日本国政府に贈呈すること、砲十門乃至十二門を備える百馬力のコルヴェット艦二隻を日本国政府の為に建造し、その一隻は西暦一八五七年中に、他の一隻は翌年中に引渡すこと、さきにスームビングにてなしたる教練を続けるため、ファビュス中佐を再び日本に派遣すること、スームビングの操縦を教えるため、適当の専門家を出島に滞在せしむることを承知した。

献上のスームビング号は、軍艦ゲデーと共に、安政二年六月七日、長崎に着いた。乗組みの海軍大尉ペルス・ライケン以下、士官、下士、水夫、火夫等二十二人が教官として幕府に雇入れられる。スームビング号を用いて練習しながら日本人が操縦を習う筈である。

日本人には初めての経験だが、幕府が海外の新しい技術を採用する態度に出た。どれだけの人数を伝習に出してよいか、まだ不案内で確定しにくかった。先ずお目見以上の者一人、与力二人、同心四、五人を差向けることとし、これらの者は年齢二十歳前後から三十歳あまりで、意志が強く身体強壮の者を選ぶ方針を立てた。

舟大工や水夫は長崎在住で、前にスームビング号で多少の手ほどきを受けた者を採用する。別に瀬戸内海の塩飽島の船乗りを三十人ほど大坂町奉行に頼んで徴集させ、至急、

長崎へ送ることになった。選抜には苦心した。多少でも予備知識のある者として、江川太郎左衛門の手代や、戸田で造船のことに与った者、また幕府の御舟手の中から人を見て選んだ。総督の心得で、他の者を指図しおのれは全部にわたって学修する者として矢田堀景蔵、勝麟太郎、永持亨次郎の三人の旗本が行くことになった。後に海軍奉行になった勝安房守が、その時は小普請の旗本だったのを、望みある若者と認められて、急に取立てられて出発した。この人も微禄の下級武士から出た新人で、初めて新しい技術を稽古するのである。

後の勝海舟は、幕府の階級体制では比較的低い階層から出た。維新をリードして働いた列藩の功労者が足軽やそれに近い下級武士から出たのが大部分だったのに通じる。家柄のある屋敷に育った人々は、けわしい時代の局面を乗切る機能と精力を欠いた。仕事は彼等よりも冒険の出来る勇気ある人々に委ねられた。勝麟太郎（海舟）の父親が頽廃して無用となった江戸の下級武士の典型だったことも事実である。四十二歳になった天保十四年におのれの放埒な一代のことを「夢酔独言」と題して、書いて残した。この時代の武士にはなかなかないことで実に率直に、無邪気な程度に隠すことのない自伝である。選択なくその中の一節を見本に摘出すると、こんなことを書いている。

「おれが山口に居た内だが、或る女に惚れて困（っ）た事が有（っ）たが、其時におれが女房が其女を貰ってやろうといいおるから頼（ん）だらば、私へ暇をくれというから、

それはなぜだと言ったら、女の内へ私が参って是非とも貰いますから、先も武士だから挨拶が悪いと、私が死（ん）でももらいますからと言った。その時に短刀を女房へ渡したが、今晩参って急（きっ）と連れてくると言うから、おれは外へ遊びにいったらば南平（人名）に出先で出合し故、何事なしに咄して居たら、勝様は女なん（難）の相が厳しい。心当りはないかと尋ねるから、右の次第を咄したらば、それはよくなすったと云（っ）てから別れて、又々関川さぬきと言う易者と心易いから通りがかりに寄（っ）たら、あなたは大変だ上れと云う故、上へ通（っ）たらば女なんのことをいいおって、今晩は剣難が有るが、人が大勢いたむだろうとて、心あたりはないかと尋ねるから、始よりのことを咄したらば、肝をつぶして段々と深切に異見をしてくれて、女房は真実だといって、以来情をかけてやれと色々いうから考（え）て見たらおれが心得違（い）だから夕方家へ飛（ん）で帰ったら、隠居に娘（女子）をだかせて男谷（親戚の家）へ遣って、女房は書置をして内を出るところへ帰（っ）て、それから漸々止（め）て何事も無かったが、これまで度々女房にも助けられし事も有（っ）た。それからは不便をかけてやったが、それまでは一日でもおれに叩かれぬと云うことはなかった。この四、五年、病身になったも、そのせいかも知れぬと思うから、隠居の様にして置（く）わ。」

こうした妻の使い方をする亭主は多分世の中でも珍しかろう。

麟太郎が御殿づとめをしていたが、九つの時から帰宅したので、本の稽古に本所三ツ目の近くの多羅尾という旗本の用人のところへ通わせたが、ある日稽古に行く道で、病

犬に出合ってきん玉を喰われたのを、花町の仕事師の八五郎というのが内へ上げて介抱してくれ、親のところへ知らせて来たので、飛んで八五郎の家へ行くと、麟太郎は布団を積んで寄りかかっていた。前をまくって見たら玉が外に流れている。「幸い外科の成田と言うのが来ているから命は助かるかと尋ねたら六カ敷と云うから、先ず息子をひどく叱ってやったら、それで気がしっかりとした故、かご駕で内へ連れて来て篠田という外科を地主が呼んで頼んだから傷口を縫ったが、医者がふるえているから、おれが刀を抜いて枕元に立て置いて、りきんだから強い権幕で叱ったから息子がなかなか泣なかった故、漸々縫って仕舞ったから様子を聞いたら、命は今晩にも受合は出来ぬと言ったから、内中のやつは泣いてばかり居る故、思うさま小言をいって叩きちらして、その晩から水をあびて金比羅へ毎晩はだか参りをして祈った。始終おれが抱いて寝て、外の者には手を付させぬ。毎日毎日あばれちらしたらば、近所の者が今度岡野様へきた剣術遣いは子を犬に喰われて気が違ったといいおった位だが、とうとう傷も直り七十日目に床をはなれた。それから今になんともないから病人は看病はかんじんだよ。」

暴君である。男の子の麟太郎だけは無類大切にしたが、病気の子の枕元の畳に白刃を立てて叱りつけて、元気を出させようとした。懸想した女が出来て、それを自分の妻女に貰いにやる無法な無邪気さに、これが通じるのである。剣道ができて強いので、貧乏小普請でも無類の徒に立てられて町内で睨みをきかせていた。

「おれは一生の内に無法の馬鹿な事をして年月を送（っ）たけれども、いまだ天道の罰もあたらぬと見えて何事なく四十二年こうして居るが身内にきず壱つも受けた事がない。そのほかの者は、或はぶちころされ又は行衛（ゆくえ）が知らず、いろいろの身に成（っ）た物が数しれぬが、おれは高運だと見えて我儘のしたい程して、小高（小身）の者はおれの様に金を遣ったものもなし、いつもりきんで（威張って）配下を多く遣（つか）った。衣類は大がい人のきぬ唐物（舶来）その外の結構の物をきて、甘いものは食い次第にして、一生女郎は好（き）に買（っ）て十分の事をして来た。」

孫やひこが出来たら、よくよくこの書物を見せて、身のいましめにするがよい。おれが真似はしないがいい、と言うのだから勝手である。

この父親の下で育った後の勝海舟が長崎にやられる。海事に適任であったかどうかは、疑問であった。任命する方も任命される方も共に勝手知らずで、模索中である。「もっとも外に役々職方の者共も遣わせられ、外国人より伝授受け候事にて容易ならぬ御用筋にもこれあり候間、銘々一時の功を争い、一己の名聞を相立候様の儀これあり候ては以ての外の義につき、右様の義、いささかもこれなき様厚く申合せ」不取締りなきようにと命令書に認めてあった。

仕事の内容は現地まで行って見ないと判らない。海軍創制の全部の指揮者は前から長崎にいた永井岩之丞（後の玄蕃頭）である。こうして第一回の伝習生は海陸二手に分れ

て、出発した。海上から行く船手組は、島津藩から献上した昌平丸に乗込み、安政二年九月三日品川沖を出帆した。浦賀や伊豆の舟大工、鍛冶方、鉄砲方、水主、塩飽島の船頭水主など、乗組みの顔触れは多彩である。勇ましい日本の海軍の門出であったが、遠州灘に差しかかって、難風に出遭い、帆柱三本を折り、船体も傷ついて、その後の航海に苦労し、長崎に着いた時、乗組みの者は病人のようになって上陸した。

勝海舟の「海軍歴史」には、「九月朔日乗組、三日解纜、此船遅々にして数十日を経過し、遂に十月二十日長崎港に達し、同日上陸す」とあるが、最新の筈の船で、江戸湾から長崎まで行くのに、五十日近くを要したわけで、そもそもの大難航で振出した。

長崎海軍伝習所は西役所に置いた。もと奉行の別役宅であって、江戸から監察が来ると、これを宿舎としたので永井岩之丞がこれに住まっていた。ここを伝習所の教場とするので、勝麟太郎も上陸してこの構内に入り、五、六日経ってから永井が人々をひきいて出島の和蘭陀屋敷に行き入門の式を行なった。一同、礼装にて出席した。

授業が開始された。航海術、運用術を船将ベレスレイケン、造船学、砲術を士官筆頭スガラウエン、船具学、測量学を二等士官エーグ、算術を公用方士官デョング、機関学を機関長が、砲術調練をセルジアント（役名のようである。）が教授することにした。（人名は海舟の「海軍歴史」に依る。当時通用の呼名らしい。）算術も和算でない。測量学、船具学などは、普通の日本人はそんな学科があることさえ始めて知ることである。実地指導には、オランダ人の水夫や火焚が当った。

讃岐の塩飽島から集めた水夫は、廻船に乗っていた者たちで、武士の伝習生とは別に艦内陸上で教えて、軍艦乗組みの水夫に仕込んだ。塩飽島にある和船の造船所は蘭医シーボルトが昔見て整頓しているのに感心したもので、長崎に来た者の中には舟大工もいた。揃って外国の技術を覚えることになる。

朝は夏は五時前、冬は六時、貝太鼓の合図で一同起きて出て、鐘の合図で朝食、場所も定め小頭一名が十人の配下とともに同席で食事する。朝飯が済むと、船内の掃除に、受持ち諸道具を洗ったり磨く。教授は八時に始り十二時まで、午後は一時より四時まで授業、陸上の伝習から艦上で運転や帆の操作などの実地演習が行われる。

言語が通じないので、通弁が一々付いたが、通弁では理解出来ぬ事項が多く、意味が徹底しない場合が多かった。暗礁続きで教える方も苦労したが、生徒は専ら暗記するのが大部分であった。矢田堀景蔵、塚本桓甫、永持亨次郎などは、江戸で昌平学校の秀才で漢学に造詣深かったが、オランダ語や文章となると、小児のように鵜呑みにして覚え込むよりほかはなく、苦労であった。学習する事項が多い。それに船と生活を共にすることが、彼らの過去になかった経験なのである。列藩からの参加も許したので、多くの生徒が留学派遣されて来た。勝麟太郎が生徒監となった。後日、勝が列藩の間に顔がひろくなった始めであった。翌年には、造船法の実習を行う為に波止場近くに仮の造船所を建て、長さ十五間、容積五百石のカッター船一隻の建立を始めた。

生徒の中には不良で豪傑肌で手を焼く者が多かった。水夫などは食事時間になると船

の甲板で火を焚き、船では大切な飲料水を勝手に使用して物を煮炊きする、時間を厳守しないのも、その頃の下層の日本人にある習癖で、オランダ人教師を困らせた。

地方の藩から来た留学生の方が、江戸から来た旗本の生徒よりよく勉強して成績がよかった。これが、江戸人と、田舎の者と分裂して不和を起す原因ともなり、仲裁には教師のオランダ人が入る場合さえあった。新しい伝習所の中に、直参と外様との区別がやはり入っているのだ。オランダ人の教師が困ったことは、成績の悪い者を叱って戒めても、中に立つ通詞が相手の身分が高いと遠慮して、教師の叱責を十分に伝えないで、ごまかして済ますことである。しかし、全体として伝習所学生の知的探究心は、語学の不便を越えて、実に烈しかった。禁じられていた未知の世界に俄かに入ることになったせいもあろう。これだけ、知識に渇えている若者は、西欧以外のどこにも見られないのを、教師たちは気がついた。

オランダ政府が派遣した第一次の海軍教育班と交代する第二次の班が一八五六年（安政三年）に長崎に着いた。幕府がオランダに注文した軍艦の竣工が、遅れていたのが、ようやく出来上がったのに乗込んで、試運転も行わずに、極東までの大航海に出た。オランダ側で付けた船名は、ヤパン（日本丸）だったが、日本に着き幕府に引渡されてから咸臨丸と命名された。この艦長となって渡日し、伝習所の教授となったのが、カッテンディーケ中佐である。三十七名の教育班をひきいて、前任者と交代した。

幕府は、アメリカ領事のハリスの通商条約の要請もあり、真剣に国防の必要を感じて、海軍の伝習に力を入れ、第二回の伝習御用の者を江戸から派遣して来た。後の海軍奉行となり幕府瓦解の時に、軍艦をひきいて北海道に幕府を成立させようとした榎本武揚（たけあき）・釜次郎もその中に加わっている。長崎伝習生頭取の心得となって来たのが伊沢謹吾で、大目付伊沢美作守の三男である。これがやや名門の出を派遣したものだが、榎本釜次郎の父親は庶民の出で、御徒士榎本家の株を千両で買って、榎本の家に入った男で、勝海舟の父親小吉が勝家の株を買って養子に入り、曲りなりに、小旗本の家を立てたのと同じような境遇である。榎本の父親は、シーボルト事件で獄死の上処刑された天文方の高橋作左衛門景保や伊能忠敬に師事して、天文地理を学んだ町家出の数学者である。カッテンディーケの日本滞在時代の思い出を見ると、榎本が身分のある旗本の出のように書いてあるが、必ずしもそうとは言えない。大身でなかったのと、父親譲りの向学心が強かったので、伝習所でも優秀な生徒で働きが目立ったのである。封建の大身の生れでなく、町人の血が混っているのが、新しいのであった。カッテンディーケはこう書いている。

「ヨーロッパでは王侯と雖も海軍士官となり、艦上生活の不自由を忍ぶということは、決して珍しいことではないが、日本人、例えば榎本釜次郎氏のごとき、その先祖は江戸において重い役割を演じていたような家柄の人が、二年来一介の火夫、鍛冶工および機関部員として働いているというがごときは、まさに当人の勝れたる品性と、絶大なる熱

心を物語る証左である。これは何よりも、この純真にして、快活なる青年を一見すれば、すぐに判る。彼が企画的な人物であることは、彼が北緯五十九度の地点まで、北の旅行をした時に実証した。」（水田信利訳「長崎海軍伝習所の日々」）

別の伝習生で咸臨丸の蒸気方士官で、後に幕府が石川島で千代田型を造った時に、その六〇馬力蒸気機関を製作した肥田浜五郎についてもカッテンディーケは優れた性質を認めた。

「オランダや他のヨーロッパ諸国では、とても望まれないようなこと、すなわち機関将校がまた甲板士官でもあって、甲板士官の代役を勤め得るというようなことが、日本では普通に行われるのである。」

もちろん、これは、日本人が何もかも新しく習得する必要があるので、その自覚から、これらの新しい青年たちは奮発し、好奇心に目を輝かしているような人間がすくなくなかったのである。カッテンディーケが他の場合に書いているように、海軍を日本に創設しようとするのなら、十四、五歳の少年を集めて伝習さすべきなのであった。が、幕府はその成長を待ってられない。青年または壮年の勇気あり能力ありと認めた者たちを選んで長崎に派遣した。この場合も実は大身の屋敷の者は、現状維持で若くして老化して進んで新しい技術と取組む力が乏しい。カッテンディーケに言わせれば、「万事すこぶる悧口であって、どんな具合にあしらえば我々（オランダ人）を最も満足させ得るかを直ぐ見抜いてしまっていた。」勝麟太郎、及びこの榎本釜次郎など下級の武士の出身の

者が、日本が迎える新しい時代の為に用意されていた。幕府の内部に聡明な新しい官僚が生れて来ていたのと同じことである。幕府にこの人々の出現は極めて必要であった。ところが幕府の体制を定めているのは、どこまでも「身分」であって、働きのある個人なのではない。動きのとれぬこの関係が、間もなく安政の大獄のような無理で強引な反動を呼び、幕府という巨船をまた暗礁に乗上げて、進めぬようにする。

勝麟太郎や榎本釜次郎は、亡びて行く体制の下に生れながら、新しい時代の為に献身する。続出する問題の解決に苦しむ幕府も、海軍の重要さを切実に思うようになって、費用のかかる遠い長崎へ伝習生を送るよりも江戸のお膝元で海軍操練所を建てることを計画し始めた。第一回の長崎伝習生を江戸に呼戻して、若い生徒を教えさせるのである。前にオランダから献上し、練習船に使用していたスームビング号、日本側に渡ってから観光丸と改名したのを、彼等の力で運転して江戸に回航させるように命令した。

四

江戸に向う観光丸の船長には矢田堀景蔵が任命され、搭乗して帰る人員は、監察永井岩之丞が選んだ。完全に技術を身につけて卒業したとは言えまいが、二年間の修業をした人々で、運用、砲術、天文、航海、蒸気など各科にわたっていた。勝麟太郎は陸路をとって帰る組に入っていたが、出発の前日になって、オランダ側から旧生徒が全員引揚

げるのは困る。製鉄所の機械もやがて到着することだし、カッター船もまだ完成してないのだから、誰か連絡に残って欲しい、と申入れて来た。急ぐ一方の幕府の方針が粗末で、教える側のオランダの教師を失望させるのも構わないのである。そこで、オランダ側にも信望のある勝が居残って、第二回以下の伝習生を世話することになった。観光丸は第一期の連中が操縦して安政四年三月四日、長崎を出帆し、二十六日に品川に着いた。列藩の第一期卒業生も同じ時に帰郷し、第二回の伝習生と交代した。新しい芽ばえが、こうして育成される。

伝習所が置かれた西役所は町の中の現在の県庁のある場所だが、今日残っている絵図を見ると、真向いに港の海に向い石段を登った高い場所に堂々と左右に長く巨きな長屋門を構えたもので、伝習所などと言うより大名屋敷に類した宏壮な建築である。

後の勝の弟子の坂本竜馬などが海援隊の本部にした亀山社の宿舎が、寺町の奥にある山に倚った墓地の間の狭い道を登って崖の中腹の地面に、小さい池もあり雪の花の咲く庭があるような場末の町のしもた家に梁山泊のように壮士たちが汗臭く籠っていたのと違って、幕府の経営だし、規模の大きい屋敷風の大きな建物にはオランダ人の教師も目を瞠ったことであろう。だが、生徒たちは、この新しい経験に対して、容器にふさわしい行状ばかりを見せたとは言えなかった。長崎奉行の目付が幕府に提出した報告にも、その事を記してある。「身柄の輩も独歩は勿論、茶屋料理屋へ集会、酒色に耽り、その上は丸山（遊廓）集会も度々にて、御家人若輩には深く惑溺に至候もこれあるやに相聞

え、もっともその連に入り申さず候ては、交際も致し悪き様にて、自然伝習の次第を互いに切瑳の障にも罷成り、やむを得ず候て、中心に不甘ものも同断の所業に及び、終には倶々楽しみ候に至り候やにて」身分のある人間が供もなく外出しない習慣だったから、独り歩きが不謹慎と見られるわけだが、十四、五歳の少年が伝習生として理想的なのに、もう、ひとかどの年齢の武士たちが舟乗りになる修業に来たのだから、丸山通いが「やめらりょうか」であろう。

「伝習所も見廻り候。西の書院に勝麟太郎を初め一同袴ばかりにて出でおり、中央には例のシッポク（長崎料理）台を据置き、珈琲湯、桃の実など設け、その廻りに曲泉を並べ置き」贅沢な生徒で、曲泉にもたれて講義を聞いたと見える。「鴨居の高さ位なる粗末の板にて見台の大なる如きものを脇に据置き、蘭士（オランダ人教師）その前にて右板へ白粉墨にて図取りをなしながら、航海の事を説き、伝習輩は通詞蘭士の語を御国語にて直ちに申述べ候を銘々筆記す。調練は西の馬場にて次の士官指揮し、松平金之助、尾本久作など号令教導となりて修養致す。蘭船雛形三間ばかりに出来居り、帆前等伝習、太鼓をも打ち候。」

カッテンディーケは書いている。

「生徒のほうも、皆年齢が長じてから始めて勉強するのであるから、ひと通りの苦労ではなかったと思われる。私には何を標準に生徒の選抜をするのか、よくは呑込めなかった。日本当局は、あまり生徒の能力といったものには頓着しないで、ただ門閥がものを

言い、一切を決定するらしいから、どんなに馬鹿らしくても、どうにも仕様がない。ただ不行状だけは仮借しない。私の信ずるところによれば、いわゆる海軍軍人に仕立てられるこれらの生徒の大部分は、ただ江戸に帰ってから、立身出世するための足場として、この海軍教育を選んだのに過ぎないのだ。」

一般にその傾きがあったのを否定出来まい。何をやるのか知らずに伝習生となって来たのが大部分なのだ。

「日本人は太鼓を敲くことや歩兵の調練には大そう熱心であって、これらの練習には重役連も加わった。この二科目の練習には、いつも沢山の参加者があって、その中には平常余り見受けたこともない者までが顔を出していた。しかしこれら科目の授業および練習は、日本の制度によって、ただ役を帯びる武士と、その子供および家来だけに限って許され、一般市民は絶対に授業を受けることを許されなかった。こんな事情から推しても、幕府が武備を固める最後の決心をつけるのは、まだまだ遠い後日のことであると思われた。」

「どちらかと言えば、私は黒板の前に立って教えることには余り興味を覚えず、むしろ海軍に関する複雑な問題に対し、口頭もしくは書面をもって回答させながら教えるという方法を好んでとった。私は海軍問題については、いろいろと案を立てた。そうして、たとい日本政府に向って、『海軍組織については、現在と違った別の方法を採用しなけ

れば、到底目的を達することができない』ということを悟らしめ得ないにしても、私自身には何の恨みもなければ、また非難もない訳だ。何となれば、私はこれまでに幾度も、今のままの方法では、とても目的の達せられることはないということを、繰返し言明しておいたからだ。

私は日本政府から若干の砲艦をヨーロッパに注文したいという提案について相談を受けた時、詳細な回答書を作り、艦船を充実するのもよいが、それより先ず現在手に入れているものを維持し、修繕し、また必要な品々を、十分に備えつける方法を考える方が、よいのではないかとの意見を述べておいた。私は乾ドックの模型を作らせ、日本にもこうしたドックを作っては、との提案をしたためた書面を付けて江戸に送った。なおまた周防灘に灯台を置くことも提議したが、すべてこれらの提案に対する唯一の回答は、『いつまで経っても破られない沈黙』であった。」

日本側には問題に対する知識がない。だから新しいものを突付けられても大方は答えようがなかったのである。そのことでカッテンディーケは最初、いらいらして怒りっぽくなった。暖簾に腕押しである。「間もなく、それは（苛立っても）何の役にも立たないばかりか、ただ日本人に嗤われるに過ぎないことを悟った。私はある時、勝麟太郎から教訓を受けた。同人は恐らく私を諷して言ったのではなかったろうが、ペリー提督について語るうち、『彼は善い人間ではあったが、大そう焦々した、そうして不作法な妙な男だった』と言ったことがある。」それで気がついたのである。

伝習所の教師たちが四十人も入って来たので、出島のオランダ屋敷は急に混雑し、庭を潰して増築が行われた。以前、オランダ人は許可なく出島の外に出て歩くことが許されなかったから、散歩する庭園が必要であった。目を楽しませる花の木を植え、孔雀から始めて家鴨、鶏、鳩など飼ってあった。そこに伝習所教師たちの宿舎が普請されたわけだが、この時代になると、自由に市中に出ることが認められ、散歩も奉行が支配する天領の範囲ならば、青いもののある郊外に出ても、美しい入江の海に島々の散らばる景色を眺めるために山に登ることも許された。外人に対する日本側の国の方針が緩んで来たのが感じられた。カッテンディーケは、日本の自然の美しいことを口を極めて賞めたたえる。陰鬱な冬が長く暗いオランダから来た人間として当然のことである。江戸へ参観に出たオランダ人から、道中で見た話をいろいろと聴いた後で書く、「私が今日までに見たところでは、日本はまさに天国のごとき国であり、幕府が外国人の入国を禁じているのも確かに道理がある。もしエルギン卿（英国使節）が、日本内地を見るならば、彼はその政府に『日本を領有せずには済まされない』と報告するに違いなかろう。我が有力なる隣国（イギリス）がここもと（シナで）手一杯であるこそ仕合せであるが、おそらく日本にも、そのうち悲しみの順番が回り来るだろう。」

カッテンディーケは、余暇を見つけては、好んで長崎の丘に登る。その場合、偶然にも彼があやしむのは、境を接する隣の大名の領内に踏入ることを禁じられたことである。すぐ対岸に見える場所でも、他藩のものならば、オランダ人が入るのを認めようとしな

い。出島から出て長崎市中を歩くのも許されながら、天領の外には出られない。カッテンディーケには、深い疑問となった。日本は幕府の下に統一国家の筈なのである。しかし、幕府の支配が及ばぬ土地が在る。役人たちは、禁止の理由について、こう説明するのである。

長崎に於ける場合だけでなく、航海の練習に咸臨丸で対馬に行った時も、同行した伝習所長木村図書が藩侯に公用で面会を求めた時に、城から一番家老が船に来て、主人は大目付にお会いにならぬと答えて来た。幕府の高官がこういう待遇を受けるのを見てオランダ人は意外とし眉をひそめる。上陸して宗対馬守の居城に通じる町に入ろうとした。すると、町の要所の木戸を閉ざしてあって通行止めになっていたので仕方なく船に帰って来た。大名領と将軍の威光との関係が、オランダ人には理解できない。オランダ人が見せて貰えるのは、天領だけで、他の諸藩の支配内に入ることは何故か禁じられる面倒な理由があるらしく見えた。（実は対州藩の場合は外患に神経過敏になっていて外人を見ると警戒したのである。）

伝習生は咸臨丸を運転して対馬や五島まで行ったが、迎えられて鹿児島まで航海したのは、幕府の大艦建造禁止が解かれて藩主島津斉彬が海軍に力を入れ、長崎の伝習所にも多くの子弟を留学させていた関係もあり、ヨーロッパから来た軍艦の実物を斉彬自身が見たかったせいもある。

鹿児島藩は江戸から地理的に最も遠く閉鎖された国で、政治的にも幕府の勢力に対し独立した色彩の強い土地であった。関ヶ原の戦で徳川氏に敗れて以来、中央に服従しているが、剛健な士風が関ヶ原の遺恨を留めて復讐する機会を待っているとも喧伝された。政治的手腕のある当代の斉彬は、一門の島津安芸の娘を自分の養女として将軍家に嫁がせたりして幕府との接近を計っていたので、咸臨丸の訪問にも都合がよかった。長崎に留学中の藩士が仲に立ち、永井岩之丞の後任として伝習所の頭取となって来た木村図書（芥舟）との間に書状を通じて話がまとまった。

カッテンディーケは、幕府の支配の外にある大藩の領土に、初めて足を入れるのを許された。以前から疑問を抱いた中央と列藩との関係を確かめて見る機会を得たわけで、この航海には興味を持った。搭乗して行く幕臣の勝麟太郎、榎本釜次郎なども普通の場合では、薩摩に入国することはまだ困難だった時代である。咸臨丸が鹿児島の城下まで入るのを許されるとは、彼等も予期しない。山川港まで行き、その先は進めないものと信じていた。何があるか、薩摩は他領の者が覗くのを許さない国柄であった。

総督は勝麟太郎で、伝習生のほかに教師カッテンディーケ以下、オランダ人士官兵士、都合十九人が乗って出航した。咸臨丸は山川港に寄るだけで、そのまま琉球まで遠洋航海を試みる予定だった。山川に入ると、藩主島津斉彬が自身で出向いて来て、オランダ人を迎え、軍艦の方でも鄭重に待遇して、艦内を案内して見せた。

その時の模様をカッテンディーケが書き留めている。

「藩侯が船に着いたのは午前九時であった。彼は勝氏その他の旗本生徒の出迎えをうけた。我々はもちろん、控室にいたが、揃って一緒に出迎えてはどうかと、招かれたので応諾した。藩侯が乗船すると、二十一発の礼砲が数分間轟きわたった。藩侯はこのとき四十四歳であったというが、見たところ老けていた。人づきは非常に良かった。彼は至って人なつこかったが、或る人の言うところによれば、その感情をありのままに現わす癖があった。それ故、将軍とは近親関係でありながら幕府の役人中には敵が多かった。このことは、将軍の個人的勢力が人の考えているほど、それほど大きなものでない証拠である。またしばしば聞いたところによれば、幕府のことは万事大老の意思一つによって決するということである。だから大老はちょうどイギリスの首相と同じような役割を演ずるのである。（中略）我々オランダ人一同が、侯に紹介せられ、そうして船内隈なく案内した上で、侯から二、三の質問を受けて後、船は錨を揚げて港外へ進んだ。船が鹿児島へ向う途中、日本の水夫たちは帆や大砲の稽古を数回行なった。藩侯は船内でただ幕府艦長役だけを傍に召して朝食をとった。私が最も驚いたことは身分の非常に低い目付役の二人が、藩侯の傍を離れないで、緊張しきった注意をもって藩侯の話を寸分聞洩らすまいと聞いていたことである。そんな訳だから日本の艦長役は、私に対し機微な点には十分気をつけてくれるようにと注意した。」幕府側でも役人は、ひそかに鋭い神経を動かして、斉彬の態度を注視している。日本国内であって、この土地は独立して外国の性格を持っているらしく見える。

「十二時、船は藩侯の海水浴場となっている海岸に設けられた天幕の前に来た。そのとき藩侯は我々に、ぜひ一度鹿児島の砲台や、いろいろの工場を仔細に視察し、我々（オランダ人）の意見を遠慮なく聞かしてくれるようにと勧めて船を下りて行った。」

四時には鹿児島の沖に着いた。町は、高い塁壁に囲まれた一連の砲台の背後に、平地に展開する。

「これはまた、どうしたことか、通行人の夥しいこと、岩石で築かれた波止場、無数の銃眼、最後に泊地に投錨した汽船までも眼に映って、鹿児島は我々が想像していたような小さな田舎町でなく、人口四、五十万を算える日本国中の大都市の一つであることを知った時の我々の驚きといったらなかった。鹿児島の備えは行き届いている。そして時世に遥かに先んじている主君の統治下にあるのだ。」

薩摩と長州との二つの藩が、早い財政改革に依って、封建的に孤立した経済から逃がれて、広域の流通経済に移りかけていた。幕府のみならず水戸のような大藩以下の列藩が財政上、崩壊するばかりに窮迫していたのにくらべ、薩長とも富強な、実力ある立場を築き上げていた。地方的な独立国の実質を潜在させていたと称してよかろう。その上に、薩州藩は旧弊にとらわれず、海外の新しい知識を吸収しようとする英邁な君侯を続けて持った。カッテンディーケが会った島津斉彬が、正にその一人である。

さて咸臨丸のオランダ人が鹿児島に上陸した時に、突然に外国船らしい見なれぬ船が

入って来たので、城下の町の者があやしんで、不穏な騒ぎを起した。藩主が招いたものだとは知らなかったのだし、元来、薩摩のお国振りは排外的なのである。異人が上陸して来たと聞いて人が見物に押出したばかりでなく、モッブの心理から、草鞋や石を投げつけ、荒馬を放って道を通れぬようにするような乱暴をする者さえ出た。武士階級の若い者たちが気負立って、やったことである。出かけるのが遅れて現場を見なかったカッテンディーケは、あやしむだけで別に悪意あるものと見ていない。藩主に招待された者だから、乱暴の理由を理解出来なかったようである。

「翌朝、私は鹿児島に出向いた。しかし、その途中で、早くから先刻砲台や工場の見学に出掛けて行った連中が帰って来るのに出会い、不審に思って聞くと、市民が役人や兵士が制止するのも聞かず、物珍しさからオランダ人を取巻いて大騒ぎをする状態だから、市中の見物など思いも寄らぬことだという。藩の方からも万一の事が起っては大変だから町を歩かないでくれと頼んで来た。宿へ行くまで途上に集った群衆は凄いもので、そんな場所に行かなかったのを幸せだったと思った。草履から鰻まで、オランダ軍人の頭をかすめて飛んで来た。ある者はここでは鰻が祝儀の魚なのかも知れぬと言った。当局は明らかに我々のことを非常に案じていた。しかし、私はその群衆が何ら悪意を抱いていたものとは信じない。むしろこれまで一度もヨーロッパ人を見たことのない大衆は、一種の好奇心を持ったのに違いない。しかしその気持が、我々の保護に当っていた役人たちに心配を起させたものだろう。」

鹿児島以外の、よその土地で異人を見て群集心理にしろ民衆がこうした乱暴に出た例はまだない。カッテンディーケが善意に解釈した方が通常なのである。だが、外のことを知らない日本人の民衆に、誤解と敵意が潜伏熱のように隠れて在ったことは否認し難い事実である。異人を夷狄と見る知識階級の一部とも、民衆は違っていた。

翌日、斉彬はこの事件を聞いて大いに驚き、家中の不心得を戒めて自身迎いに出て、一行を藩邸に案内した。カッテンディーケの一行は、鎔鉱炉を備え付けた鋳砲工場や製銃工場、硝子工場、電信機製作所などを自由に見せて貰った。

初歩のものながら近代的な努力がここでは意慾を以て試みられているのである。それも教える者がなく、自分たちの工夫だけで、試作をしている。列藩にくらべて、この薩摩の自覚は出色であった。カッテンディーケは、前日、風邪心地だったので、他の者が揃って上陸したのに、船に居残っていた。海軍の生活に慣れない日本人船員がまた、港に入ると、すぐに船を捨てて上陸して了うのである。さすがに勝麟太郎ひとりが、カッテンディーケに従って、船に留っていた。夕方になってから多少たいくつにもなり、すぐ近くに小さな外輪蒸気船が繋留してあるのを、両人で見に行った。長さ二丈ばかりの汽船で、木で造って銅板が張ってあった。カッテンディーケが注目したのは、この船に据えつけてあった日本製の蒸気機関であった。安政のはじめごろに江戸で製作したのである。

「この機関はフェルダム教授の著書に載っている図面だけを頼りに造られたものである。

シリンダーの長さからすれば、その機関は約十二馬力のはずだが、コンデンサーに漏洩部があったり、その他いろいろの欠点があって、僅かに二、三馬力しか出ない。その後になって、日本人はもっと良いものを造れることを知った。それだのに何故こんな不完全なものを拵えたのかといえば、これを試験的に造ったのは、はや既に大分以前のことだったからである。何としても一度も実際に蒸気機関を見たこともなく、ただ簡単な図面をたよりに、この種の機関を造った人の才能の非凡さに、驚かざるを得ない。我々オランダ人でも、蒸気機関の働きに十分の理解を持つまでになるのは、並大抵の苦労ではないではないか？」

近代が生れる準備が、ここでもなされている。しかし一般の民衆は異人を見ると古草鞋や、鰻などまで投げつける。この矛盾を日本は国中どこにも持っていた。

この最初の鹿児島訪問の場合も、島津斉彬は工場や砲台を見せて、カッテンディーケに腹蔵のない意見を求め、批評を詳しく書き留めさせた。謙虚で熱心な態度であった。カッテンディーケは砲台の守備兵は五万人あると知らされた。兵士たちが入る宿舎を見ると、せいぜい数百人を収容するのも難しいもので、カッテンディーケの判断では、五万人の軍隊と言うのは仮想のもので、それも日本全国どこでもそうであるように、武士と供の家来が独立した単位になって、ヨーロッパの軍隊のように部隊として組織されていないのが明らかであった。制服らしいものを着た者を見ない。「薩摩兵は日本国中で

最も勇敢だが、その逆に軍規を守ることは最もだらしないと言われている。」この批評は、同行の幕臣の誰かから聞いたものだろう。まだ個人の武勇の時代から前に出ていないのである。

咸臨丸が帰航の時、山川港に寄って貰いたいと藩侯から申入れて来た。その言葉に従い山川港に入って上陸すると、住民がまたしても妨害して町の見物を許すまいとした。「暫く船で待っていると、藩侯が訪ねて来た。そして、いろいろ話したいことがあるから、接客室に来るようにと求めた。藩侯は、この町の防備をよくするためには、どうしたらよいかと、特に意見を聞いた。それには港を精しく測量しなければ意見を言えない。藩侯は防備について我々の智恵を借りる計画だと言うので、歓んでそれに応じる旨答えた。果して幕府側がその許可を私（カッテンディーケ）に与えるかどうか疑わしい。」

カッテンディーケは、船を推進するスクリューを水から引揚げて斉彬に見せようと思い立った。長崎からついて来た幕府の目付が、それは許されぬと言った。幕府に対して薩摩は競争する立場に在る。カッテンディーケは、斉彬が来ると、急に故障があって、どうしてもスクリューを引揚げねばならなかったと見せかけるように機関船員に命じて、スクリューが外から見えるようにした。鹿児島藩主は、新しい機械や設備を、実に熱心に見る。幕府の目付役が、露骨にいやな顔をしたのは当然であった。

二カ月後に、カッテンディーケ等を乗せて咸臨丸は再び山川港に現れ、同じ日の夕方には鹿児島に入港した。島津斉彬が越前藩主松平春岳に知らせた書状にも「山川より城

下まで十三里の海上を一時半にて参り候」と、船の速力に驚嘆を記している。前の訪問の時、取締りが悪く騒擾を来たしたので、斉彬は市民が静粛に和蘭人の一行を歓迎するように布告し、藩主自身馬に乗って一行を案内した。群衆は今度は祭礼の日のように着飾って静かに一行を迎えた。

次の日から三日の間、ほとんど止む間なく強い雨が続いたが、最初の日から斉彬は藩の軍艦万年丸で、長崎目付木村図書、勝麟太郎、オランダ将校を迎えた。万年丸に案内させたのはこの船の構造上の欠陥を指摘させるためである。それから、磯御殿、集成館などを見せ、大小の砲の製造方法についていろいろと質問した。

「天気は悪かったが、我々はまたもや藩侯の工場や作業場を視察した。そうして初めて来たときに経験したようなささは、もはや大方なくなっていた。今度は藩侯御自身、徒歩で、我々ヨーロッパ人一同を案内されたので、市の最も綺麗な方面を散歩したが、少しも市民から妨碍を受けなかった。港内には三本檣の約千噸の船が浮んでいるのを見た。同船は四年前に薩摩において、古い造船学の書物に載っている図面を手本にして造られただけあって、ずいぶん醜いものであった。胴体や造りは、大げさに言えば、ちょうど昔の東インド会社の船に似ている。とりわけ装具は全く釣合いがとれてなく、到るところに欠陥があった。それをまた（オランダ人）下士や水兵どもが、いちいち争って指摘するのであった。この船の名は万年丸と名付けられていた。藩侯は自らこの船で我々を迎え、船内残らず検べて遠慮なく我々の意見を述べて貰いたいと頼んだので、十

分にその需めに応じた。大工の仕事は、大体良くできており、鉄肘ですこぶる堅牢に造られているように見受けた。しかし保存が悪いので、船底の到るところに水が溜っている。

造船費は莫大な額であったに相違ない。甲板には十二門の砲が据え付けられてある。火薬庫は型のとおりに設備され、藩の工場で拵えられた新型の銅製火薬匣が備え付けてある。この船は荷物の運搬に使用され、最近江戸から帰航したばかりであった。」

検分は大雨の中であった。「此節は通路取締役々厳重にて、第一は強雨にて気楽の見物も相調わざる位、尤も若干の諸士稀に罷出候者も行儀正しく父兄老輩よりや教えも行届候様相見え候」と、藩士の日記に残ったのは、前回の訪問に鰻まで持出して投げて乱暴したのが武家の子弟、兵児たちだった事実を告白したわけである。

饗応の席でも、主人側は鹿児島湾の防備をどうすればよいか、オランダ人に意見を聴いた。地図を見ないと何とも案が立たぬと答えると、藩主は、もっとものことだと言って外部に見せない秘蔵の地図を持出させて、意見を叩いた。「上段の間に上様（斉彬）御相伴にて木村殿、勝殿、蘭人上官三人、通詞一人、次の段に公役人二十余名罷在、我々もその段の末に罷出候て酒泡盛など取遣り到し取持ちに勉め、夫より夕方に浜にて奥支配人数の調練等仰付けられ百人余も罷出」と家中の者が日記に書き留めた。カッテンディーケの記録もこれと大差ない。

「下士官以下の乗組員には、別に工場に、食事の用意がされてあって、卓上には食べ物が山ほど積まれてあった。この宴会で、酒が水のごとくふんだんに振舞われたが、何の不祥事も起らなかったのは幸いだと思った。食後お庭下の海浜で種々雑多な服装をした三百名の藩士の練兵が行われた。伝習所教官（オランダ人）の兵曹は、執銃教練の指揮をしてくれと頼まれ、なかなか手際よくやってのけた。三名の鼓手は、勇ましくマーチを奏した。その軍鼓は私が始めて日本に紹介したのである。これによって見ても、日本人が如何に好んで、我々のものを取入れているかが良くわかる。」

長崎で教えた太鼓が、いつの間にか鹿児島城下で採用されていて、カッテンディーケの立会う前で実演されたのである。驚きもし愉快でもあったろう。

前回の訪問の際に、鹿児島の防衛について意見を求められた時、カッテンディーケは、海中に岩礁のあるのを見て、あれを利用してはどうかと、何気なく進言した。そしてその時から二カ月そこそこに来てその岩礁の近くを通って見ると、「すでに実際にその一部が岩の塊で固められ、それが水上堡塁になるのだと聞かされた時の我々の驚きったらなかった。我々が右に言ったような意見を述べたのは、まだ僅か二カ月ばかり以前のことに過ぎない。

元来日本では、何事も評議に長い時間が費されるのが普通である。その日本で、こんなにも早く、これほど費用もかかるであろう大事業が実施されようとは、また我々の言がこれほどまでも尊重されようとは、全然予想もしなかったのである。後に我々はその

鹿児島港防備の設計図を見せられたが、それを見ても、その岩礁が実際その防備に非常に役立つ場所にあることを知った。そうして藩侯は、すでに以前から、その上に堡塁を構築する計画を樹てていたと思われるのである。」

江戸では幕府が新しい方策を望みながら諸方から牽制する勢力を持ち自らの肥満した重い体格から軽く動きが採り得ぬ。米国領事ハリスを膝元宿舎に待たせて置きながら外国御処置の大本は、隣国に交る道を以て致すべきや、夷狄を処する道を以て致すべきやと、外事掛の首脳から部内に下問していたのだ。副将軍の水戸の牽制に対する政治的なゼスチュアだったかも知れぬが、それだけに動くことが出来ぬように強力な制動をかけられていた。薩摩はその点で、行動的で、進取的で活発である。藩主島津斉彬だけがその経綸を持っていて家中の兵児どもが望むのは別だったようにも見えるが、二世紀前から琉球を間に置いて、外国との交渉があった唯一の藩である。中央の人々より新しいものを採るのに遅疑しない。

「我々はそれから、いま一度工場を巡視した。藩侯はその工場に、今郊外にある製銃所を此処に移して、もっと拡張する計画を樹てている。我々は今朝既にその製銃所を見物して、そこで作られるミニエ銃を見たのであった。この銃の銃身は、鉄の性質が非常に良いので優秀である。またここで雷管も作られているが、それは一つの型の上で打たれ、そうして黒い渦巻をもって満たされている。また日本製の電信機も見せられたが、それはモールス機に倣って作ったものである。それだのに、何故この有益なる機械を使っ

て、国内の通信を便利にしないのか、不思議でならない。現に国内の通信は、面倒で不便きわまる方法で行われている。例えば、いま長崎から江戸まで通信するには二十日を要する。しかし特別に高い料金を払い、かつ途中大河が大雨で川止めにでもならなければ十日で済む。」

長崎では、かねてオランダ人が勧告していた蒸気船の修繕工場を、対岸飽之浦に建造を始めていた。伝習所の教師ハルデスが設計をし、永持亨次郎が会計監督をして普請を進めた。落成は文久元年四月になったが、その前から機械を入れ、手軽な修繕は実施出来た。安政五年に観光丸が機関に故障を生じた時、江戸付近の造船所ではまだ機関の修理が出来なかったので、長崎へ廻航し、この新築の工場で機関の新旧入れ替えを行なった。

五

まだタウンゼント・ハリスが渡来しない安政元年十一月四日の大地震で、下田港に碇泊中の露西亜軍艦ディアナ号が港内の津波の為に大破した。艦長プチャーチンと日本側との間に、樺太の境界や開港について談判している最中のことであった。

搭乗する軍艦が毀れて遠洋航海が危険となったので、修復する適当な場所が欲しいと申入れて来た。ロシア人が選定したのは、半島の西海岸にある君沢郡戸田（へだ）村の入江であ

った。日本側で良港と知らなかった場所を、ロシア人がいつの間にか見つけて来たのである。ディアナ号は折れた舵の補いに縄を下げ、それから樽を結びつけ、大綱を以て船体を巻いている状態で大洋に乗出られる状態ではなかった。

これを戸田港へ漁船数十隻で引いて廻そうとした途中で、更にこれが破損し、八分どおり沈んで水びたしになった。乗員は船を捨てて上陸し、引船を増加して戸田へ引入れようと努めたが、浪が高くなり覆って沈んで了った。

ロシア人は、この大変に際しながら三日間に、五百人分の居所、食物、酒、煙草などまで、差支えないように準備して機敏なのに日本側を驚かしめた。「船はかたもなく沈みて、海底に帆柱みゆるよし也。魯人は十万両のものを流し候由、布恬廷（プチャーチン）申したるよし也。」日本の談判委員川路聖謨が日記にこう書いている。えらいものなのである。「魯戎のプチャーチンは、国を去ること、既に十一年（航海三十年に及ぶといいき）家を隔つること一万里余、海濤の上を住家として、その国の地を広くし、その国を富まさんとして、こころをつくし、去年已来は、英仏二国より海軍を起して、魯国と戦い、かれも海上にて一たびは戦けむ。長崎にて（聖謨が）見たりし船は失いて、今はただ一艘の軍艦をたのみにて、三たび四たび日本へ来たりて国境のことを争い、この十一月四日を始めて、一たび津浪に逢い、再び神にいぶきに挫れて、艦は深く千尋の海底に沈みたり。されど少しも気おくれせず、再びこの地にて小船を作り、漠土（シナ）の定海県へやりて、大艦を求めんことをいいて、其日より其事を落ちなく書記して

出し、其いとまに、両国の条約を定めんことを乞いぬ。常には布廷奴などいいて罵りはすれど、よくおもえば、日本の幕府、万衆のうちより御膳用ありて、かく御用いある左衛門尉（自分）などの労苦に十倍とやいわん、百倍とやいわん、実に左衛門尉などに引競べれば、真の豪傑なり」と感心している。

二百年以上の鎖国で、限った範域にちぢ込まる習慣のついた人間から見れば、プチャーチンのような世界の海を股にかけて闊歩している人間の生活なり苦難に対する態度が、如何にも驚嘆に値するものに見えよう。ロシア人が持つ物事に動じない性格も聡明な川路聖謨が看過ごさぬところである。

「布恬廷、今般破船にて立のまま（着のみきのまま）に相成候由、将士以下の者ども等は流れよりし衣類等の内よろしきを着用いたし候ところ、使節（プチャーチン）ばかり破れたる下等の品を着用いたし、食器も使節は欠け損じたるを用い候由、衣類等くだされるべき旨、懸合候ところ断りたり。さて、原、吉原等、東海道を通行中は、下官どもには銘々に食料を持たせ候て三行（列）に並び、かたかわを明け候て歩行、少にても外へはり出候もの、これ有り候えば、直に下官は鞭打たれ候事の由、所謂整々堂々のけしきにて」日本側も宿々に達示を出して、前代未聞のことで宿々で見物がおびただしく出たが、家々の雨だれ落ちより一寸を出ないように整理させた。

五百人の異人が通るのだから騒ぎは大きかったが、行進は規律正しく、片側に道をあけて迷惑にならぬようにして通った。さて、プチャーチンは、日本側との談判を再開す

ると共に、帰国の船を調達する方法を考え、結局、船大工も乗っていたことで、戸田港で、西洋型の巨船を建造することになり手伝った日本人大工に、船体の竜骨の造り方など覚えさせることとなった。厄介丸で難航を続けて来た日本側には、技術の習得にこの上ない機会となった。

水戸の御隠居、斉昭からこの場合にも途方もない提議が幕府の老中に向けて出された。斉昭は、極めて真剣なので、二度まで同じ意見を申出た。日露間の条約が締結されようとして談判が進行中なのが、観念の固定した老人の心を悲しませ、破談に持って行きたい一心なのであった。露艦は海に覆没した。乗組みのロシア人が帰る手段を失った。この際、五百人を一カ所に集め、火をかけて一人も残さず殺して了ってはどうか？　秘して置けば、本国へ相知れる心配もないのではないか？　是非とも、その手段に出るがよい。

日露条約は間もなく同じ年の十二月に調印されたが、その少し前に、こうした提言が幕閣に真面目に向けられたのである。開国の決心を固めている要路の人々には、今更、何とも返す言葉に苦しむことである。副将軍で、外交の最高顧問の政府に対し命令に類する意見なのである。

阿部伊勢守正弘が、老中の筆頭にいた。このひとから懇切な書簡が、斉昭に送られるのだ。

「この間中、両度御示教を蒙り候魯夷残らず一所へ引入置き灰塵に仕るべき一件、愚昧ながらその後篤と勘考候ところ、何分愚案に御座候ては（自分の見解としては）宜しからずやと存じ候。」

なるほど彼等ロシア人の乗船の修復が出来るまでの間は、籠の中の鳥のようなもので、尊諭の如く随分計略を以て鏖にすることも出来るが、そのことが彼の本国に知れたならば遺恨骨髄にとおって国を挙げて「復讐の兵を差越申すべく、ほかの国々にてもこの儀承り及び候わば、日本人鄙怯の致し方と我国を賤しめ候は申すに及ばず」ロシアが我が国へ復讐の兵を向けるとなれば、外夷の人情只さえ我を偏固暴戻の国と見ているようだから、交易を願いに来ている使節が天災に逢ったものを不意に打殺させるなどとは、言語道断無道の国である。罪を正すべしと、外国人に立派な名目を与え、「元来涎を垂れ罷りあり候富饒の日本国分取りに致すべき底意にて、魯夷に加勢、諸戎押寄せ、この場に至りては、和蘭も余儀なく彼等へ与し案内者と相成候類、計りがたく存じ奉り候。」鄙怯の致し方、偏固暴戻の国と言っているのは、斉昭の意見を皮肉に批評したものと見てよい。

「申さばこれは無益の殺生をして神国の名を汚し、諸夷を相手に無謀の軍を相初め候ように相成申候ては如何やと存じ奉り候。」

斉昭は彼らを鏖殺しても、隠しておけば本国に知れる心配はなかろうと、素朴な意見の建前である。伊勢守は、これだけのことに秘密は保って隠しておけるものでない、と

事こまかに説明を続ける。

「この儀取行いの上深く秘しおき候わば彼本国へ相知れ候筈これなしと御見込あらせられ候ようには相伺い候えども」一両人を人知れず殺すのと違って、五百人の夷を一時に皆殺しにすることは異例の珍しい事であるから、愉快と見る者も残酷だと感じる者もあろうが、日本国中の評判になることは当然であって、長崎の和蘭人から本国へ知らせることもあろうし、その間に外国船が来て嗅ぎつけて、魯船はどうなったかと、やかましい問題になることも起り得る。ロシア本国でもプチャーチンはどうしたかと使いの船を寄越して尋ねて来るだろう。「去る何月何日、下田湊津浪の節、外洋へ押流され候を見受け候まま、その後、行方存ぜず候とか、又は船修復中、仮小屋に滞留、右の節自火にて焼死候とか返答仕り候て」彼がそのまま引取るかと言うと、とうてい、そうは出来ない。折角、さがしに来たのだから、津々浦々手を尽して調査することになり、厳重に口留してあっても、いつか、どこかで誰かが喋る。口外しないとしても、「衆口一様に相揃うものには決して御座なく候て」何れこれは怪しき儀とロシア人の方で気がつくものである。

どうも、きかない子供を説得しようと苦労している調子の文章であるが、相手が天下の副将軍で、真面目で如何にも真剣に言出したことだから、伊勢守も説得するのに大汗をかいた様子である。

「左候えば、とても始終臭きものへ蓋と申す類には参り申さず、必定大変の端と相成り、

我方へ曲名を取候戦争相始り申すべく、右にては御国内の者とても、御尤の御取計いと心服は仕るまじきか、恐れ入り奉り候。」

恐れ入り奉り候が面白い。曲っていても相手の身分が遥かに上だから、道理を訴えるのも骨が折れる。老中たちは厄介のことと思っている。さすが、斉昭もこの返事を見て、わかったと言って、自説を引込めた。

「つまり愚老の愚衷さえ御察し候えば、あながち鑒賊にも限らず、大丈夫にて、国威押張り候手段もこれあるべく、只々当節の如く、表向きは（外人に）御憐恤（れんじゅつ）御信義など申すも、内実は怯懦（きょうだ）恐怖より起り、跡ひざり（後退）致し、その禍一日一日と深く相成候は、他日の大変、その罪御同様逃るべからずと、日夜寒々いたし候。」

当局に対する批評を言うのを忘れない。

水戸の老公、斉昭は、徳川一門中の豪傑であって、頼るに足る方と全国的に見られている人物である。斉昭ほど、言動が過激でなくとも、御三家の尾張徳川の当主慶勝が江戸から福井の松平慶永に贈った書簡に、「先月以来度々の強地震にて下田も烈しく、魯舶洋中に沈没したりと云う。甚だ愉快の事なれども、人情（日本国民の）更に怠惰を増すに至らん。右天災たる全く天神地祇凹眼凸鼻の醜類（外国人のこと）を悪（にく）みたまい、又これまで我神州の御処置にあるべからざることを悪みたもう神慮に出づ。恐るべし。慄ずべし」と書いている。鹿児島でカッテンディーケ等に古草鞋や鰻まで投げた民衆と、

あまり大差ない感情が、日本の支配階級に優勢だった。「神州」の信念が前面に出て来たのも、夷狄の出現があってからで、唐土の華夷の思想と共通する思想があるのを否定出来ないと同時に、新しく生れた危機の感情に依るものなのを隠し得ない。頼るに足るものとして水戸の老公に天下の信望が集ったように、危機に際して神慮を人が常でなく念じ始めたのが、事毎にあらわれる。動揺する心を鎮める為の祖先神の動員が望まれる。

ハリスは、隣国シナに起っているアロー号事件でイギリス、フランスが侵略戦を続けている事実を挙げ、次はその火の手が日本に及ばぬとも限らないと、なかば威嚇するように、老中たちに説いた。その申立を文書にして三家諸大名に示して幕府が意見を求めた時に、斉昭の水戸家からの返事はこうであった。前中納言様（斉昭）の意見は毎々繰返してお話してあることで今更別段に申すことはない。ただ、将軍家は東照宮已来、征夷の大任を受けている立場で在る。

「万々一、征夷の御名目を廃せられ候事に至りて候わば、天朝よりも御沙汰これ有るまじきものにもこれなく、又大小名も公辺に背き候ことこれ有るまじきものにもこれなく、左候時は内外御混雑の姿に相成るべくと、三家の立場にては、わけて御苦労申上げられ候。この段黙止しがたく、恐れをも顧みず申上候よう、水戸殿、前中納言殿申付けられ候。」

水戸家執政武田修理の名義で出した返事である。家康公以来、代々征夷大将軍なのだから、ただ今のように夷狄が現れて来たのを退治するのが御役目なので、その大任を抛

棄しては、天朝の思召しが、どうなるか、諸大名が離反することはないか心配であると「征夷」と言う表面的な字義をわざと深刻らしく取上げて、幕府が進めているハリスとの協定に、意地悪い横槍を入れる。御用部屋では、最早、進むより他に動きが取れぬ。それを承知で、征夷はどうしたのだ、と詰問して来たのである。

斉昭は、単に皮肉に言掛りをつけているだけではなく、真剣なのであった。やがて、追いかけるようにして、この五十八歳の老人が言出した。「彼の人類、懇切に御為交易交易と申候えども、交易にて、一切御国の御益に相成ることはこれなく、最初には御国の益のように存じ候とも、皆人を馴らし候のみにて、終に残らず御国を奪うべき計策に御座候。」

これに註をつけて、「博奕致候者、初心の人を引入れ候にても御承知成られらるべく候」と書いている。

「日本は他の品を用いず、日本国中の品にて事欠き候儀は御座あるまじく、事欠き候儀御座候わば、御制度にて、如何とも相成るべく候。且墨夷（アメリカ）のみならず、諸夷江戸に集り候上は、如何にも御指支に相成候こと、只今より見取申候。さて一度御集りの上にて、又々御攘い遊ばさるべくと申し候時は、墨夷のみならず、皆御敵に相成り余程むずかしく、と推察仕り候。」

「外国人を江戸に入れ居住を許すなどとは、公辺の御為、以てのほか危く存じ奉り候。」

「外を内にし内を外に遊ばされ候成行き、遂に姦人その間に出で候て、夷人の内通等の

ほども計り難く、左様相成る時は、御大城を初め、江戸中焼払い候もいと易き事と存じ奉り候。この度、拝謁致し候人類、なにほど口上にて御懇切に御為大切と存じ候とて、二百余年御厚恩を蒙り、御懇切に御為御大切と存じ上げ奉り候三家御家門、御譜代は申すまでもこれなく、外様とても二百余年御厚恩に相成り、公辺御為を存じ上げ候人々にて、墨夷（アメリカ）にて御為と申すと、一日の論にはこれあるまじく候えば、嫌疑をも厭わず、この段存分、各々方まで御相談かたがた御咄し申候。」

どうあっても外国人を江戸に入れることはならぬ。国を破る基となる。何度でもくりかえして、執拗に進言して来る。孤立したまま日本が世界史の進展の海に抱込まれている際に、日本だけでこれまでどおり、ひとり歩き出来る。夷狄を入れることなど相ならぬのである。

斉昭は、更に別の提議を寄せて幕府を悩ませた。それは、斉昭自身をアメリカに派遣して欲しいと言う。論理は、常のものでない。

彼は言う。江戸に商館を建てさせてはならぬ。ほんとうを言えば、どこの港にも夷狄を置いてはならぬのだ。しかし、これまで話を済ませたことで、三つの港だけは暫く已むを得ないとする。アメリカ人も「人類にて」、表面は懇切に御為を思うとて申上げることだから一円にお断りも致しかねるであろう。いささかも好むことでないが、拙老は、現在公辺よりは隠居の身分だし、公辺の親属で身柄の者だからとアメリカ人に申聞かせ

ても不都合ない身分であるし、この自分をアメリカへお遣りくださるとすれば、これ以上の好意はない。「拙老も二百余年の御厚恩を報い奉らず、このまま朽ち果て候よりは、日本の御為アメリカへ遣わされ、その代り此方へ商館等立て候儀は相成らずと、厳重御達しに仕り度く候。」

かなり奇妙な話だが、斉昭は好意を見せに自分が先方に遣ってもらい、その代り条約を延期させるように出来るものと信じているのだ。ただこれは人質などではなくて、身分ある自分が行ってやるのは、こちらの誠意を感じさせる為で、かたわら貿易を内地で行わせず、先方に出向いて行うようにする考え方も加わっているのである。斉昭ほどの重要な地位の者が外国へ出かけるにしては条件がある。「願いのとおり、拙老墨国へ遣わされ候儀に候わば、参りたき者は誰にでも参り候よう、御達しに相成り、浪人は勿論、百姓町人等の二、三男、三、四百万（誤字か）人もくだされ、重追放、軽き死刑の者までも御免に下され相成り召連れまいり、墨夷にて交易致し度き品は、拙老扱い中次ぎにて致し候わば、万々一拙老彼地に於て殺され候とも、日本の御不為には相成るまじく、又中納言（慶篤）この地に居り候えば、水戸に障りもこれなく、又百姓町人等も、元より二男三男をくだされ候故、これまた如何相成候とて、その家元は、この地につつがなくこれ有り候えば厭わざる事に御座候。」

ほんとうのお大名で、それで済むと思っている。日本の百姓町人は命令で連れて行くことが出来るとして、この多人数不穏な者たちをひきつれた豪傑を、アメリカの側で入

国を許すものと信じたのか？「墨国へ拙老を遣わされ、また他夷より云々申出候わば、また誰か遣わされ候と申す如く、先々へ此方のもの遣わされ候て、御懇意の振り遊ばされ候わば然るべく、夷狄を江戸中へ指置かれ候は、公辺御為、以ての外、御危く存じ奉り候。」

神聖なる日本を守る為に、こちらからは人を遣るが、先方の人間を日本に入れることは許さない。その間に戦争も辞せぬよう、国防を整えておく。この方策である。「拙老儀、先年より夷狄を防禦致し候は、大艦大砲の二つに止まり候と見抜き居り候。」

海外にて防禦致候節は、内地は静かに候ところ、内地にて事出来候えば、大いに混雑いたし、その中には、内地の姦人等、又騒ぎ立て候えば、海外にて防禦いたし候ほか、これなく候と先年より見抜き居り候、と斉昭は註を入れる。

斉昭が、常に怖れているのは、百姓が騒擾を起し反乱に出ることなので、外国との戦闘に入る場合も、その起る危険を他人よりも重く考えて、ペリー来朝の節も、幕府に警告したことがある。近年に一揆の例が諸国に多くなっていた。三陸地方の領主の威厳を無視した大規模の武力を伴った逃散で、武士たちが手の下しようもなく無政府状態を来たした例など、土地が近いし斉昭は承知していた筈である。財政の窮迫とともに、大小名、諸代官ともに、次第にこの危険を感じて来ていたのだ。

斉昭は、更に要求する。

「只今は、大艦大砲の工夫も付き候ところ、近頃相願い、公辺より大艦御雛形ならびに

御書、御懇篤に拝見も仰せつけられ候えば、かたがた発明仕り候ことにて、有難き仕合わせに御座候えば、御時節がら願い候は、幾重にも恐れ入り候えども、港に夷狄指置き候上は、遅速は格別、いずれ事は出来申候えば、なにとぞ早く拙老へ百万両下され候て、年来存じ込み候とおりの大艦大砲製し候て、日本の御為に仕り度く存じ奉り候。」

百万両は大金であるが、これは皆、内地に落ちるので、また「廻りて公辺に入候事に御座候」と斉昭は注意させる。

「但し右様申候とて、一時に百万両拝領仕り度く願い候にはこれなく、三度にも願い奉り度く候。なおまた木柄（きがら）の儀も、御領の分は願いに任せ下し置かれ、その他は拙老より願い出候わば、先々へ拙老買上げ候わば、滞りなく出し候よう公辺より御触れに仕り度く候。（中略）拙老兼ての所存の通りなる、大艦大砲出来候えば、勿論ながら命に懸けて、自身出帆、二百余年公辺の御厚恩報い奉り度く願い奉り候。」

六

ハリスは辛抱強く日本側と条約の交渉を続けた。安政四年十月に江戸に出て来てから、年も暮れ、新年となった。雪が降る。新年が来てもまだ成功の見込みがない。ハリスは疲れた、この疲労が積ってやがて下田に戻って大病となるのだ。準備して来た条約草案に外国事務相も異存ないような態度を示したが、逐条審議に入ると、日本側から一々苦

情や故障が出た。

ハリスが開港場を三つの場所以上に要求すると、それはならぬと言う。公使を江戸におくことも、国内を自由に旅行することも認め難い。公使の居住を神奈川と川崎の間に局限して、用務の起った時だけ江戸に出ることに定め、一般に用務のない時は日本のどこにでも旅行を認めることは出来ないと主張する。

幾度も、ごく初歩の案件に戻って交渉することになる。日本人が提議するような規定の下では貿易は不可能なのだ、とハリスは辛抱強く説明した。日本側の委員はそのことも理解しているらしいのだが、承諾を渋って、今日の協議はこれまでにして、返答はこの次にしようと言出す。

ハリスは告げた。自分が日本で観察したあらゆる点から見て、日本の国民は実際は我々との自由な交際を切望しているものと確信出来る。もし、どこかに反対があるとすれば、それは大名と武士に限られているのではないか？　どこの国でもこの二つの階級は、国民の大多数の状態改善に反対するものなのだ。この見解は、町人出身のハリスだから指摘出来たことなので、日本側委員の武士たちには異論のあることかと思うと、彼らは率直に、そのとおりかも知れぬと答えた。座談の間だったので、うちとけた話をした。「学者社会、あるいは官職志望者と称せられる大きな階級は、自国以外の事を全く知らないので、開国にも反対しているのだと付言した。この説明によれば、孔子の四書を修め、須要の試験を通過した者は、幕府から少額の扶持をうける。役人が入用の節は、

この階級の中から専任されるのだ。彼らはこう付言した。大学（カレッジ）は江戸、およびこの国の各地方に設けられている。使用される書籍は、単に孔子の書とシナの歴史である。科学も、美術も、歴史も、美文学も、すなわち、実際孔子とシナの歴史以外は、それらの学校では教えられない。」

ハリスにこの話をした反省のある日本側委員は誰だったのだろうか？　接伴委員を兼ねて一番よくハリスと会い親しくしていた井上信濃守かとも思われる。このひとは下田の奉行で、聡明な川路聖謨の弟である。ハリスと幕府との間にあって、始終苦労する立場にあった。しかし、この日本の支配階級の歪みに対する批評は面白い。確かにシナの歴史だけを学んで日本の現在について考えていたのである。

しかし、信濃守は、日本側委員の活気のある話が終ってから、ハリスに向って秘密になっている話があるが、お聞きくださるかと断って、水戸の浪人三名がハリスの暗殺をくわだてて、江戸に出たことを打明けた。これは水戸藩から幕府に届け出た事実で、水戸藩からも追手を出し捜索していた。首謀者は堀江克之介と言う水戸の郷士、同じく水戸領下伊勢畑村の郷士の弟で蓮田信成、執政武田修理の従者で現在浪人の信田義正と謀り、ハリスが江戸に来て将軍と対面したのを怒って、どこか途上で襲って暗殺しようと企てて、上京したものであった。

狼狽した水戸藩は手を廻して三人の居所を突止め、自首させて幕府に引渡した。堀江は四十二、三歳、信田が三十歳、農家出の蓮田が二十の年齢である。信濃守はハリスの

理解を求めるように次のように説明した。

武士の息子や兄弟の中、長子以外は何らの官位をも受けない。しかも彼らはすべて軍事教育を受け、兵法や武器の使用などを学んでいる。彼らは俸禄を受けておらず、生涯立身の見込みがない。ただ家長によって養われている。彼らの身分が何らかの有用な職につくことを禁じている。任用される希望もなく、唯一の特権として両刀を帯びる権利だけ持っている者たちである。怠惰の習慣から、彼らの多くが悪の道に落ち、放蕩者、酒乱者、乱暴者となる。彼らの不行跡がつのると勘当され、近親の者から見捨てられる。この状態から浪人と称する一つの階級が生れた。これは兇漢、暴漢、無頼の徒、浮浪者に相当する。制度の現在から発生するもので、糾正の道がない。

三名の首謀者を幕府は投獄したが、この事件の為、幕府は非常に心配して、多人数の者を出してハリスの宿所の周囲を巡邏させ警戒させている。夜も空地や庭に、彼らを寝ず番で詰めさせて、万一に備えている。これから考えても、外国公使の江戸居住は、不祥事件を起す種になると思う。信濃守はこう言うのである。やはり江戸でなく、川崎か神奈川に居られる方が公使の為によいのだ。

ハリスは眉をひそめる。彼が江戸へ来てから五十五日間も、浪人たちは何も危害を加えようとしなかった。外国公使の居住の問題が論議される日になってから急に、不穏な企てが知れ逮捕されたというのは如何にも出来過ぎていて疑わしい。どうしても不信の

念が起る。そしてそれが事実としても、そんなことは、さほど重大な問題でないのである。たとえその三人の刺客が三千人だったとしても、浪人たちの行動が我々外国人を江戸に近付かせなくするものと皆さんが想像するとしたら、これは我々の性質をまったく御存じないものだ。

「右のものは、私を一目撃もいたし候儀はこれあるまじく、私よりも悪事等相施し候ことは曾てこれなく候。若し一時面会致し一体の理合を説示候わば、右等の邪念は、忽ち相解け候ことにこれあるべしと存じ奉り候。」日本側で記録したハリスの言葉である。別に悪いことをしない自分が命を狙われるとは、ハリスは信じようがない。また、この東と西との出合いに、西方の合理主義や良識では解き得ない、地霊の如く死に密着した考え方や行動があることを、ハリスが知るまでには到ってない。

暗殺者の逮捕とともに、ハリスの住む蕃書調所の警備は厳重となり、巡邏の者が建物の周囲を見まわって夜中喧しかった。ハリスは、まだ作り事だと信じていた。この物々しい警備が外国人の居住問題が解決した前後から、解かれたので、暗殺計画があったとは、やはり日本側で口実に設けたことなのだと信じた。しかし、水戸の老公のお膝もとから暗殺を企てた者が出て、人が騒いだのは事実であった。二名は獄死し、残った一名は、やがて懲りずに後年の坂下門の要撃に参加した。

日本側は公使の江戸駐劄(ちゅうさつ)を承認した。しかし、条約成文の期日より一年半経つまで公使を派遣しないでくれと申入れて口約を取った。やはり、水戸の老公の裏面からの牽制

が影響して、直ちに公使を江戸に迎えては、反対論を抑え切れぬことになるのである。

公使や領事の国内旅行を許すことにも、日本側では諸大名の反対が起り得ると言う。この案件について、日本側から微妙な発言があった。「原初（幕府の始）から大名十八名のうち、それらの領土における独立的支配権を有する大名は七、八名である。加賀守（前田）は大名階級のうちで最も大きな領土をもち、最も勢力があり、最も富裕である。大君（将軍）でさえも、これらの大名の承諾を先ずもって獲得しなければ、これらの領土内に一名の人間も入れることができない。将軍の政府（幕府）の役人でも、このような許しがなくて立入る者は立ちどころに殺される。」

ハリスは、日本人がそう言っても、逃げ口上と見てまだそれを信じなかった。これはオランダ人カッテンディーケが、日本が統一国家でありながら必ずしも列藩が幕府の命令に従うように見えないのを知って、疑問としていた点である。彼が見た薩摩のような雄藩は、中央の影響から離脱し、自主的な政策と軍艦さえも持ち、生産財の経営から専売までも藩で行なって、幕府とは関係なく繁栄している。ハリスはカッテンディーケと違って、まだそこまで列藩の実状を知る機会がない。幕府を唯一の中央政府と見ている。躊躇する必要もない協定に、日本側が譲ろうとしないのを、了解に苦しむのである。

日本側もまた、それと気がつかず、幕府の立場の意外のもろさ、現体制のままでは何を決定するのも容易でなくなっている実状を懇談の間に、私（ひそ）かに告白していたわけである。あまり待たされるので猜疑深くなったハリスは、まだそれと気がつかない。逃げ口

上の嘘と聞くだけである。

談判は難航を続けて、漸く合意して条約文を作成した。清書が行われ、修正と変更の箇所が日本語に翻訳されることになって、安政五年を迎えた。通商条約に普通に規定せられる条項を並べて、下田、箱館の他に神奈川、長崎、新潟、兵庫の四つの港を期限を定めて開くことにした。そのほかに江戸と大坂とは、商売をする間だけアメリカ人が逗留出来る。この二つの町には一区域だけ代価を払って家を借りることを許し、また散歩出来る範囲を後に相談して定める。外国貨幣と日本貨幣とは金は金、銀は銀と量目を以て比較、通用させる。注意すべきは、阿片輸入を厳禁し、アメリカ商船にして三斤以上を持っていたら、過量の分を日本側役人が没収し得ることを成文で認めている点である。イギリス人が阿片戦争で占領した香港島にその後も自由に阿片を持込み、シナ大陸に送り込んでいたのに対し、アメリカ人でキリスト教徒ハリスは、日本の将来の為にこの規定を加えておくのが必要なことを、日本人に代って考えてくれていたものだった。このことは、間違いなく日本の為になった。

これで亜細亜で最後まで国を閉鎖して残っていた日本を開国させ世界の舞台に連れ出した。ハリスはこう信じて悦んだ。フランスがメキシコの遠征で動きがとれず、イギリスはインドを侵略してから、富裕なシナに手をつけて続けざまに戦争を遂行していたために、日本に向う余裕をまだ持たない間に、つまり鬼の来ない間にハリスは仕事をする

ことが出来た。平和的な条約で、日本の地位を固め、日本とヨーロッパの或る国との間に「障り起る時は、日本政府の嘱に応じ、合衆国の大統領、和親の媒となりて扱うべし」として、日本が武力の圧迫でヨーロッパのどこかの国の植民地となる危険を側面から防いだ。

現在のアフリカ、中近東、東南アジアの新興諸国よりも開港前の日本は、国情が複雑錯綜し、ヨーロッパの武力をもって臨めば、どんな侵略でも割譲でも望み得たところである。他国から牽制されることなく狼たちは腹を肥やすことが出来た。アメリカはまだ資本力が強大と言えず開拓者の冒険心と報酬を望まぬ精神的理想を人間に残していた。政治家でなく貿易商人でキリスト者のハリスが乗込んで来たのは日本の為に大きな幸福であった。ハリスもそれを望んで尽力して成功した。この条約に満足を感じたのは、まだ日本人ではなく、アメリカ国籍の彼が第一の人間だったと言える。

安政五年の正月休みが終って、この年の最初の会合が行われた。日本側の委員は、どうしたものか、約束した正午に姿を見せず、午後五時になってハリスの前に姿を見せた。また何か故障が起ったらしく、談判の経過を復習した上に、条約文のあるくだりについては、三、四度繰返して読んでから、日本に外国人の居住を許すのは日本の古来の習慣を変更するもので、諸大名が反対していると知らせた。

また、話が振出しに戻ったのかと落胆して聞いていたが、一時間あまり話が続いて、日本側が一体何を望むのか、なかなか言出さなかった。

「彼らは更に話をすすめ、今月十一日に条約を有りのまま諸大名に提示したところ、城中忽ち大騒ぎとなったと語った。若干の最も過激な分子は、かかる大きな変革の行われるのを許す前に、自分の生命を犠牲にするだろうと言明した。閣老会議は絶えずこれらの人々の啓蒙に努め、単なる政策に止まらず、王土の滅亡を避けんとすれば、この条約の締結は止むを得ないものであることなどを、彼らに指摘してきた。

彼らは若干の人々を説得したが、爾余の者は依然頑として応じない。幕府は、流血の惨を見ることなしに、今直ちにこの条約に調印することができない状態にある。そして大統領としても日本にかかる災害をもたらすことを欲せぬものと確信するなどと言った。」

これを聞くハリスの心中は暗い。もどかしい限りなのである。

しかし、次いで日本側は思いがけぬことを言出した。「最後に閣老会議の一員が京都の『精神的皇帝への特使』として赴いて、皇帝の認可を得ることができるまで、彼らは条約の調印を延期しようと望んでいる。その認可があり次第、大名たちはその反対を撤回するに相違ないこと。彼らは条約の内容をそのまま受けいれ、ただ若干の些細な辞句の変更を申出るだけで満足し、特使が都より戻り次第、条約を実施するという彼らの約束を厳粛に誓うこと。それには約二カ月を要すること」をハリスに話した。

ハリスには、これは意外であった。一八五八年一月二十八日、木曜日の彼の日記に幕府の閣老たちがこのミカド（帝）について殆ど軽蔑的に話し、日本人がミカドに払って

いる尊敬についてハリスが若干の言葉を引用したとき、彼らは呵々と大笑した。彼らの言うところによれば、ミカドは金も政治的権力もなく日本で尊重される何ものでもない。彼は一介の価値なき人に過ぎぬ、と聞かされた。

充分知識のないハリスは、閣老たちの言葉をそのまま聞いた。この時の会話と、ハリスがたった今聞いたのとでは、明瞭に矛盾がある。ハリスは、一切のことが江戸で完了すると信じて来た。不意に彼らは、大君（将軍）の他にミカドを持出して来たのである。「この非常に重大な会話がおわるや、私は彼らに、もしミカドが承認を拒むなら、諸君はどうするつもりかと訊ねた。彼らは直ぐに、そして断乎たる態度で、幕府はミカドから如何なる反対をも受けつけぬことに決定していると答えた。私（ハリス）は、単に儀式だけと思われることのために、条約を延期する必要がどこにあるのかと問うた。彼らは、この厳粛なる儀式そのものに価値があるのだと答えた。そして私の了解したところによると、ミカドに対して以上のように荘重に上奏し、ミカドの決定が最後のものとなって、あらゆる物議が直ちに治まるであろうというのであった。」

ハリスには、この話はわかるようで、わからない。

政治については朝廷が発言しないのが、江戸幕府創設以来の規律であった。幕府の方から都に指揮を仰いだこともない。ハリスを前において、政治上の権力は天皇にないと、閣老が軽く言ったのは当っていたのである。数日後に井上信濃守がハリスを訪ねて、前

回の閣老の話を保証するように言明した。

「彼はこう言う。幕府は善意をもって行動し、私との条約の締結を切望している。都への使節はミカドの承認を得ることに成功するであろう。そして、その承認が布告された時に、大名の反対は立ちどころに止むであろうと。信濃守は私に、十八名の大きな大名の中の四名は条約に賛成であり、十四名は反対であること。家康の作った三百の大名の中、百名中の三十名は賛成で、その残りは反対であること。幕府は常にこれらの人々に働きかけている。彼らをして傾聴させることができるときには、屢々彼らを信服させているが、多くの者は、――文明のより高い国々の頑固者のように――理由や論証や説明の一言をも傾聴することを避ける。こうした階級は、ミカドの意見が布告される時にのみ、それに屈服するであろうと語った。」

つまり日本の大名たちは深く思考する習慣がなく、怠惰で、理屈嫌いな点が共通していると言う。幕府の末期になると、大名たちが身分だけの相続制度から、創設期の独創性も覇気も次第に失って来ていたことは事実である。農民の労働の上にあぐらをかいて、気楽に暮すだけの身分だったせいもある。しかし、ここでミカドの意見を布告しようとしたのは、水戸の老公を中心にして、その強い影響に依って条約に反対している大名たちを、沈黙させる方法であった。外国関係については、一々、上奏することは、最近に従うようになった手続きだが、裁可を受けるまでの考えではなかった。宸襟を悩ませまいとする幕府の好意的な意向から出た約束だった筈であるが、形式上、これを楯に取ろ

うとしたのである。二月二十日、土曜日の日記にハリスは書いている。

「今朝降雪。加賀侯（水戸の誤り）が条約のことで狂人のように『罵詈して』いるそうだ。彼は言う。大君（将軍）が祖法に則って統治する間は自分もその臣下であるが、それに違反するときは、忠節を断つであろうと。」

これも日本人が大げさに言うのではないか、と、ハリスは、あまり重大と見なかった。「大君（将軍）は、この条約は国の利益になることを確信するといって、それに賛成しているということだ。比較的に小さい大名は幕府に公然たる反対を敢てしないが、彼らは大きな大名の説の下に身を衛っている。ミカドに対して二種の意見書が提出されるであろうということだ。その一つは条約の提案に賛成し、他は反対するものである。ミカドは両方を審査した上で、その一つを認可するであろう。そしてその認可には一切の者が承服しなければならない。最も激しく条約に反対している人々でも、『神宣う。我れ従わん』と言うであろうと。これは、日本人たちがこの君主のことを語るときの、ほとんど軽蔑的な態度とは、あまりにも一致しないものだ。

すでに多額の金がミカドの諸役人の間に撒かれており、なお、もっと多くの金が同じように使用されるであろうと。」

確かに、儀式だけのものとハリスが解釈した以上に、手続きだけのもののように見えた。幕閣の老中たちも安易にそう考え、軽率に思い立って実行したもののようである。彼らは、都を過去の日のままの眠ったような反応のない世界、幕府から申入れることに

は、直ちに応じてくれる人々と見ていたのである。

幕臣となって、その時代をくぐった福地源一郎、後の桜痴居士がこの点について触れている。

「幕府もしこれを朝廷に奏せず、諸侯に問わず、水戸殿にも相談せず、全く御老中御用部屋（幕閣）の評議を以て処分を定め、断然通信通商を許可すべしと約して、開港条約まで取極めたらんには、朝廷といえども諸大名といえども、これすなわち幕府大権内の事と思惟して、毫もこれに向って異議を鳴らさざりしならん。然るを事これに出でずして、幕府が家康公の制定し置かれたる将軍専裁の政体を固守せずして、これを朝廷に奏し、これを諸侯に謀ると云える新政体に変更したるが幕府衰亡の一大原因なれば、すなわち進取のために亡びたるものに非ずや。」（幕府衰亡論）

進取のためではない。熟れた果物のように自らの重みで崩れたのである。

難局に当っていた閣老阿部伊勢守正弘が安政四年六月十七日に俄かに死んだ。三、四月頃より健康が優れず松平慶永が殿中で正弘を見て屋敷に帰ってから、どうもただでない。もとの顔色でない。大分悪いと見えるが、この夏の暑さに耐えられるか、若しここで勢州が倒れるようなことがあったら、天下の形勢はどう変化するか知れぬ。心配なことだと話した。その予感のとおりになった。

「中背にして肥満し、色白く、眼涼やかに、髪黒く潤（ママ）わしく、面相常に春の如く賑わし

く、如何なる塵泥に染まりても王公貴人と見らるべき容貌品格備わり、殊に仁愛温和の徳は天稟（てんぴん）にて、誰を見ても莞爾として笑い、言葉の温厚なる、如何なる鬼神も降服すべき容貌なりき」と時人が伊勢守のことを記している。他の者の評には、「年四十を過ぎて少年の如し」とあったが、四十に達せず、三十九歳で死んだのである。国事に精励し、水戸斉昭、島津斉彬のような正反対の極端に在る勢力家の間に立って巧みに調節して、手腕は政敵からも信頼を受けていた。島津斉彬は開国の已むを得ぬのを早くから悟って、正弘が苦境にあるのに同情し、協力して攘夷論を抑えようと計った。

斉彬は大久保将監忠寛を招いて、告げた。「今日の世、攘夷など到底行わるべきにあらず。今九州にて戦争を為し得る藩は、筑後の柳河藩だけであろうが、これも貧乏だから他所から軍費を出してやらねば動けぬ。今や攘夷の到底為すべからざることは勢州（正弘）のよく知るところなり、自分も一人にて大広間諸侯の説論の任に当るから、勢州は今一層奮励して、三家親藩の理解を求めるよう、貴下から勢州に話されたい。」

伊勢守は、よく努めて毎月三日の面会日には数十名の客を迎えて長い時間快く話した。いつも、彼の立ったあとが、汗で濡れていた。

水戸の隠居が思いつく毎に厄介な話を持込んで来るのを巧みにあやして、過激な行動を抑えて誤らせなかったのも伊勢守の円満な人柄があって出来たことで、それだけの手腕は、対京都の関係、列藩の支配にも充分に発揮された。幕府の一敵国と見られる急進的な島津斉彬と相互に信頼し合って提携した。

斉彬の臣、後の西郷隆盛が友人市来四郎に話した言葉に、幕府近来の名閣老は水野越前守と阿部伊勢守のふたりだが、水野侯は厳格に過ぎて失敗したのに対して、阿部侯は能く永遠の目的を立て、これを徐々に行なったので成功したと批評した。

山陽道の福山のような藩から出て困難な時代の閣老となって、これほど衆望があったのは、よほど、人間的にも魅力があり政治家としても才幹があったのである。伊勢守がなくなった後に「幕府の厄運極難に陥りたるは外患にあらず内患にあり。外患は勢州（伊勢守）独力の支うべきに非ずと雖も、内患を未萌に防ぐの定算に於ては完全なりと言うべし、外患は勢州なしと雖も或はその無事を保ちしなるべし、内訌の破裂はその死後幾何ならずして内閣の更迭に始り水戸老公は忽ち登営を止められ、満胸の憂憤激発して京都の内奏となり、この内奏より大いに鎖攘の勢力を助け、議論沸騰す。」これは幕臣の勝安房の評言である。

伊勢守に十年と言わず、四、五年の生命があったら、一流の捌き方をして安政の大獄などに到らしめなかったかも知れない。三十九歳とは短命で、難局に当り、心労の為に疲れ果てたのである。「逐日容貌瘠せて顔色蒼白となり腹中右方に凝塊を生じたるものの如し。」

大酒が禍したと言う説がある。大久保忠寛が摂生に害ありと酒を廃めさせようと勧めたのに、「今のように忙しくして疲れて帰るのだ。酒ぐらいは勘免して欲しい」と答えたと言う。「勢州の不可なる事一あり、即ち過飲なり、その短命、豈幾分か飲酒に因る

ことなしとせんや。」（大久保一翁説話）

勝麟太郎は、カッテンディーケと、鹿児島を訪れた時、島津斉彬と初対面ではなかった。斉彬が洋学者を招いて翻訳をさせたことがあって、当時勝は三十俵二人扶持の貧しい生活で、蘭文の筆耕をして暮していたので、写字生として鹿児島藩邸に出入りし、斉彬にも知られていた。勝が俄かに取立てられて海軍伝習所に行くことになったのは、伊勢守が斉彬に人選を相談した結果であった。伊勢守のもとに蘭学の出来る者を求められた時、勝は自宅の食客の杉純道を推薦したことがある。勝のような貧書生も伊勢守に知られていたのである。

杉純道は、竜ノ口の屋敷で、伊勢守の前に出ると、机にどこから手に入れたのか独逸のゴッタ版の地図書ハンドアトラスが置いてあった。求められて図をさして説明すると、「なるほど日本は如何にも小さいな」と伊勢守は言い、原書は何でも入用のものを取寄せるがよいと杉に言ってくれた。温厚な君子だが、また積極的な意志の持主でもあった。明日はどう成り行くか、今、幕府はその人を失ったのである。

解説　『天皇の世紀』の周辺 (1)

福島行一

作者の年譜に沿って

明治三十（一八九七）年、横浜で生まれた大佛次郎（本名・野尻清彦）の年譜に、初めて〈明治維新〉にかかわる記述が登場するのは、東京府立一中二年の時、「学友会雑誌」に発表した「薩摩潟」である。西郷隆盛と僧月照との入水事件を扱ったものだった。五年の時には、同じ雑誌に「吾人の敬慕する偉人」と題して、中国宋朝の忠臣、文天祥の国難に殉じた姿を叙し、選抜文の一篇として掲載された。書くのが好きな性癖は親ゆずりのもので、小学生時代にも、勤勉、誠実の二徳を述べた「二つの種子」という投稿文を残している。

青春時代に刻まれた指導の力は大きい。東洋史の亀井高孝、西洋史の河野元三両先生の自由で豊かな人柄に引かれ、いよいよ歴史が好きになった。あまり整理された叙述よりも、ごちゃごちゃ入り混じった未整理の形のものが真実の歴史の姿に近いように思え、

学校近くの日比谷図書館で、塚原渋柿園の小説に読み耽った。メレジュコフスキーの歴史小説『背教者ジュリアノ』にも感銘を受けた。

親戚のクリスチャンからも、大きな精神的影響を受けている。大佛次郎の兄嫁の父、大島正健は札幌農学校の一期生で、その縁で伊藤一隆、内村鑑三、長尾半平などのクリスチャンと知り合い、家庭にも出入りするようになった。特に伊藤一隆は大島正健の義兄であり、親戚の中では中心的な存在。男らしく爽快な性格の持主で、説教こそしなかったが、内村鑑三の烈しさに共通する堅固な信仰を持った老紳士であった。

大佛次郎が生涯を通じて、正しいと思わないものにどこまでも抵抗したり、人間的に卑しいことを自分に許すことが出来なかったり、もし間違って自分が羞しいことをしてしまったら、十年、二十年後も忘れず、思い出すたびに顔を赤くして苦しむ性質や生き方は、このハイカラな老紳士から貰ったものであった。

伊藤の〈凱風一過〉といった性格は、美しい節度ある人格とともに、大佛次郎の理想の人間像で、作家として主人公を形象化する際にもしばしば登場する。「丹前屏風」（昭和二十年）の前田慶次は、その典型的な一例とみることができ、敗戦で萎縮した時代に爽風を吹き込んだ。

歴史とキリスト教の感化を通じて得た生活態度は、この作家から生涯離れぬものとなり、『天皇の世紀』の叙述の節々にも窺える。

執筆まで

昭和四十二（一九六七）年は、近代日本の夜明けを告げる明治維新から百年目にあたった。歴史を顧みつつ、未来への一歩を踏み出したいマスコミ各社は、それぞれが時節にふさわしい企画をと知恵をしぼった。「読売新聞」は身近な人物の回顧で綴る「昭和史の天皇」の連載、「産経新聞」は司馬遼太郎に日露戦争をテーマとした「坂の上の雲」の連載を依頼した。

「朝日新聞」は、維新と明治天皇をテーマとして、期限なしという破格の連載を立案した。企画の検討が始まったのは二年前の昭和四十年正月。日本史学の泰斗、坂本太郎が発案者で、社内に別室を設け、学芸部記者、櫛田克巳らが調査を始めた。

大切なのは執筆者である。「朝日新聞」と縁故が深く、最も多く連載ものを書いた作家は、大佛次郎だった。

大正十五（一九二六）年、「照る日くもる日」を「大阪朝日新聞」に寄稿したのが始まりで、昭和六年には初の現代小説「白い姉」を連載、続いて横浜を舞台とした〈開化もの〉の作品「霧笛」を昭和八年に、以後、昭和十九年には自分の時代小説の中では一番いいものと自負した作品「乞食大将」を執筆、敗戦後も昭和三十六年から「朝日ジャーナル」にノンフィクションの傑作「パリ燃ゆ」を連載して、『天皇の世紀』執筆の態勢は充分にととのっていた。

全社挙げての支援と決まり、期限なし、読者を顧慮せず、という破天荒な作業が始ま

った。

作品の題名は、なかなか決まらなかったが、明治天皇一代記と考え、資料の収集、整理、現地取材や関係人物からの聞き取り作業も進められた。昭和四十年の暮れにはガリ版刷りだが、立派に製本された別室編の『明治天皇関係資料所在目録』ができ上った。

昭和四十一年十二月二十二日の朝刊第一面に「新春より本紙を飾る連載作品」として、「天皇の世紀」という題名が明らかにされ、大佛次郎は〈作者の言葉〉において、「明治時代と言う貧しかったにしろ雄渾（ゆうこん）な日本民族の努力と冒険と飛躍のことを、この時代についてすべて無関心になっている今日の若い方たちにも素直に正しくお話出来れば」と、抱負を述べた。

国論を二分した、安保闘争から安田講堂攻防戦までの激動を背景に、小さく私の頭に潜んでいるエピソードがある。大佛次郎が娯楽雑誌「ポケット」に作品を掲載していた大正末年、敬愛する長兄・野尻抱影が、「帝大出の法学士が、講談を書いているとは、何事だ」と、末弟を叱ったというのである。

私はこの長兄に、数回だけではあったが、駒沢のお宅へ訪問してお話を伺っている。この訪問で印象的だったのは、抱影が、「私は、明治の長男である」と述べたことだった。

晩年の大佛次郎の如く、そして名随筆『鶴の舞』で描写した如く、細身ではあったが、背をピンと伸ばした抱影の姿は、いかにも〈明治の長男〉と言うのに相応しかった。

作家大佛次郎の生涯は、この長兄の期待に沿うべく努力し、書き続けた七十五年であった。最晩年、大佛次郎が、がんセンターのベッドの上から長兄へあてた有名な書簡――死を前にして自分の仕事をふり返り、自信と誇りを述べたものとしてよく引用される――がある。昭和四十八年二月二十七日の日付である。自分の病気が重く、仕事を続けられないのが悔しいと述べ、「(天皇の世紀は)日本の小説家程度の頭では理解困難なのです。百年後には日本文学で太平記や平家物語より上の扱ひを受けませう。かつてなかったものなのです」と書いた。しかし、大佛次郎の思いを代弁するなら、『天皇の世紀』が、『平家物語』や『太平記』の古典を凌駕する名作であるとまともに書いたのではない。あの〈長男〉に対し、少しは背伸びしながら、「俺だって、ここまで頑張ったのだ。兄さん、出来の悪い弟だが、死後の処理をよろしく」と、感謝の気持を吐き出した遺文だったと思いたいのである。この作家が晩年に、読者を考えず、期限もない連載に取り組んだ動機を、私はそんなエピソードの中に見出している。

歴史叙述

書き出しは、どの作家も迷った。国民の文学として『天皇の世紀』と並称されることの多い『近世日本国民史』を書いた徳富蘇峰も例外ではなく、大阪毎日新聞主筆、阿部賢一による評伝にはこう書かれている。

よほど以前のことだが、国民史に筆を下すとき、最初の書き出しにはちょっと苦しんだといっていた。

誰でも物を書く人は書き出しに苦心するそうだ。長篇の国史をどう書き出すか、さすがの蘇峰もいろいろ試みてみたそうだが、結局のところ最も平凡な書き出しに落ちついたという。「此より近世日本の国民史を叙し始む」がそれだ。

大佛次郎は、前年の暮れ、引かれるように明治天皇生誕の地を訪れ、その風に触れる気になった。寒い日の御所は、消火作業――ドレンジャーの訓練が行われていた。『天皇の世紀』は、この光景から、ありのままに描いた。それが書き出しとなった見事な文章だ。

大屋根の面をつたわって流れる水が、見る間にひろがって屋根の色を変えて行き、檐（のき）のところで飛沫を上げ始める。

その紫宸殿南庭（だんてい）の描写から始まって、京都御所とその境内に暮らす公卿たちの生活が、ゆっくりと描かれてゆく。

『天皇の世紀』の叙述は、第一巻だけでも〈序の巻〉から〈厄介丸〉まで変化がある。例えて言えば〈つづれ織り〉の如き文体。初めは、ゆっくりと平叙文で始まるが、次第

に引用が多くなり、いうならば読みにくい叙述体になってゆく。

第一巻だけでは、この変化、進展は明瞭に読み取れないかもしれない。しかし、巻が進むにつれ『天皇の世紀』の叙述は身についたものになり、作者が登場人物の胸の裡に潜って、共感、反撥、疑問などを記してゆく。この変化の萌芽だけでも示唆を受けるのである。

『天皇の世紀』の叙述について、作品掲載後、最も早くその特徴を指摘したのは福原麟太郎で、昭和四十二年十月八日の「朝日新聞PR版」に書いた「史伝の美しさ」と題する一文であった。末尾の部分を引用する。

決して小説ではない。きびしい態度で史実を集め整理して、時の移ってゆくあとを、はっきり記録しようとしている。史伝というものなのだ。事実そのものに事実を語らせようとすると、その配列が生命的である。人間や社会のことをよく知っている人の想像力がそれを適正に決定する。それは事実を再現する歴史であるとともに、芸術の美をも備えているものである。

誰もまだ触れなかった時に『天皇の世紀』の時代を画する独創性を指摘した、見事な論述であった。

「序の巻」では、進んで明治天皇の生誕を描くことになる。

まず気がつくのは、ゆったりとした時間の流れである。京都御所内の生活、天皇の一日の生活は、宮廷を律した江戸幕府の意向に則したものであった。その貧乏な生活ぶりは、梨ノ木町の例の如くであり、下級の公卿から変革への希求が生まれる。好例は岩倉具視の行動であろう。そして、やがては宮廷の生活も、外からの風にさらされることになる。

明治天皇のおそばに豚や鶏のいる生活は驚きだし、そういった掘り下げ方は、作家大佛次郎らしい目配りだろう。

最後に、第一巻にはそれぞれが独立章といえるが如き、特殊で強烈な叙述があることに触れておく。「野火」前半の吉田松陰と、黒船来航以上に大きな事件として描かれた「南部の百姓一揆」である。

二つに特に共通するものを求める必要はない。ただ、作者が両者から共通して抽出した要素、それは〈純粋な行動への共感〉ではなかったか。大佛次郎が『天皇の世紀』で、自分の胸の裡――特に感情的な高ぶり――を示している例は少ない。その中にあって、この松陰、南部の百姓一揆、それに相当あとになるが浦上キリシタンを描いた「旅」（第十一巻に所収）にのみ、心の動きが露わに見える例外を指摘できる。

松陰については第二巻「地熱」の章で詳述し、南部一揆については、拙書『大佛次郎』（平成七年、草思社刊）下巻末に、『天皇の世紀』の文章を引用して考えており、こ

の箇所については多くの論者の指摘するところでもあるので、ここでは簡潔に、結論めいた論点のみを挙げておきたい。

明治維新を語る時、まず黒船来航から始まるのが通例である。つまり維新を日本の近代化の視点からとらえるなら、この事件は疑いもなく〈外発的開化〉としてしめくくることができる。それに対し、南部一揆は「農民が三万人に近い大人数で、田畑を捨て集団となって雪崩のように領内を横断し、隣国の仙台領に入って保護を求めた事件」で、これは農民達が、人間としての最低限の〈生きる自由〉を求めて、自藩による秩序を拒否したのである。封建制の急速なる自壊作用を招く結果となった、〈内発的開化〉と呼べる、維新の知られざる一面であった。

（防衛大学校名誉教授・国文学）

初出　「朝日新聞」朝刊　昭和四十二年元日～昭和四十八年四月二十五日（未完・絶筆）
本書は朝日新聞社の文庫版（全十七巻）を底本とし、十二分冊としました。



文春文庫

天皇の世紀(1)

定価はカバーに表示してあります

2010年1月10日　第1刷

著　者　大佛次郎

発行者　村上和宏

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3-23　〒102-8008
TEL　03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社製作部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・図書印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN978-4-16-777339-7

文春文庫　最新刊

耳袋秘帖　**妖談うしろ猫**　風野真知雄

まとい大名　山本一力

ひとつ灯せ　大江戸怪奇譚　宇江佐真理

泣かないで、パーティはこれから　唯川　恵

からだのままに　南木佳士

右か、左か　心に残る物語——日本文学秀作選　沢木耕太郎編

白疾風（しろはやち）　北　重人

キララ、探偵す。　竹本健治

ワーキング・ホリデー　坂木　司

暁の群像　豪商　岩崎弥太郎の生涯　上下　南條範夫

退職刑事　永瀬隼介

経産省の山田課長補佐、ただいま育休中　山田正人

レコーディング・ダイエット決定版　岡田斗司夫

レコーディング・ダイエット決定版　手帳　岡田斗司夫

ニューヨークの魔法のことば　岡田光世

風天（フーテン）　渥美清のうた　森　英介

東京ファイティングキッズ・リターン　悪い兄たちが帰ってきた　内田　樹／平川克美

天皇の世紀（1）　大佛次郎

渋谷　藤原新也

藤沢周平　父の周辺　遠藤展子（のぶこ）

仇討群像　池波正太郎

球形の荒野　長篇ミステリー傑作選　上下　松本清張

夜がはじまるとき　スティーヴン・キング／白石　朗ほか訳

9784167773397

1920193007909

ISBN978-4-16-777339-7

C0193 ¥790E

定価（本体790円＋税）

歴史とは何か？　日本人とは何か？『天皇の世紀』（全12巻）は、文豪・大佛次郎が史実の中に真の人間像を追求した渾身の大作である。卓抜した史観と膨大な資料渉猟によって、明治天皇の誕生から戊辰戦争に至る激動の時代を照射し、世界史上のエポックともなった明治維新の真義と、日本人の国民的性格を明らかにする。解説・福島行一

お 44 2

文春文庫